鹿児島県

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（７）

町田堀遺跡　第１分冊

二〇一六年三月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（７）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

町田堀遺跡（まちだぼりいせき）

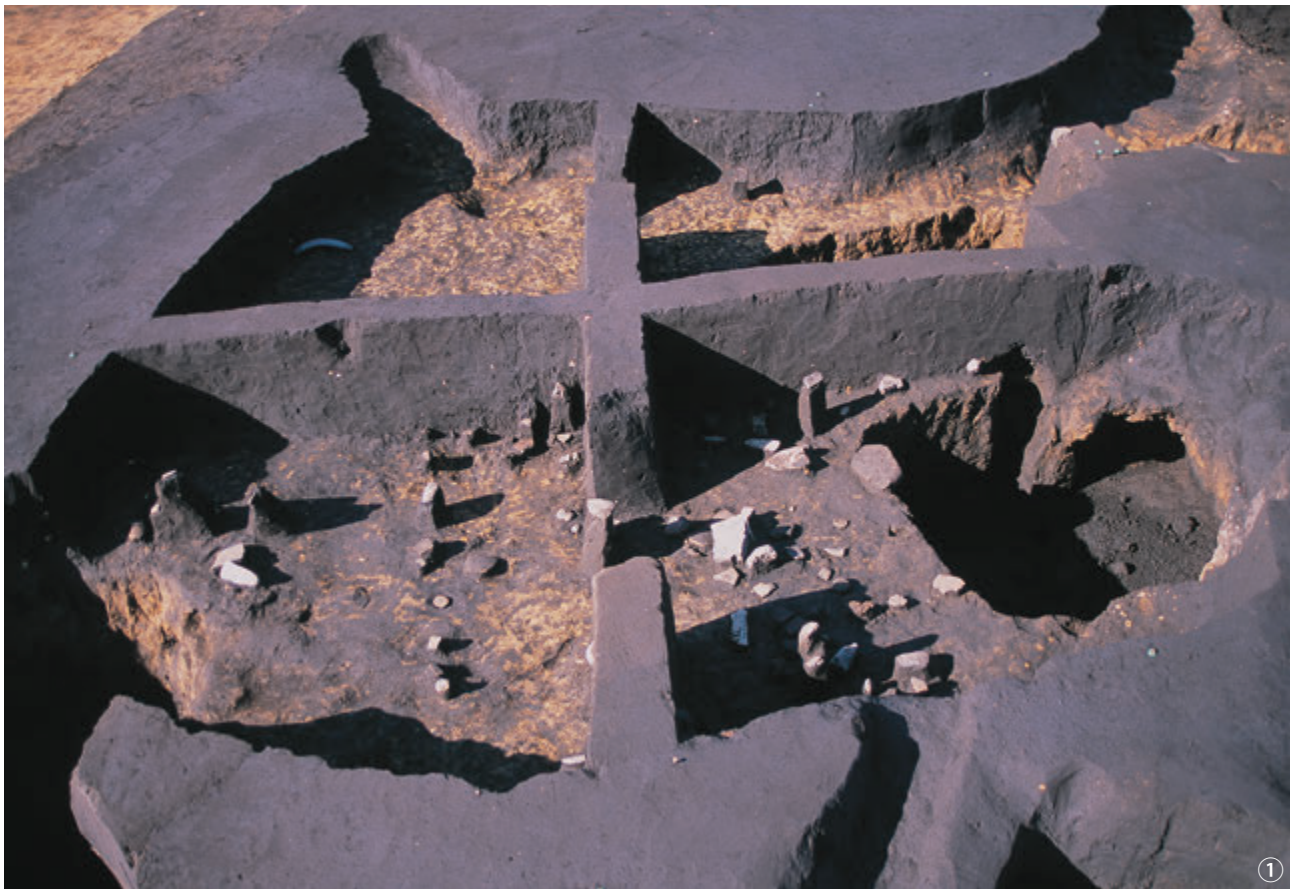
（鹿屋市串良町）

第１分冊

２０１６年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

①調査区２・３　②調査区１　③町田堀遺跡遠景（東から）



①２号竪穴住居跡　②２号竪穴住居跡出土石刀

埋設土器集合

①１号石斧集積遺構　②石斧集合

60号地下式横穴墓

異形鉄器集合

序　　文

近年増加してきております東九州自動車道建設等国事業に係る埋蔵文化財発掘調査に円滑に対応するため，平成25年４月１日，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが発足しました。

当センターの役割は，従来鹿児島県立埋蔵文化財調査センターが実施してきた埋蔵文化財調査のうち国事業に係るものの調査を引き継ぎ，また，新規の国事業に係る埋蔵文化財調査を実施することであります。このため，東九州自動車道建設関係の発掘調査は当センターが担当することとなりました。

町田堀遺跡は平成25年度に株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ発掘調査支援業務・平成26年度には整理作業の支援業務を委託した。また，平成27年度には国際文化財株式会社へ整理作業及び報告書作成の支援業務を委託し，業務の更なる効率化を果たしております。

町田堀遺跡では，縄文時代後期から古代までの遺構や遺物が発見されております。縄文時代後期の調査では竪穴住居跡や埋設土器・ヒスイ製の垂飾や，石刀が見つかっており広範な交流が窺われます。古墳時代では，南九州特有の地下式横穴墓と呼ばれる墓が88基も発見され，それに伴う人骨や鉄器等多くの資料が得られています。これらの調査成果は本県をはじめ南九州の歴史を考える上で貴重なもので，本報告書が今後の研究に資する事を祈念しております。

最後になりましたが，本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省，鹿児島県教育庁文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター，調査中に御指導いただいた先生方，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，国際文化財株式会社，発掘作業員，整理作業員，その他関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成28年３月

公益財団法人　　鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター長　　堂込秀人

報　告　書　抄　録

ふりがな	まちだぼりいせき
書名	町田堀遺跡
副書名	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	7
編著者名	中村耕治・新屋敷久美子・国際文化財株式会社（鵜久森彬）・株式会社埋蔵文化財サポートシステム（松崎拓郎）
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡0995-70-0574　FAX0995-70-0576
発行年月日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
まちだぼりいせき 町田堀遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやしくしらちょう 鹿屋市串良町 ほそやまだ 細山田	46203	203-300	31° 26′ 41″	130° 55′ 55″	確認調査 2012.08.01～ 2012.11.28 本調査 2013.06.10～ 2014.01.28	11,600㎡	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町田堀遺跡	集落 散布地	縄文時代 後期	竪穴住居跡，埋設土器，石斧集積遺構，集石遺構，落とし穴，土坑	中岳Ⅱ式土器，石刀，打製石斧，磨製石斧，石鏃，スクレイパー，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉	石刀には橿原文が施され，朱と漆が塗られている。
	散布地	縄文時代 晩期		刻目突帯文土器	
	集落 散布地	弥生時代 中期	竪穴住居跡	山ノ口式土器	
	地下式 横穴墓群 散布地	古墳時代	地下式横穴墓，円形周溝墓，土坑墓，溝状遺構	人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ，鉇，異形鉄器，成川式土器（壺・高坏・坩）	
	散布地	古代	焼土跡，古道	土師器，須恵器	

要約

町田堀遺跡は，標高約90ｍの笠野原台地の北縁辺部に位置し，串良川が北側と東側を蛇行する。縄文時代後期～古代の複合遺跡である。

縄文時代後期は中岳Ⅱ式土器がほとんどで，住居跡３軒・埋設土器12基・石斧集積遺構２基等の遺構が検出された。また，住居跡からは完全な石刀（橿原文を施す）が出土している。

弥生時代中期では，住居跡が３軒検出されている。

本遺跡の主となる時代は古墳時代である。特に南九州特有の地下式横穴墓が88基も発見され，地下式横穴墓では初めての円形周溝を伴う例が確認された。また，大隅地域の内陸部にある立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性を持ち，志布志湾沿岸部の高塚と共存する地域の地下式横穴墓との比較をする事により，この地域の古墳時代の在り方を考える上で貴重な資料である。

町田堀遺跡位置図（１／ 25,000）

例　　言

1　本書は，東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う町田堀遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。
3　発掘調査は，平成25年度，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
4　整理・報告書作成事業は，平成26年度・平成27年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
5　掲載遺物の番号は通し番号であり，本文・挿図・表及び図版の遺物番号は一致する。
6　検出された竪穴住居跡は縄文時代３軒，弥生時代３軒であるが，発掘調査時の番号を１号→１号，２号→４号，３号→５号，４号→２号，５号→６号，６号→３号と変更して記載する。
7　地下式横穴墓は88基検出されたが，発掘調査時は，発見された順に番号を付したが，グループ分けしたため番号を付し直すこととし，旧番号は地下式横穴墓計測表に記すこととした。
8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。土器は1/3を基本とするが，大型の埋設土器・二重口縁壺等は1/4とした。石器は小型の石鏃等は原寸，石斧等は1/3，大型の石皿等は1/4とする。
9　本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。
10　遺物注記で用いた遺跡記号は「マチ」である。
11　本書で用いた方位は全て磁北である。
12　発掘作業における写真撮影は調査担当者が行った。また，空中写真撮影は株式会社ふじたに委託した。
13　平成25年度及び平成26年度の発掘調査・整理作業は，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託し，平成27年度の整理作業・報告書作成作業は国際文化財株式会社に支援業務を委託した。
14　遺構の実測図作成・遺物分布図作成及びデジタルトレースは，株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行った。
15　出土遺物の実測・拓本・トレースは，株式会社埋蔵文化財サポートシステム及び国際文化財株式会社が行った。
16　出土遺物の写真撮影は埋蔵文化財調査センターの写真班が行った。
17　金属製品（鉄器）の大半は保存処理，実測・トレースを公益財団法人元興寺文化財研究所に委託し，一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行った。
18　本報告書に係る自然科学分析は，鉄器に係る樹種同定，塗膜分析，微少部観察，繊維種同定,石刀の塗膜分析を公益財団法人元興寺文化財研究所。鉄器に係る材質同定を株式会社パレオ・ラボ。炭化物の放射性炭素年代測定・樹種同定及び植物珪酸体分析・花粉分析は株式会社古環境研究所。火山灰分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また，各分析結果は第４章を参照されたい。
19　本書の編集には，国際文化財株式会社の協力を得て中村が行った。執筆担当は以下のとおりである。

第１章		中村
第２章		中村・松崎
第３章	第１節・第２節	中村
	第３節－１	鵜久森
	－２・４	中村
	－３	中村・新屋敷
第４章－１		竹中正巳
－２		下野真理子
－３		中村幸一郎
－４		武安雅之
－５		公益財団法人元興寺文化財研究所
－６		株式会社古環境研究所
－７		公益財団法人元興寺文化財研究所
－８		株式会社パレオ・ラボ
－９		パリノ・サーヴェイ株式会社
第５章		中村

20　縄文時代の土器分類については，第３章第３節－１（縄文時代の小結）の土器分類表（第27表）において示した。
21　出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　　例

赤色顔料：
煤付着：
石皿使用面：
漆　　：

遺構の略号

竪穴住居跡：ＳＩ	埋設土器：ＳＪ
石斧集積遺構：ＳＵ	集石遺構：ＳＱ
落とし穴：ＳＴＰ	土坑：ＳＫ
ピット：Ｐ	円形周溝墓：ＳＺａ
弧状遺構：ＳＺｂ	溝状遺構：ＳＤ
地下式横穴墓：ＳＴ	土坑墓：ＳＫＴ
焼土跡：ＳＬ	古道：ＳＦ

総　目　次

第１分冊
巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
凡例
第１章　発掘調査の経過…… 1
第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　県内遺跡事前調査…… 1
第３節　本調査の経過…… 2
第４節　平成26年度の整理作業・報告書作成業務 …… 2
第５節　平成27年度の整理作業・報告書作成業務 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境…… 5
第１節　地理的環境…… 5
第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に） …… 5
第３節　東九州自動車道関連遺跡…… 6
第３章　発掘調査の方法と成果…… 12
第１節　発掘調査の方法…… 12
第２節　層序について…… 12
第３節　調査の成果…… 17
1　縄文時代後期・晩期の調査…… 17
2　弥生時代の調査…… 158

第２分冊
3　古墳時代の調査…… 1
4　古代の調査…… 211

第３分冊
第４章　自然科学分析…… 1
第５章　総括…… 83
写真図版（遺構） …… 85
写真図版（遺物） …… 115

第１分冊目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
凡例
第１章　発掘調査の経過……１
　第１節　調査に至るまでの経緯……１
　第２節　県内遺跡事前調査……１
　第３節　本調査の経過……２
　第４節　平成26年度の整理作業・報告書
　　作成業務　……２
　第５節　平成27年度の整理作業・報告書
　　作成業務　……３
第２章　遺跡の位置と環境……５
　第１節　地理的環境……５
　第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）　……５
　第３節　東九州自動車道関連遺跡……６
第３章　発掘調査の方法と成果……　12
　第１節　発掘調査の方法……　12
　第２節　層序について……　12
　第３節　調査の成果……　17
　　１　縄文時代後期・晩期の調査……　17
　（１）調査の概要　……　17
　（２）遺構　……　23
　　ア　竪穴住居跡……　23
　　イ　埋設土器……　34
　　ウ　石斧集積遺構……　41
　　エ　集石遺構……　44
　　オ　落とし穴……　54
　　カ　土坑……　54
　　キ　ピット……　68
　（３）縄文時代後期の遺物　……　72
　　ア　土器……　72
　　イ　土製品……　90
　　ウ　石器……　92
　　エ　装飾品……112
　（４）縄文時代晩期の土器　……118
　（５）遺物観察表　……127
　（６）小結　……148
　　２　弥生時代の調査……158
　（１）調査の概要　……158
　（２）遺構　……158
　　ア　竪穴住居跡……159
　（３）遺物　……162
　　ア　土器……162
　（４）遺物観察表　……165
　（５）小結　……166

挿図目次

第１図　周辺遺跡位置図……　７
第２図　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡位置図……11
第３図　グリッド配置図・土層断面位置図……13
第４図　土層断面図①②③……14
第５図　土層断面図④⑤⑥……15
第６図　土層断面図⑦⑧……16
第７図　縄文時代後期遺構配置図（１）……17
第８図　縄文時代後期遺構配置図（２）……18
第９図　縄文時代後期遺物出土状況（１）……19
第10図　縄文時代後期遺物出土状況（２）……20
第11図　縄文時代晩期遺物出土状況（１）……21
第12図　縄文時代晩期遺物出土状況（２）……22
第13図　１号竪穴住居跡……23
第14図　１号竪穴住居跡出土土器（１）……24
第15図　１号竪穴住居跡出土土器（２）……25
第16図　１号竪穴住居跡出土土器（３）……26
第17図　１号竪穴住居跡出土土器（４）・土製品……27
第18図　１号竪穴住居跡出土石器（１）……28
第19図　１号竪穴住居跡出土石器（２）……29
第20図　２号竪穴住居跡……30
第21図　２号竪穴住居跡出土土器・石器（１）……31
第22図　２号竪穴住居跡出土石器（２）……32
第23図　３号竪穴住居跡・出土土器・石器……33
第24図　１号・２号・３号・４号・５号埋設土器……34
第25図　６号・７号・８号・９号・10号・11号・
　　12号埋設土器……35
第26図　１号・２号埋設土器出土遺物……36
第27図　３号・４号・５号埋設土器出土遺物……37
第28図　６号・７号・８号埋設土器出土遺物……38
第29図　９号・10号埋設土器出土遺物……39
第30図　11号・12号埋設土器出土遺物……40
第31図　１号石斧集積遺構・出土石器（１）……41
第32図　１号石斧集積遺構出土石器（２）……42
第33図　１号石斧集積遺構出土石器（３）……43
第34図　２号石斧集積遺構・出土石器……44
第35図　１号・２号・３号・10号集石遺構……45
第36図　１号集石遺構出土土器……46
第37図　１号集石遺構出土石器……47
第38図　２号・３号・10号集石遺構出土土器・石器……48
第39図　８号・９号集石遺構……49
第40図　８号・９号集石遺構出土焼成粘土塊・石器……50
第41図　４号・６号・７号－Ａ・Ｂ集石遺構……51
第42図　５号集石遺構……52
第43図　４号・５号・６号集石遺構出土石器……52
第44図　７号－Ａ・Ｂ集石遺構出土石器……53
第45図　１号・２号落とし穴……54
第46図　１号・２号・３号土坑……55

第47図　１号・２号土坑出土石器……56
第48図　４号・５号・６号・７号・８号・９号土坑……57
第49図　６号・９号土坑出土土器・石器……58
第50図　10号・11号・12号・13号・14号・15号・
16号・17号・18号・19号土坑……59
第51図　20号・21号・22号・23号・24号・25号・
26号・27号土坑……60
第52図　19号・21号・22号・23号土坑出土土器・石器……61
第53図　24号土坑出土土器・石器……62
第54図　26号土坑出土石器……63
第55図　27号土坑出土土器……64
第56図　28号土坑・出土土器（１）……65
第57図　28号土坑出土土器（２）……66
第58図　28号土坑出土石器……67
第59図　ピット……69
第60図　ピット出土土器・石器（１）……70
第61図　ピット出土石器（２）……71
第62図　縄文時代後期の土器（１）……72
第63図　縄文時代後期の土器（２）……73
第64図　縄文時代後期の土器（３）……74
第65図　縄文時代後期の土器（４）……75
第66図　縄文時代後期の土器（５）……76
第67図　縄文時代後期の土器（６）……77
第68図　縄文時代後期の土器（７）……78
第69図　縄文時代後期の土器（８）……79
第70図　縄文時代後期の土器（９）……80
第71図　縄文時代後期の土器（10）……81
第72図　縄文時代後期の土器（11）……82
第73図　縄文時代後期の土器（12）……83
第74図　縄文時代後期の土器（13）……84
第75図　縄文時代後期の土器（14）……85
第76図　縄文時代後期の土器（15）……86
第77図　縄文時代後期の土器（16）……87
第78図　縄文時代後期の土器（17）……88
第79図　縄文時代後期の土器（18）……89
第80図　縄文時代後期の土器（19）……90
第81図　縄文時代後期の土製品（１）……91
第82図　縄文時代後期の土製品（２）……92
第83図　縄文時代後期の石器（１）……93
第84図　縄文時代後期の石器（２）……94
第85図　縄文時代後期の石器（３）……95
第86図　縄文時代後期の石器（４）……96
第87図　縄文時代後期の石器（５）……97
第88図　縄文時代後期の石器（６）……98
第89図　縄文時代後期の石器（７）……99
第90図　縄文時代後期の石器（８）…… 100
第91図　縄文時代後期の石器（９）…… 101
第92図　縄文時代後期の石器（10）…… 102
第93図　縄文時代後期の石器（11）…… 103
第94図　縄文時代後期の石器（12）…… 104
第95図　縄文時代後期の石器（13）…… 105
第96図　縄文時代後期の石器（14）…… 106
第97図　縄文時代後期の石器（15）…… 107
第98図　縄文時代後期の石器（16）…… 108
第99図　縄文時代後期の石器（17）…… 109
第100図　縄文時代後期の石器（18）…… 110
第101図　縄文時代後期の石器（19）…… 111
第102図　縄文時代後期の石器（20）…… 112
第103図　縄文時代後期の石器（21）…… 113
第104図　縄文時代後期の石器（22）…… 114
第105図　縄文時代後期の石器（23）…… 115
第106図　縄文時代後期の石器（24）…… 116
第107図　縄文時代後期の石器（25）・装飾品 …… 117
第108図　縄文時代晩期の土器 …… 118
第109図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（１）　119
第110図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（２）　120
第111図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（３）　121
第112図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（４）　122
第113図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（５）　123
第114図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（６）　124
第115図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（７）　125
第116図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（８）　126
第117図　鹿児島県内出土石刀・石棒（１）（東2001改変）155
第118図　鹿児島県内出土石刀・石棒（２）（東2001改変）156
第119図　弥生時代遺構配置図 …… 158
第120図　４号竪穴住居跡 …… 159
第121図　５号竪穴住居跡・出土土器 …… 160
第122図　６号竪穴住居跡・出土土器 …… 161
第123図　弥生時代の土器（１） …… 162
第124図　弥生時代の土器（２） …… 163
第125図　弥生時代の土器（３） …… 164
第126図　５号竪穴住居跡出土土器・須久式土器比較 …… 166

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 8
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の調査済及び
調査中遺跡概要（１）…… 9
第３表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の調査済及び
調査中遺跡概要（２）……10
第４表　ピット計測値一覧表……68
第５表　縄文時代後期・晩期土器観察表（１）…… 127
第６表　縄文時代後期・晩期土器観察表（２）…… 128
第７表　縄文時代後期・晩期土器観察表（３）…… 129
第８表　縄文時代後期・晩期土器観察表（４）…… 130
第９表　縄文時代後期・晩期土器観察表（５）…… 131
第10表　縄文時代後期・晩期土器観察表（６）…… 132

第11表　縄文時代後期・晩期土器観察表（７）…… 133
第12表　縄文時代後期・晩期土器観察表（８）…… 134
第13表　縄文時代後期・晩期土器観察表（９）…… 135
第14表　縄文時代後期・晩期土器観察表（10）…… 136
第15表　縄文時代後期・晩期土器観察表（11）…… 137
第16表　縄文時代後期・晩期土器観察表（12）…… 138
第17表　縄文時代後期・晩期土器観察表（13）…… 139
第18表　縄文時代後期土製品観察表（１）…… 140
第19表　縄文時代後期土製品観察表（２）…… 141
第20表　縄文時代後期石器観察表（１）…… 142
第21表　縄文時代後期石器観察表（２）…… 143
第22表　縄文時代後期石器観察表（３）…… 144
第23表　縄文時代後期石器観察表（４）…… 145
第24表　縄文時代後期石器観察表（５）…… 146
第25表　縄文時代後期石器観察表（６）…… 147
第26表　縄文時代後期装飾品観察表…… 147
第27表　縄文時代土器分類表…… 149
第28表　中岳Ⅱ式土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）… 150
第29表　刻目突帯文土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）　150
第30表　縄文時代石器分類表…… 152
第31表　石器組成…… 153
第32表　石鏃分類集計一覧表…… 153
第33表　打製石斧分類集計一覧表…… 154
第34表　天附型石刀出土地一覧表…… 157
第35表　弥生時代土器観察表（１）…… 165
第36表　弥生時代土器観察表（２）…… 166

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。

この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は東九州自動車道（志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ）建設を計画し，当該事業区間における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会を行った。

これを受けて，鹿児島県教育庁文化財課（以下，「文化財課」という。）は平成12年２月志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ，50箇所の遺跡（854,100㎡）の存在が判明した。この分布調査の結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下，「埋文センター」という。）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業計画の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化や，道路建設工事計画に伴い，遺跡についてもより綿密な把握が求められることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴについては，平成14年４月に再度分布調査を実施し，遺跡面積を289,000㎡と報告した。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県へ再委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま生きるということになった。また，日本道路公団からの再委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

なお，平成21年度までの当該区間の確認調査は，事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが，平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を受けて，鹿児島県教育委員会が県内遺跡事前調査事業として実施することとした。

平成24年度の県内遺跡事前調査事業として，東九州自動車建設に係る確認調査を町田堀遺跡の他に３遺跡が実施された。町田堀遺跡では縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物包含層が確認され，弥生時代の住居跡や古墳時代の地下式横穴墓等の遺構も確認されている。

近年，東九州自動車等の国道路建設事業等の増加に伴い，埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ，その対応が困難な状況となりつつあった。そこで，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年に設立し，国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。

また，事業の効率化を図るために平成24年度から民間調査組織へ発掘調査の支援業務を委託することとなり，平成25年度から埋文調査センターが発足するにあたり「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」を策定し，それに基づき，株式会社埋蔵文化財サポートシステへ発掘調査の委託を行った。

平成26年度には，株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ整理作業支援業務を委託した。平成27年度には，国際文化財株式会社へ整理作業及び報告書作成作業支援業務を委託した。

第２節　県内遺跡事前調査

期間　平成24年８月１日～平成24年11月28日

調 査 体 制

調 査 主 体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調 査 総 括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所　　長	寺田　仁志
調 査 企 画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	次長兼総務課長	新小田　譲
	次　　長	井ノ上　秀文
	調査第一課長	堂込　秀人
	調査第一課第二調査係長	大久保　浩二
調 査 担 当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	吉岡　康弘
	文化財研究員	今村　結記
事 務 担 当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	主　　査	下堂薗　晴美

第３節　本調査の経過

本調査は，平成25年6月10日～平成26年1月28日の期間実施した。調査組織については，以下のとおりである。

１　調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　（公財）埋蔵文化財調査センター
　センター長　冨田　逸郎
調査企画　（公財）埋蔵文化財調査センター
　総務課長兼係長　山方　直幸
　調査課長　鶴田　静彦
　調査第一係長　八木澤　一郎
調査担当　（公財）埋蔵文化財調査センター
　文化財専門員　大岩本　博之
　〃　中村　耕治
事務担当　（公財）埋蔵文化財調査センター
　主　査　岡村　信吾
現地指導　鹿児島大学総合研究博物館
　准教授　橋本　達也
　鹿児島女子短期大学教授　竹中　正己
　鹿児島国際大学教授　大西　智和
遺物指導　國學院大學名誉教授　小林　達夫
　國學院大學栃木短期大学教授　小林　青樹
調査の委託
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
　主任調査支援員　島内　浩輔
　調査支援員　松崎　拓郎
　調査支援員（10月まで）　上高原　聡
　調査支援員　立神　勇志
　調査支援員（11月から）　堤　浩一郎
　調査支援員　沖野　沙和美
　調査支援員　柏木　数馬
委託期間　平成25年４月23日～平成26年３月14日
委託内容　記録保存調査業務
　測量業務
　土坑業務
検　査　中間検査　平成25年10月22日
　完成検査　平成26年２月26日
　平成26年３月４日

２　調査の経過

調査を実施するにあたり，遺跡全体を道路や畦畔により区分し，西から調査区１・調査区２・調査区３・調査区４とした。

調査の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成25年６月

調査区１，表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。調査区４，表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。

平成25年７月

調査区１，Ⅱ層掘り下げ，調査区２，表土剥ぎ，地下式横穴墓の竪坑検出掘り下げ，調査区４，Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削，Ⅴ層上面遺構検出。

平成25年８月

調査区１，Ⅱ層掘り下げ，調査区２，表土剥ぎ，地下式横穴墓の調査。調査区３，表土剥ぎ，Ⅱ層掘り下げ。調査区４，Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削，Ⅴ層上面遺構検出。

平成25年９月

調査区１，Ⅲ層上面遺構検出，住居跡調査。調査区２，地下式横穴墓の調査。調査区３，Ⅱ層掘り下げ，地下式横穴墓の調査。調査区４，下層確認調査。

平成25年10月

調査区１，Ⅱ層掘り下げ，地下式横穴墓の調査。Ⅲ層遺構掘り下げ。Ⅴ層遺構検出。下層確認調査。調査区２，地下式横穴墓の調査。調査区３，Ⅱ層掘り下げ，地下式横穴墓の調査。空中写真撮影。現地説明会開催。中間検査。

平成25年11月

調査区１，Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層遺構掘り下げ，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，Ⅴ層上面遺構検出。調査区２，地下式横穴墓の調査。Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層上面遺構掘り下げ。調査区３，Ⅲ層上面遺構掘り下げ。Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，Ⅴ層上面遺構検出。調査区３，Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層遺構掘り下げ。Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，Ⅴ層上面遺構検出。

平成25年12月

調査区１，Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層上面遺構掘り下げ。Ⅴ層上面遺構検出。調査区２，地下式横穴墓の調査。Ⅲ層上面遺構掘り下げ。調査区３，Ⅱ層掘り下げ，Ⅴ層上面遺構検出。

平成26年１月

調査区１，Ⅲ層上面遺構掘り下げ。Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，Ⅴ層上面遺構検出・掘り下げ。調査区２，Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層上面遺構検出・掘り下げ。Ⅲ層・Ⅳ層掘り下げ，Ⅴ層上面遺構検出・掘り下げ。調査区３，Ⅲ層上面遺構検出・掘り下げ，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，Ⅴ層上面遺構検出・掘り下げ。

記録保存調査を終了する。

第４節　平成26年度の整理作業・報告書作成業務

平成26年度本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業は，県文化財課から委託を受けた埋文調査センターが実施することとなり，平成26年度には，株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ整理作業・報告書作成の支援業務を委託した。その期間は埋文調査センターの第二整理作業所で行った。

1　調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　センター長　　堂込　秀人
調査企画　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　総務課長兼係長　　山方　直幸
　　調査課長　　八木澤　一郎
　　調査第一係長　　中村　和美
整理担当　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　文化財専門員　　切通　雅子
事務担当　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　主　　査　　岡村　信吾
整理の委託
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
　　主任調査支援員　　松崎　卓郎
　　調査支援員　　立神　勇志
　　調査支援員　　坂井　靖奈
委託期間　平成26年４月11日～平成27年３月12日
検　　査　中間検査　平成26年10月22日
　　完成検査　平成27年２月26日
　　平成27年３月４日

2　調査の経過

平成26年５月
　遺物水洗，土壌フローテーション，遺物選別・分類，デジタルトレース。
平成26年６月
　遺物水洗，土壌フローテーション及び選別，遺物選別・分類，遺物注記・実測，デジタルトレース。
平成26年７月
　遺物水洗，土壌フローテーション及び選別，遺物選別・分類，遺物注記・実測，石斧接合，デジタルトレース。
平成26年８月
　土壌フローテーション及び選別，遺物選別・分類，遺物注記・実測，土器接合，デジタルトレース，原稿執筆。
平成26年９月
　台帳整理及びデータ入力，実測候補遺物選別・分類，土器接合・復元，石器実測，デジタルトレース，原稿執筆，地下式横穴墓原図修正。
平成26年10月
　台帳整理及びデータ入力，実測候補遺物選別・分類，土器接合・復元，土器実測，石器実測，デジタルトレース，自然科学分析，地下式横穴墓原図修正，原稿執筆。
平成26年11月
　台帳整理及びデータ入力，実測候補遺物選別・分類，土器接合・復元，土器実測，石器実測，鉄器実測，デジタルトレース，自然科学分析，原稿執筆。
平成26年12月
　土器実測，石器実測，鉄器実測，土器復元，デジタルトレース，自然科学分析，地下式横穴墓法量計測，土器拓本，遺物観察表作成，原稿執筆。
平成27年１月
　土器実測，石器実測，鉄器実測，土器復元，土器拓本，デジタルトレース，遺物観察表作成，地下式横穴墓法量計測，原稿執筆，遺物整理。
平成27年２月
　土器実測，石器実測，鉄器実測，土器復元，土器拓本，デジタルトレース，遺物観察表作成，地下式横穴墓法量計測，原稿執筆，台帳整理及びデータ入力，遺物整理。

第５節　平成27年度の整理作業・報告書作成業務

　平成27年度本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業及び平成26年度に本調査が行われた出土遺物についての水洗・注記・接合作業は，県文化財課から委託を受けた埋文調査センターが実施することとなり，平成27年度は，国際文化財株式会社へ整理作業・報告書作成の支援業務を委託した。その期間は埋文調査センターの第二整理作業所で行った。

1　調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　センター長　　堂込　秀人
調査企画　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　総務課長兼係長　　有村　貢
　　調査課長　　八木澤　一郎
　　調査第一係長　　中村　和美
整理担当　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　文化財専門員　　中村　耕治
事務担当　（公財）埋蔵文化財調査センター
　　主　　査　　荒瀬　勝巳
遺物指導　鹿児島大学総合研究博物館
　　准教授　　橋本　達也
整理の委託
委託先　国際文化財株式会社
　　主任調査支援員　　鵜久森　彬
　　調査支援員　　荻澤　太郎
　　調査支援員　　島崎　直行
委託期間　平成27年４月13日～平成28年３月11日
委託内容　整理作業
検　　査　中間検査　平成27年10月22日
　　完成検査　平成28年２月26日
　　平成28年３月４日

2　整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業については，日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成27年５月

土器破片実測（縄文後期～古代）。石器トレース図スキャン及び画像処理。遺構図版レイアウト。

序文・報告書抄録・第Ⅰ章第１節～３節データ編集。遺構（地下式横穴墓）図版データ編集。

平成27年６月

土器（完形・破片）実測。土器（縄文）拓本。土器トレース。石器実測・トレース。遺物観察表作成。遺構（縄文～古代）図版レイアウト・データ編集。現場写真選択・スキャン。鉄器写真図版レイアウト。

平成27年７月

土器（縄文）拓本。土器（縄文～古代）トレース。遺物観察表作成（縄文～古代）。遺構図版データ編集。現場写真選択・スキャン。石器図版レイアウト。原稿執筆（縄文・弥生・古代）。土器復元。

平成26年度調査分の土器水洗・注記。

平成27年８月

縄文土器拓本画像処理及び合成。土器トレース画像処理。土器観察表作成。遺構（縄文・古墳）図版データ編集。縄文後期及び古墳原稿執筆。土器（縄文後期・古墳）復元。土器写真レイアウト。鉄器写真撮影。

平成26年度調査分の土器水洗・注記。

平成27年９月

縄文後期土器拓本画像処理及び合成。遺構（縄文・古墳）図版データ編集。縄文後期・晩期・古墳原稿執筆。土器（縄文後期・古墳）復元。

平成26年度調査分の土器水洗・注記。

平成27年10月

基本土層・縄文後期～古代の遺構・遺物図版データ編集。縄文後期・晩期・古墳原稿執筆。土器（古墳）復元。石器写真撮影。

平成26年度調査分の土器水洗・注記・接合。

平成27年11月

遺構・遺物データ編集。土器写真撮影。埋設土器及び異形鉄器集合写真撮影。

縄文・弥生・古墳・古代それぞれの小結原稿執筆。最終編集及び目次の確認。

平成26年度調査分の土器接合

平成27年12月

原稿執筆。原稿入稿・校正。

平成26年度調査分接合。

平成25年度調査分（報告書掲載遺物も含む）収納。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鹿屋市串良町は，大隅半島東南部のほぼ中央に位置し，東には東串良町，南には肝属川を隔てて肝付町，西には鹿屋市東原町，旭原町，笠之原町，北東は立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。平成18年１月１日に旧鹿屋市と合併するまでは広大な笠野原台地を二分していた。

串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地，その間の丘陵，台地及び低地等の低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラ等の火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119ｍ）で中生層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳等500 ～ 600ｍ級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.8ｍ）を主峰に横岳・御岳等1,000ｍ級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長をなし，それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布したシラス地形となっている。この火砕流は南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。これらの火砕流をはじめとする噴出物が堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開折され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。

一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地等を水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾等に注いでいる。この河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また，何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は，東西に6.5㎞，南北に13㎞の狭長で北部の山地中央部の台地，南部の低地に大別されるが，大部分において山地は少なく，笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており，広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ，それによる沖積地が広がり，約695haの水田地帯を形成している。また，北部には低い丘陵性の山地が存在するが，町域に占める割合は少ない。

町田堀遺跡は，この串良町の北東部に位置し，笠野原台地の縁辺部に位置する。当遺跡の北及び東側を串良川が蛇行しながら南流する。

第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

町田堀遺跡周辺の主要な遺跡について時代別に紹介する。また，東九州自動車道関連遺跡については，第３節において記すことにする。

１　旧石器時代

旧石器時代の遺跡は本遺跡周辺の二子塚Ａ遺跡において旧石器時代の可能性がある剥片が数点出土している他，本遺跡からやや離れるが鹿屋バイパス建設に伴って発掘調査が行われた西丸尾遺跡・榎崎Ａ遺跡・榎崎Ｂ遺跡でナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

２　縄文時代

早期の遺跡としては益畑遺跡・下堀遺跡・古園遺跡・石綴遺跡・十三塚遺跡等があげられる。当遺跡より東に２㎞離れた益畑遺跡では早期の住居跡２件，連穴土坑16基，集石遺構85基，土坑160基が検出されている。住居埋土に桜島起源の軽石（P13）がレンズ状に堆積していることから霧島市上野原遺跡とほぼ同様の状況が窺える。下堀遺跡では集石遺構13基が検出され，前平式土器・手向山式土器・塞ノ神式土器等が出土している。古園遺跡では，早期の石坂式土器に比定される山形波状口縁をもった貝殻条痕文の円筒土器が確認されている。石綴遺跡では遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑が検出された。また，隣接する十三塚遺跡では縄文時代早期の石坂式土器等が出土している。

後晩期の遺跡としては釜ヶ宇都遺跡・二子塚Ｂ遺跡・ホンドガマ遺跡・十三塚遺跡・柿木段遺跡等があげられる。ホンドンガマ遺跡では，後期の市来式土器に比定できる土器，石匙，打製石斧等の遺物が確認されており，十三塚遺跡では凹線文土器・市来式土器・三万田式土器や晩期の黒川式土器が出土している。柿木段遺跡では晩期の落とし穴・土坑の他，石斧埋納遺構が検出されている。

３　弥生時代

弥生時代前期の遺跡は，当遺跡から東に約10㎞離れた大崎町沢目遺跡等があげられる他，わずかしか確認されていない。中期以降の遺跡は吉ヶ崎遺跡・西ノ丸遺跡・下堀遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・益畑遺跡等があげられる。吉ヶ崎遺跡では，中期の竪穴住居跡が３軒確

認されている。特に，1号住居跡はベッド状遺構をもち，床面の焼土や炭化物が多く見られ，焼失家屋と思われる。そのためか，甕形土器・壺形土器の完形品が各４点と磨製石鏃・磨製石斧等が住居跡の床面から発見されている。下堀遺跡では竪穴住居跡７軒が検出され，土製勾玉も出土している。石綴遺跡では弥生時代の遺構は確認されていないが山ノ口式土器等が出土している。十三塚遺跡では，弥生時代中期の竪穴住居跡が８軒検出されており，方形・花弁形等に分類されている。また，掘立柱建物跡が３棟・土坑７基が検出されている。遺物は，弥生時代前期末～中期の土器・石器の他，土製勾玉や鉄鏃等も出土している。

４　古墳時代

大隅半島，特に志布志湾沿岸部は古くから唐仁古墳群・塚崎古墳群・横瀬古墳をはじめとする多くの古墳が存在することが知られている。また，南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域である。

町田堀遺跡の周辺には，立小野堀遺跡・上小原古墳群・下堀遺跡・岡崎古墳群等が存在する。上小原古墳群では，前方後円墳１基・円墳20基及び地下式横穴墓が確認されている。地下式横穴墓では赤彩された軽石製石棺をもつものや，大型で玄室床面に粘土床をもつものが確認されている。岡崎古墳群は，18基の高塚墳と数基の地下式横穴墓が確認されている。また，同じ台地に高塚墳と地下式横穴墓が存在し，４号墳・16号墳・17号墳・18号墳では高塚墳の周溝内に竪坑を掘って造られた地下式横穴墓が複数基確認されている。岡崎18号墳の２号地下式横穴墓で確認された須恵器は，愛媛県伊予市の市場南組窯産と考えられるものである。また，鉄鋌・Ｕ字型鍬鋤先・鑷子状鉄製品等の朝鮮半島系遺物，琉球列島産イモガイ製貝釧等により広域交流を積極的に行っていたと考えられている。下堀遺跡では須恵器が出土した竪穴住居や溝状遺構等の他，地下式横穴墓５基が確認されており，地下式横穴墓２号からは大隅半島では初見となる異形鉄器が出土している。また地下式横穴墓周辺で高坏や坩が意図的に置かれたような状態で発見され，祭祀遺構の可能性が考えられる。

５　古代・中世以降

稲村城跡・下堀遺跡・柿木段遺跡・十三塚遺跡があげられる。岡崎古墳群と甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は，16基の近世墓のほか，土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が確認されている。下堀遺跡では土坑墓・畝跡・溝状遺構の他，多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高い炉も検出されている。柿木段遺跡では古代のカマド跡・溝状遺構・古道，中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出された。十三塚遺跡では古道跡が８条検出されており陶磁器片の出土から近世以降の可能性が考えられている。

第３節　東九州自動車道関連遺跡

東九州自動車道については，平成26年に鹿屋串良JCTまで開通している。現在志布志ICから鹿屋串良JCTまでの間で，工事や埋蔵文化財の発掘調査が行われている。

埋蔵文化財の調査は，平成20年から石綴遺跡・十三塚遺跡が開始され，別表にあるように27年度までに16遺跡の調査が行われている。

旧石器時代は，荒園遺跡・永吉天神段遺跡と牧山遺跡の３遺跡であるが，荒園遺跡では，細石器文化期の細石刃・畦原型細石核が出土している。永吉天神段遺跡ではナイフ型石器や尖頭器が出土している。大半の遺跡では石坂式・塞ノ神式等早期中葉から後葉の時期のものが多く，前平式土器等早期前半の遺物が出土する遺跡は数少ない。縄文時代早期では住居跡・連穴土坑・集積遺構・落とし穴・石器製作跡等集落として認められる田原迫ノ上遺跡をはじめ12遺跡が確認されている。大隅半島ではアカホヤ火山灰の堆積が厚く，その下位にある縄文時代早期の遺物は保存状態がよいものが多く復元可能な個体も多く出土している。縄文時代前期・中期・後期の遺跡は少ないが，牧山遺跡で轟式土器の埋設遺構が検出されている。京の塚遺跡では中期前半の深浦式土器が多量出土し，近畿系・瀬戸内系の土器が見られる。また，土坑も数多く検出されている。田原迫ノ上遺跡では，池田軽石層直上に曽畑式土器が出土している。縄文時代後期では町田堀遺跡で後期後半の中岳Ⅱ式が出土し，住居跡３軒も検出されている。１軒の住居からは石刀も出土している。牧山遺跡からは西平式土器・市来式土器・丸尾式土器。田原迫ノ上遺跡からは指宿式土器・市来式土器。京の塚遺跡からは辛川式土器・丸尾式土器・西平式土器・中岳Ⅱ式土器がそれぞれ出土している。縄文時代晩期では，黒川式土器が十三塚遺跡・立小野堀遺跡・田原迫ノ上遺跡・川久保遺跡・京の塚遺跡等から出土している。

弥生時代では多くの遺跡で弥生時代中期の山ノ口式土器が出土し，石綴遺跡・田原迫ノ上遺跡・永吉天神段遺跡で竪穴住居跡が多く検出され集落を形成している。永吉天神段遺跡では円形周溝墓を中心とした土坑墓群も発見されている。土坑墓には鉄鏃を副葬する墓もある。また，数は少ないが町田堀遺跡・川久保遺跡・荒園遺跡でも竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代では立小野堀遺跡・町田堀遺跡で多くの地下式横穴墓が発見され副葬品も鉄器をはじめ豊富である。竪穴住居跡は川久保遺跡・荒園遺跡・春日堀遺跡で検出されている。川久保遺跡では鍛冶工房跡が発見され，それに伴う遺物も出土している。荒園遺跡では焼失家屋も検出されている。

古代・中世は数少ないが，永吉天神段遺跡で中世の土坑墓が検出され銅鏡や滑石製石鍋も出土している。川久保遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出されている。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
大崎町
東串良町
鹿屋市
0
(1:25000)
1km

第１図　周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	町田堀遺跡	串良町細山田アタゴ山	台地	弥生，古墳	本報告書
2	遠見ヶ丘遺跡	大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野Ａ・Ｂ遺跡	串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	串良町細山田立小野	台地	縄文（後），弥生	
5	高松遺跡	串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚Ａ遺跡	大崎町野方二子塚	台地	旧石器，縄文（早・晩），弥生，古墳	平成11年度本調査
7	二子塚Ｂ遺跡	大崎町持留二子塚	台地	縄文，弥生	
8	二子塚Ｃ遺跡	大崎町持留二子塚	台地	弥生（中・後）	
9	大佐土原遺跡	大崎町野方大佐土原	山腹緩斜面	弥生（中）	
10	佐土原遺跡	大崎町野方4715-2	台地	縄文，古墳	
11	柏山城跡	大崎町持留	台地	弥生，古墳，中世	別称「山ノ城」，城跡の正確な所在は不明・推定
12	川上神社遺跡	大崎町持留中持留	扇状地	縄文（後）	
13	持留牧遺跡	大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文，古墳	平成９年農政分布調査
14	茶木遺跡	大崎町持留1406-2	台地	古墳	
15	京の塚遺跡	大崎町持留下原 串良町下中京の塚	台地	縄文（早～晩）	
16	細山田段遺跡	大崎町持留下原 串良町下中京の塚	台地	縄文（後・晩），弥生（前），古墳	平成８年農政分布調査，平成11年度農政分布調査で拡大
17	京の塚古墳	串良町細山田下中京の塚	台地	古墳	
18	益畑遺跡	串良町細山田益畑	台地	縄文，弥生	
19	ホンドガマ遺跡	串良町細山田下中	洞窟	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
20	霧島城跡	串良町細山田下中	丘陵	中世	
21	小牧遺跡	串良町細山田小牧	台地	弥生，歴史	
22	川久保遺跡	串良町細山田川久保	台地	弥生	平成26年度調査
23	北原古墳群	串良町細山田北原	台地	古墳	
24	北原墓地逆修古石塔群	串良町細山田北原	台地	中世（鎌倉末）	
25	北原城跡	串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）	
26	細山田城跡	串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	生来巣遺跡	串良町細山田生栗須	台地	弥生	
28	牧山遺跡	串良町細山田牧山	台地	弥生，古墳	平成11年度分布調査，平成12年試掘調査，平成25，26年度本調査
29	入部堀遺跡	串良町細山田入部堀	台地	弥生，古墳	
30	新堀遺跡	串良町細山田新堀	台地	縄文	
31	是ヶ迫遺跡	串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文，弥生	
32	瓜々良蒔遺跡	串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生	平成12年度本調査
33	熊ヶ鼻遺跡	串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文，弥生	
34	柏場遺跡	串良町有里柏場	台地	弥生	
35	永田堀遺跡	串良町有里永田堀	台地	弥生，古墳	
36	宮留古墳群	串良町有里	台地	古墳	
37	石塚遺跡	串良町有里石塚	台地	弥生	
38	石塚古墳	串良町有里石塚2169	台地	古墳	
39	牧内古墳	東串良町岩弘	台地	古墳	
40	下原遺跡	大崎町持留	台地	縄文（後）， 弥生，古墳	
41	岩弘上古石塔	東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
42	上市ノ園古墳群	東串良町岩弘	台地	古墳	

第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の調査済及び調査中遺跡概要（１）

番	遺跡名	所　在　地	遺　跡　の　概　要	
1	石縊 H20 ～ H21	鹿屋市串良町 標高140ｍの台地縁辺	縄文早期 弥生中期	集石遺構・岩本式・前平式・志風頭式・石坂式土器・平栫式 須玖式・山ノ口式
2	十三塚 H20 ～ H21	鹿屋市串良町 標高140ｍの台地縁辺	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生中期	石坂式 凹線文・市来式・三万田式 黒川式 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・山ノ口式・勾玉・鉄鏃
3	立小野堀 H22 ～	鹿屋市串良町 標高125ｍの台地縁辺	縄文前期 縄文後期 縄文晩期 古墳	深浦式 市来式 黒川式 地下式横穴墓（190基）・土坑墓・溝状遺構・鉄器・青銅製鈴・初期須恵器
4	田原迫ノ上 H22 ～	鹿屋市串良町 標高120ｍの台地縁辺	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生中期	竪穴住居跡・連穴土坑・集石遺構・落とし穴・石器製作跡・前平式・吉田式・石坂式・塞ノ神式 落とし穴・指宿式・市来式 黒川式 竪穴住居跡・大型建物・掘立柱建物跡・円形周溝・方形周溝・山ノ口式・土製勾玉・鉄器
5	牧山 H25 ～	鹿屋市串良町 標高110ｍの台地縁辺	旧石器 縄文早期 縄文前期 縄文後期 縄文晩期 弥生中期 中世	剥片 集石遺構・石器製作跡・吉田式・石坂式 埋設土器（轟式） 土坑・西平式・市来式・丸尾式・中岳Ⅱ式 入佐式 山ノ口式 青磁
6	町田堀 H25 ～	鹿屋市串良町 標高90ｍの台地縁辺	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生前期 弥生中期 古墳	集石遺構・下剥峯式・平栫式 竪穴住居跡・埋設土器・落とし穴・土坑・石斧集積遺構・石刀・ヒスイ製垂飾・小玉・勾玉・管玉・中岳Ⅱ式 刻目突帯文 高橋式 竪穴住居跡・山ノ口式 竪穴住居跡（中津野式）・地下式横穴墓（88基・円形周溝墓等も含む）・溝状遺構・鉄器
7	川久保 H26 ～	鹿屋市串良町 標高30ｍの台地縁辺	縄文前期 縄文晩期 弥生中期 古墳 古代 中世	轟式・曽畑式 黒川式・刻目突帯文 竪穴住居跡・下条式 竪穴住居跡・鍛冶工房跡・笹貫式・鞴羽口・高坏脚転用鞴羽口・鉄滓・勾玉・管玉 掘立柱建物跡・須恵器・土師器 掘立柱建物跡・青磁・白磁・瓦器椀(楠葉型)

第３表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の調査済及び調査中遺跡概要（２）

番	遺跡名	所　在　地	遺　跡　の　概　要	
8	小牧 H27 ～	鹿屋市串良町 標高60ｍの台地	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 古墳	方形土坑・前平式・桑ノ丸式・下剝峯式 集積遺構・土坑・竪穴住居跡・埋設土器・指宿式・市来式・凹線文土器 黒川式・刻目突帯文土器 竪穴住居跡・勾玉・鉄鏃
9	京の塚 H25 ～ H27	曽於郡大崎町 標高90ｍ～ 100ｍの緩傾斜台地	縄文早期 縄文前期 縄文中期 縄文後期 縄文晩期	集石遺構・中原式・石坂式・下剝峯式・手向山式・押型文・平栫式・塞ノ神式 曽畑式 土坑群(約150基)・深浦式・近畿系の大歳山式・鷹島式・瀬戸内系の船元式・玦状耳飾り 辛川式・丸尾式・西平式・中岳Ⅱ式 入佐式・黒川式
10	永吉天神段 H24 ～	曽於郡大崎町 標高30ｍの河岸段丘と 標高50ｍの台地縁辺	旧石器 縄文早期 縄文晩期 弥生中期 古墳 古代 中世	石器製作跡・礫群・尖頭器・ナイフ形石器 集石遺構・埋設土器 竪穴住居跡・落とし穴・土坑 竪穴住居跡・円形周溝墓を中心とした土坑墓群・掘立柱建物跡・土坑・入来式・山ノ口式・鉄鏃 竪穴住居跡・土坑・埋設土器・成川式 掘立柱建物跡・土坑・須恵器・土師器 掘立柱建物跡・土坑墓・大型土坑・火葬土坑・青磁・白磁・東播系須恵器・滑石世石鍋・銅鏡
11	荒園 H24 ～	曽於郡大崎町 標高30ｍの河岸段丘と 標高50ｍの台地縁辺	旧石器 縄文早期 弥生中期 古墳 古代以前	畦原型細石核・細石刃・水晶剥片 集石遺構・チップ集中区・前平式・下剝峯式・苦浜式・平栫式・塞ノ神式 竪穴住居跡・吉ヶ崎式・山ノ口式 竪穴住居跡(焼失家屋１軒含む)・笹貫式 埋土中に紫コラ(開聞岳起源AC874年)を含む片薬研堀
12	宮脇 H27 ～	曽於郡大崎町 標高50ｍの台地	縄文早期	集石遺構・加栗山式・吉田式・下剝峯式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式
13	平良上Ｃ H26 ～ H27	曽於郡大崎町 標高40ｍの台地縁辺	縄文早期	竪穴住居跡・連穴土坑・集石遺構・吉田式・石坂式・下剝峯式・平栫式・塞ノ神式
14	春日堀 H26 ～	志布志市有明町 標高27ｍの台地縁辺	縄文早期 古墳 古代	竪穴住居跡・集石遺構・連穴土坑・石坂式 竪穴住居跡・溝状遺構・須恵器 竪穴建物・掘立柱建物跡・溝状遺構・須恵器
15	木森 H26 ～	志布志市有明町 標高50ｍの台地縁辺	縄文早期	集石遺構
16	次五 H26 ～	志布志市志布志町	旧石器 縄文早期	 平栫式
17	小牧古墳群 H27 ～	志布志市志布志町 標高95mの台地	縄文早期 弥生中期	押型文土器・塞ノ神式・集石遺構

※平成 27 年度現在

第２図　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡位置図

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

１　発掘調査の方法

平成25年度の町田堀遺跡の調査は，11,600㎡を対象に実施した。調査区は道路や畦畔により調査区１～調査区４まで区分した。

グリッドは座標値（X=-172350，Y=-6460）を起点として磁北に合わせて設定した。また，10ｍ単位で北からＡ・Ｂ・Ｃ……，西から１・２・３……とした。

発掘調査は，調査区１及び調査区４から開始した。表土剥ぎは重機（バックホー）により行ったが，掘削深度については，平成24年度の確認調査の結果を基にした。その後，遺物包含層については人力による掘削を行い，遺物や遺構の検出に努めた。

遺物の取り上げ及び，古道・溝状遺構についてはトータルステーションを用いた。また，遺構やまとまった土器については，手測り実測を行った。地形測量は，Ⅱ層上面とⅢ層上面で精査を行い実施した。

竪穴住居跡については，中央に十字の土層観察用ベルトを残し掘り下げ，遺物はトータルステーションによる点上げと手測り実測を併用した。

地下式横穴墓については，土層断面の実測を行いながら，竪坑の1/4掘り下げ，1/2掘り下げを行った後発掘した。玄室については，流入土や天井落盤土のある墓は土層の主軸断面を実測後慎重に土砂除去を実施した。

Ⅴ層（アカホヤ層）下位については，各調査区共にトレンチを設定し下層確認調査を行ったが，遺物・遺構は確認されなかった。

２　整理作業の方法

整理作業は平成25年度発掘調査と平行して，現場で水洗い，注記，接合，分類まで行った。また一部遺構についてもデジタルトレースまで行った。

平成26年度は，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに整理作業支援業務を委託した。当初，未洗い遺物の水洗い，注記を行った。その後，接合・復元作業を行った後に土器・石器の実測・トレースを行った。また，鉄器については公益財団法人　元興寺文化財研究所へ実測と科学分析を委託した。また，炭化材についての放射性炭素年代測定及び樹種同定を株式会社古環境研究所，開聞岳起源と思われる火山灰の分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

地下式横穴墓等の遺構については，デジタルトレースを実施した。

縄文時代及び弥生時代の竪穴住居跡からサンプリングした土壌について，ウォーターフローテーションを行った。

平成27年度は，国際文化財株式会社に整理・報告書作成作業支援業務を委託した。未実測分の土器・石器の実測・トレースから作業を開始，随時，レイアウト，写真撮影，原稿執筆を行った。

３　出土遺物の分類について

（１）土器類についての分類

出土した遺物については，遺物包含層のⅡ層から新旧混在した状況で出土しているため，層位ごとの分類は困難であった。水洗いが終わった段階で時代・型式等を分類した。

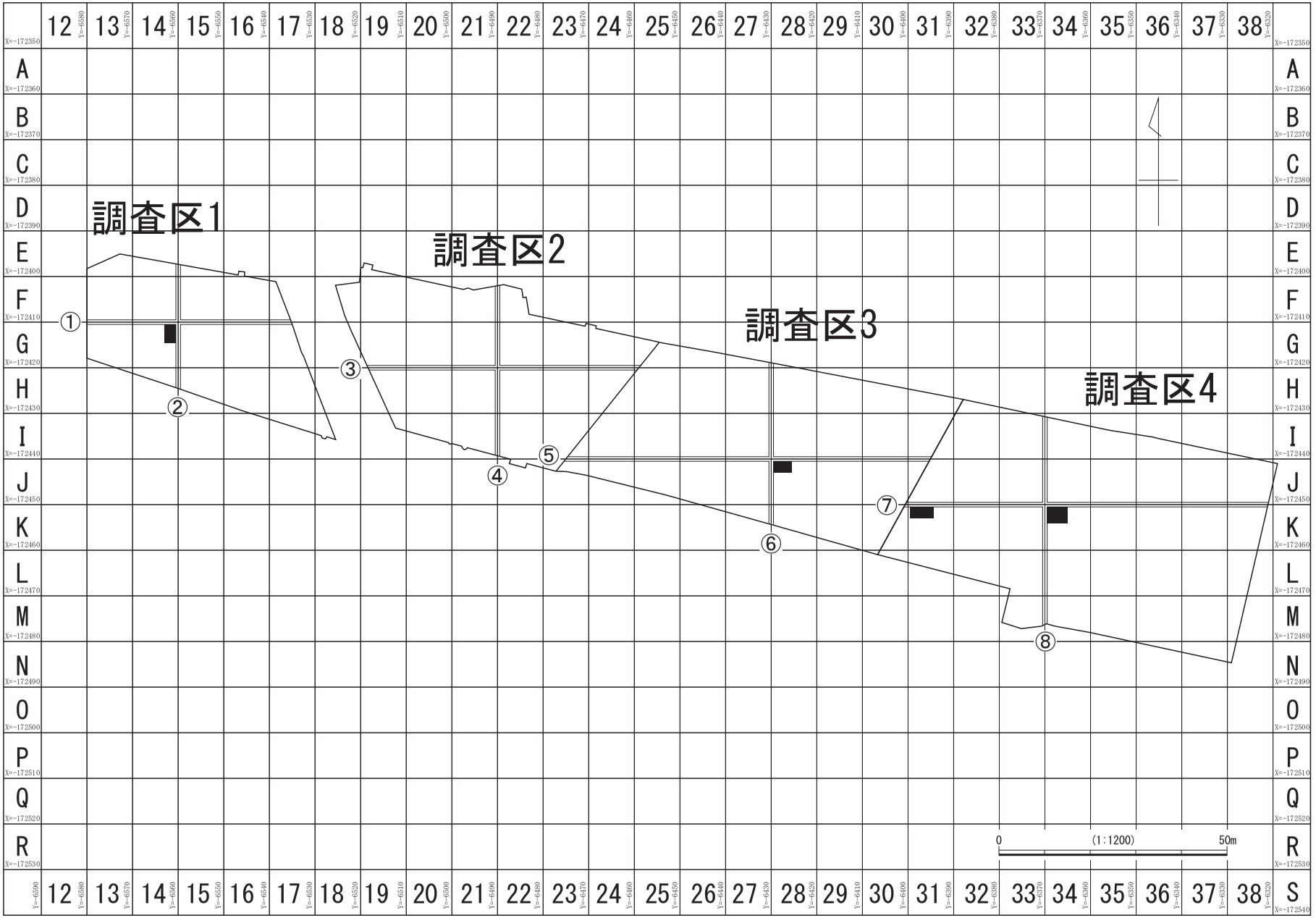
（２）石器類についての分類

石器については，ほとんどが縄文時代に属するものであるが，縄文時代の遺構・遺物は後期の中岳Ⅱ式土器が大半を占めるため縄文後期として記載した。

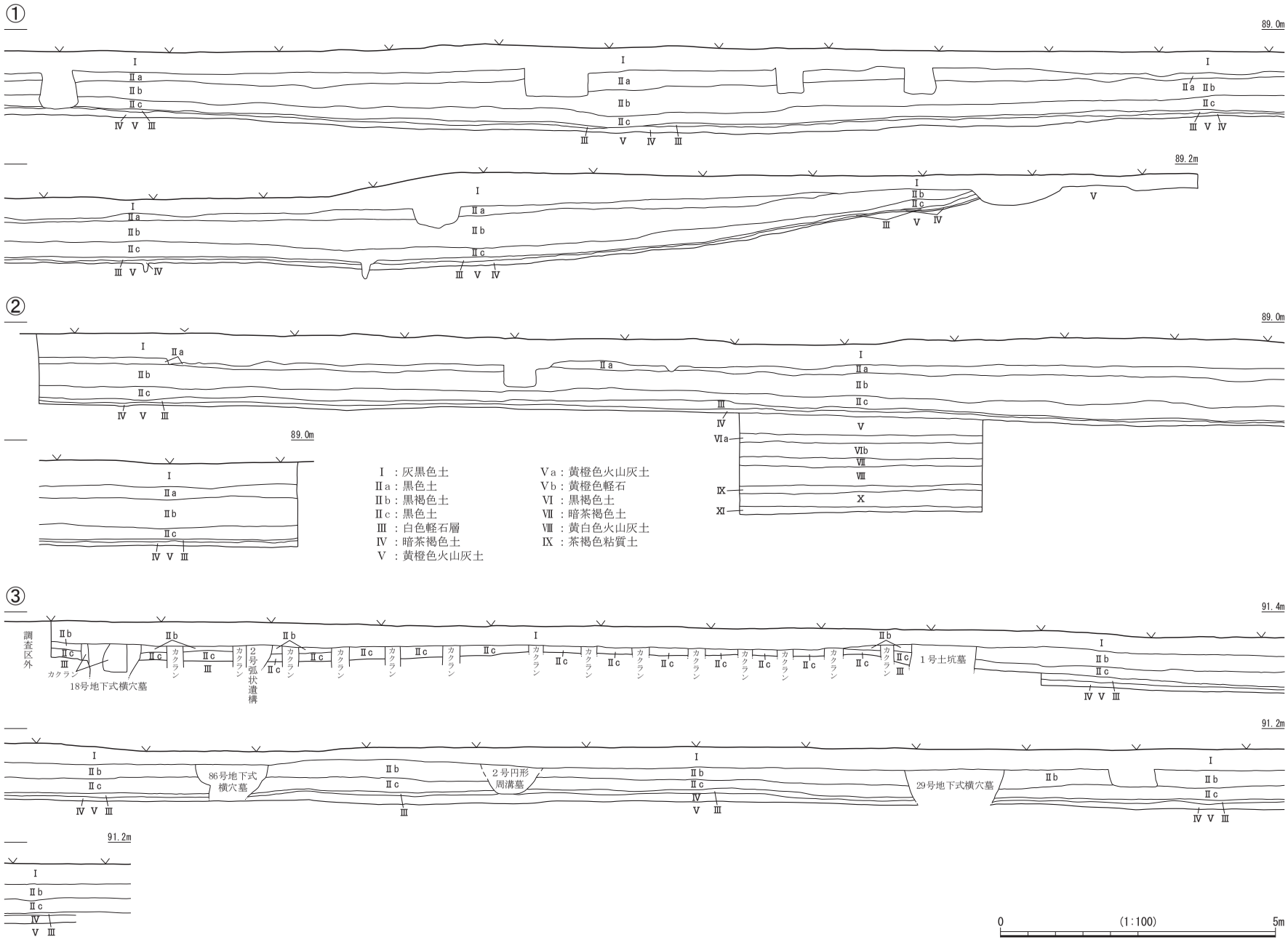
第２節　層序について

調査区２～４は起伏が少なく，傾斜も弱いものであるが調査区２から調査区１へかけては急傾斜で下がって行く。また調査区１も西側へ向かって下がっていく地形である。一部圃場整備により上層が削平されている部分があるが，遺跡全体でほぼ同様の層位である。

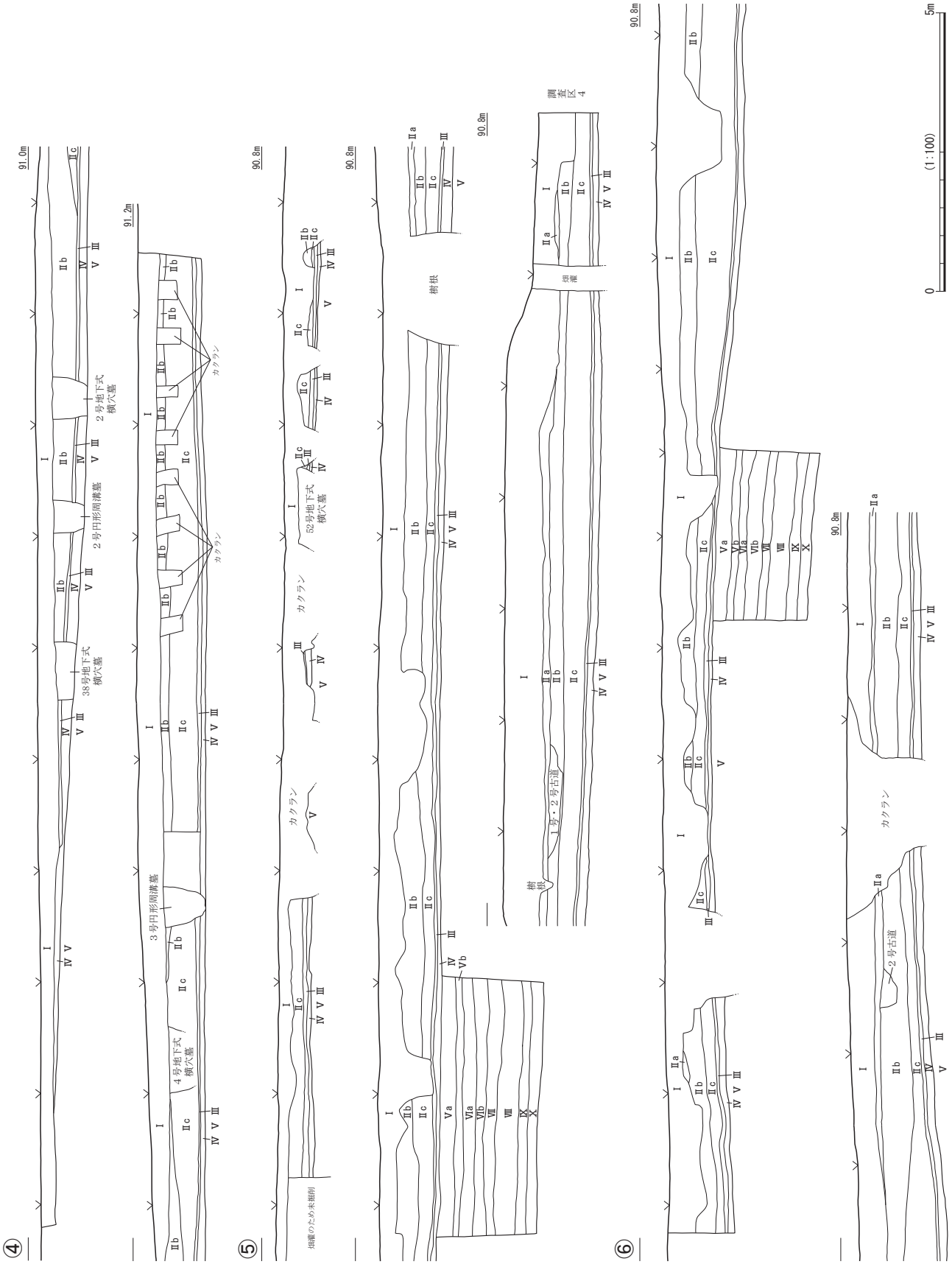
Ⅰ層　：灰黒色土（耕作土），白色軽石・混在。
Ⅱ層　：黒色土で層厚が90㎝を超す所もあり，色調の変化でａ・ｂ・ｃに細分層される。
Ⅱａ層：黒色土（主に弥生時代・古墳時代の包含層）
Ⅱｂ層：黒褐色土（縄文時代後期～晩期）
Ⅱｃ層：黒色土，粘性が強い
Ⅲ層　：白色軽石層で，２～５㎝の堆積である。（池田カルデラ起源，約6,500年前）
Ⅳ層　：暗茶褐色土，やや硬質
Ⅴ層　：黄橙色火山灰土で鬼界カルデラ起源である。上層が火山灰土，下層が軽石である。
Ⅴａ層：黄橙色火山灰土（鬼界カルデラ起源アカホヤ，約7,500年前）
Ⅴｂ層：黄橙色軽石（鬼界カルデラ起源の軽石）
Ⅵ層　：黒褐色土（黄色パミスを少量含む）
Ⅶ層　：暗茶褐色土（黄色パミスを多量含む）
Ⅷ層　：黄白色火山灰土（桜島起源の薩摩火山灰）
Ⅸ層　：茶褐色粘質土



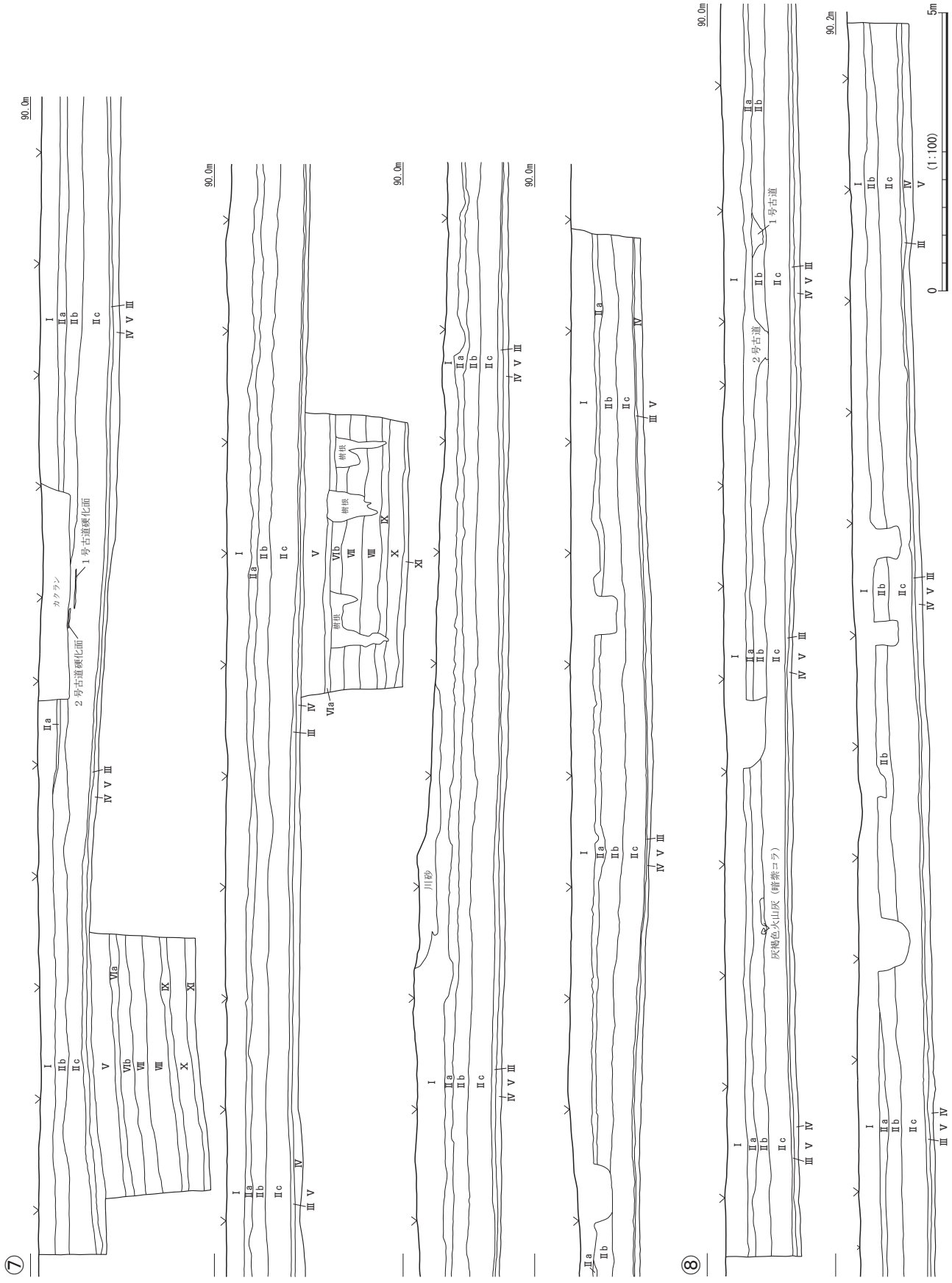
第３図　グリッド配置図・土層断面位置図



第４図　土層断面図①②③



第5図　土層断面図④⑤⑥


⑦
⑧
90.0m
90.2m
1号古道
2号古道
1号古道硬化面
2号古道硬化面
カクラン
樹根
川砂
灰褐色火山灰（暗紫コラ）
5m
0
(1:100)

第６図　土層断面図⑦⑧

第３節　調査の成果

１　縄文時代後期・晩期の調査

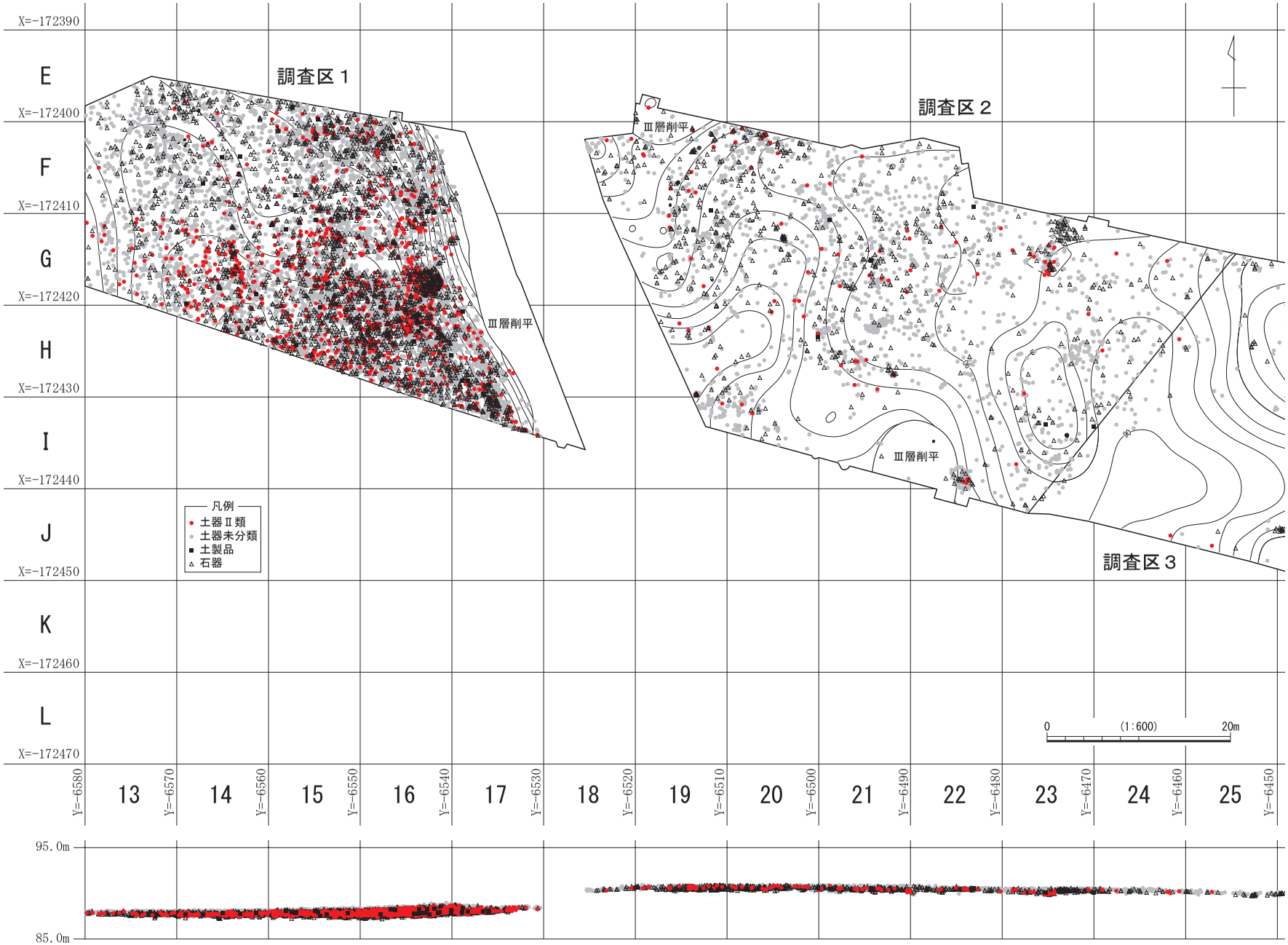
（１）調査の概要

縄文時代の遺構・遺物は主にⅡｂ層（黒褐色土）から出土している。遺構は，竪穴住居跡３軒，埋設土器12基，石斧集積遺構２基，集石遺構10基，落とし穴２基，土坑26基，ピットが複数検出されており，その大半の遺構が後期後半の中岳Ⅱ式土器の時期に帰属するものである。

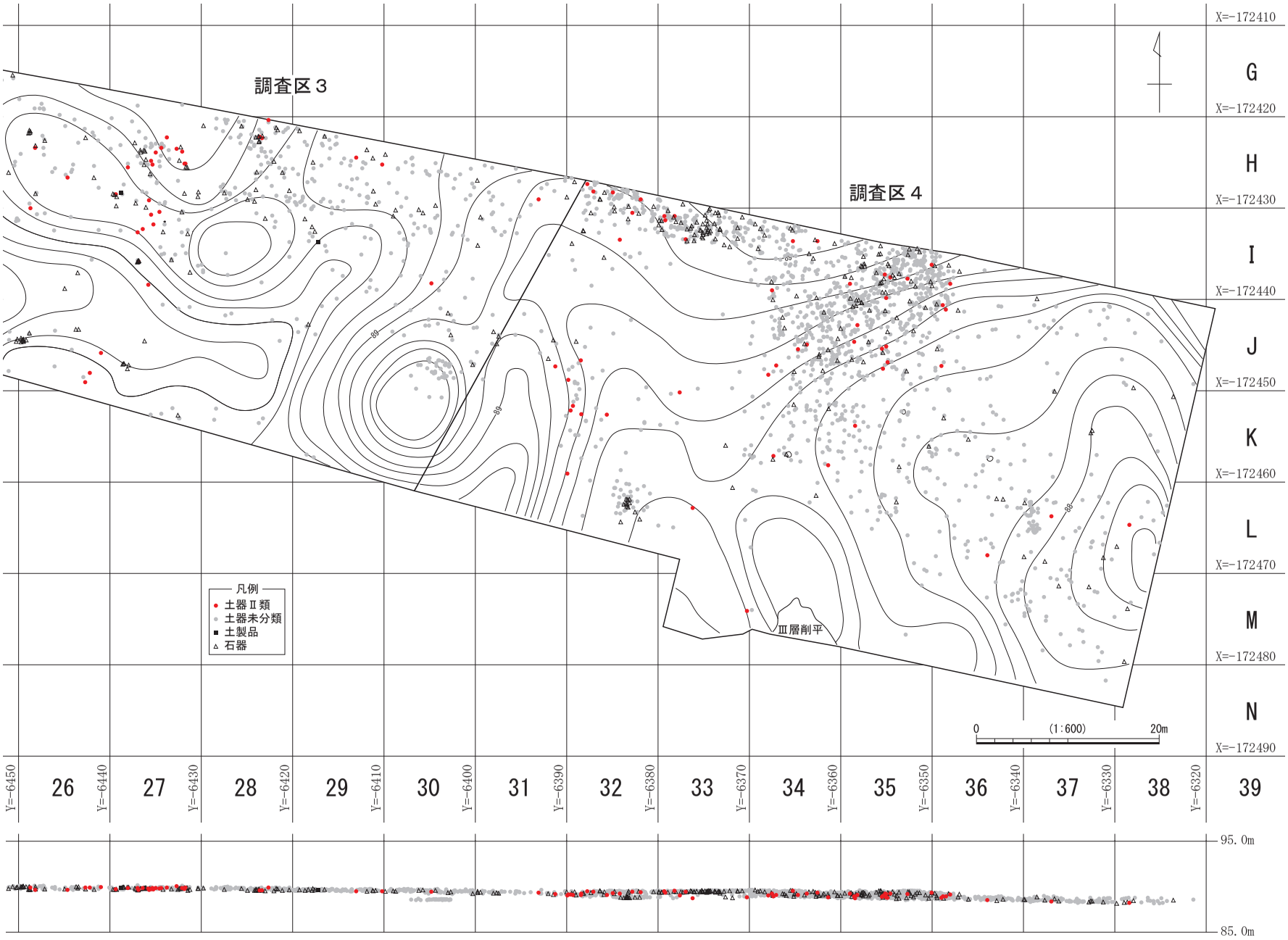
遺物は，後期後半の中岳Ⅱ式土器が相当数出土している他，縄文時代後期中葉の西平式土器，晩期初頭の上加世田式土器，晩期中葉の黒川式土器，晩期末の刻目突帯文土器が出土している。石器は，縄文時代後期と晩期のものが混在している可能性があるが，殆どは中岳Ⅱ式土器の時期に帰属するものと思われることから，一括して報告する。器種は打製石斧が多量に出土している他，磨製石斧・石鏃・ドリル・楔形石器・スクレイパー・磨石・敲石・石皿等多様である。また，垂飾・丸玉・勾玉・管玉等の装飾品や，精神文化を象徴する石刀が出土している。

第７図　縄文時代後期遺構配置図（１）

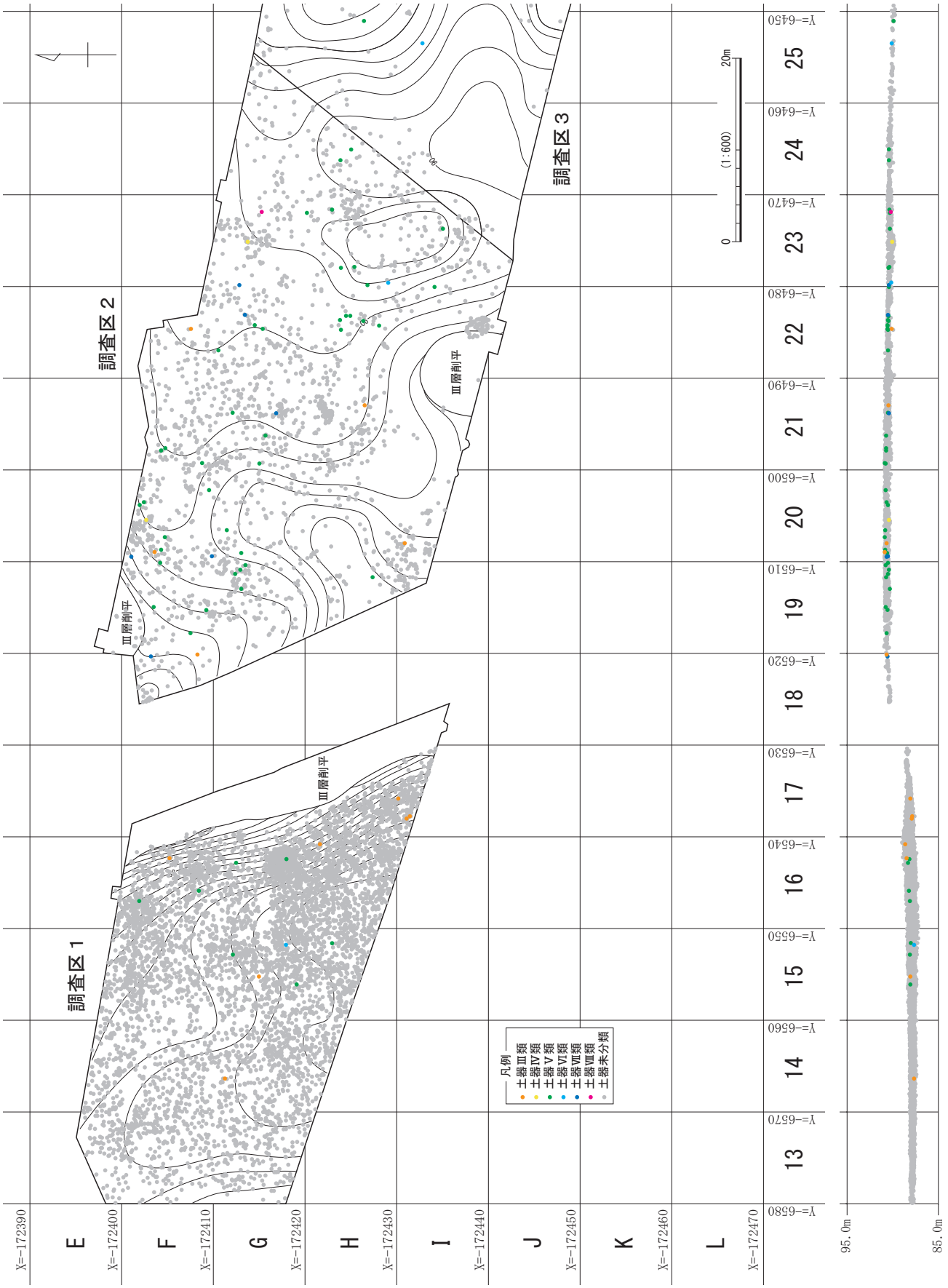
第８図　縄文時代後期遺構配置図（２）



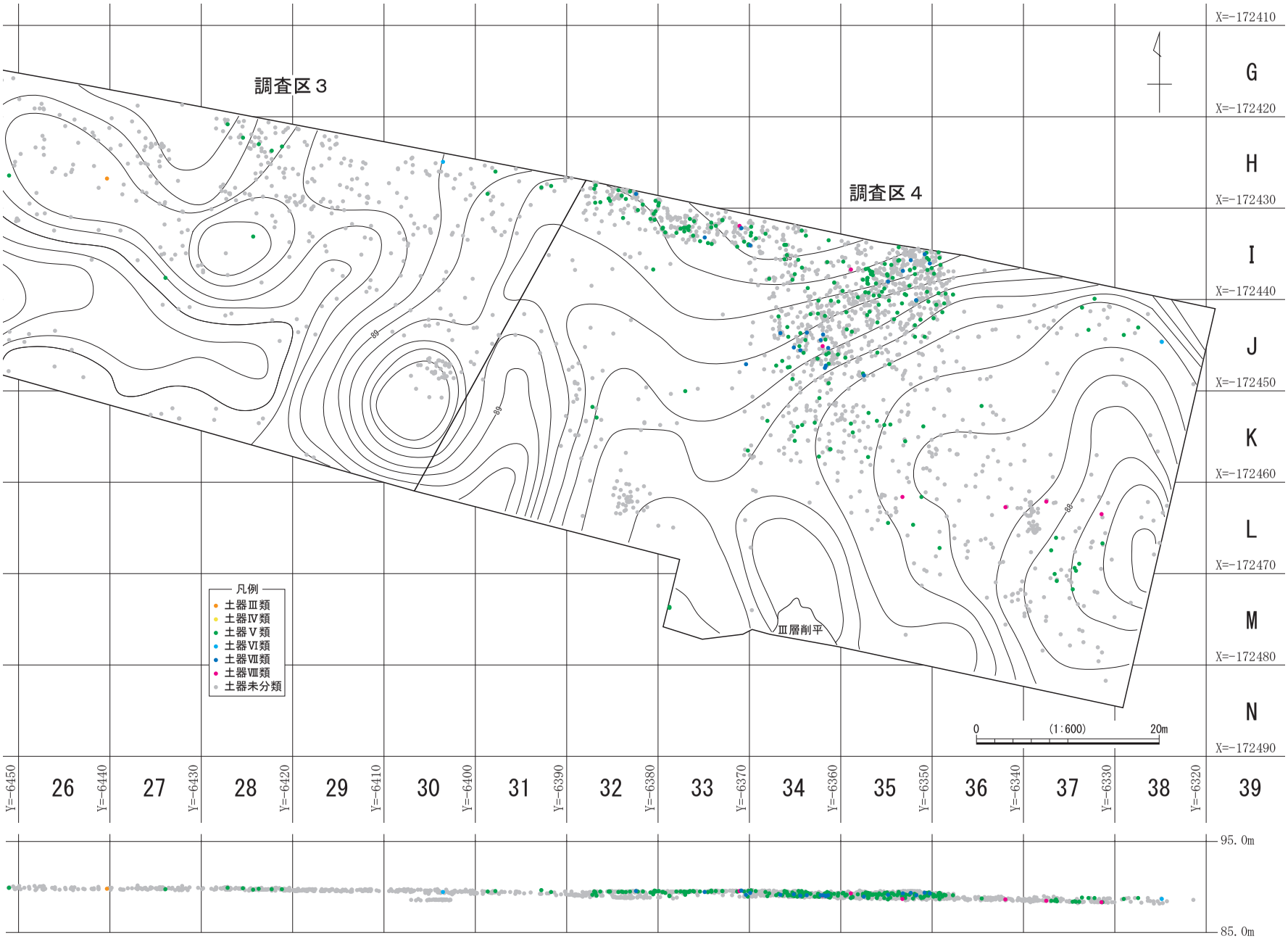
第９図　縄文時代後期遺物出土状況（１）



第10図　縄文時代後期遺物出土状況（２）



第11図　縄文時代晩期遺物出土状況（1）



第12図　縄文時代晩期遺物出土状況（２）

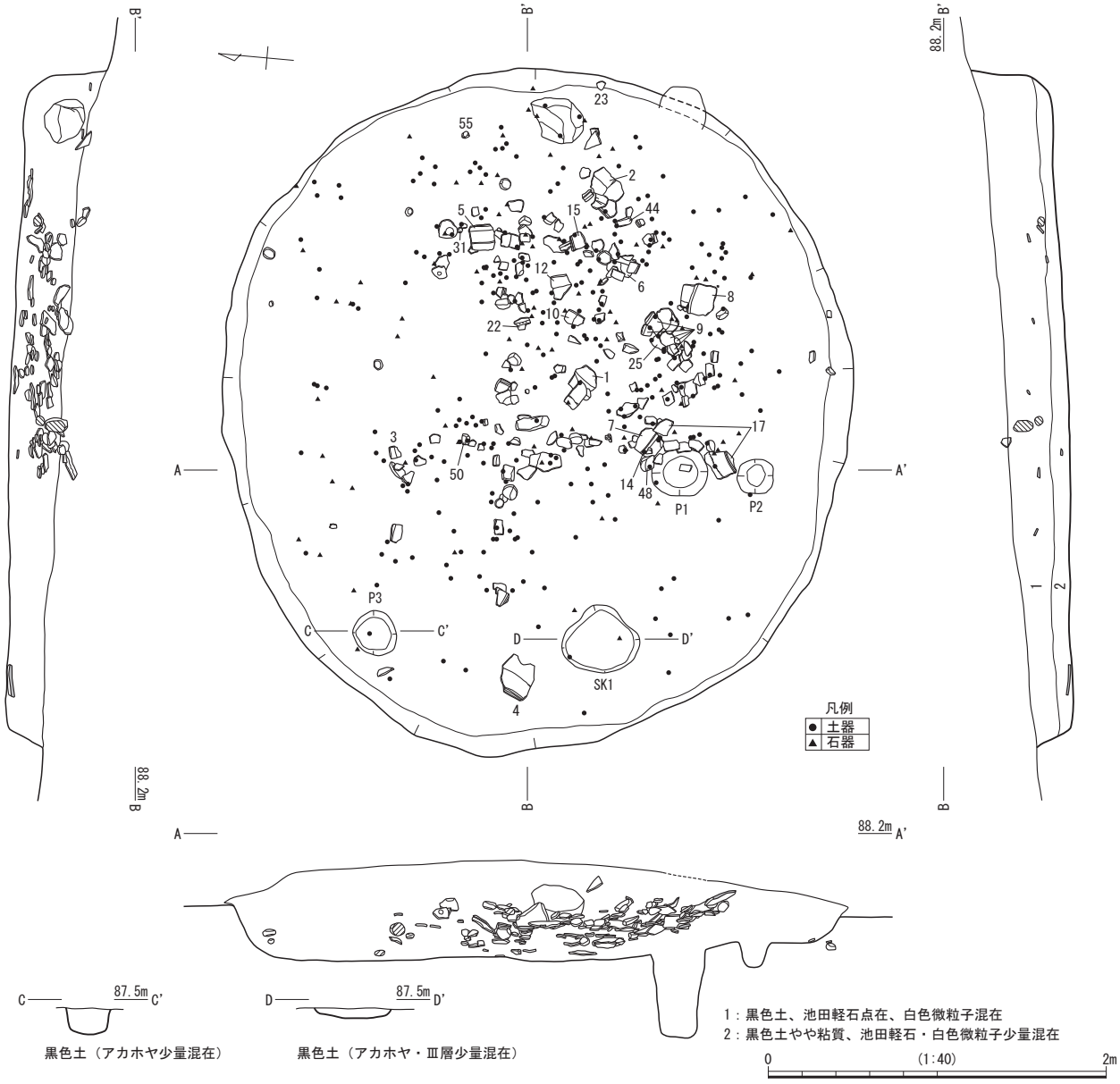
（２）遺構（第13図～第61図）

ア　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第13図～第19図）

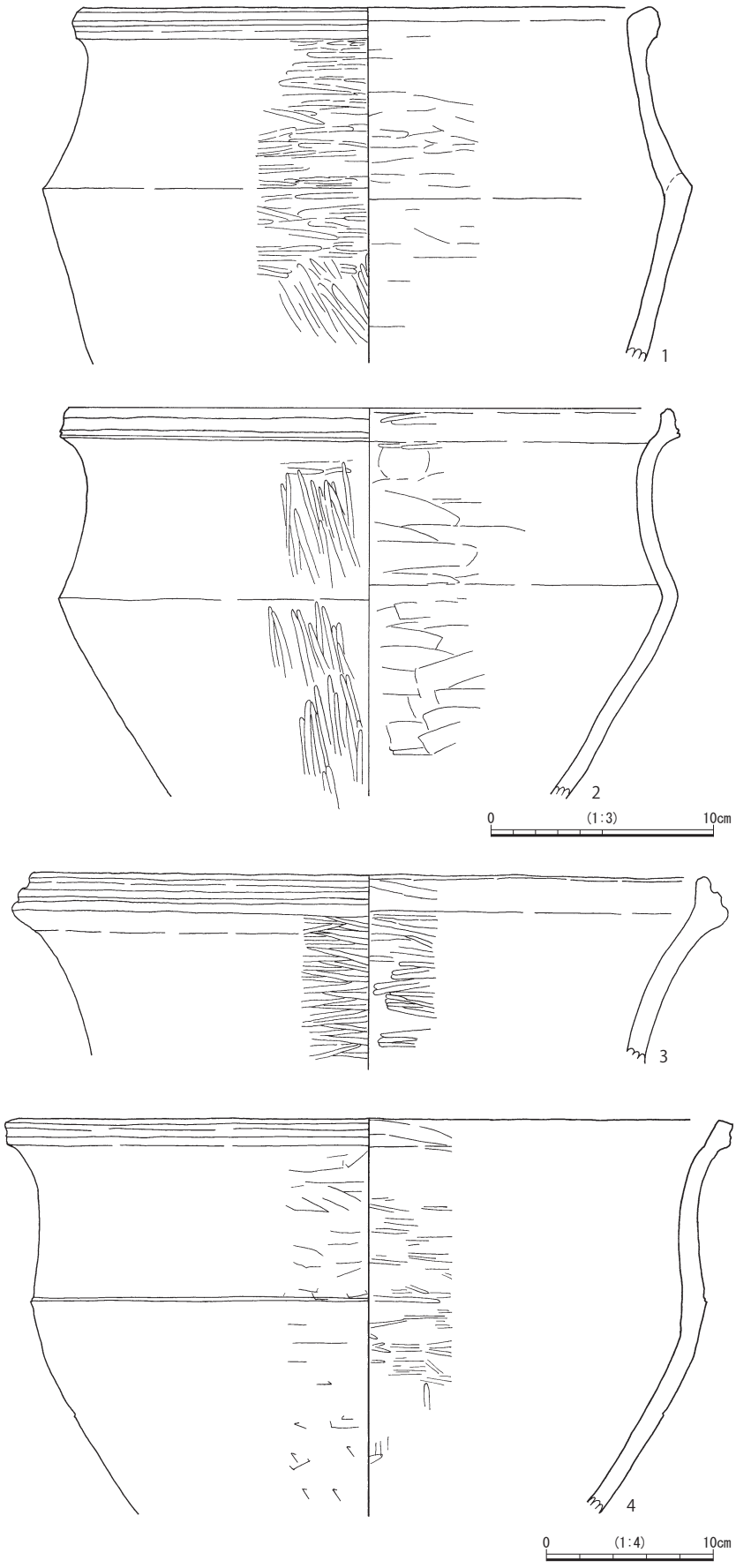
Ｇ－16区において検出された住居跡で，長軸4.1ｍ，短軸3.8ｍの略円形を呈している。検出面はⅡｃ層中で，確認面からの深さは0.4ｍである。埋土は黒色土を主体とする。南壁側にピット１・２，西壁側にピット３と不整形な円形で深さ0.06ｍの浅い土坑１基が検出されているが，柱穴と考えられる痕跡は認められなかった。南東隅をピット62に掘り込まれている。１号住居跡から採取された炭化物の分析の結果，^{14}C年代測定で，3825±20年BPの年代値が得られている（第４章６参照）。

遺物は床面直上から１層下面にかけて多量に出土しており，中央から壁面に向かって広がっている。多量の土器に対し完形品が全くないことから，建物廃絶後に廃棄された可能性が考えられる。１～17・22・25・26は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器，18～21・23・24が中岳Ⅱ式土器の浅鉢形土器である。11がⅡＡ類，２～６・９・10・14・16・19がⅡＢ類，１・15がⅡＣ類，12がⅡＤ類，18・20がⅡＧ類にそれぞれ分類される。調整は，外面胴部上位に横位のミガキ，胴部下位に縦位のミガキを施すものが多い。内面は横位のナデと横位のミガキを行うものがある。１は口径25.2㎝を測る。口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせている。２は口径26.8㎝を測る。３は口径32.0㎝を測る。口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。外面に煤が付着している。４は口径41.1㎝を測る。胴部に沈線を１条，口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。５は口径33.9㎝を測る。胴部に沈線を１条巡らせ，口縁部は肥厚し，口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせている。外面に煤が付着してい

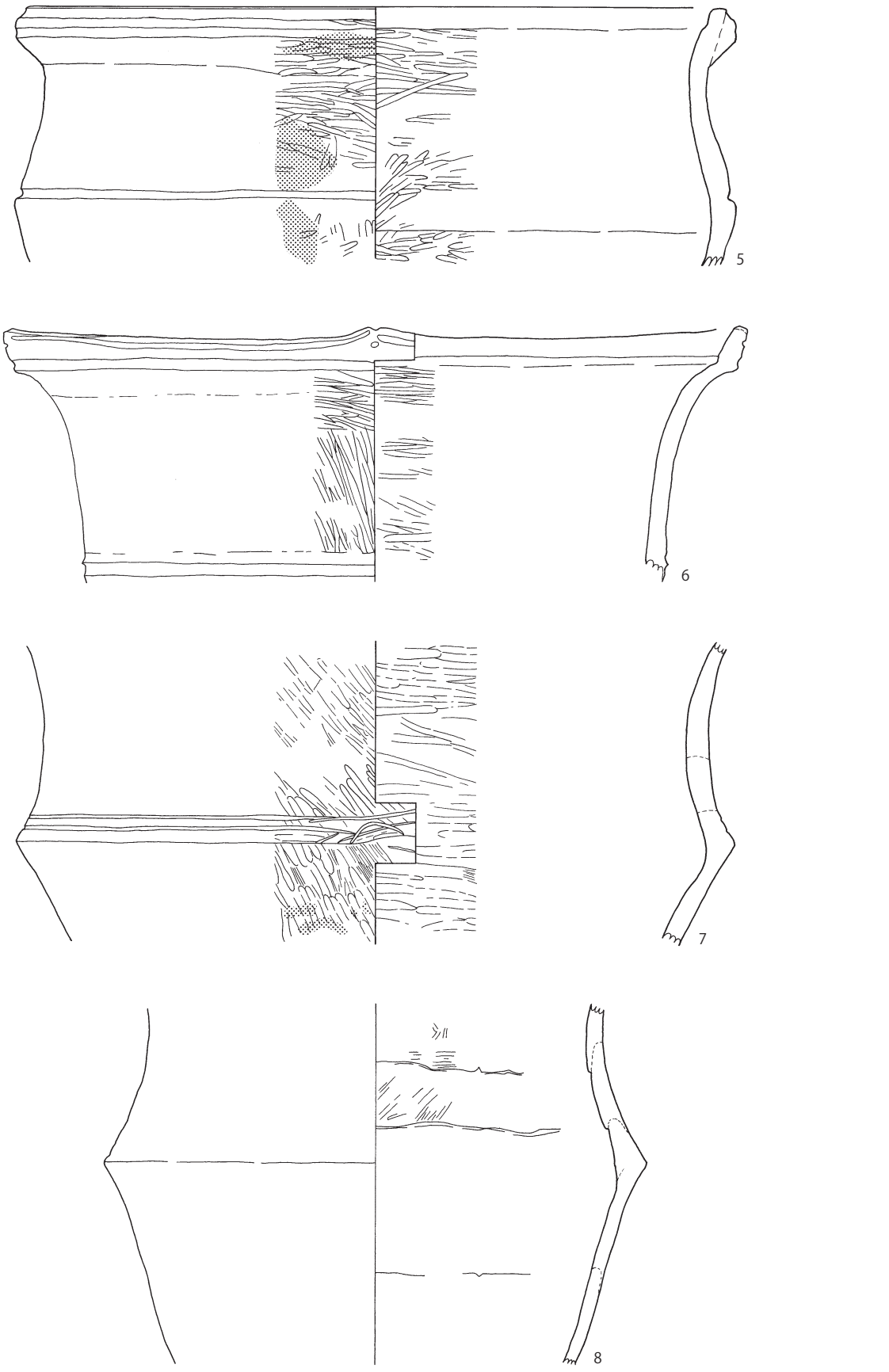


第13図　１号竪穴住居跡

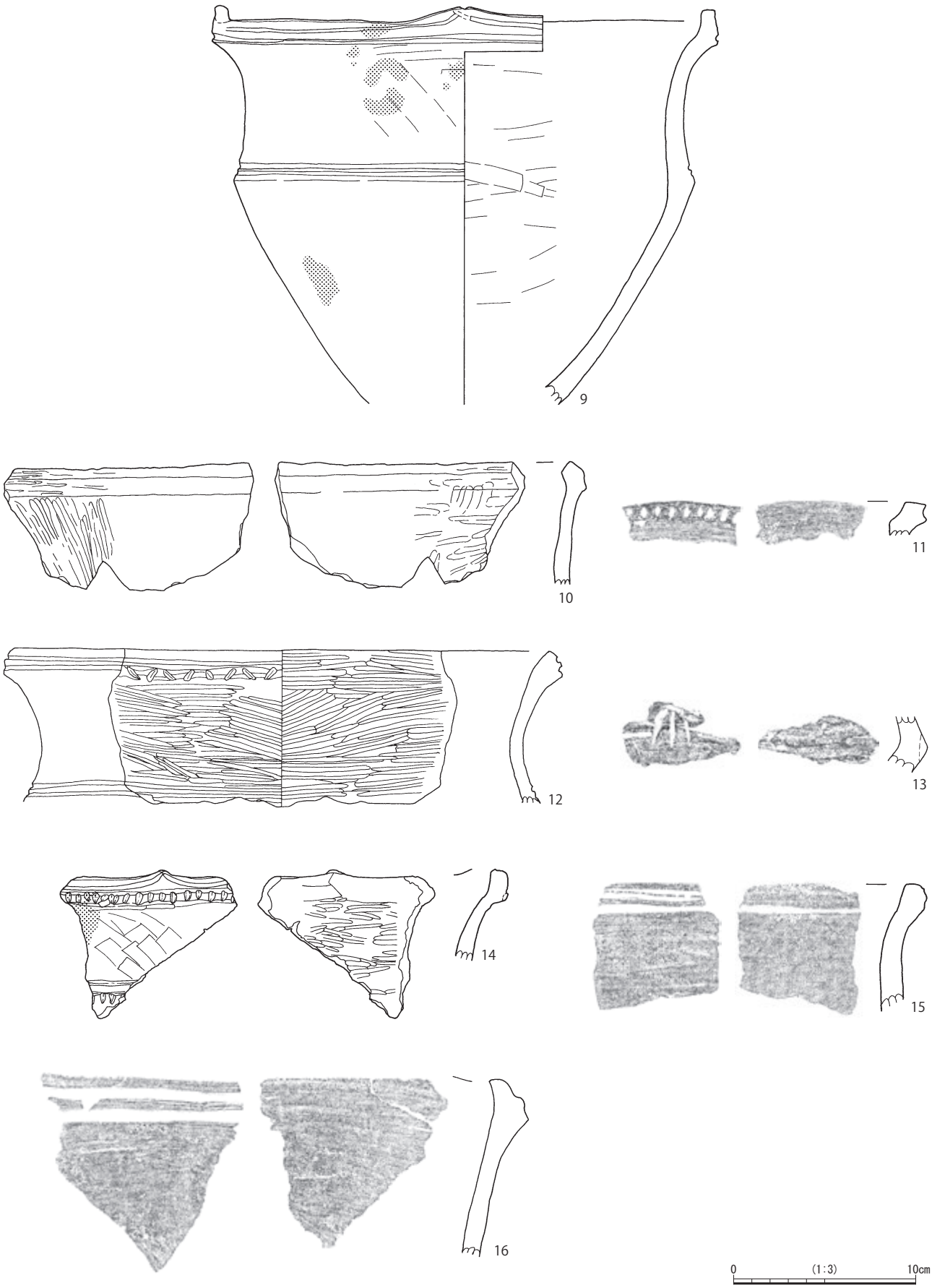
る。６は口径37.0㎝を測る４対の頂部を持つ波状口縁である。口縁部文様帯に沈線を２条巡らせ，頂部下に円形の凹点を施している。７・８は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する胴部である。７は沈線を２条巡らせた後，三日月状の凹点を施している。９は口径27.3㎝を測る４対の頂部を持つ波状口縁である。胴部に沈線を２条，口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。口唇部の一部に刻目を施している。外面には煤が付着している。10は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせている。11は口縁部文様帯に楕円形の凹点を連続的に施している。12は口径30.5㎝を測る。胴部に沈線を２条巡らせている。口縁部文様帯に沈線を２条巡らせた後，「は」の字状の凹点を施している。13は沈線を１条巡らせた後，刻目を施している。14は波状口縁である。胴部に沈線２条と刻目，口縁部文様帯に沈線が２条と刻目がそれぞれ施されている。15は肥大した口縁部文様帯に沈線を３条巡らせている。16は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせている。17は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する胴部である。胴部に沈線を２条巡らせた後，三日月形の凹点を施している。口縁部文様帯には沈線が２条残存している。18は口径25.6㎝を測る。口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。19は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。20 ～ 24は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する胴部である。21は胴部に半月形の凹点を施している。22 ～ 24は胴部に沈線を１条巡らせいている。22・24は胴部に楕円形の凹点を施している。23は胴部に刻目を施している。21・24は外面胴部上位には帯状に赤色顔料を塗布している。24は外面胴部下位には煤が付着している。25は底径4.1㎝を測る，平底の底部である。26は底径2.8㎝を測る，丸みを帯びた底部である。27 ～ 32は円盤形土製加工品である。周縁を打ち欠いた後，面取りを行っている。33 ～ 41は石鏃である。33・34がⅠｃ類で，35 ～ 38がⅡｂ類にそれぞれ分類される。39 ～ 41は未製品である。石材は，34・36・39 ～ 41が黒曜石，35・37・38が安山岩，



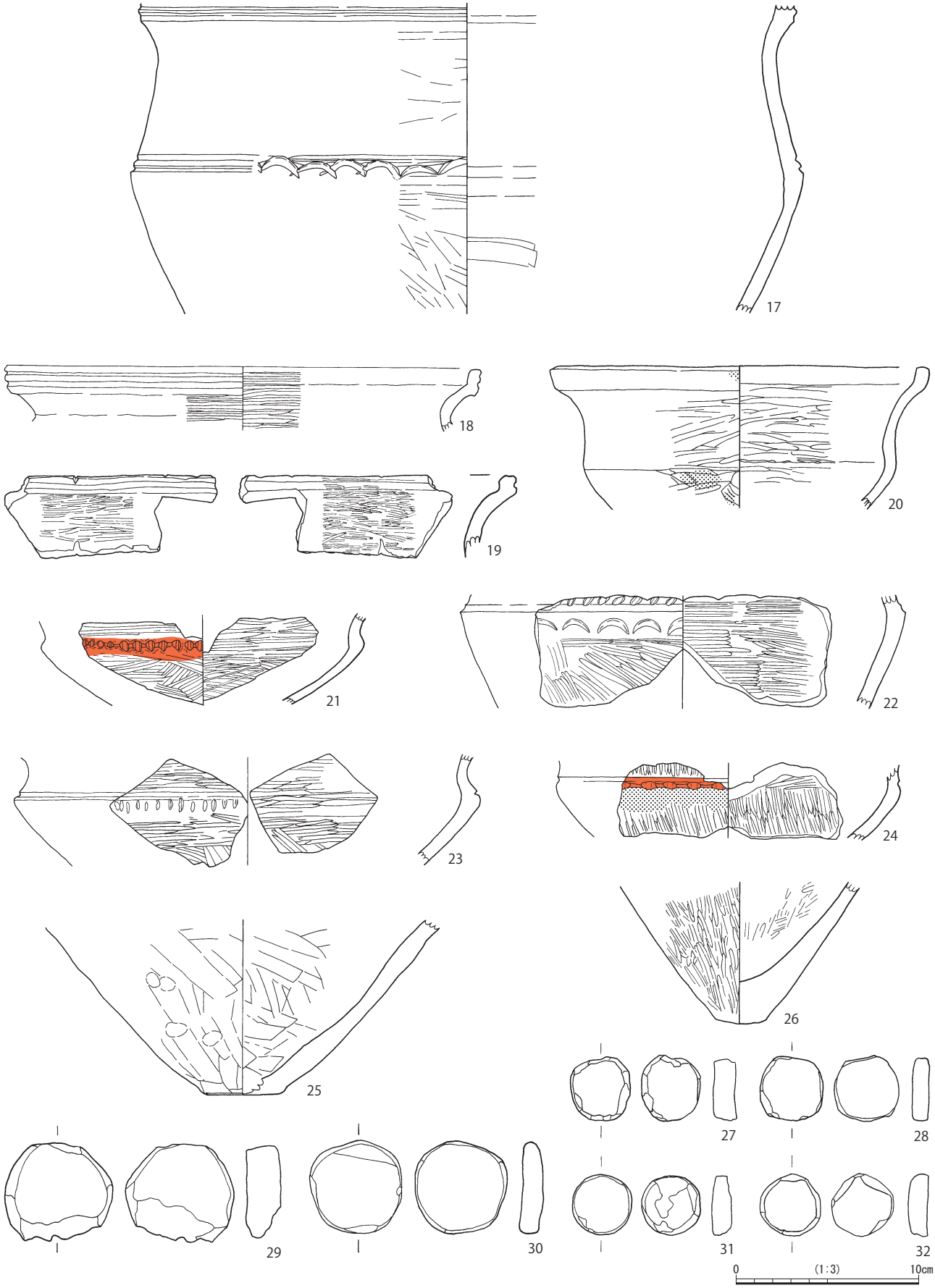
第14図　１号竪穴住居跡出土土器（１）



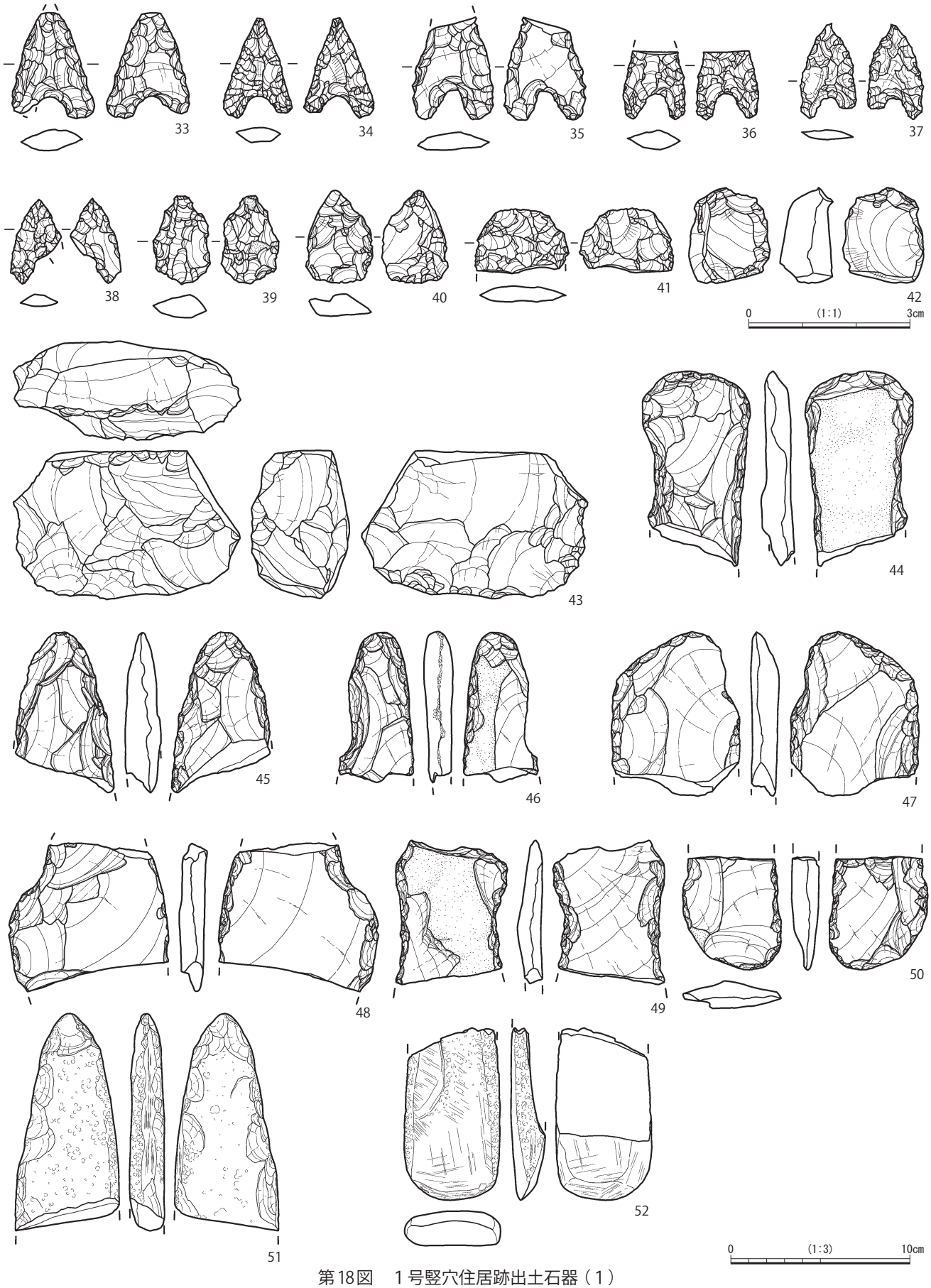
第15図　１号竪穴住居跡出土土器（２）



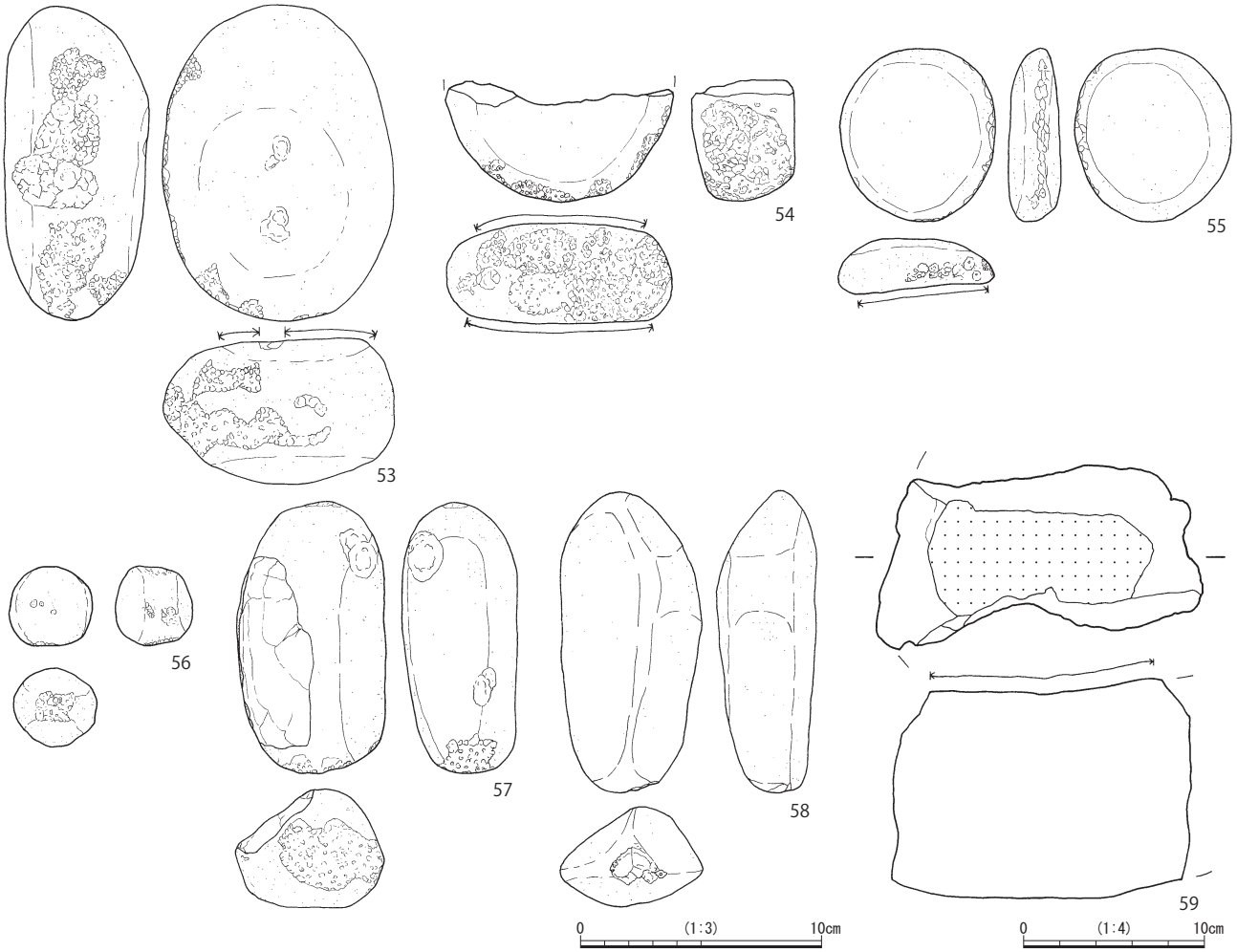
第16図　１号竪穴住居跡出土土器（３）



第17図　1号竪穴住居跡出土土器（4）・土製品



第18図　1号竪穴住居跡出土石器（1）



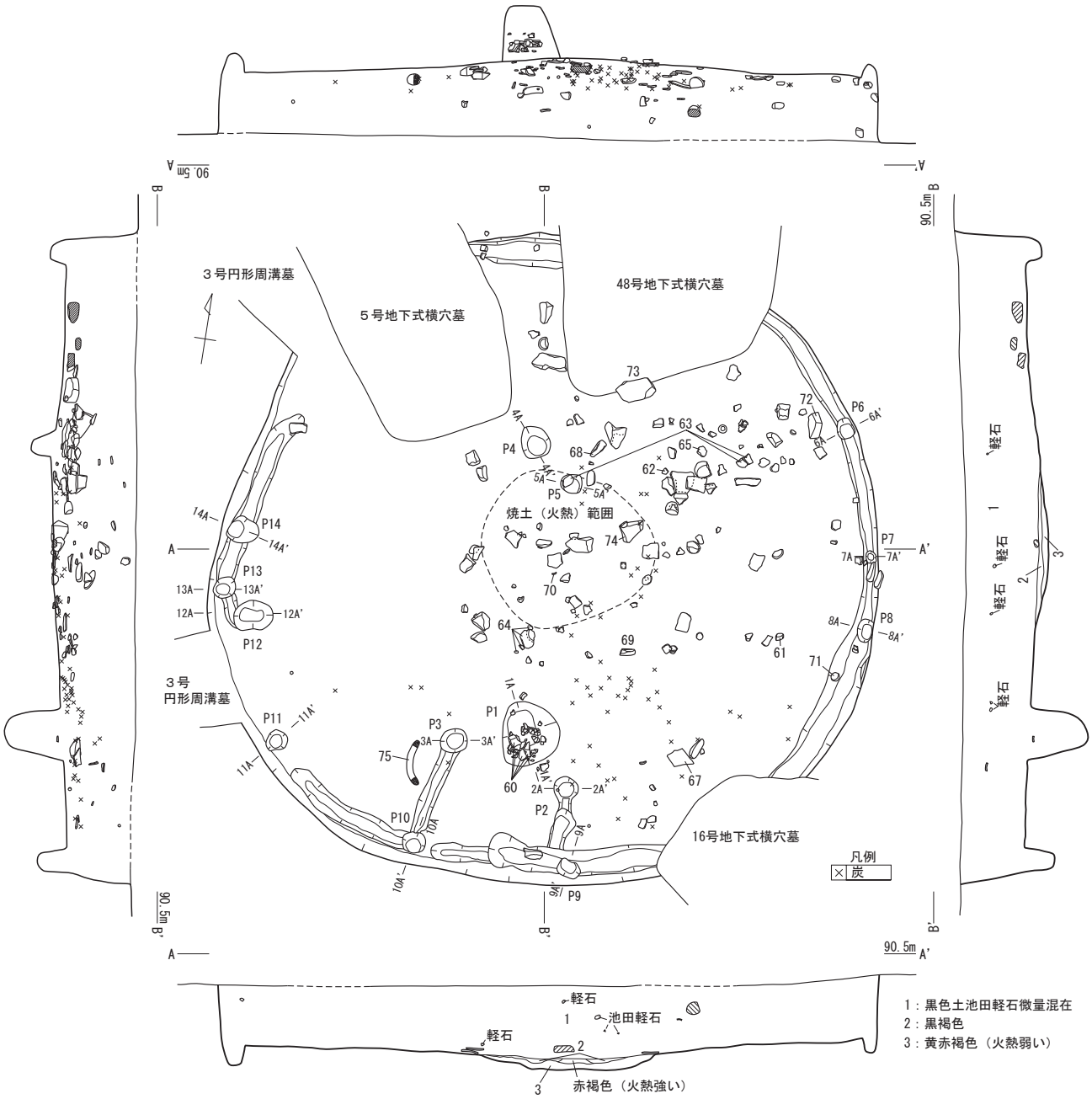
第19図　1号竪穴住居跡出土石器（2）

33がホルンフェルスである。42は黒曜石製の楔形石器である。上下両端部に対となる潰れ状の剥離が認められる。43はチャート製の石核で，打面転移を頻繁に行う石核の一端を剥離し，厚手の剥片を獲得し，裏面の下端縁から右側縁にかけて連続的に小型の剥片を剥離している。44 ～ 50は打製石斧である。45・47・50がⅠａ類，49がⅢａ類，44・46がⅣａ類にそれぞれ分類される。全て欠損している。43を除き，素材剥片の剥離面や自然面を残している。石材は全てホルンフェルスである。51・52は磨製石斧で，共に欠損している。51は未製品で，側縁にのみ研磨痕が認められる他，側縁に剥離痕，表裏面中央に敲打成形の痕跡が残される。石材は共にホルンフェルスである。53 ～ 58は磨石・敲石類である。53 ～ 55は扁平な楕円形の礫を利用したもので，磨面と敲打痕が複合して認められる。56は球状の礫を利用したもので，右側縁及び，下端部に敲打痕が集中する。57・58は棒状の礫を利用したもので，下端部に敲打痕が集中する。石材は，53 ～ 57が安山岩，58がホルンフェルスである。59は石皿で，大部分が欠損している。表面は使用により，緩やかに凹面を形成している。石材は凝灰岩である。

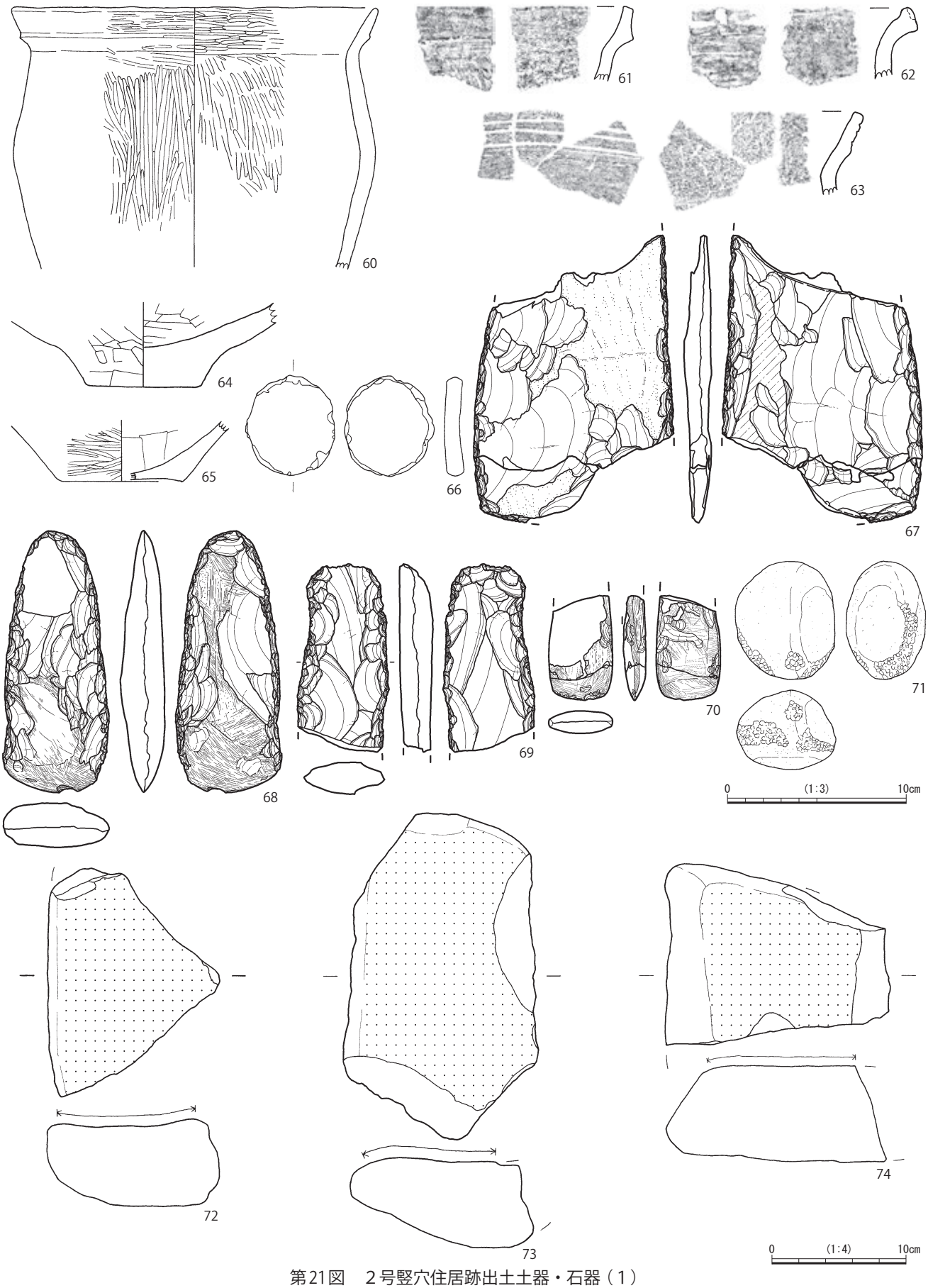
２号竪穴住居跡（第20図～第22図）

Ｇ－22区において検出された住居跡で，長軸4.2ｍ，短軸4.1ｍの略円形を呈している。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは0.5ｍである。埋土は黒色土を主体とする。壁帯溝が略全周しており，溝の中に柱穴と思われるピットが検出されている。壁際の一部が３号円形周溝墓，５号弧状遺構，５・17・49号地下式横穴墓に掘り込まれている。中央に浅く窪んだ地床炉があり，焼土と炭化物・材が検出されている。２号住居から採取された炭化材の分析の結果，炭化材はクリで，^{14}C年代測定では3015±20年BPの年代値が得られている（第４章６参照）。

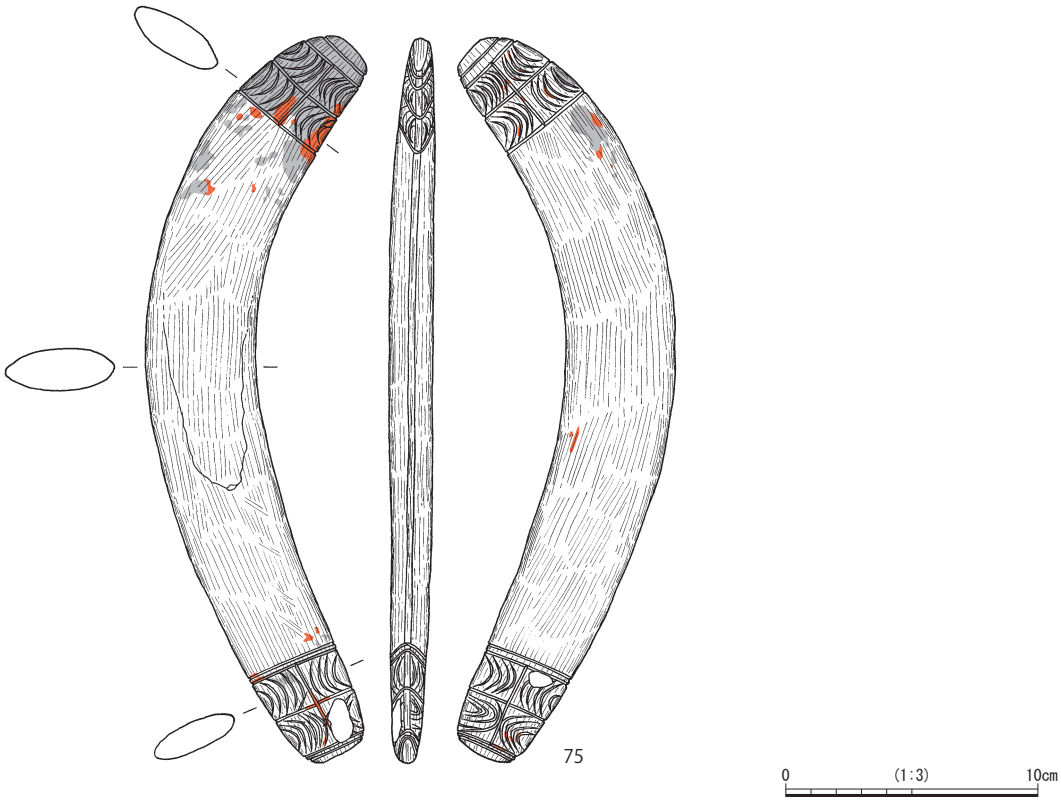
遺物は主に床面直上から出土しており，中央から東壁面に向かって広がっている。60 ～ 62・64・65は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。61・62がⅡＢ類，60がⅡＥ類に分類される。63は上加世田式土器の深鉢形土器である。60は口径20.0㎝を測る。器面調整は内外面共に丁寧なヘラミガキを施している。62は口縁部文様帯に楕円形の凹点が施されている。63は口縁部文様帯に沈線を３条巡らせている。64は底径6.2㎝を測る平底



第20図　2号竪穴住居跡



第21図　２号竪穴住居跡出土土器・石器（１）



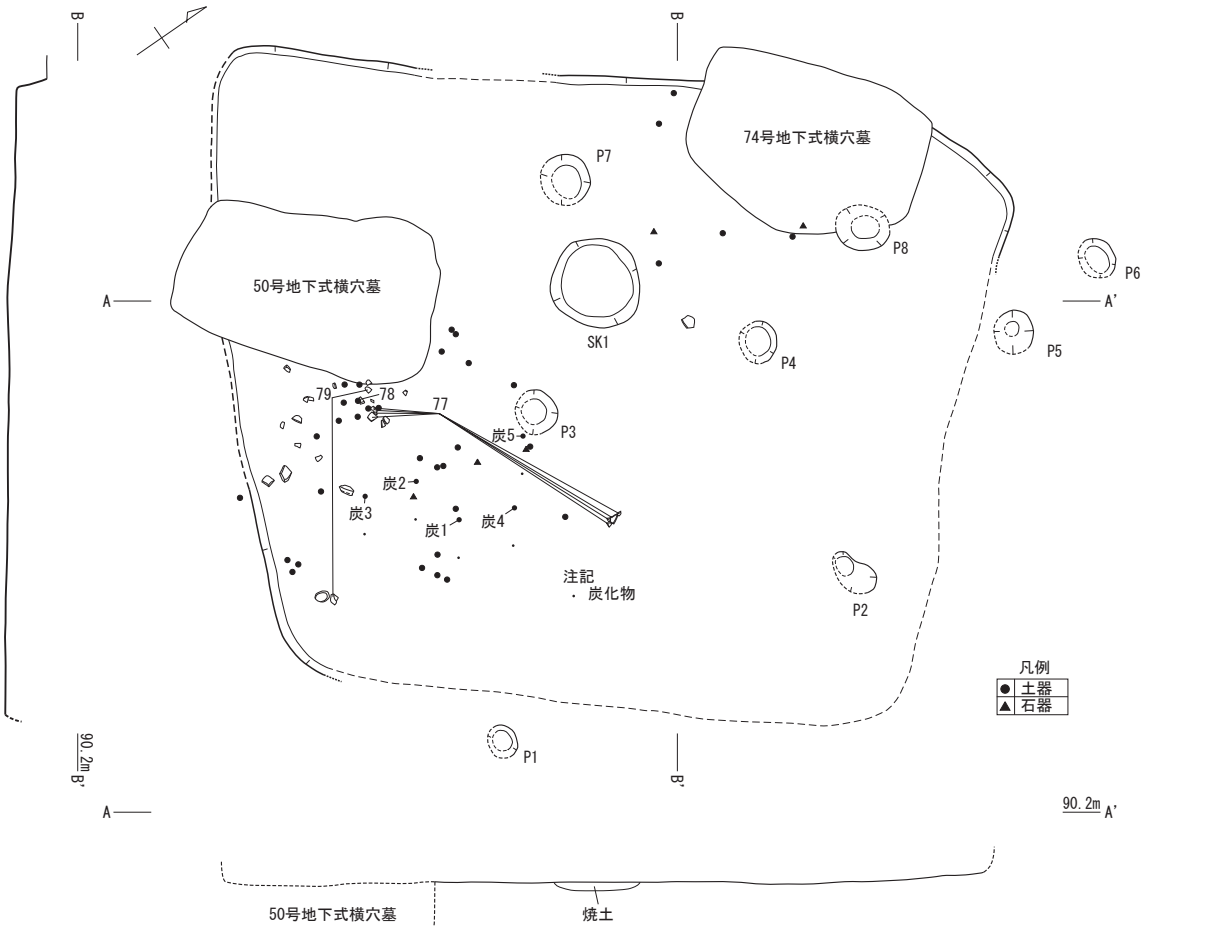
第22図　２号竪穴住居跡出土石器（２）

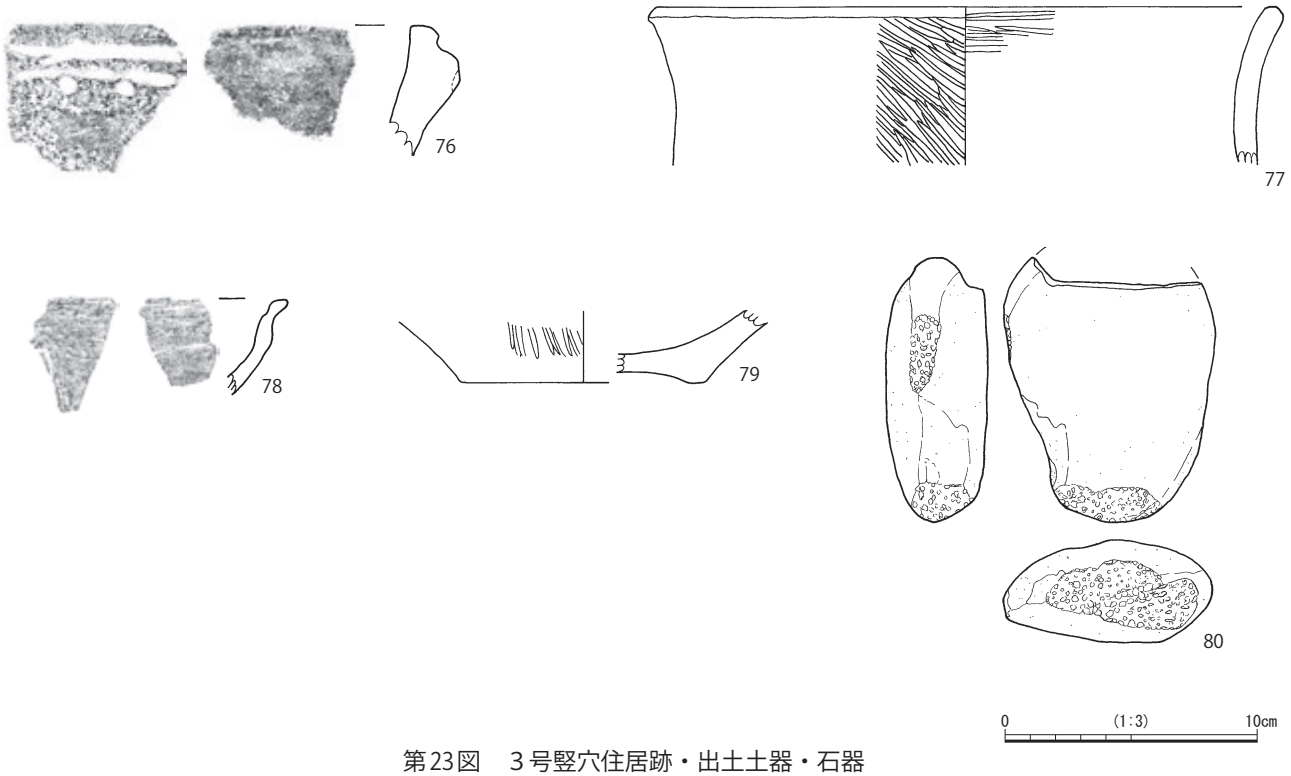
である。65は底径6.6㎝を測る，やや上げ底の底部で，器厚が薄い。66は円盤形土製加工品である。周縁を打ち欠いた後，面取りを行っている。67 ～ 69は打製石斧である。67・69がⅠａ類，68がⅠｂ類に分類される。67・68は自然面を残している。69は裏面に素材剥片時の剥離面を残している。石材は全てホルンフェルスである。70は磨製石斧で，基部を欠損している。刃部には使用によるものと思われる刃こぼれが認められる。石材はホルンフェルスである。71は磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。扁平な楕円形の礫を利用している。石材は安山岩である。72 ～ 74は石皿である。全て欠損品である。72・73は使用により，緩やかに凹面を形成しており，74は平坦な使用面を形成している。石材は72・73が凝灰岩，74が安山岩である。75は最大長28.6㎝，最大幅4.3㎝，最大厚1.7㎝の天附型の石刀である。住居内南西隅の床面より出土している。刃部は鋭利でない。内反りで頭部に瘤状の突起はなく全体的に扁平である。また，頭部と端部に櫃原文様と呼ばれる線刻が施されている。頭部は沈線により４分割された区画の中に４本と５本の弧状の文様が描かれている。端部も２条の沈線と１条の沈線で４分割した区画の中に３～４本の弧状の文様が描かれている。沈線内には赤色顔料が観察され，頭部の一部には黒色塗膜も認められる。蛍光Ｘ線分析により赤色顔料は朱であることが，ＡＴＲ－ＦＴＩＲ分析により黒色塗膜は漆であることが明らかとなっている。資料の肉眼観察と分析結果より，石刀に朱を塗布した後に黒色漆を塗布していることが理解できる。石材はホルンフェルスである。

３号竪穴住居跡（第23図）

Ｇ－23区において検出された住居跡で，長軸4.2ｍ，短軸3.6ｍの方形に近い形状を呈している。検出面はⅡｃ層中で，確認面からの深さは0.2ｍである。埋土は黒色土を主体とする。住居内外にピットが複数基認められるが，規則性はなく，柱穴と考えられる痕跡は認められなかった。ピット264を掘り込み，50・60・74号地下式横穴墓に掘り込まれる。中央に略円形で深さ0.07ｍの浅い土坑が検出されており，焼土及び炭化物を含むことから炉と考えられる。３号住居から採取された炭化材の分析の結果，^{14}Ｃ年代測定で，3030±20年BPの年代値が得られている（第４章６参照）。

住居内の遺物は少なく，図化できたのは５点である。76・77・79が中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器，78が中岳Ⅱ式土器の浅鉢形土器である。76はⅡＣ類，77はⅡＦ類，78はⅡⅠ類に分類される。76は肥厚した口縁部で，口縁部文様帯に沈線を２条巡らせ，三日月形と楕円形の凹点を施している。77は口径24.2㎝を測る。器面調整は，外面が斜め方向のミガキ，内面は横方向のミガキを施している。79は底径9.6㎝を測る，やや上げ底の底部である。80は扁平な楕円形の礫を利用した敲石である。左側縁及び下端部に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。





第23図　３号竪穴住居跡・出土土器・石器

イ　埋設土器

１号埋設土器（第24図・第26図）

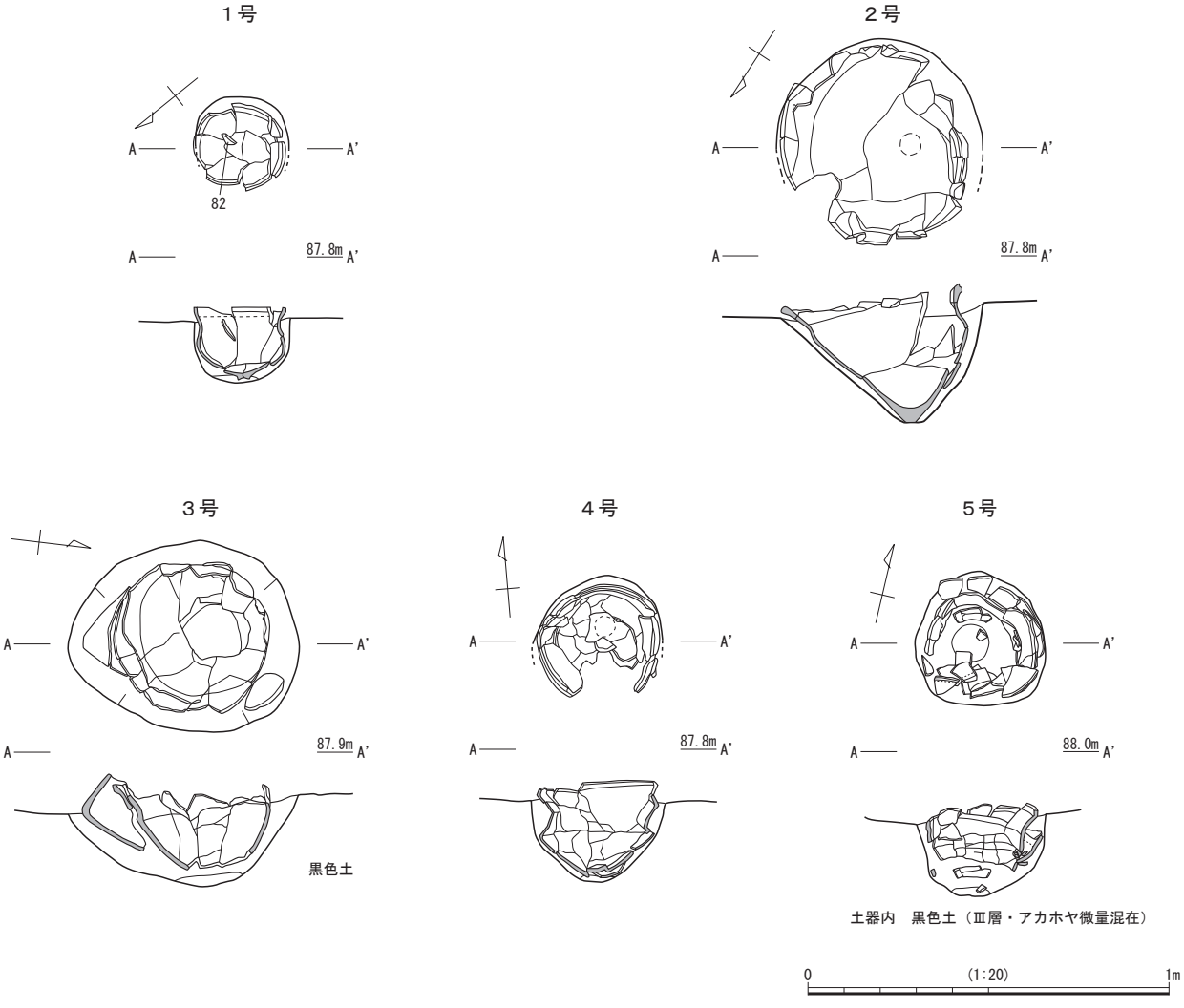
Ｈ－14区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸・短軸共に26.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは17.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設されている。

81は口径22.2㎝，底径4.0㎝，器高23.2㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。ⅡＢａ類に分類される。底部はやや上げ底状で，胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反し，直行する口縁部へ至る。器面調整は，外面胴部下位がナデ仕上げ，胴部中位から頸部にかけて縦方向，口縁部は横方向のミガキを施している。内面は胴部が斜め方向，口縁部が横方向のミガキを施している。82は打製石斧の刃部である。表裏両面共に縁辺からの調整剥離を行い，部分的に研磨を施している。石材は，ホルンフェルスである。

２号埋設土器（第24図・第26図）

Ｇ－14区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸57.5㎝，短軸57.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは33.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設されている。

83は口径21.6㎝，底径3.6㎝，器高42.9㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。ⅡＣｂ類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり，胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反する口縁部へ至る。口縁部は肥厚し口縁部文様帯に浅く幅広な沈線を２条巡らせ，楕円形の凹点を施している。胴部最大径の所には，浅く幅広な沈線を２条巡らせ，楕円形と山形の凹点を施している。器面調整は，外面胴部下位が縦方向のヘラケズリ，胴部中位から頸部にかけて縦方向のミガキを施している。内面は底部から胴部下位にかけてナデ，胴部中位から口縁部にかけて横方向を主体とするミガキが施されているが大部分が剥落している。



第24図　１号・２号・３号・４号・５号埋設土器

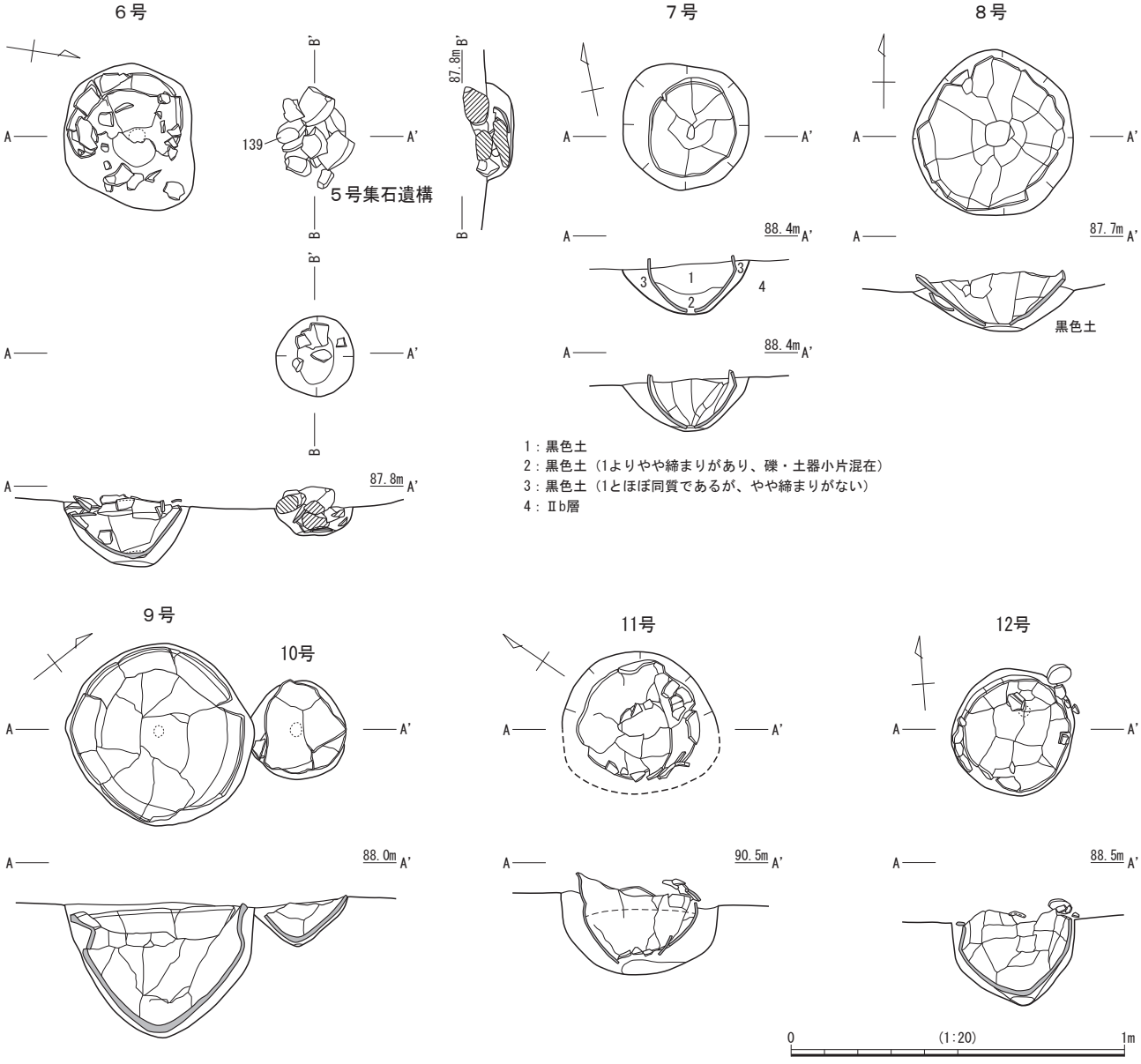
３号埋設土器（第24図・第27図）

Ｇ－15区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸64.0㎝，短軸53.0㎝の楕円形を呈している。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは26.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。掘り込みの南壁際で土器の底部が倒れた状態になっており，胴部から口縁部は，掘り込み中央で底部と接するように正位置で埋設されている。

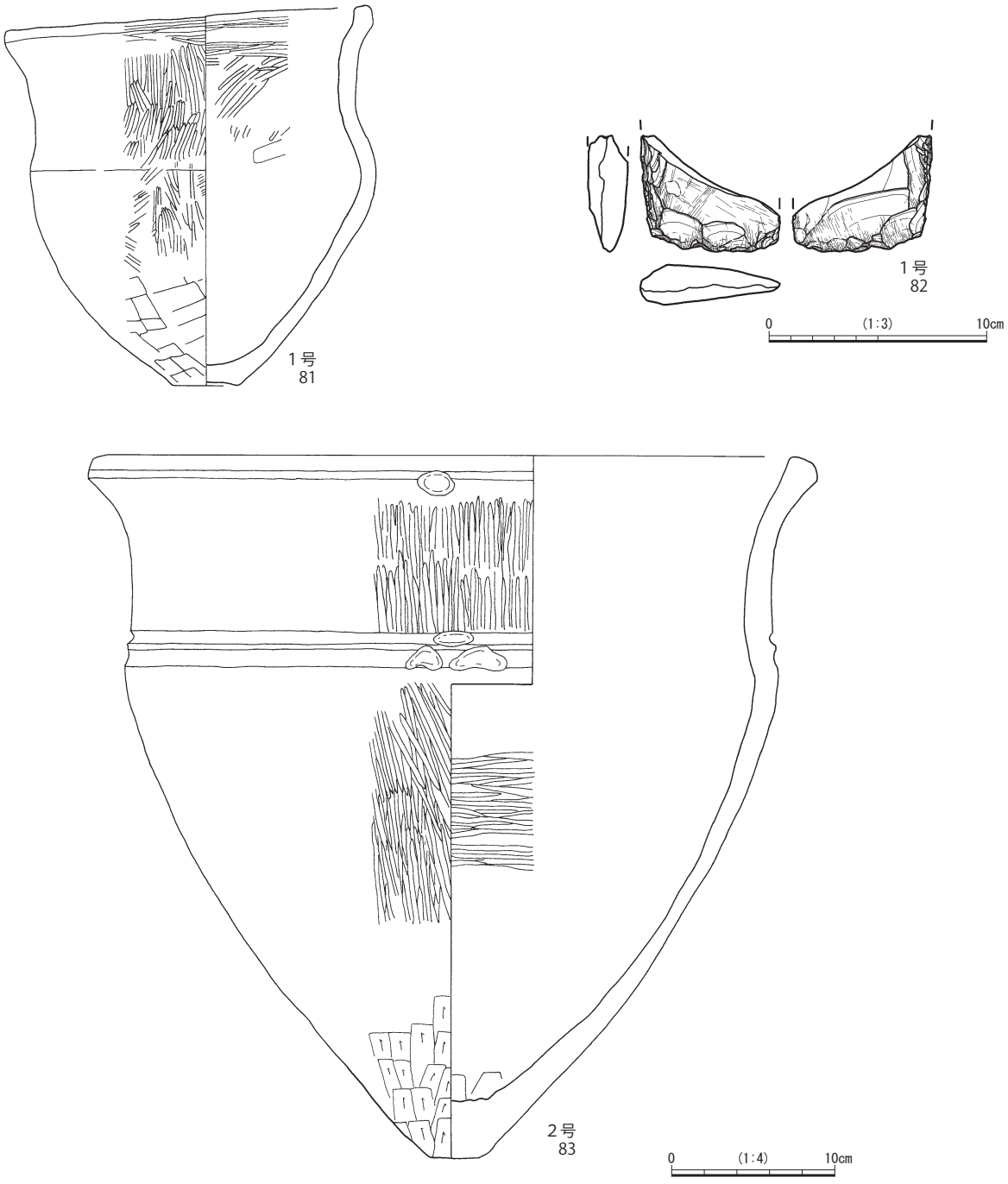
84は口径36.7㎝，底径1.8㎝，器高39.4㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。ⅡＡａ類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり，胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反し，直行する口縁部へ至る。４対の頂部を持つ波状口縁で，口縁部は肥厚し口縁部文様帯に浅く幅広な沈線を２条巡らせ，頂部下で円形の凹点を施している。胴部最大径の所には，沈線を２条巡らせている。器面調整は，外面胴部下位がナデ，胴部下位から中位にかけて斜め方向，頸部から口縁部にかけて横方向のミガキを施している。内面は胴部下位から胴部中位までが横方向，頸部から口縁部にかけて横方向を主体とするミガキが施されている。内面には煤が付着している。

４号埋設土器（第24図・第27図）

Ｇ－15区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸36.0㎝，短軸33.5㎝の略円形を呈している。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは22.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設されており，４分の１欠損している。



第25図　６号・７号・８号・９号・10号・11号・12号埋設土器



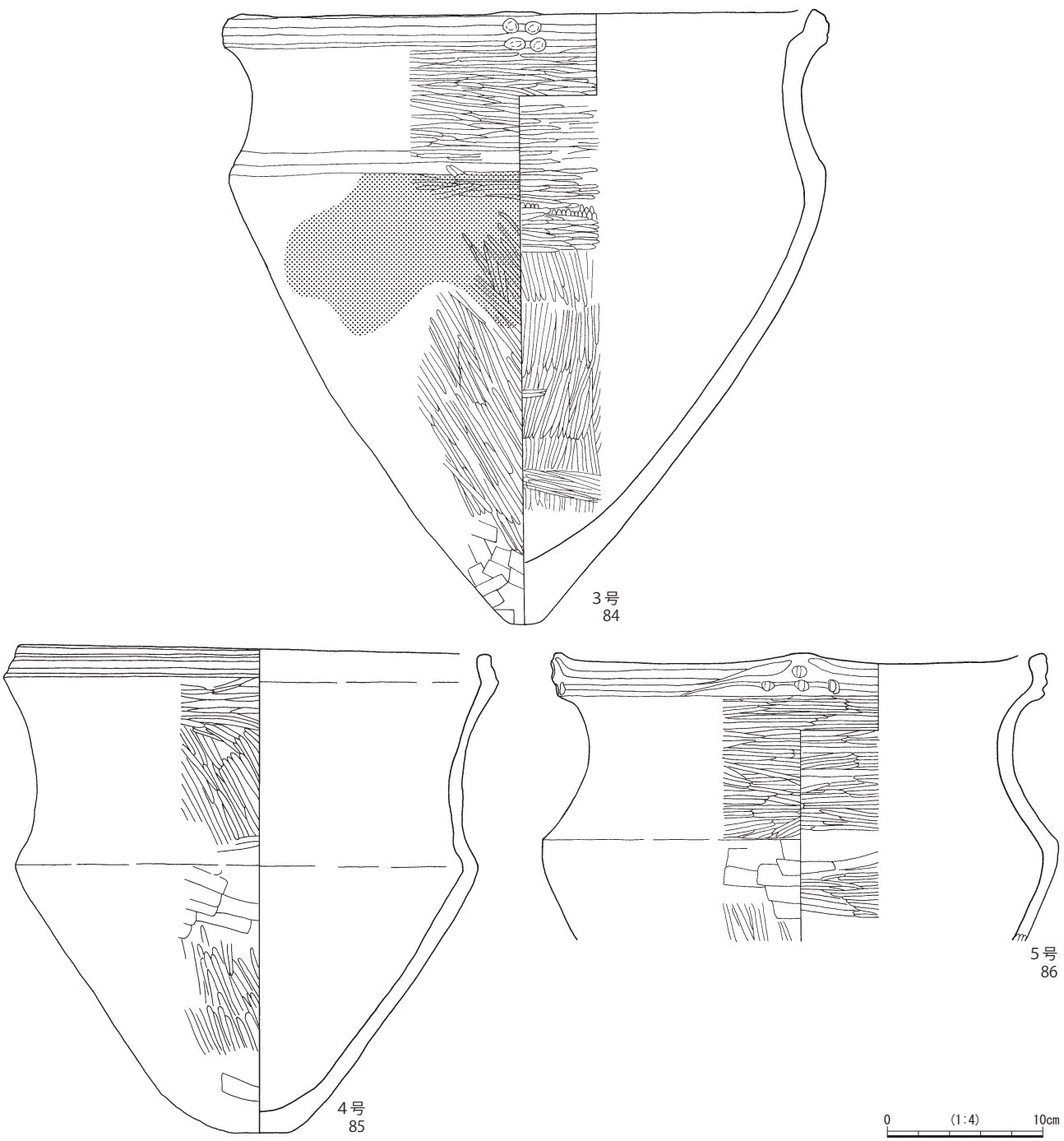
第26図　1号・2号埋設土器出土遺物

85は口径29.7㎝，底径3.6㎝，器高31.3㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。ⅡＢａ類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり，胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反し，直行する口縁部へ至る。口縁部文様帯には沈線を２条巡らせている。器面調整は，外面胴部下位がナデ仕上げ，胴部中位から頸部にかけて縦方向，口縁部は横方向のミガキを施している。内面は胴部がナデ，頸部から口縁部が横方向のミガキを施している。

５号埋設土器（第24図・第27図）

Ｅ－14区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸37.5㎝，短軸36.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは22.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。土器は底部がない状態で出土した。口縁部は復元できるが，半分は正位置に，もう片方は，逆位置に重ねて埋設されている。

86は口径16.4㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。ⅡＢａ類に分類される。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反し，直行



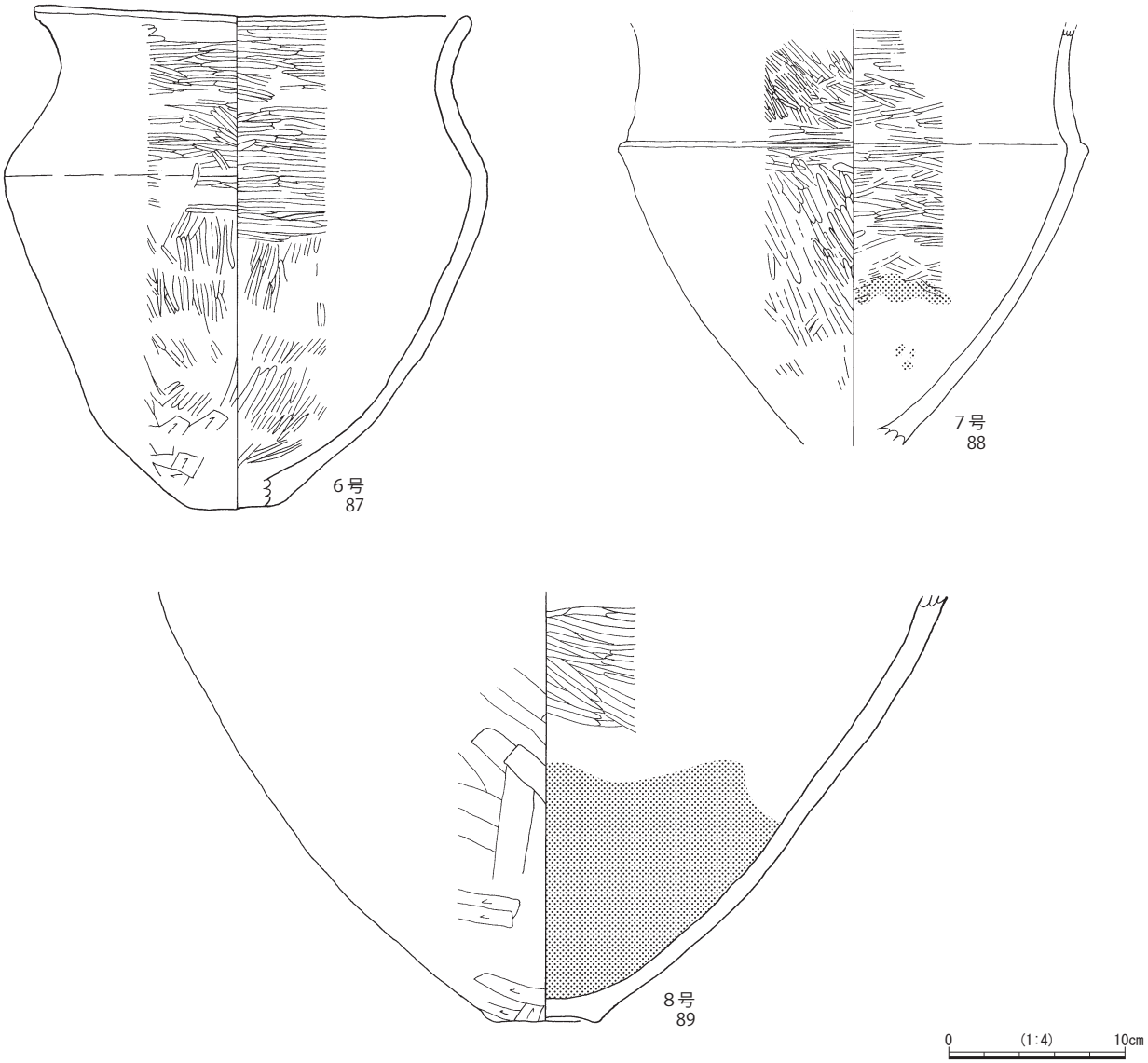
第27図　3号・4号・5号埋設土器出土遺物

する口縁部へ至る。4対の頂部を持つ波状口縁で，口縁部文様帯には沈線を2条巡らせ，頂部下に円形の凹点を施している。器面調整は，外面胴部がナデ後，縦方向のミガキ，頸部から口縁部にかけて横方向のミガキを施している。内面は胴部から口縁部まで主に横方向のミガキを施している。

6号埋設土器（第25図・第28図）

F－14区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸44.0cm，短軸39.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは23.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。5号集石遺構に隣り合って出土しており，土器は正位置で埋設されており，2分の1が欠損している。

87は口径23.0cm，底径5.0cm，器高28.7cmを測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。ⅡFa類に分類される。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり，胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反する口縁部へ至る。器面調整は，外面胴部下位がケズリ後，縦方向の



第28図　6号・7号・8号埋設土器出土遺物

ミガキ，頸部から口縁部にかけて横方向のミガキを施している。内面は胴部下位が縦方向のミガキ，胴部上位から口縁部までが横方向のミガキを施している。

7号埋設土器（第25図・第28図）

E・F－16区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸・短軸共に38.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは17.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設しており，底部及び口縁部を欠損している。

88は胴部最大径35.0㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反する。器面調整は，外面胴部下位がケズリ後，斜め方向のミガキが施される。斜め方向のミガキは頸部まで認められる。内面は胴部下位から頸部まで横方向のミガキを施している。内面に煤が付着している。

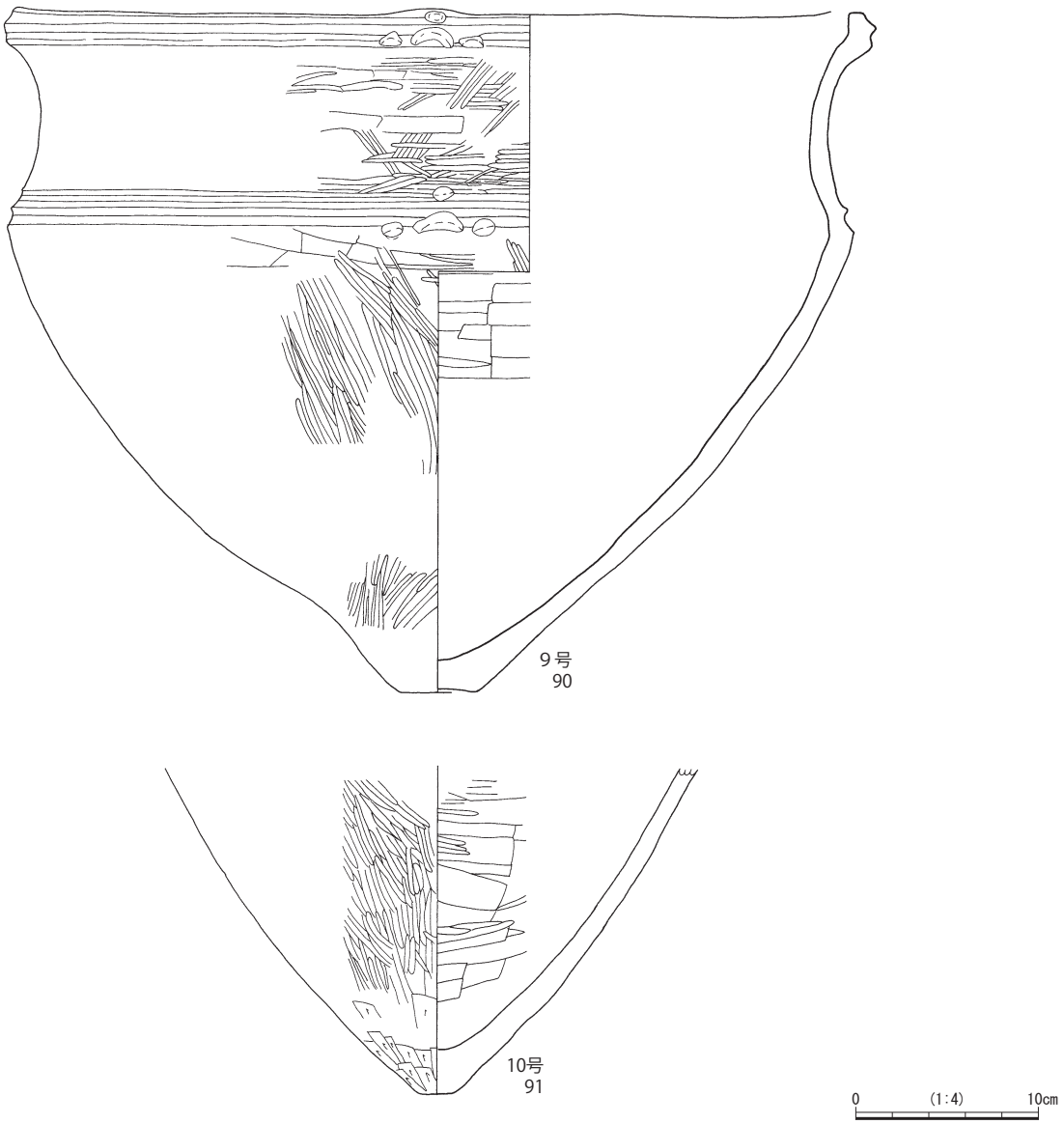
8号埋設土器（第25図・第28図）

E－13区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸50.5㎝，短軸48.5㎝の略円形を呈している。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは12.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設しており，胴部上位から口縁部を欠損している。

89は底径6.3㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。底部はやや上げ底状で，胴部最大径の所に向かって直線的に延びる。器面調整は，外面胴部下位がケズリ，内面胴部下位が横方向と斜め方向のミガキを施している。内面底部には，煤が付着している。

9号埋設土器（第25図・第29図）

F－15区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸56.0㎝，短軸54.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは41.0㎝である。埋



第29図　9号・10号埋設土器出土遺物

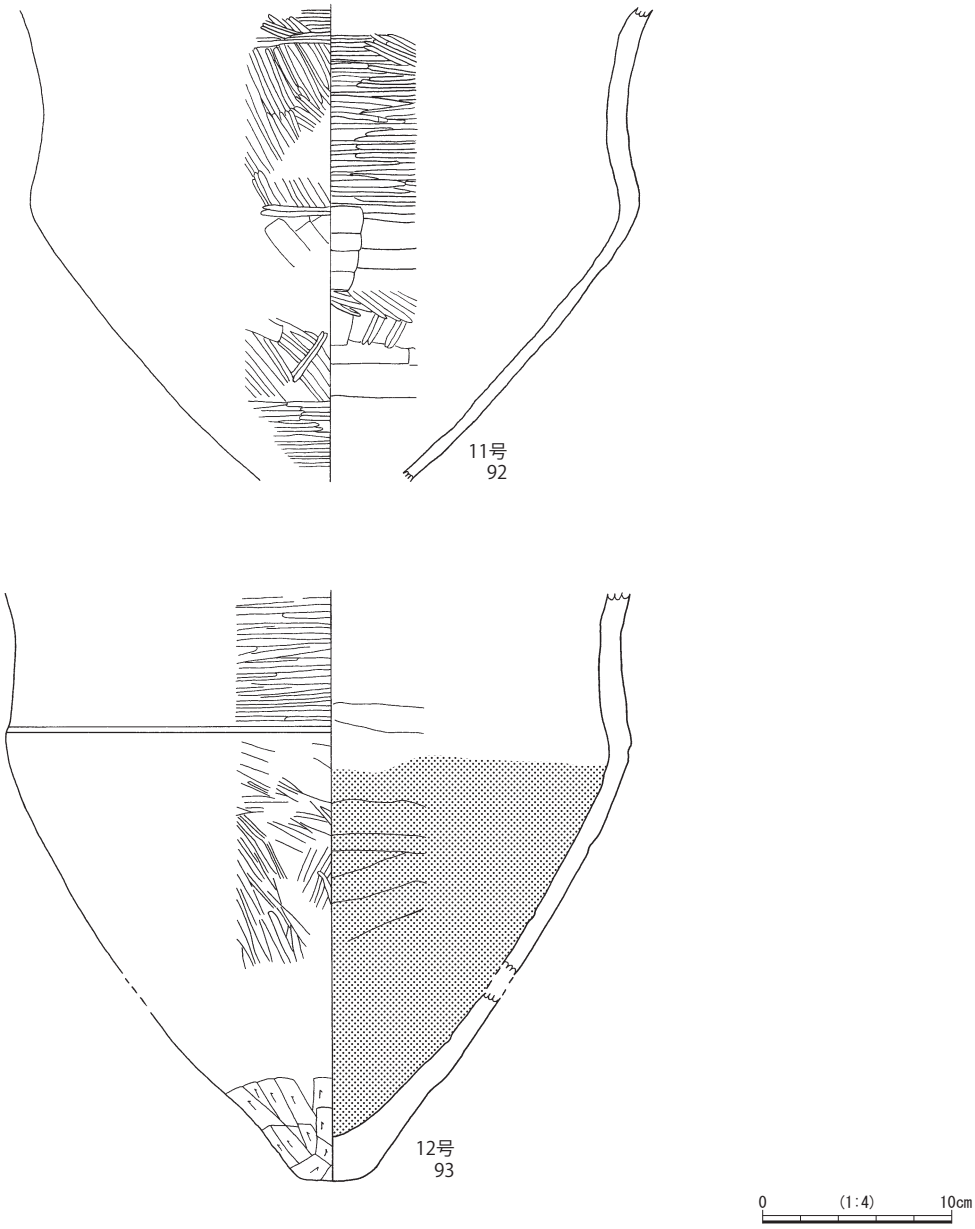
土は黒色土を主体とする。10号埋設土器を掘り込んでいる。土器は10号埋設土器に接して出土しており，正位置で埋設している。

90は口径46.2㎝，底径4.2㎝，器高37.4㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。ⅡＢａ類に分類される。底部はやや上げ底状で，胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反し，直行する口縁部へ至る。４対の頂部を持つ波状口縁で，口縁部は肥厚し口縁部文様帯に浅く幅広な沈線を２条巡らせ，頂部下で楕円形と三日月形の凹点を施している。胴部最大径の所には，沈線を２条巡らせた後，口縁部文様帯と同様に楕円形と三日月形の凹点を施している。器面調整は，外面胴部下位がナデ後，縦方向のミガキ，胴部上位から口縁部にかけて横方向のミガキを主体的に施している。内面は胴部下位から口縁部にかけて横方向のナデが施され，部分的にミガキも施されている。

10号埋設土器（第25図・第29図）

Ｆ－15区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸31.0㎝，短軸30.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは15.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。９号埋設土器に掘り込まれている。土器は９号埋設土器に接して出土しており，胴部下位から底部までの状態で正位置に埋設している。

91は底径1.8㎝を測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり，胴部最大径の所に向かって直線的に延びる。器面調整は，外面胴部下位が縦方向のミガキで底部付近がケズリ，内面胴部下位は横方向のナデ後，ミガキを施している。



第30図　11号・12号埋設土器出土遺物

11号埋設土器（第25図・第30図）

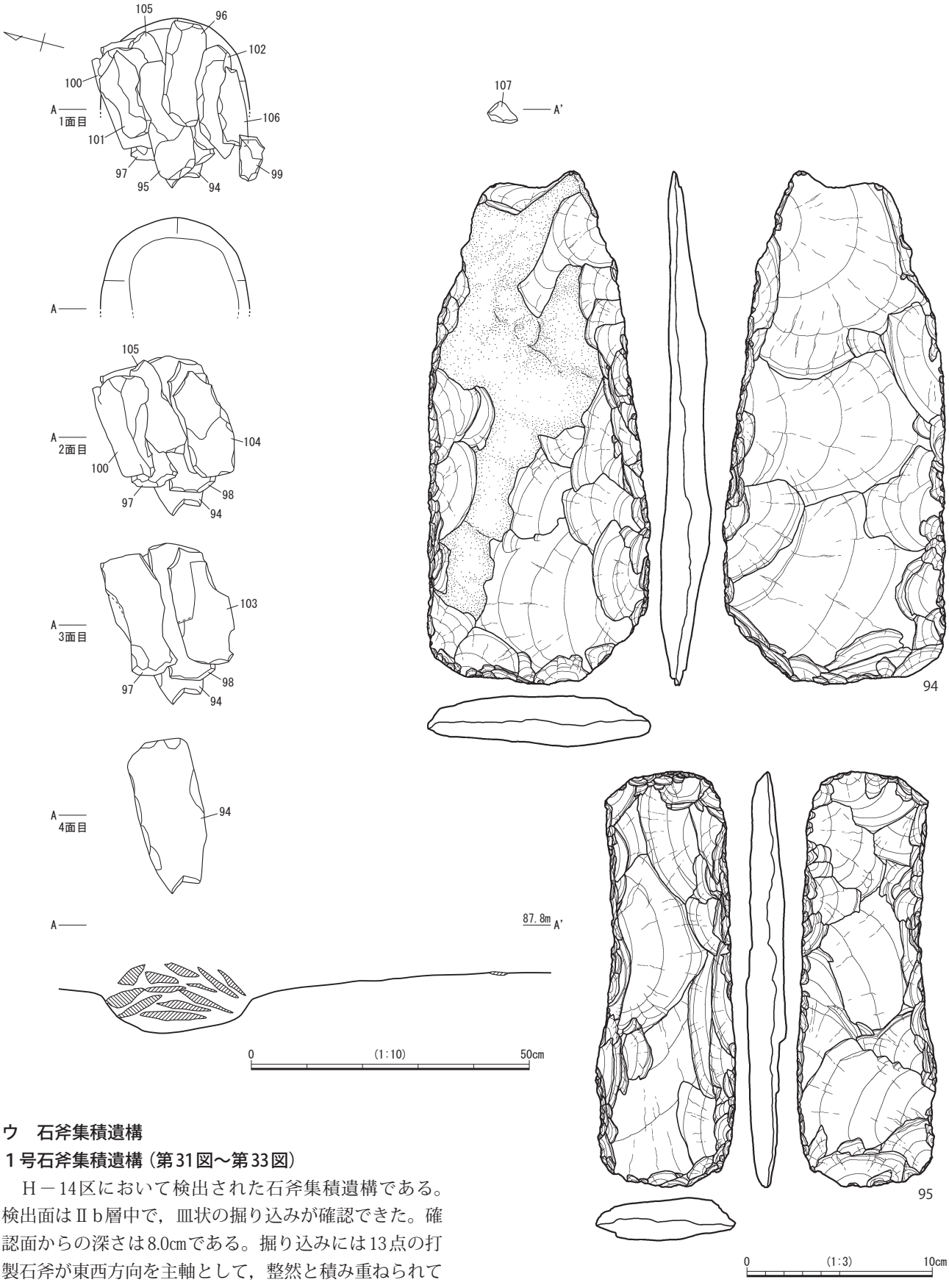
Ⅰ－23区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸37.0cm，短軸36.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは23.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。1号円形周溝墓の溝により口縁部が破砕されている。土器は正位置で埋設しており，底部及び口縁部を欠損している。

92は胴部最大径32.0cmを測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反する。器面調整は，外面胴部下位がナデと斜め方向，横方向のミガキが施される。ミガキは頸部まで認められる。内面は胴部下位から頸部までナデと横方向のミガキを施している。

12号埋設土器（第25図・第30図）

Ｅ・Ｆ－16区において検出された埋設土器で，掘り込みは長軸39.0cm，短軸38.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは25.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。土器は正位置で埋設しており，口縁部を欠損している。

93は底径4.0cmを測る中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。底部は不安定な形状でやや膨らんでおり，胴部最大径の所に向かって直線的に延びる。器面調整は，外面底部付近がケズリ，胴部が斜め方向のミガキ，頸部が横方向のミガキを施している。内面胴部から頸部は横方向のナデを施している。内面に煤が付着している。

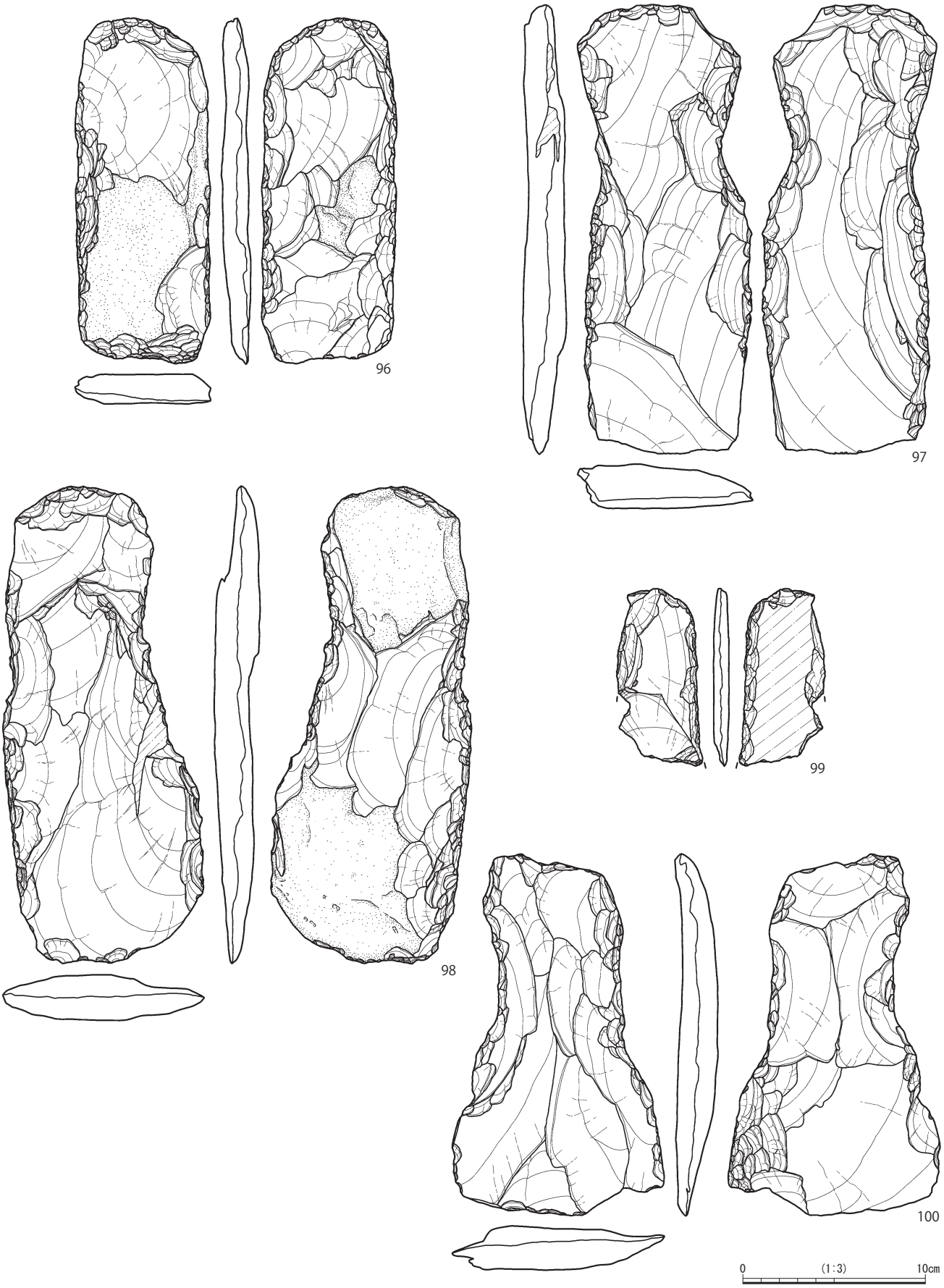


第31図　１号石斧集積遺構・出土石器（１）

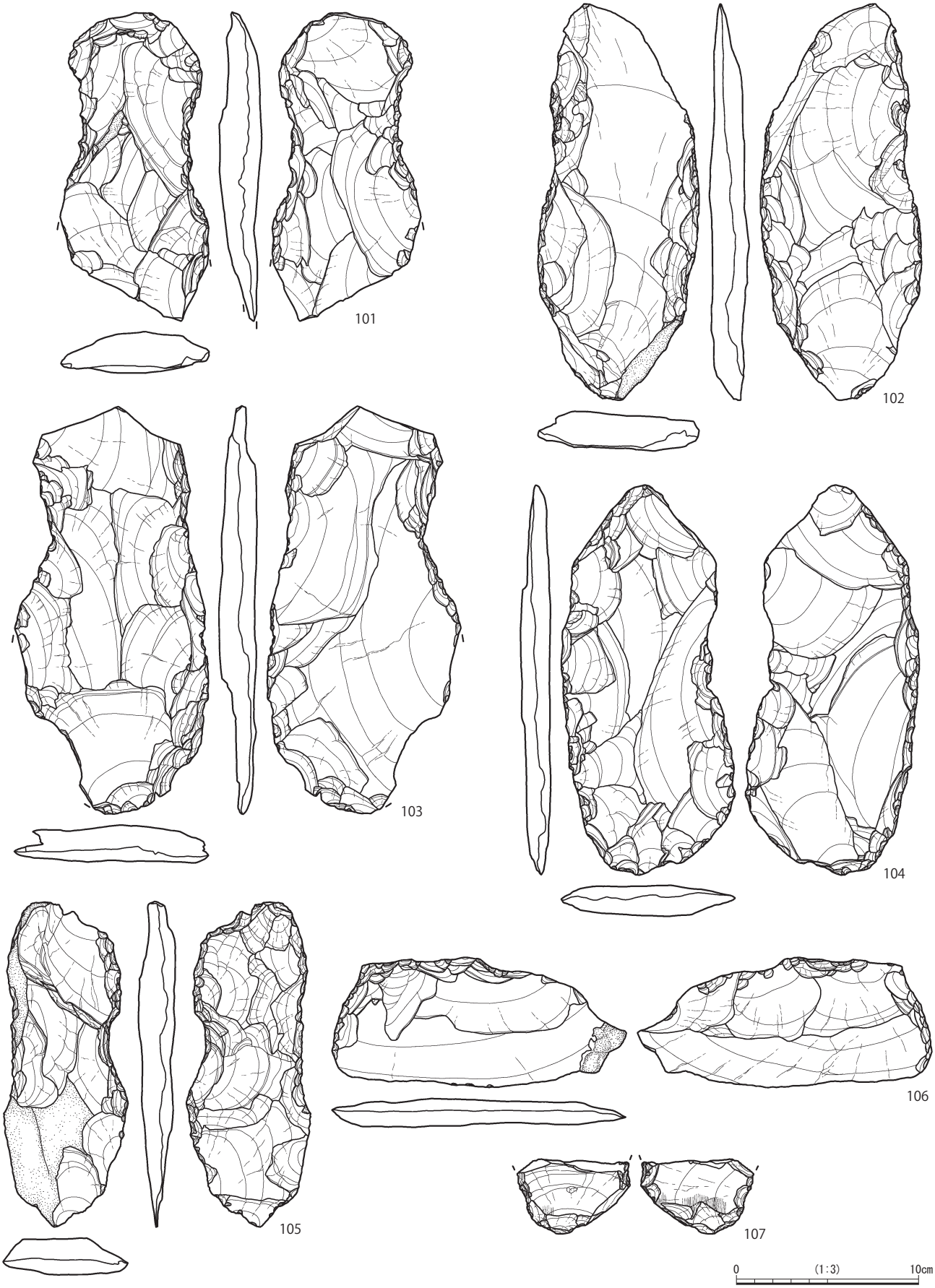
ウ　石斧集積遺構

１号石斧集積遺構（第31図～第33図）

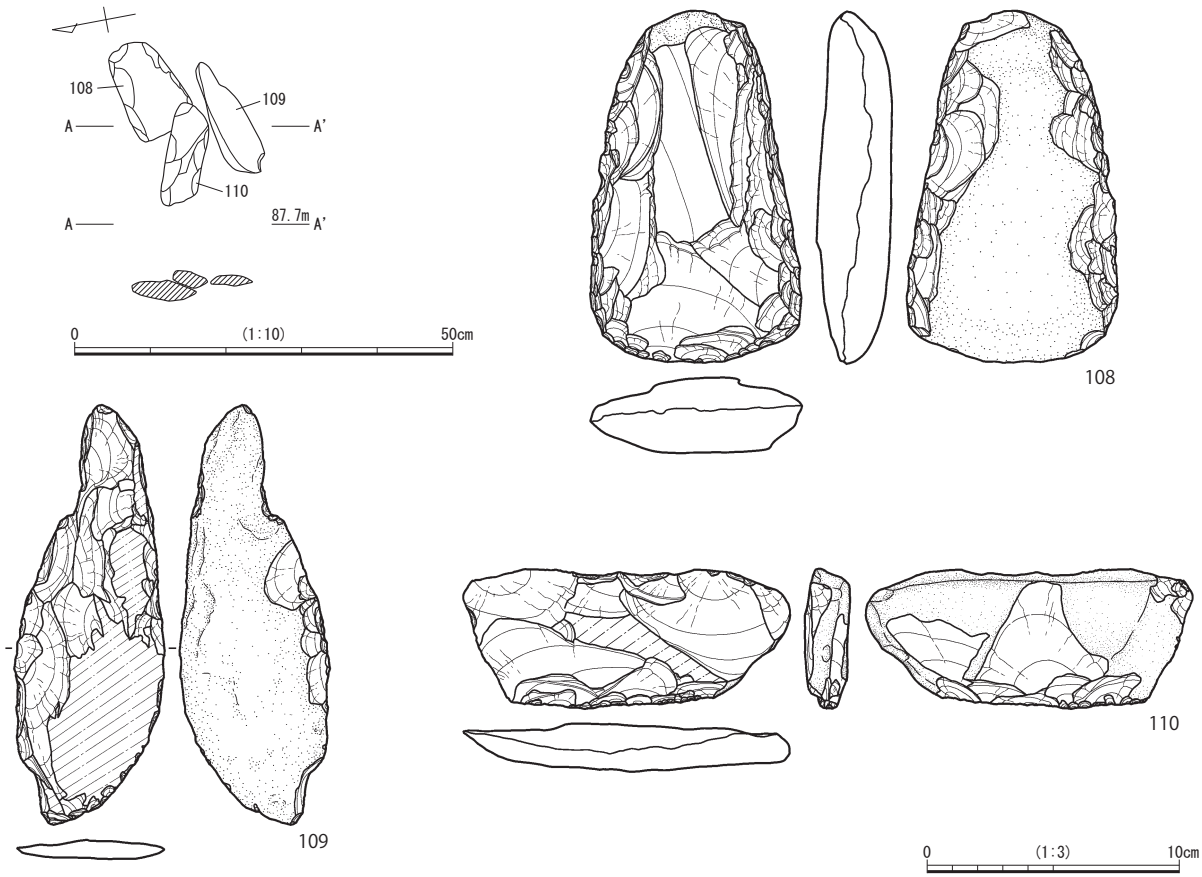
Ｈ－14区において検出された石斧集積遺構である。検出面はⅡｂ層中で，皿状の掘り込みが確認できた。確認面からの深さは8.0㎝である。掘り込みには13点の打製石斧が東西方向を主軸として，整然と積み重ねられていた。13点の内，７点が長さ20.0㎝を超える大型である。94 ～ 102は刃部を東に，103・104・105は刃部を西



第32図　1号石斧集積遺構出土石器（2）



第33図　1号石斧集積遺構出土石器（3）



第34図　２号石斧集積遺構・出土石器

に向けている。106の刃部の向きは不明であるが，長軸を東西方向に向けている。掘り込み部分から南側約50.0㎝離れた所で107が出土しているが，本来集積されていたものが長い年月の経過により散在した可能性があることから，本遺構出土遺物として取り扱った。全14点の打製石斧の中に，使用による刃こぼれや摩滅が確認できるものはなかった。したがって，欠損しているものについても，使用時に欠損したのか不明である。おそらく，未使用品ないし，製作途中のものを集積したと考えられる。

94 ～ 107は打製石斧である。94 ～ 96・99がⅠａ類，100がⅢＢａ類，103・105がⅢＣａ類，97・101がⅢａ類，98・104がⅣａ類に分類される。製作工程は，大型の横長剥片や板状節理を有する剥片を素材とし，周縁から大まかに成形剥離を施した後，入念に調整剥離を施す傾向がある。102・106は未製品である。94・96・98・102・105は自然面を残している。95・97・100・103は素材剥片の剥離面を残している。99 ～ 101は刃部を欠損している。106は製作初段階のもので，縁辺から成形剥離を施した後，調整剥離を施しているが，周縁には及んでいない。石材は，94・96・98・101・102が頁岩で，95・97・100・103 ～ 106がホルンフェルス，99・107は粘板岩である。

２号石斧集積遺構（第34図）

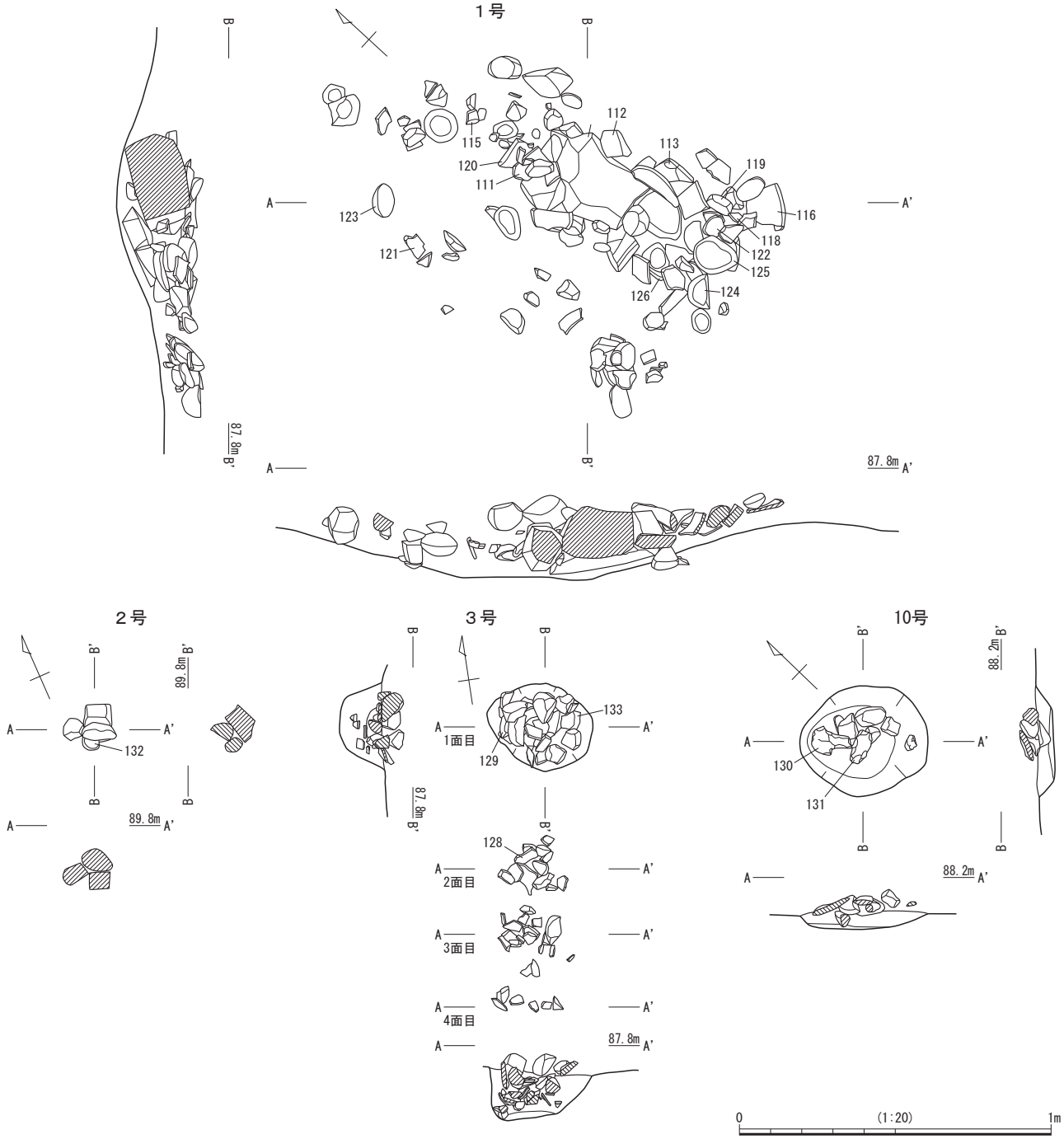
Ｈ－16区において検出された石斧集積遺構である。検出面はⅡｂ層中である。明確な掘り込みは確認できなかった。東西方向を軸として，108は刃部を西に向けている。109・110の刃部の向きは不明であるが，長軸を東西方向に向けている。いずれも未使用品ないし，製作途中のものを集積している。

108 ～ 110は打製石斧である。108はⅠａ類に分類される。表裏両面に自然面を残すことから，扁平な礫を素材としていたと考えられる。109・110は打製石斧の未製品である。板状に発達する節理を利用し，表皮付近で剥離された剥片を素材としている。109は，基部を成形する際，大きく変形してしまっていることから，失敗品の可能性も考えられる。石材は，108・110がホルンフェルス，109は頁岩である。

エ　集石遺構

１号集石遺構（第35図～第37図）

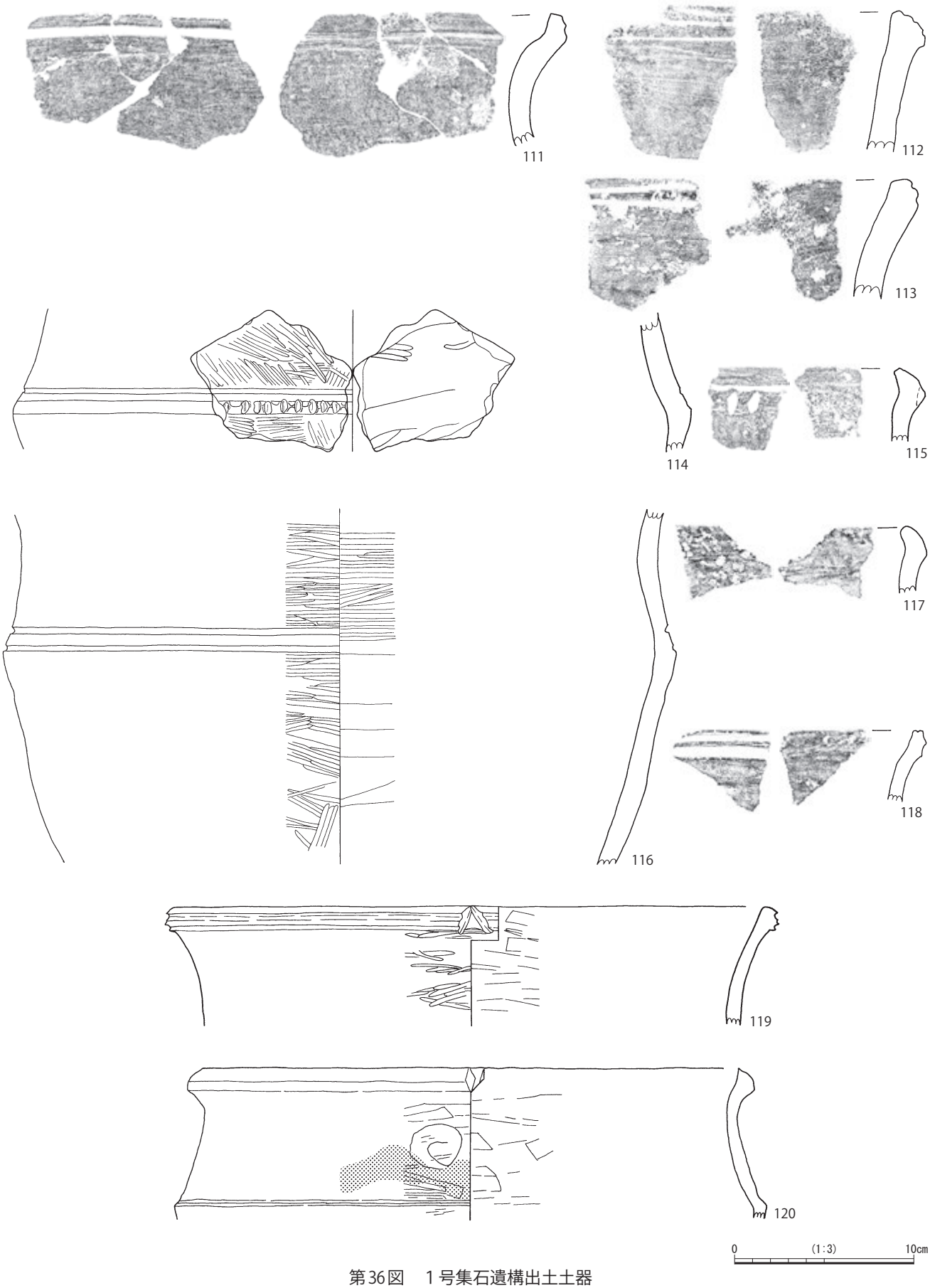
Ｇ－14区において検出された集石遺構で，長軸148.5㎝，短軸116.0㎝の皿状の掘り込みを持つ。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは18.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。礫29点と石皿９点，磨石20点，打製石斧７点，敲石３点で構成されており，掘り込み底



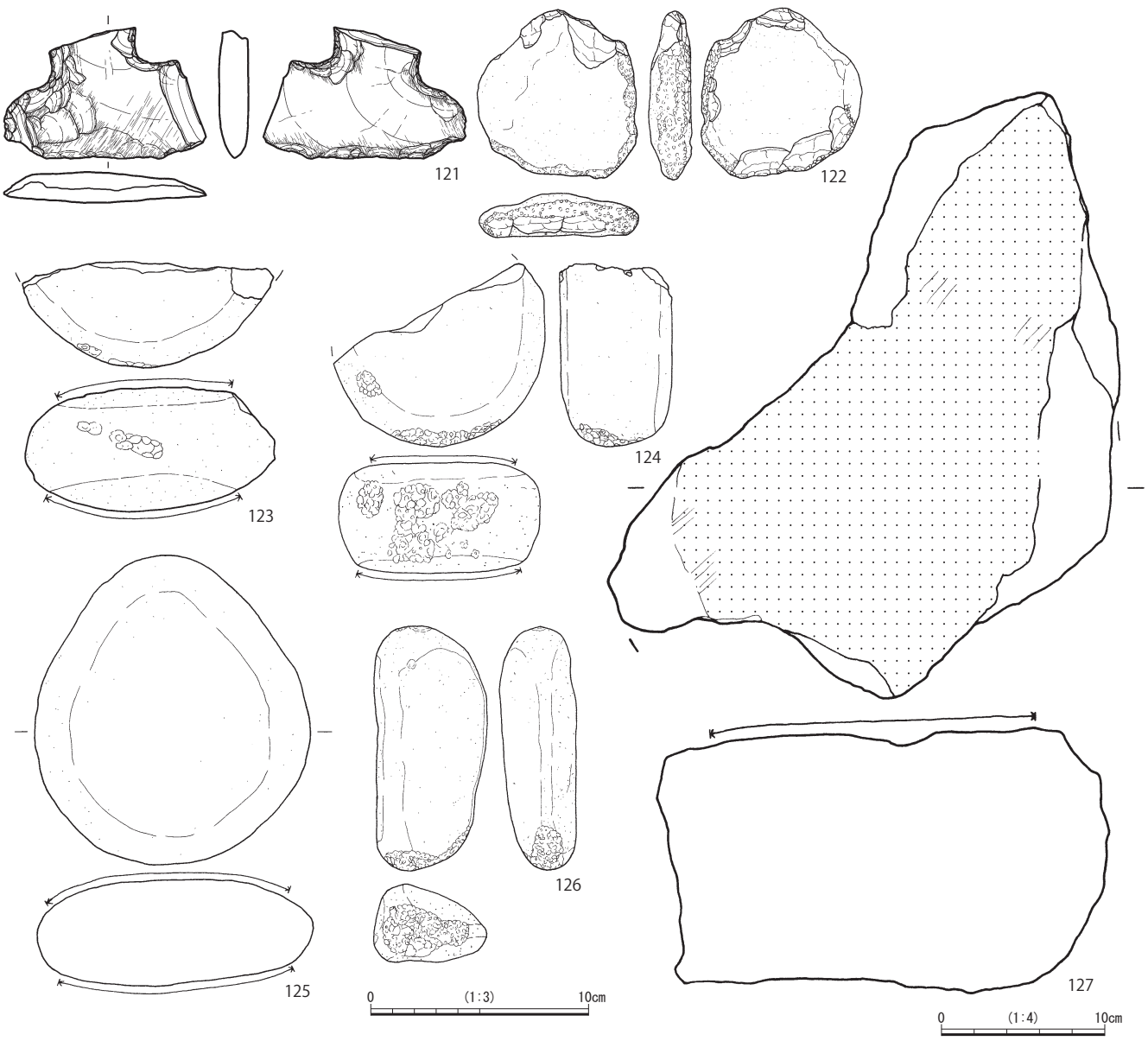
第35図　1号・2号・3号・10号集石遺構

面からやや散在した状況で出土した。石器の殆どが欠損しており，廃棄されたものと推測される。石材は安山岩22点，ホルンフェルス6点，頁岩6点，花崗岩6点，石英3点，凝灰岩1点，砂岩1点，不明23点である。礫や石器と共に中岳Ⅱ式土器の破片も出土している。

111～120は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。111・115・117・118・120がⅡB類，112・113・119がⅡC類に分類される。111は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を1条巡らせている。112は肥厚した口縁部文様帯に沈線を3条巡らせている。113・118は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。113は肥大した口縁部文様帯に沈線を3条巡らせている。114・116は胴部最大径の所に沈線を2条巡らせている。114は楕円形の凹点を施している。115は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を1条巡らせた後，楕円形の凹点を施している。117は口縁部文様帯に文様がみられないものである。111～118の器面調整は，内外面共に横方向のミガキを施している。119は口径44.6㎝を測る。肥厚した口縁部文様帯に沈線を2条巡らせた後，山形の刻目を施している。器面調整は，外面が横方向のミガキ，内面が横方向のナデを主体



第36図　1号集石遺構出土土器



第37図　1号集石遺構出土石器

的に施し，一部ミガキを施している。120は口径39.8㎝を測る。肥厚した口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせた後，菱形の線刻を施している。頸部には渦状の線刻が施されている。器面調整は，外面が横方向のミガキ，内面が横方向のナデを施している。121は打製石斧で，ⅢＤｂ類に分類されるものである。表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。122は扁平な円形の礫を利用した敲石である。上下両端部に連続する剥離痕が認められることから，礫器を転用したものと思われる。123・124は磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。共に上半部を欠損している。125は扁平な楕円形の礫を利用した磨石である。126は棒状の礫を利用した敲石である。127は石皿である。表面の広範囲で使用による磨面が形成されている。石材は123・125・127が安山岩，121・122がホルンフェルス，124・126が花崗岩である。

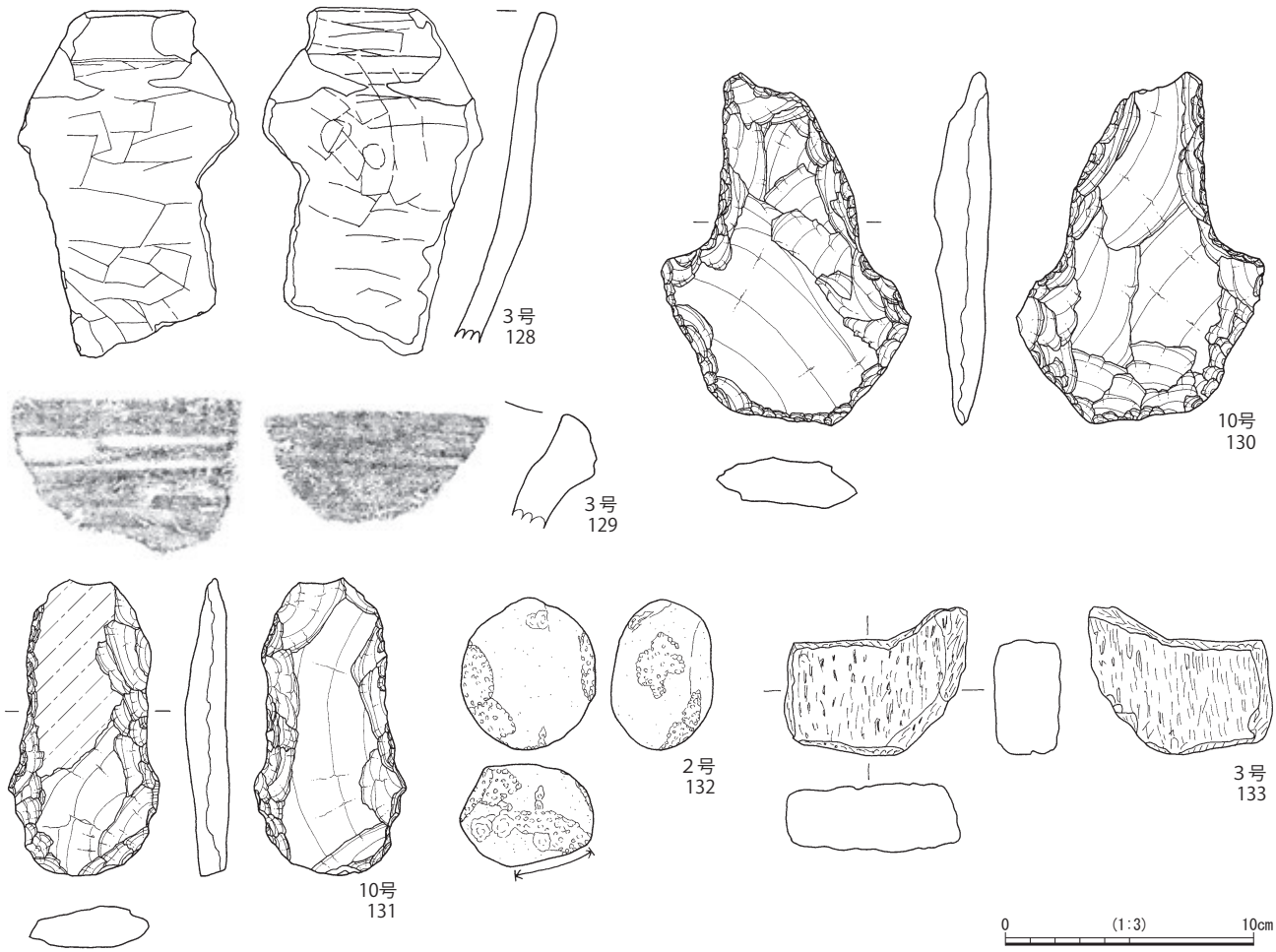
２号集石遺構（第35図・第38図）

Ⅰ－27区において検出された集石遺構で，明確な掘り込みは確認できなかった。検出面はⅡｂ層中である。磨石２点，敲石１点，石皿１点で構成される，小規模の集石遺構である。磨石・石皿はいずれも欠損している。石材は全て安山岩である。

132は球状の礫を利用した，磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。

３号集石遺構（第35図・第38図）

Ｆ－14区において検出された集石遺構で，長軸34.0㎝，短軸28.5㎝のたらい状の掘り込みを持つ。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは18.0㎝である。礫８点，磨石15点，打製石斧７点，石皿１点，二次加工剥片１点，軽石製品１点で構成されており，掘り込み



第38図　2号・3号・10号集石遺構出土土器・石器

底面で纏まって出土した。石器の殆どが欠損しており，廃棄されたものと推測される。石材は頁岩22点，安山岩６点，砂岩３点，ホルンフェルス１点，軽石１点である。礫や石器と共に中岳Ⅱ式土器の破片も出土している。

128・129は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。129はⅡＢ類，128はⅡＦｂ類に分類される。129は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせている。133は軽石製品である。上半部を欠損している。表裏両面及び下面を面取り加工している。

10号集石遺構（第35図・第38図）

Ｆ－16区において検出された集石遺構で，長軸41.0cm，短軸36.0cmの皿状の掘り込みを持つ。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは7.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。打製石斧２点，石皿２点，磨石２点，敲石１点，剥片１点で構成されており，掘り込み上層から纏まって出土している。石器の殆どが欠損しており，破棄されたものと推測される。石材は安山岩４点，頁岩３点，砂岩１点である。

130・131は打製石斧である。130・131共にⅢＡａ類に分類される。131は表裏面に素材剥片の剥離面を残している。石材は130・131共にハリ質安山岩である。

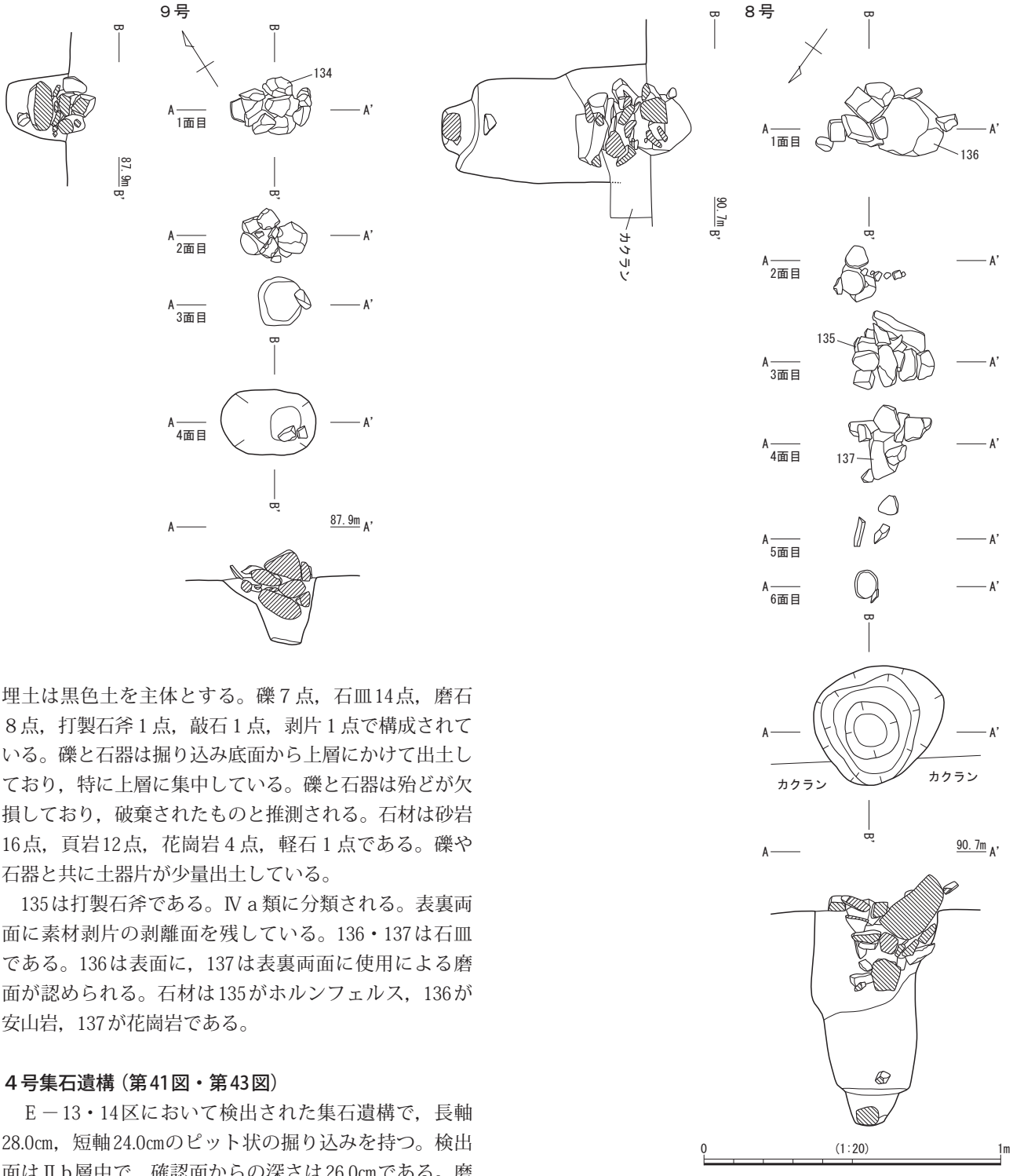
９号集石遺構（第39図・第40図）

Ｆ－14・15区において検出された集石遺構で，長軸32.0cm，短軸22.0cmのピット状の掘り込みを持つ。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは21.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。礫５点，磨石10点，打製石斧３点，石皿１点，軽石製品１点で構成されており，掘り込み底面から上層にかけて纏まって出土した。石器の殆どが欠損しており，破棄されたものと推測される。石材は頁岩８点，安山岩５点，砂岩５点，凝灰岩１点，軽石１点である。礫や石器と共に土器片が少量と焼成粘土塊が１点出土している。

134は焼成粘土塊である。拳大で，表裏両面に複数の指の痕が残されている。

８号集石遺構（第39図・第40図）

Ｆ－19区において検出された集石遺構で，長軸44.0cm，短軸40.0cmの深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はⅡｃ層中で，確認面からの深さは72.0cmである。



第39図　８号・９号集石遺構

埋土は黒色土を主体とする。礫７点，石皿14点，磨石８点，打製石斧１点，敲石１点，剥片１点で構成されている。礫と石器は掘り込み底面から上層にかけて出土しており，特に上層に集中している。礫と石器は殆どが欠損しており，破棄されたものと推測される。石材は砂岩16点，頁岩12点，花崗岩４点，軽石１点である。礫や石器と共に土器片が少量出土している。

135は打製石斧である。Ⅳａ類に分類される。表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。136・137は石皿である。136は表面に，137は表裏両面に使用による磨面が認められる。石材は135がホルンフェルス，136が安山岩，137が花崗岩である。

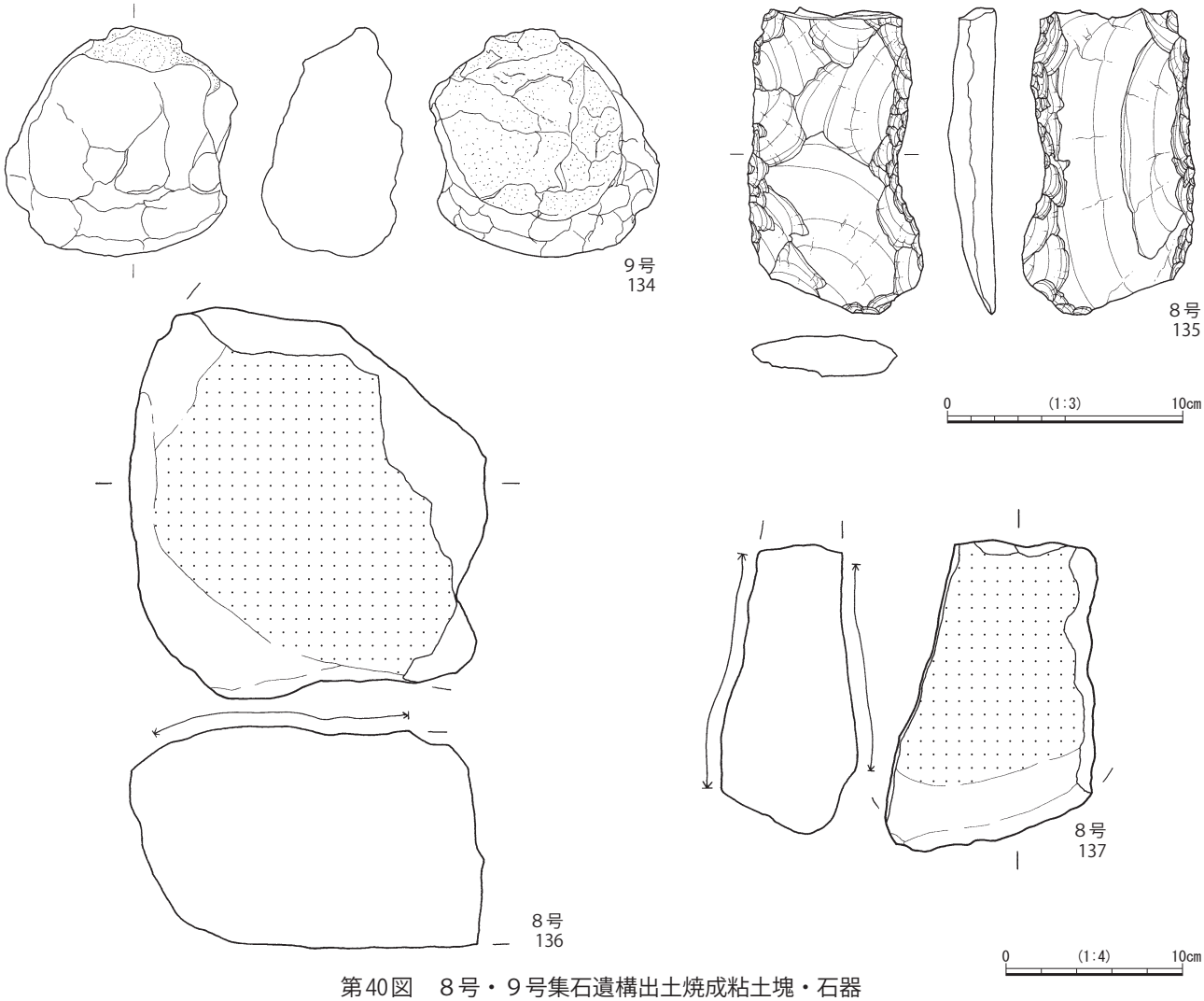
４号集石遺構（第41図・第43図）

Ｅ－13・14区において検出された集石遺構で，長軸28.0㎝，短軸24.0㎝のピット状の掘り込みを持つ。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは26.0㎝である。磨石５点，石皿４点，磨製石斧１点で構成されており，掘り込み底面から上層にかけて纏まって出土した。磨石１点を除く全てが欠損しており，廃棄されたものと推測される。石材は安山岩５点，砂岩３点，頁岩１点，花崗岩１点である。

138は磨製石斧の未製品である。棒状の礫を素材とし，左右両側縁に敲打成形を行っている。被熱により破砕している。石材はハリ質安山岩である。

５号集石遺構（第42図・第43図）

Ｆ－14区において検出された集石遺構で，長軸44.0㎝，短軸39.0㎝のたらい状の掘り込みを持つ。６号埋設土器の北側で隣り合って検出されている。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは21.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。礫２点，磨石４点，石皿３点，敲石１点，剥片１点で構成されており，掘り込み底面から



第40図　８号・９号集石遺構出土焼成粘土塊・石器

上層にかけて纏まって出土した。石器の殆どが欠損しており，廃棄されたものと推測される。石材は砂岩３点，安山岩２点，凝灰岩２点，頁岩２点，ホルンフェルス２点である。礫や石器と共に土器片が少量出土している。

139は厚みのある楕円形の礫を利用した敲石である。周縁に敲打痕が認められ，特に，上下両端部に集中している。石材は頁岩である。

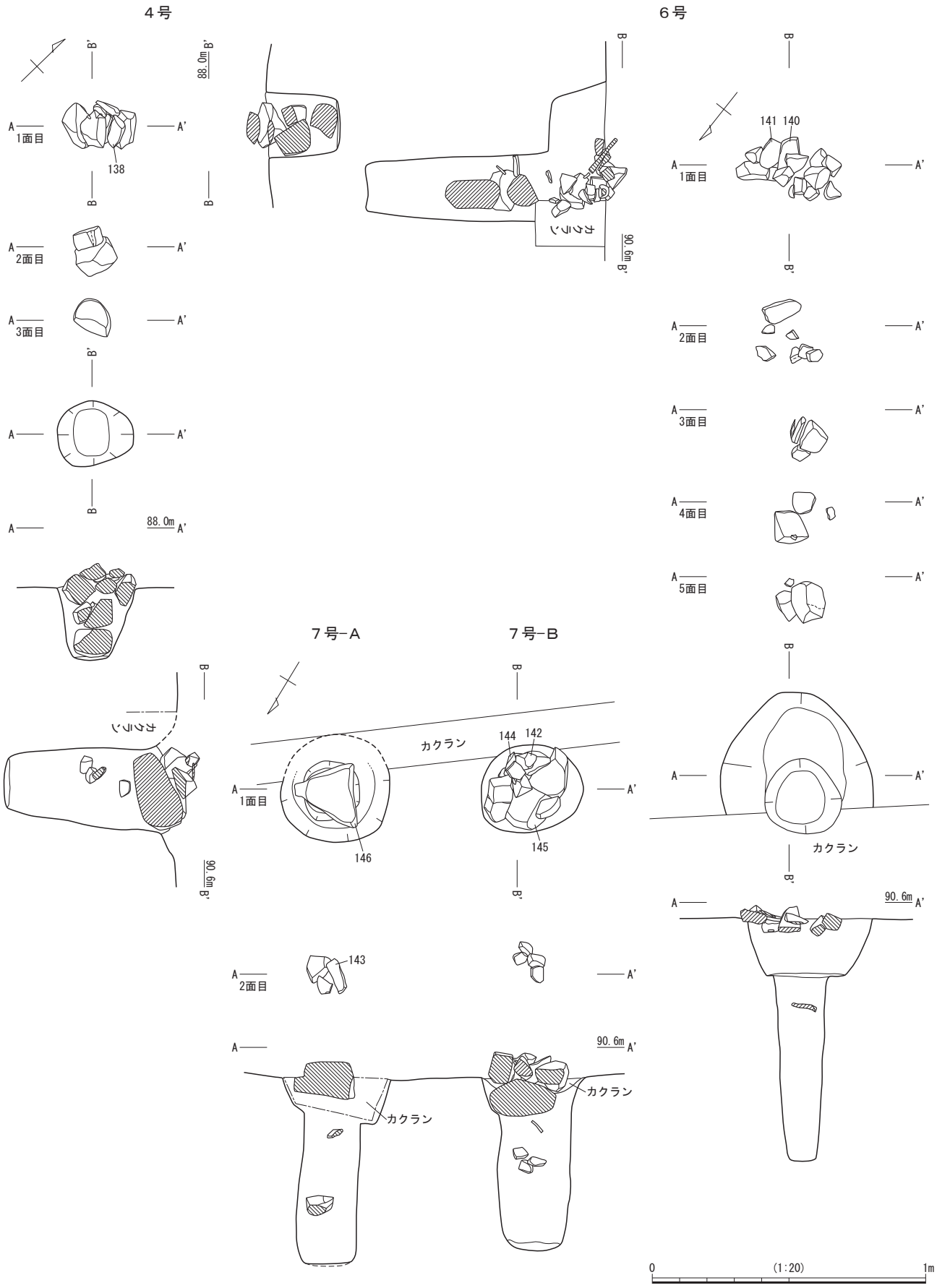
６号集石遺構（第41図・第43図）

Ｆ－20区において検出された集石遺構で，長軸56.0㎝，短軸52.0㎝の深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは89.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。礫５点，石皿13点，磨石３点，打製石斧３点，剥片２点，磨製石斧１点，軽石製品１点で構成されており，掘り込みの中層から上層にかけて出土した。石器の殆どが欠損しており，廃棄されたものと推測される。石材は安山岩12点，頁岩９点，砂岩２点，ホルンフェルス２点，軽石２点，凝灰岩１点である。礫や石器と共に中岳Ⅱ式土器の破片が出土している。

140は砥石である。面取り加工で板状に仕上げている。主たる使用面は表面である。141は磨製石斧である。大型の剥片を素材とし，表裏両面に研磨を施している。刃部は欠損している。石材は140が砂岩，141がホルンフェルスである。

７号－Ａ集石遺構（第41図・第44図）

Ｆ－19区において検出された集石遺構で，長軸38.0㎝，短軸32.0㎝の深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは68.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。検出時は，掘り込みが確認できなかったため，７号－Ａ・Ｂ集石遺構を同一の遺構として調査したが，東西並列して２つのピット状の掘り込みが確認できたため，それぞれ個別の遺構として認定した。石皿２点，打製石斧１点で構成されている小規模の集石遺構で，掘り込みの中層から上層にかけて出土した。石器は石皿１点を除く全てが欠損しており，破棄されたものと推測される。石材は頁岩１点，ホルンフェルス１点，花崗岩１点である。石器と共に土器片が少量出土している。



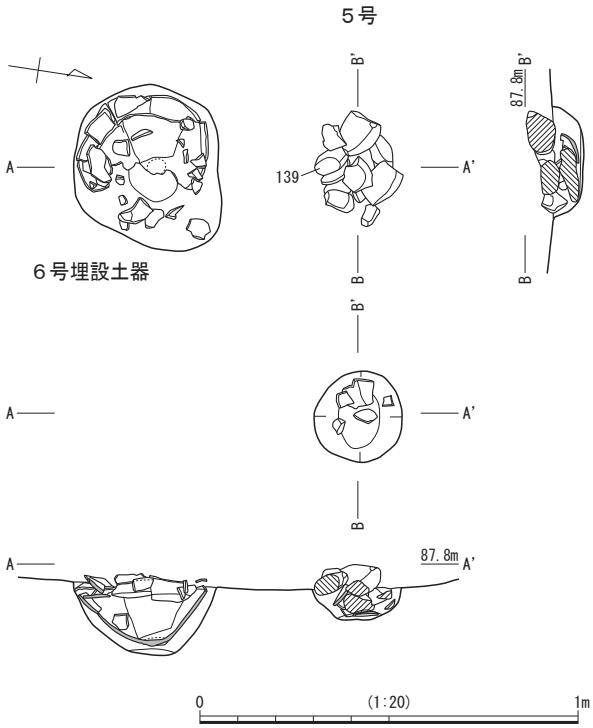
第41図　４号・６号・７号－Ａ・Ｂ集石遺構

143は打製石斧である。ⅢＡｂ類に分類される。周縁から大まかな成形剥離を施した後，調整剥離を施している。部分的に研磨を施している。146は石皿である。表面及び右側面に使用による磨面が形成されている。石材は143が頁岩，146が花崗岩である。

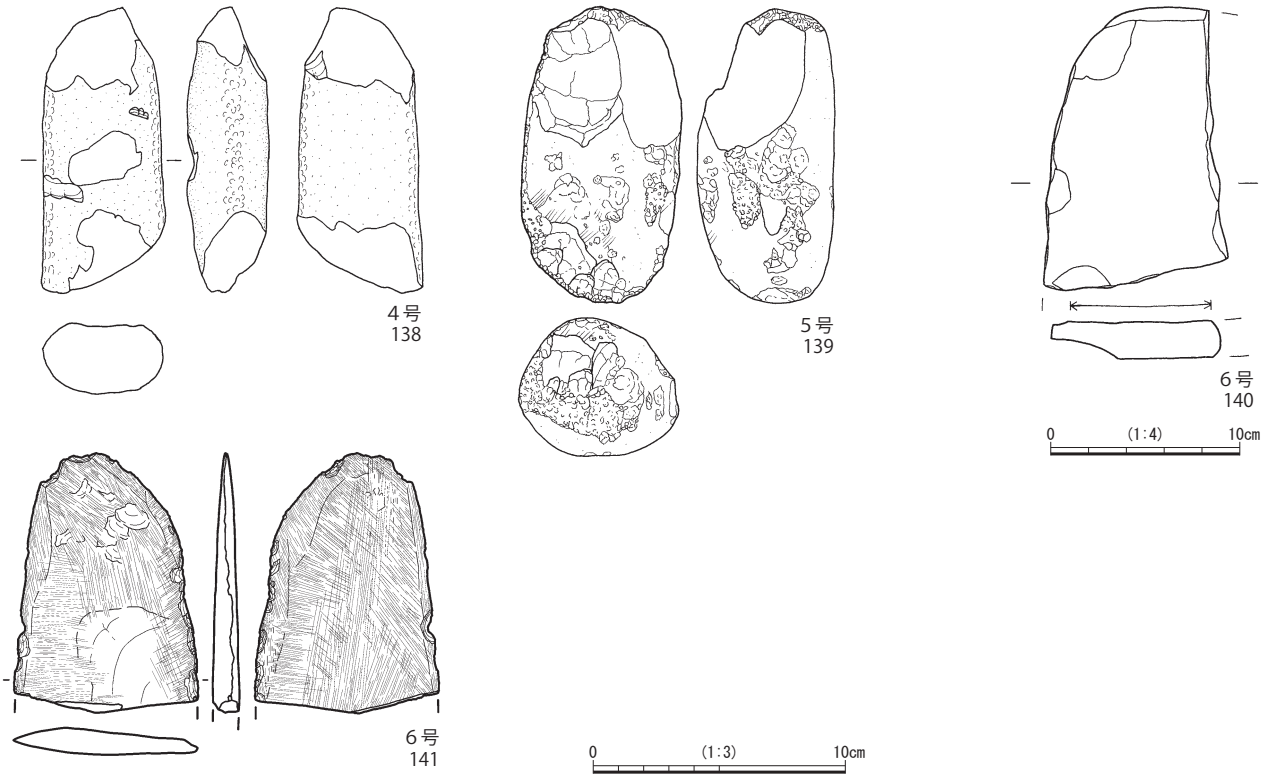
７号－Ｂ集石遺構（第41図・第44図）

Ｆ－19区において検出された集石遺構で，長軸40.0㎝，短軸38.0㎝の深いピット状の掘り込みを持つ。検出面はⅡｃ層中で，確認面からの深さは65.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。礫２点，石皿６点，打製石斧３点，磨石１点で構成されている。礫と石器は掘り込みの中層から上層にかけて出土しており，特に上層に集中している。礫と石器は全てが欠損しており，破棄されたものと推測される。石材は安山岩６点，頁岩４点，ホルンフェルス１点，礫岩１点である。礫や石器と共に土器片が少量出土している。

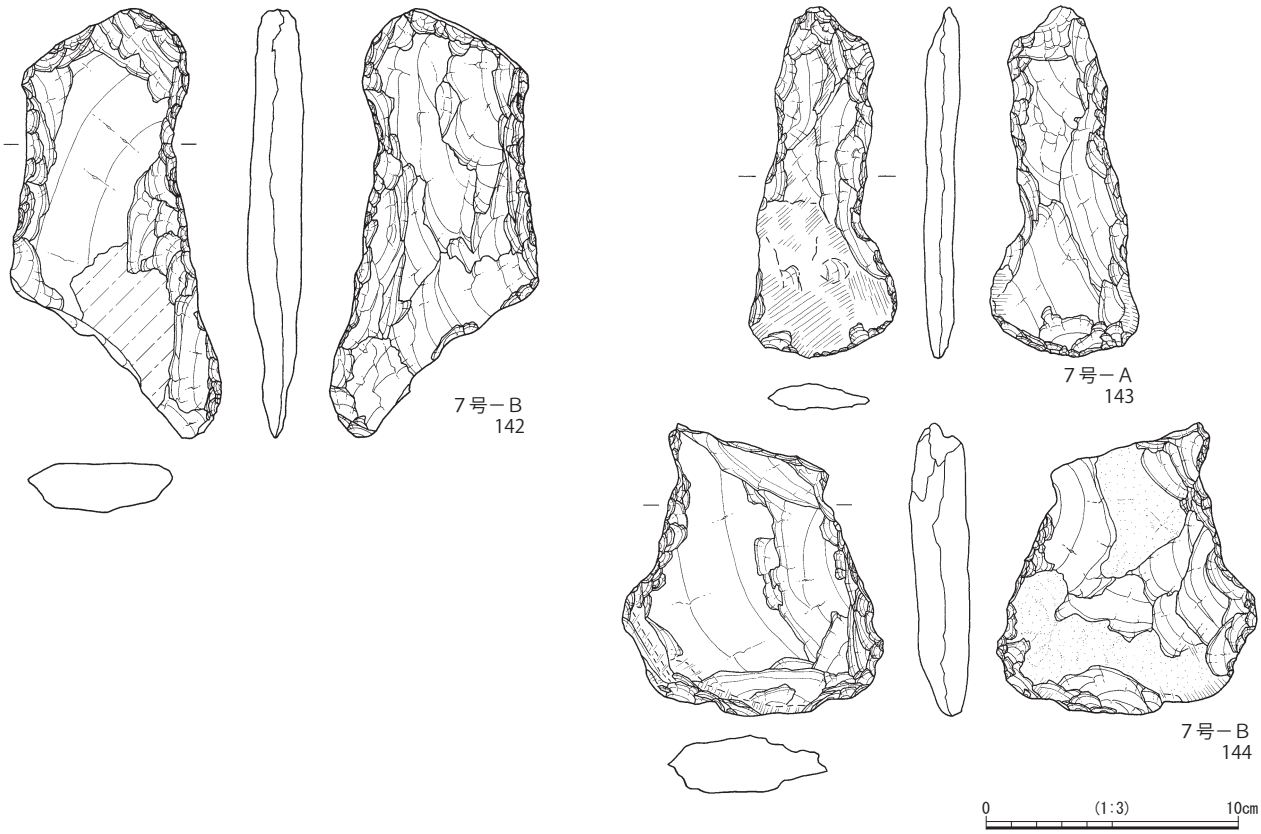
142・144は打製石斧である。142がⅢａ類，144がⅢＡｂ類に分類される。142は表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。144は表面に素材剥片の剥離面，裏面に自然面を残している。142・144共に大型の横長剥片を素材とし，大まかな成形剥離後，調整剥離を行っている。144は刃部に部分的な研磨を施している。145は石皿である。表面に使用による磨面を形成している。石材は142・144がホルンフェルス，145が凝灰岩である。

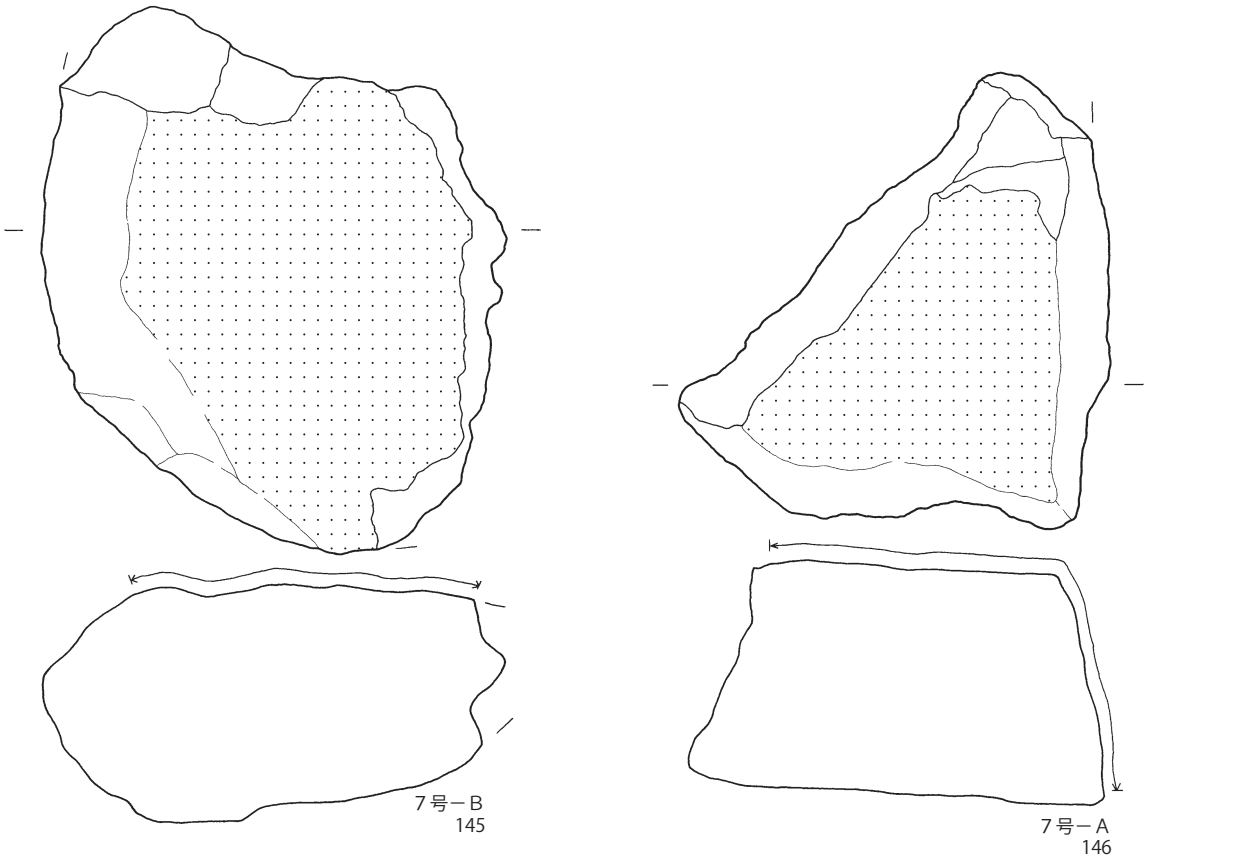


第42図　５号集石遺構



第43図　４号・５号・６号集石遺構出土石器





第44図　7号－A・B集石遺構出土石器

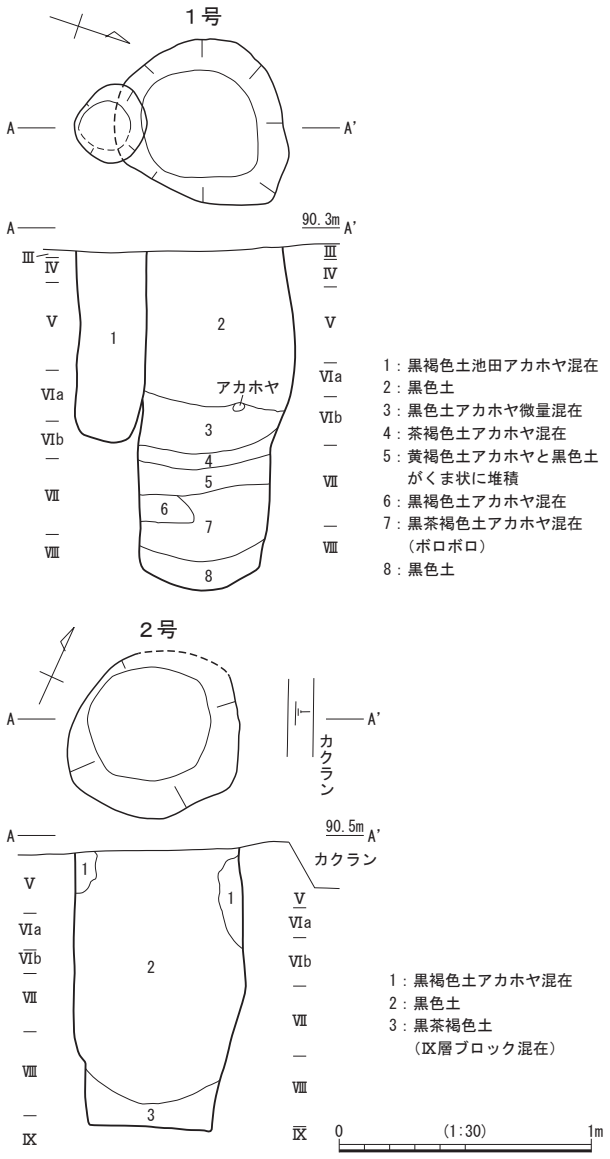
オ　落とし穴

１号落とし穴（第45図）

Ｆ－20区において検出された落とし穴で，長軸70.0cm，短軸66.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは137.0cmである。１・２層はⅡ層起源の黒色土が自然堆積し，３層以下は硬度，含有物から人為堆積の可能性がある。埋め戻し時期については構築時か，使用時か，廃棄時か不明である。掘り方中位に緩やかな段差があり，掘る際の足掛けの可能性も考えられるが判然としない。底面に小ピットの痕跡は認められない。南側をピット266に掘り込まれている。埋土中に遺物は認められなかった。

２号落とし穴（第45図）

Ｇ－18区において検出された落とし穴で，長軸69.0cm，短軸66.0cmの略円形を呈している。検出面はⅤ層中で，確認面からの深さは116.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。底面に小ピットの痕跡は認められない。埋土中に遺物は認められなかった。



第45図　１号・２号落とし穴

カ　土坑

１号土坑（第46図・第47図）

Ｇ－19区において検出された土坑で，長軸218.0cm，短軸148.0cmの不整楕円形を呈している。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは70.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。掘り方は段を持ちながら立ち上がっている。東側を４号円形周溝墓に掘り込まれている。遺物は土器片や石器が少量出土している。

147は球状の礫を利用した敲石である。下端部に敲打痕が集中している。石材は砂岩である。

２号土坑（第46図・第47図）

Ｅ・Ｆ－14区において検出された土坑で，長軸214.5cm，短軸134.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは18.0cmである。埋土は黒色土（Ⅲ層混在）を主体とする。北西隅でピット103を掘り込み，南西隅をピット95に掘り込まれる。遺物は掘り方底面で石器や礫が出土している。

148は石皿である。使用により凹面を形成している。大部分が欠損している。石材は凝灰岩である。

３号土坑（第46図）

Ｉ－21区において検出された土坑で，長軸130.0cm，短軸80.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは34.0cmである。埋土は黒色土（アカホヤ混在）を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

４号土坑（第48図）

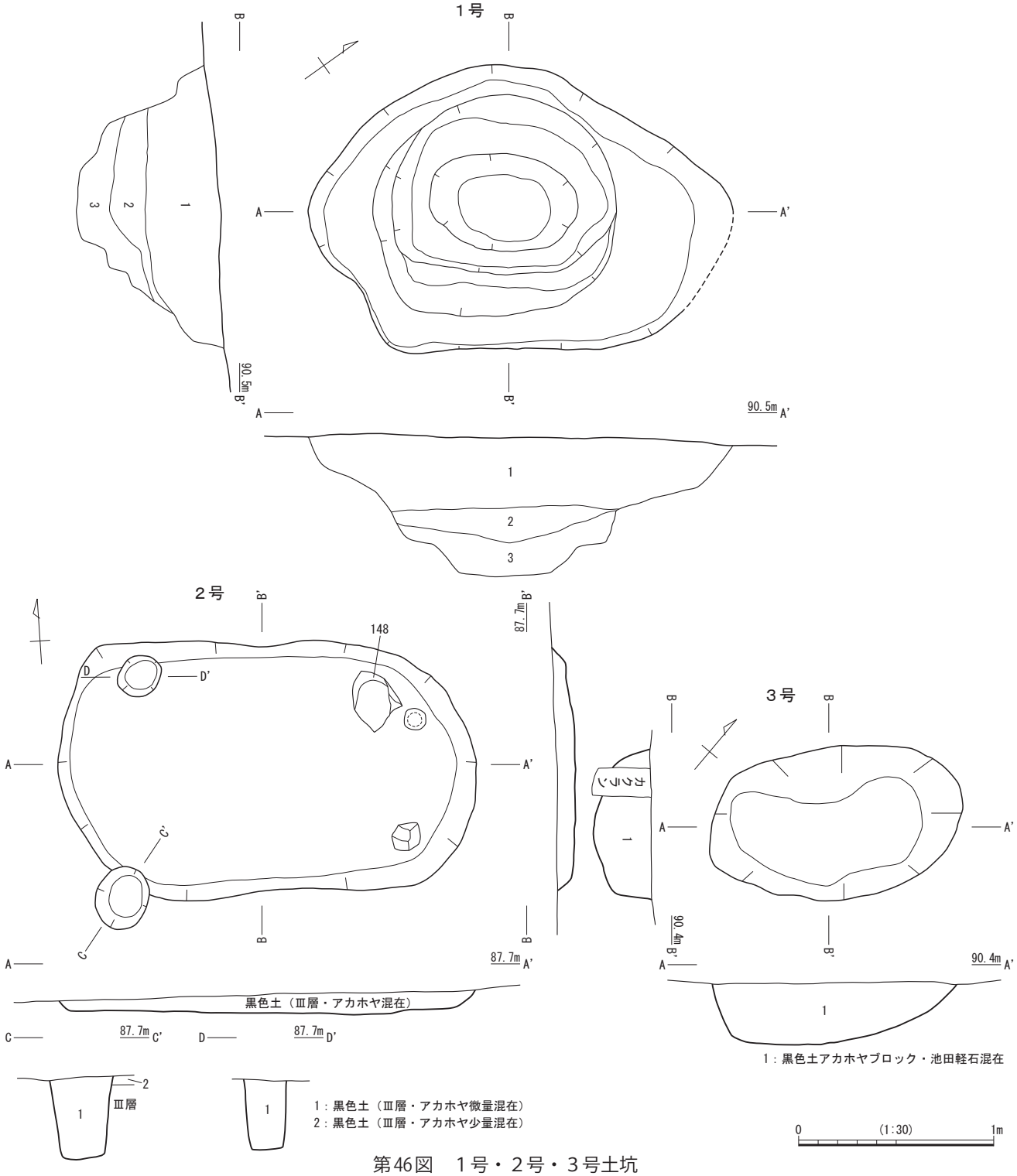
Ｈ－16区において検出された土坑で，長軸132.0cm，短軸80.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは74.0cmである。埋土は黒色土（Ⅲ層混在）を主体とする。遺物は土器片が少量出土している。

５号土坑（第48図）

Ｅ－19区において検出された土坑で，長軸120.5cm，短軸98.5cmの略円形を呈している。検出面はⅣ層中で，確認面からの深さは58.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は掘り方底面で土器片が少量出土している。

６号土坑（第48図・第49図）

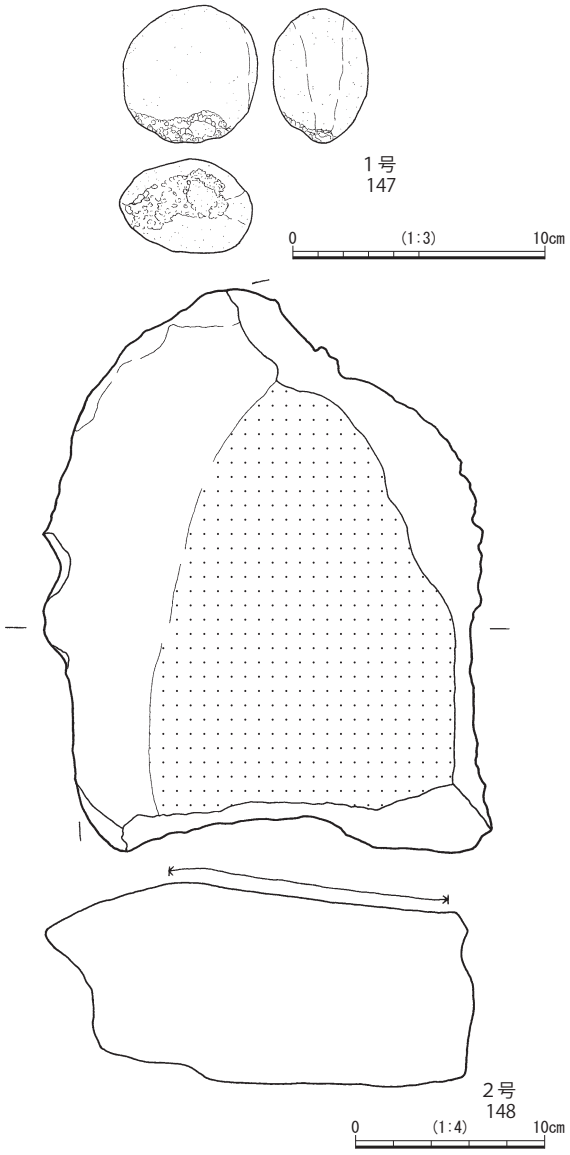
Ｆ・Ｇ－19区において検出された土坑で，長軸97.0cm，短軸96.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは71.0cmである。埋土は黒色



第46図　1号・2号・3号土坑

土を主体とする。断面形状は下縁に対して上縁が小さいフラスコ状を呈している。遺物は中層から，中岳Ⅱ式土器や上加世田式土器の破片，打製石斧・磨石・敲石等が多量に出土した。

149は上加世田式土器の浅鉢形土器，150・152～154は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器，151は中岳Ⅱ式土器の浅鉢形土器である。150はⅡB類，152はⅡF類，151はⅡI類に分類される。149は口径24.5㎝を測る。口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。器面調整は，内外面共にナデ後，横方向のミガキを施している。150は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。器面調整は，内外面共に横方向のミガキを施している。151・152は口縁部文様帯と頸部の境がないものである。151の器面調整は，内外面共に横方向のミガキを主体的に施して



第47図　1号・2号土坑出土石器

いる。153は底径4.3cmを測る平底の底部である。154は底径3.8cmを測る上げ底状の底部である。155は土玉である。156・157・159は打製石斧である。157はⅠb類に分類される。156・159は未製品である。大型の横長剥片を素材とし，左右両側縁から調整剥離を施している。157は板状に発達する節理を利用し，横長剥片を獲得し，その素材形状を生かしてわずかの調整剥離で短冊形に整えている。部分的に研磨を施している。161・164は扁平な楕円形を利用し，磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。162は磨石である。165は球状の礫を利用した敲石である。石材は156・159がホルンフェルス，157が頁岩，161が凝灰岩，162が花崗岩，164が安山岩，165が砂岩である。

7号土坑（第48図）

G－19区において検出された土坑で，長軸69.0cm，短軸68.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは18.0cmである。埋土は黒色土（アカホヤ混在）を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

8号土坑（第48図）

F－21区において検出された土坑で，長軸57.0cm，短軸50.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは78.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は土器片が少量出土している。

9号土坑（第48図・第49図）

H－17区において検出された土坑で，長軸114.5cm，短軸100.0cmの隅丸方形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは31.0cmである。埋土は黒色土（アカホヤ少量混在）を主体とする。158は打製石斧である。Ⅳb類に分類される。表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。大型の横長剥片を素材とし，上下両端から大まかな成形剥離を施した後，周縁に調整剥離を施している。抉りは素材剥片の打点側に偏っている。160は礫器である。扁平な楕円形の礫を素材とし，縁辺に調整剥離を施し，両刃の刃部を形成している。163は敲石である。上端部に敲打痕が認められる。石材は158・160がホルンフェルス，163が砂岩である。

10号土坑（第50図）

G・H－15区において検出された土坑で，長軸71.0cm，短軸70.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは42.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

11号土坑（第50図）

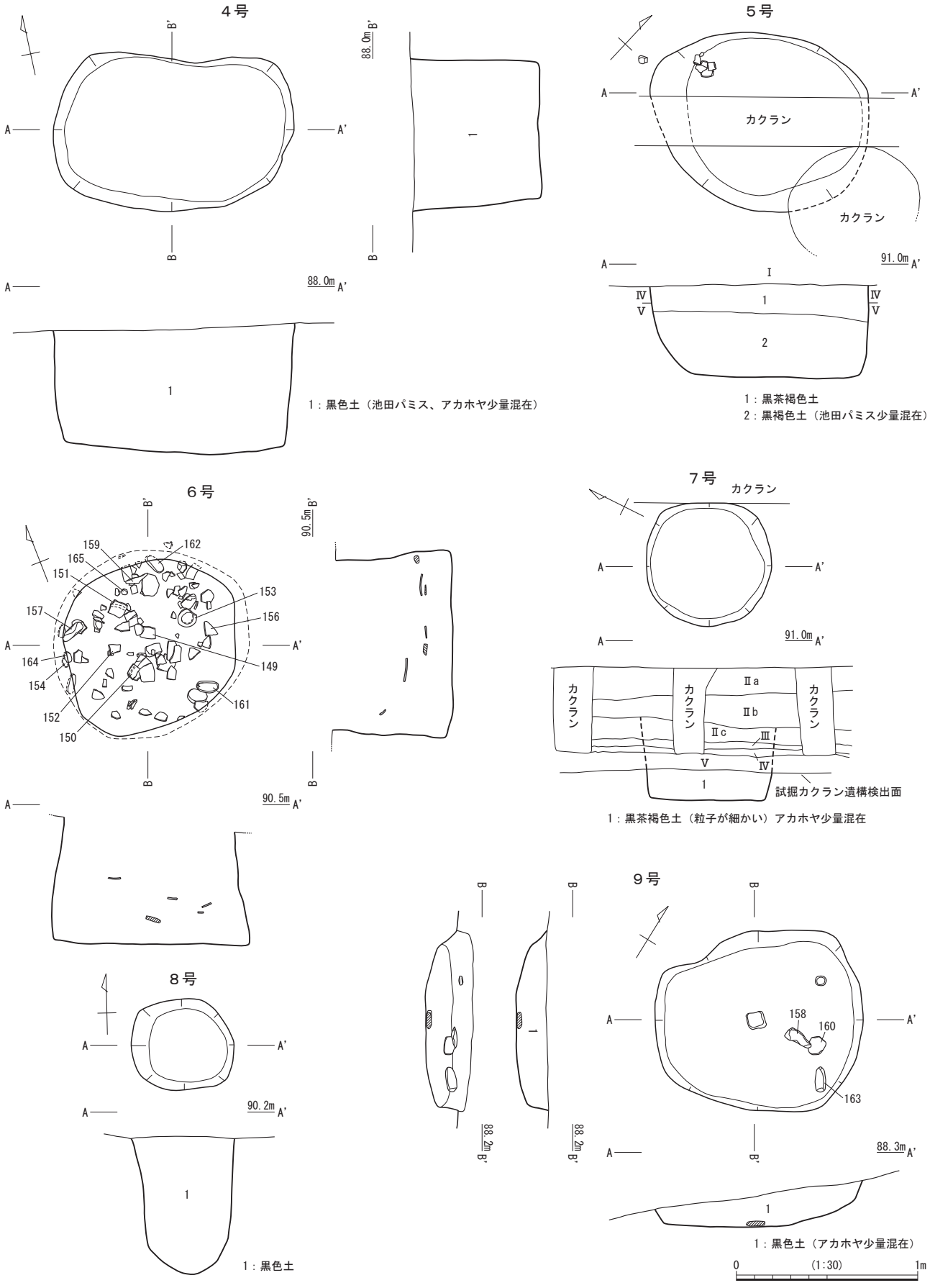
K－34区において検出された土坑で，長軸64.0cm，短軸63.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは19.0cmである。埋土は黒色土（Ⅱ層）を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

12号土坑（第50図）

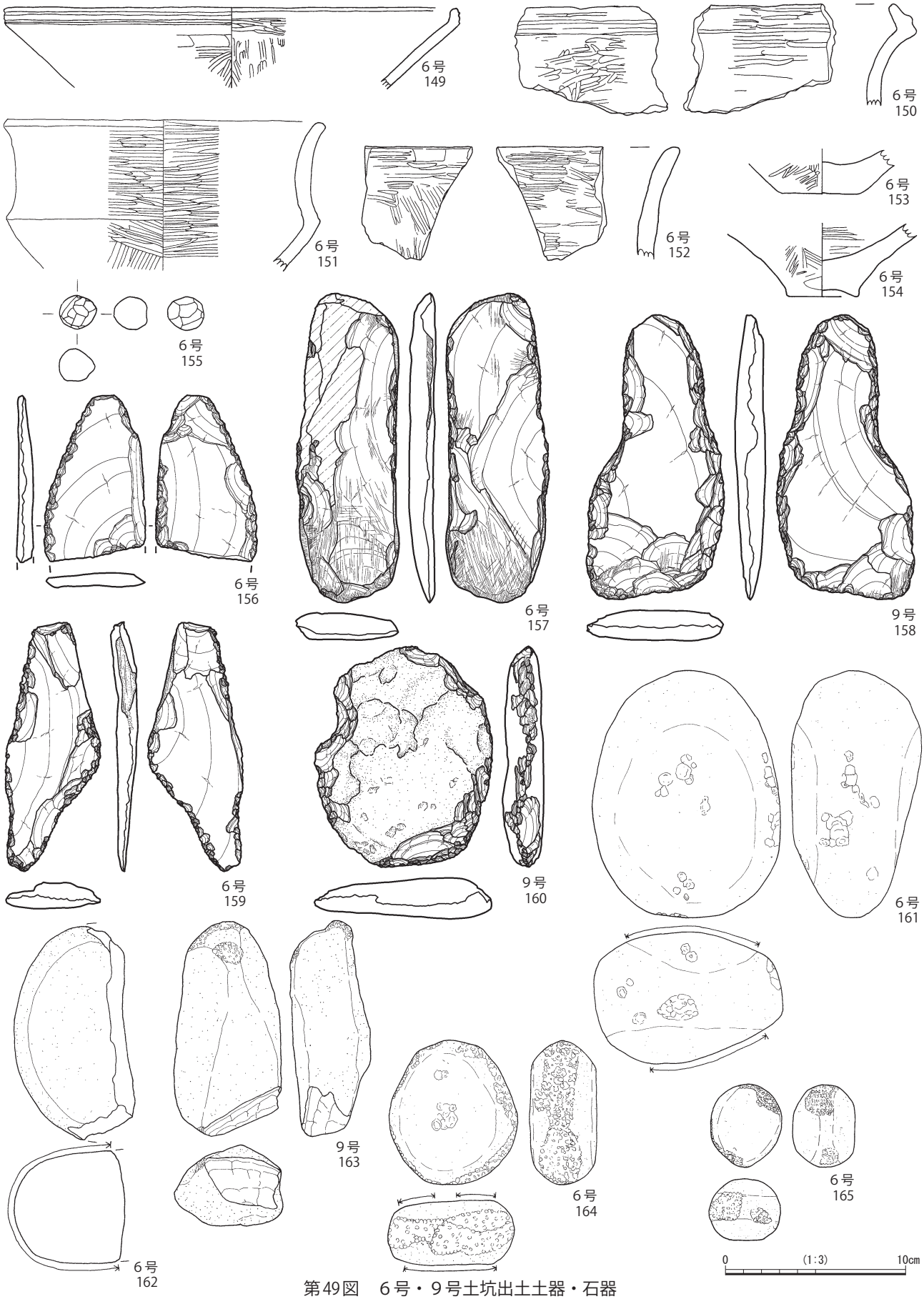
E・F－16区において検出された土坑で，長軸60.0cm，短軸46.5cmの不整円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは16.0cmである。北東隅にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

13号土坑（第50図）

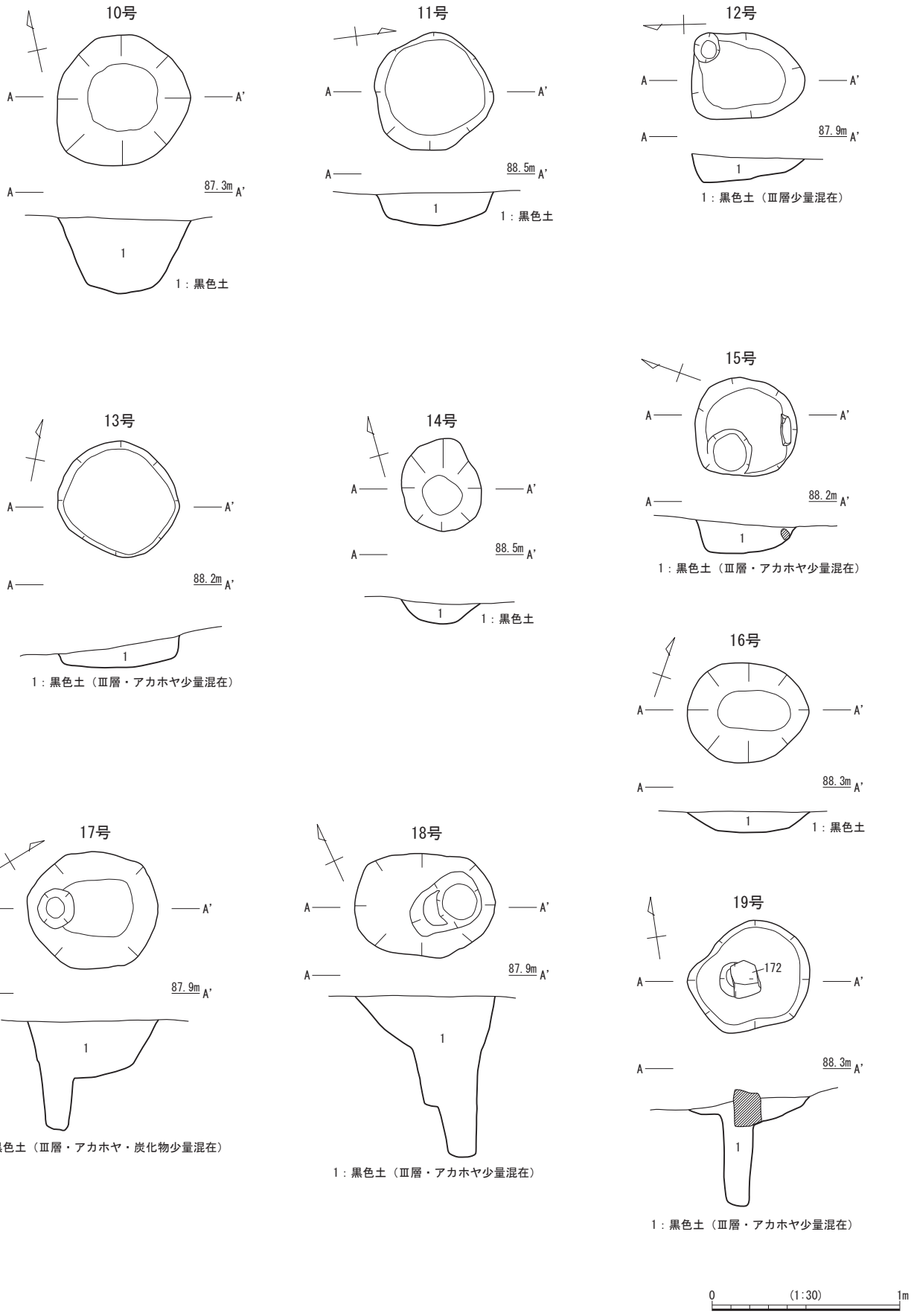
H－17区において検出された土坑で，長軸65.0cm，短軸62.0cmの略円形を呈している。検出面はⅤ層中で，



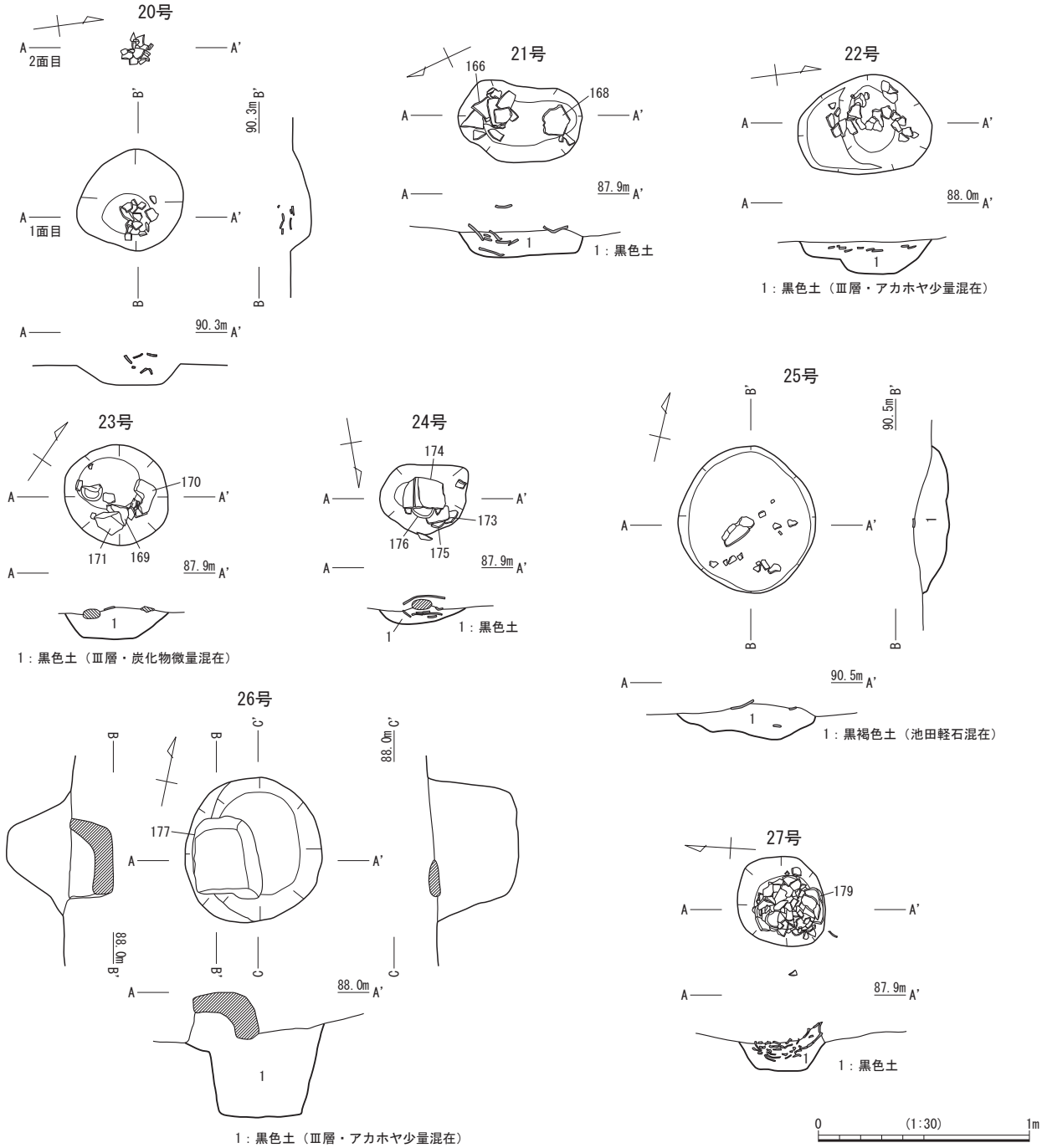
第48図　４号・５号・６号・７号・８号・９号土坑



第49図　6号・9号土坑出土土器・石器



第50図　10号・11号・12号・13号・14号・15号・16号・17号・18号・19号土坑



第51図　20号・21号・22号・23号・24号・25号・26号・27号土坑

確認面からの深さは17.0㎝である。埋土は黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）を主体とする。遺物は土器片少量と砕片１点が出土している。

14号土坑（第50図）

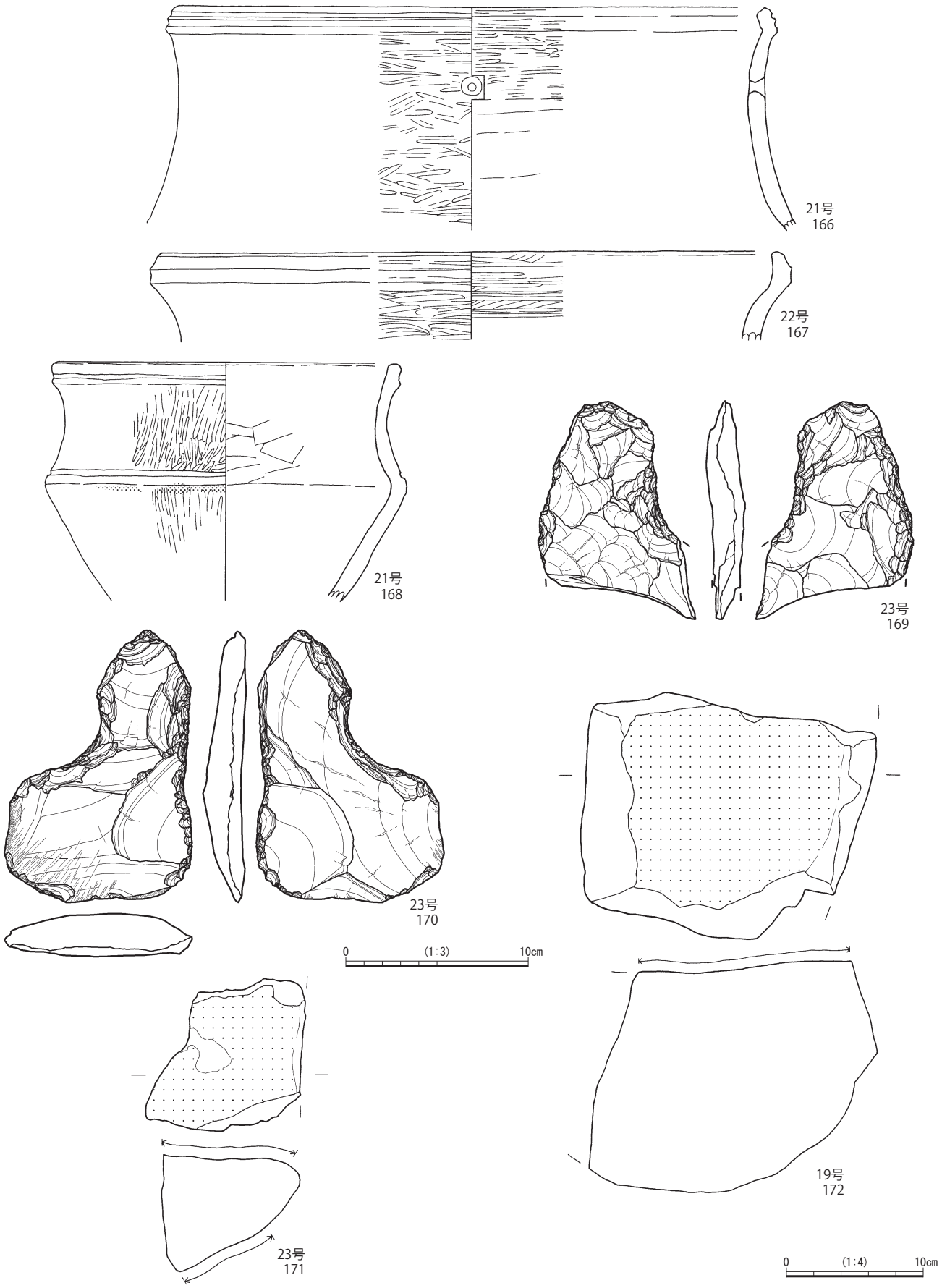
Ｋ－35区において検出された土坑で，長軸49.5㎝，短軸42.5㎝の略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは15.0㎝である。埋土は黒色土（Ⅱ層）を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

15号土坑（第50図）

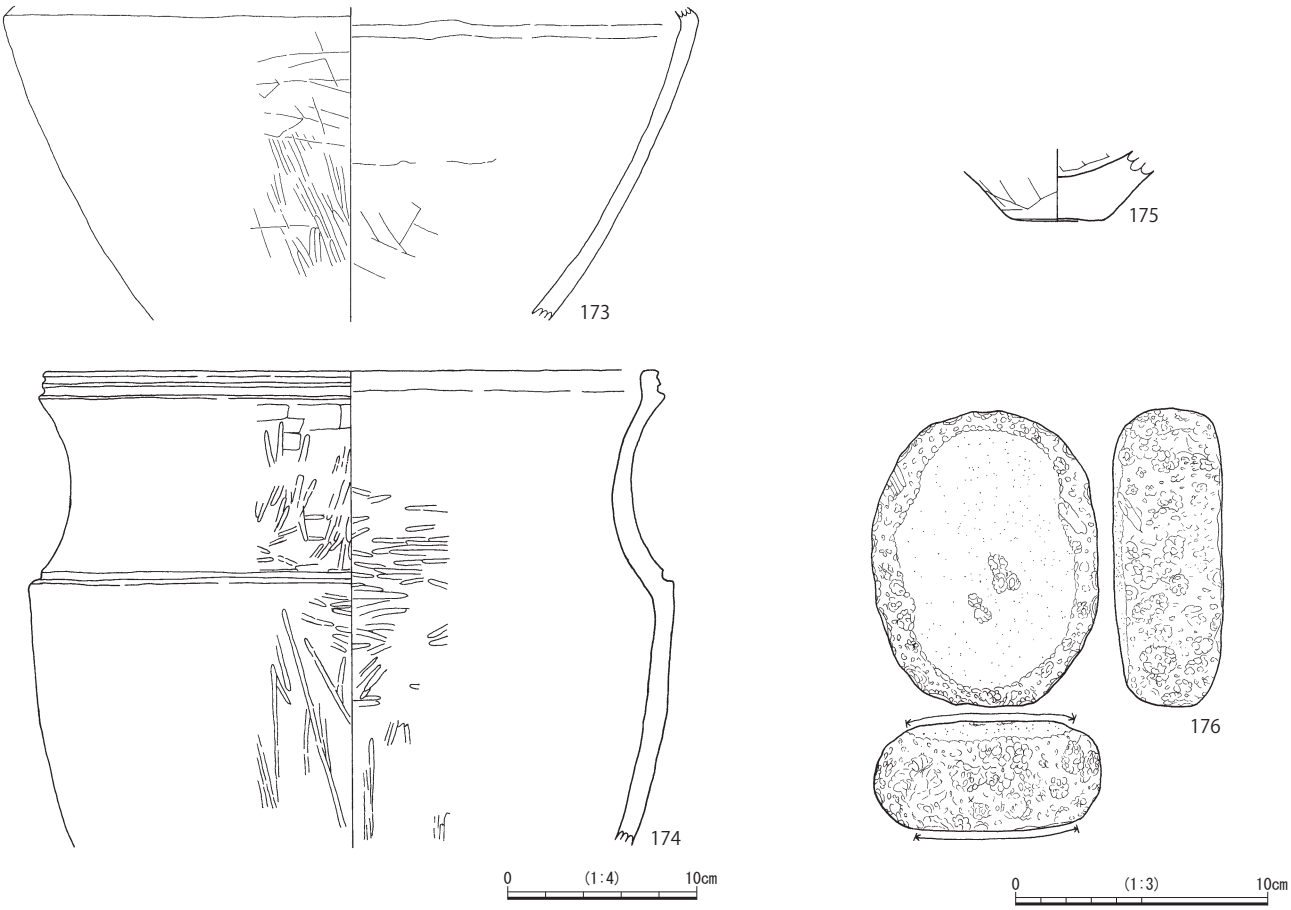
Ｈ－17区において検出された土坑で，長軸54.5㎝，短軸53.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅤ層中で，確認面からの深さは21.0㎝である。北西隅にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）を主体とする。遺物は土器片少量と礫１点が出土している。

16号土坑（第50図）

Ｋ－36区において検出された土坑で，長軸65.0㎝，



第52図　19号・21号・22号・23号土坑出土土器・石器



第53図　24号土坑出土土器・石器

短軸53.5cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは11.0cmである。埋土は黒色土（Ⅱ層）を主体とする。埋土中に遺物は認められなかった。

17号土坑（第50図）

Ｆ－15区において検出された土坑で，長軸70.0cm，短軸62.5cmの略円形を呈している。検出面はⅡｃ層中で，確認面からの深さは57.0cmである。南西側にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土（Ⅲ層混在）を主体とする。遺物は土器片が少量出土している。

18号土坑（第50図）

Ｆ－15区において検出された土坑で，長軸80.0cm，短軸56.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅡｃ層中で，確認面からの深さは87.0cmである。東側にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土（Ⅲ層少量混在）を主体とする。遺物は土器片少量と敲石・石皿が各１点出土している。

19号土坑（第50図・第52図）

Ｈ－17区において検出された土坑で，長軸65.0cm，短軸60.0cmの楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは67.0cmである。中央にピット状の掘り込みが認められる。埋土は黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）を主体とする。遺物は石皿が１点，ピット状の掘り込みを塞ぐように出土している。

172は石皿である。表面に使用による磨面が形成されている。石材は凝灰岩である。

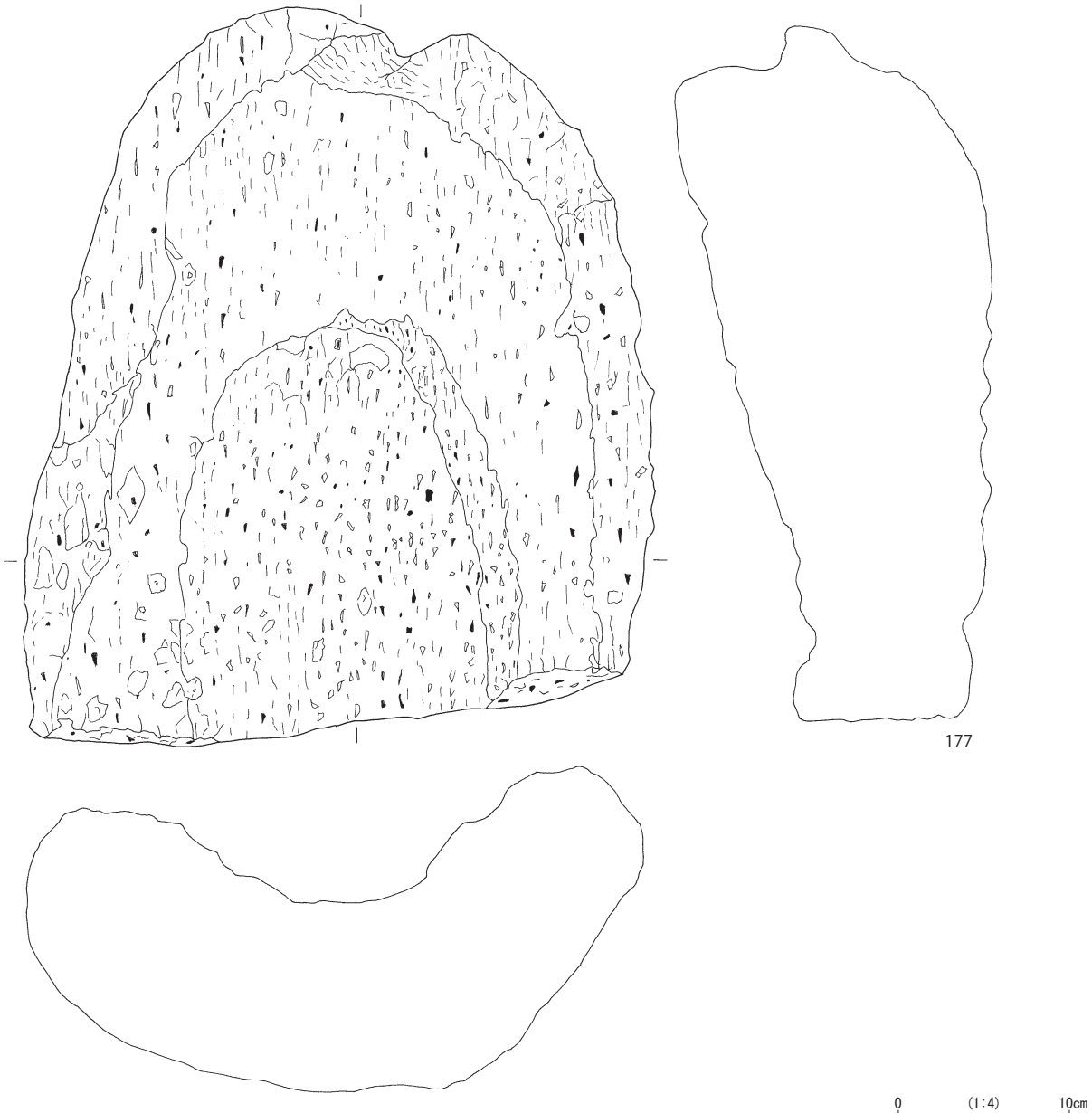
20号土坑（第51図）

Ｈ－23区において検出された土坑で，長軸50.0cm，短軸30.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは10.0cmである。埋土中に遺物は認められなかった。遺物は上層から土器片が纏まって出土しており，廃棄の可能性が考えられる。

21号土坑（第51図・第52図）

Ｆ－14区において検出された土坑で，長軸59.0cm，短軸39.5cmの不整円形を呈している。検出面はⅡｂ層中で，確認面からの深さは12.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。掘り方北側と南側で中岳Ⅱ式土器の破片が出土している。

166・168は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。共にⅡＢ類に分類される。166は口径31.9cmを測る。口縁部文様



第54図　26号土坑出土石器

帯に沈線を２条巡らせている。頸部には補修孔が認められる。器面調整は，内外面共に横方向のミガキを施している。168は口径18.1㎝を測る。口縁部文様帯及び胴部最大径の所に沈線を１条巡らせている。外面には煤が付着している。器面調整は，外面が胴部から口縁部まで縦方向のミガキを施し，内面は横方向のナデを施している。

22号土坑（第51図・第52図）

Ｆ－16区において検出された土坑で，長軸63.5㎝，短軸42.5㎝の楕円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは17.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。上層から中岳Ⅱ式土器（167）の破片が出土している。

23号土坑（第51図・第52図）

Ｆ－13・14区において検出された土坑で，長軸49.0㎝，短軸48.0㎝の略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは15.0㎝である。埋土は黒色土を主体とする。遺物は上層から土器片少量と打製石斧２点・磨石１点・石皿１点が出土した。

169・170は打製石斧である。169はⅣａ類に分類される。刃部を欠損している。170はⅣｂ類に分類される。171は石皿である。表裏両面に使用による磨面が形成されている。大部分が欠損している。石材は169・170がホルンフェルス，171が花崗岩である。

24号土坑（第51図・第53図）

Ｆ－14区において検出された土坑で，長軸42.0cm，短軸33.5cmの楕円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは9.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は掘り方底面から中岳Ⅱ式土器の破片と磨石１点が纏まって出土した。

173～175は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。174はⅡＢ類に分類される。173は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲する胴部である。器面調整は，外面が横方向のナデ後に縦方向のミガキを施し，内面は横方向のナデを施している。174は口径31.7cmを測る。口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。胴部最大径の所には沈線を１条巡らせている。器面調整は，外面が胴部から口縁部まで縦方向のミガキを主体的に施し，内面は横方向のミガキを主体的に施している。175は底径3.6cmを測る平底の底部である。176は磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。扁平な楕円形の礫を利用し，表裏両面に磨面，周縁に敲打痕が認められる。石材は安山岩である。

25号土坑（第51図）

Ｇ－19区において検出された土坑で，長軸70.0cm，短軸65.0cmの略円形を呈している。検出面はⅢ層中で，確認面からの深さは17.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は土器片が少量出土している他，炭や赤色顔料も出土している。

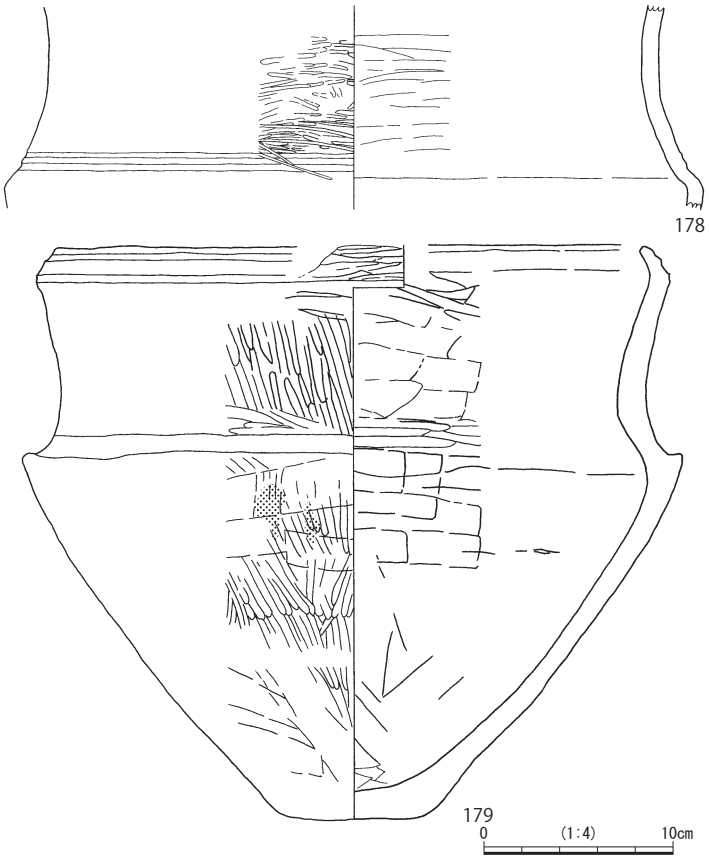
26号土坑（第51図・第54図）

Ｈ－17区において検出された土坑で，長軸69.0cm，短軸65.5cmの略円形を呈している。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは43.0cmである。埋土は黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）を主体とする。遺物は上層から土器片が少量と大型の軽石製品が１点，逆位で出土している。

177は大型の軽石製品である。上部に大きな切れ目を作出し，正面には深い凹を作出している。形態的特長から，女性器を模した女陰形石製品の可能性も考えられる。被熱により，全体がやや赤化している。半分を欠損しているが，赤化が欠損部に及んでいないことから，被熱後に欠損，或いは意図的に破壊し廃棄した可能性が考えられる。

27号土坑（第51図・第55図）

Ｆ－14区において検出された土坑で，長軸42.5cm，短軸42.5cmの略円形を呈している。検出面はⅡb層中で，確認面からの深さは18.0cmである。埋土は黒色土を主体とする。遺物は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器が土圧により，細かく潰れた状態で出土している。それらの土器片を接合した結果，底部から口縁部まで復元することができた。断面の観察からは，正位で置かれていたようにも見え，埋設土器の可能性も考えられる。

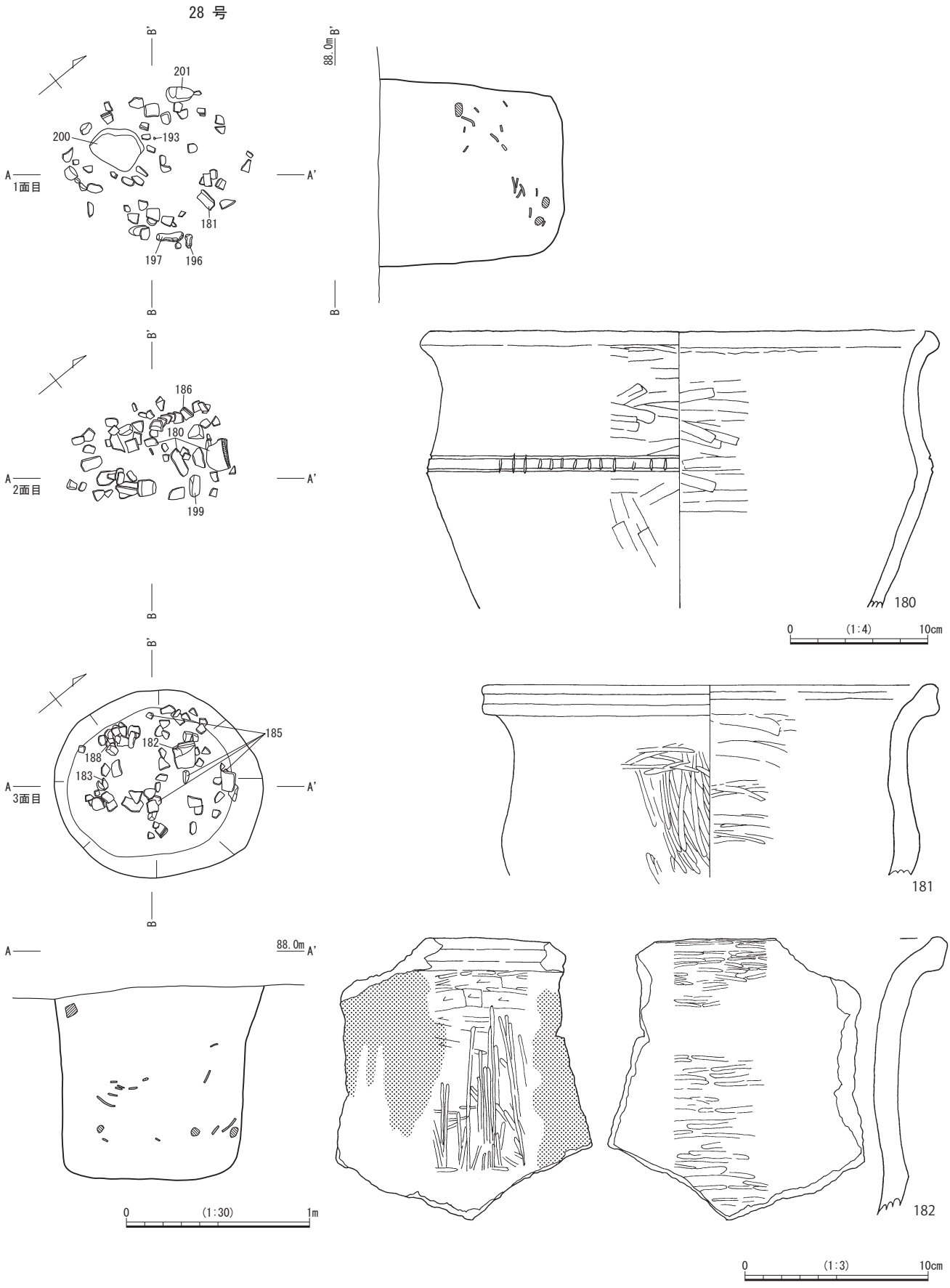


第55図　27号土坑出土土器

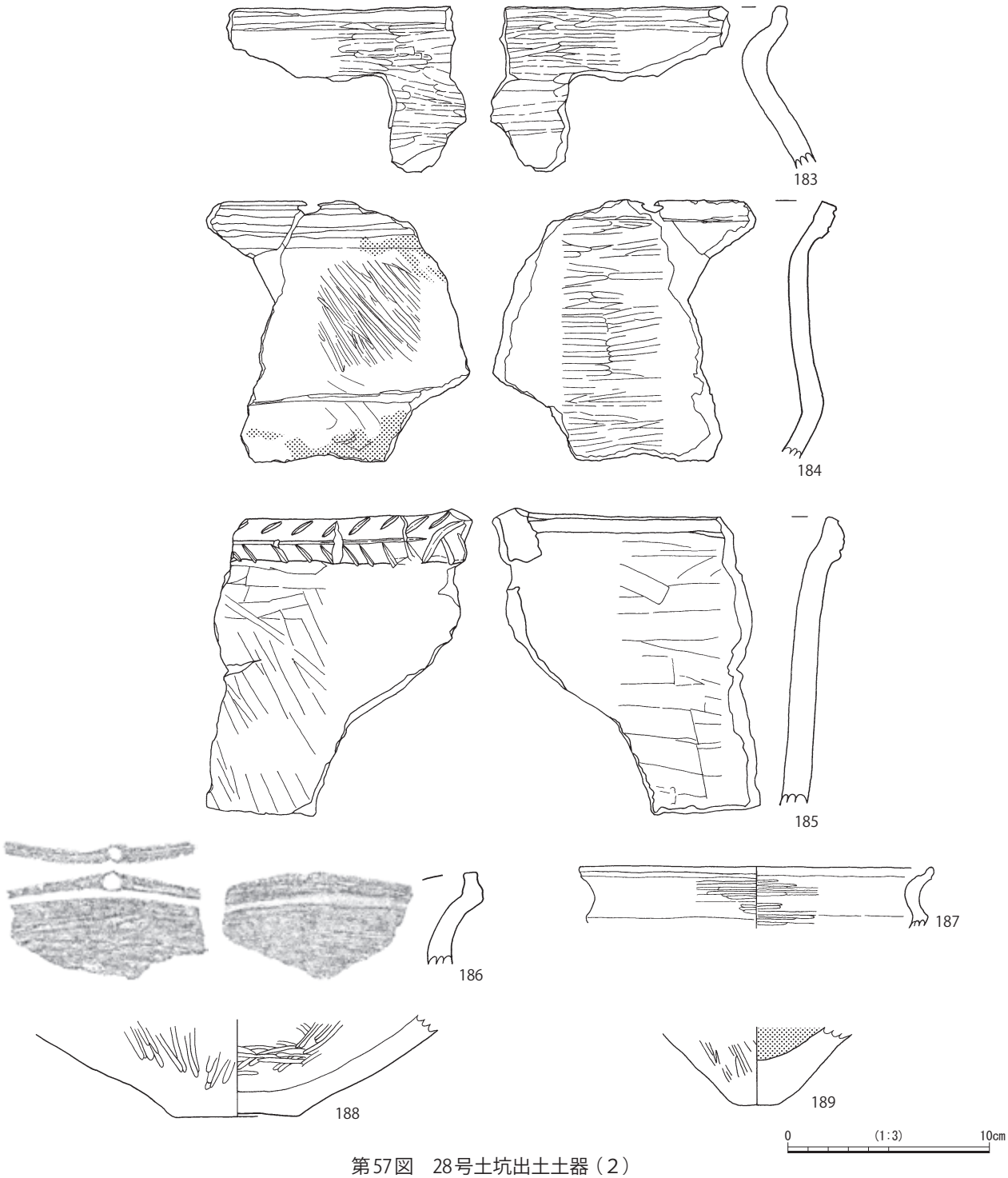
178・179は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器である。179はⅡＢ類に分類される。178は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し，沈線を２条巡らせている。器面調整は外面が横方向のミガキを施し，内面は横方向のナデを施している。179は口径23.0cm，底径5.6cm，器高22.4cmを測る。底部は不安定な平底で，胴部最大径の所までは直線的に延びる。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反し，直行する口縁部へ至る。口縁部文様帯には浅く幅広の沈線を２条巡らせている。器面調整は，外面が胴部下位から口縁部まで横方向のナデ後，縦方向のミガキを施している。内面は胴部下位から口縁部まで横方向のナデを施している。外面に煤が付着している。

28号土坑（第56図～第58図）

Ｆ－16区において検出された土坑で，長軸114.5cm，短軸103.0cmの略円形を呈している。検出面はⅡc層中で，確認面からの深さは11.0cmである。埋土は黒色土（Ⅲ層少量混在）を主体とする。遺物は底面から中層にかけて中岳Ⅱ式土器の破片や石鏃・打製石斧・磨・敲石・石皿が多量に出土しており，廃棄された可能性が考えられる。

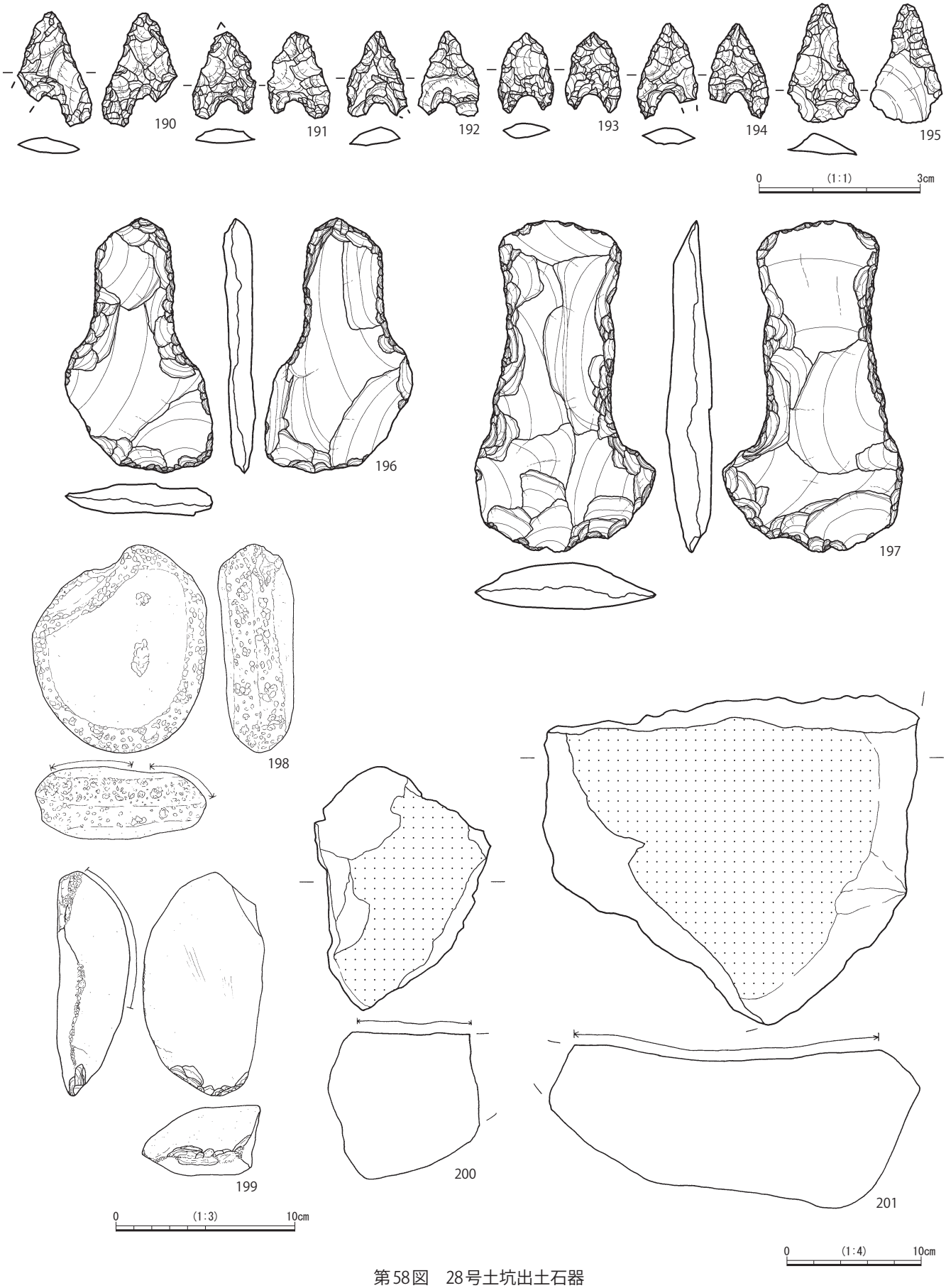


第56図　28号土坑・出土土器（1）



第57図　28号土坑出土土器（2）

180 ～ 185は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器，186・187は中岳Ⅱ式土器の浅鉢形土器，188・189は中岳Ⅱ式土器の底部である。180はⅡA類，181 ～ 185がⅡB類，186・187がⅡG類に分類される。180は口径35.9㎝を測る。胴部最大径の所で沈線を２条巡らせた後，刻目を連続的に施している。181 ～ 183は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を１巡らせている。器面調整は，外面胴部下位が縦方向のミガキを施し，頸部は横方向のミガキを施す傾向がある。内面は胴部下位から口縁部まで横方向のミガキを施す傾向がある。184は口縁部文様帯に沈線を２条，胴部最大径の所に沈線を１条巡らせている。器面調整は，外面が胴部から口縁部まで横方向のミガキを施し，内面は胴部から口縁部まで斜め方向のミガキを施している。185は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせ綾杉文を施す。186は波状口縁である。口縁部文様帯に沈線を１条巡らせる他，頂部下に円形の凹点を施している。頂



第58図　28号土坑出土石器

部の上面には円形の凹点が施される。187は口縁部文様帯に沈線を1条巡らせている。器面調整は，内外面共に丁寧な横方向のミガキを施している。188は底径5.8㎝を測る，やや上げ底状の底部である。189は底径2.1㎝を測る，不安定な平底の底部である。190 ～ 195は石鏃である。190 ～ 193はⅠｃ類，194がⅡｂ類に分類される。195は石鏃未製品である。先端部を作出しているが，基部の作出には至っていない。196・197は打製石斧である。196はⅢＡａ類，197がⅣａ類に分類される。共に裏面に素材剥片の剥離面を残している。柄を装着するための抉り部を作出し，入念に調整剥離を施している。198・199は磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。199は下端縁に潰れた刃部が確認できることから，礫器としての機能を失った後に磨・敲石として利用したものと思われる。200・201は石皿である。共に表面に使用による磨面が形成されている。大部分が欠損している。石材は，190 ～ 192・194・195・198・199が安山岩，196・197がホルンフェルス，200・201が凝灰岩，193が黒曜石である。

キ　ピット（第59図～第61図）

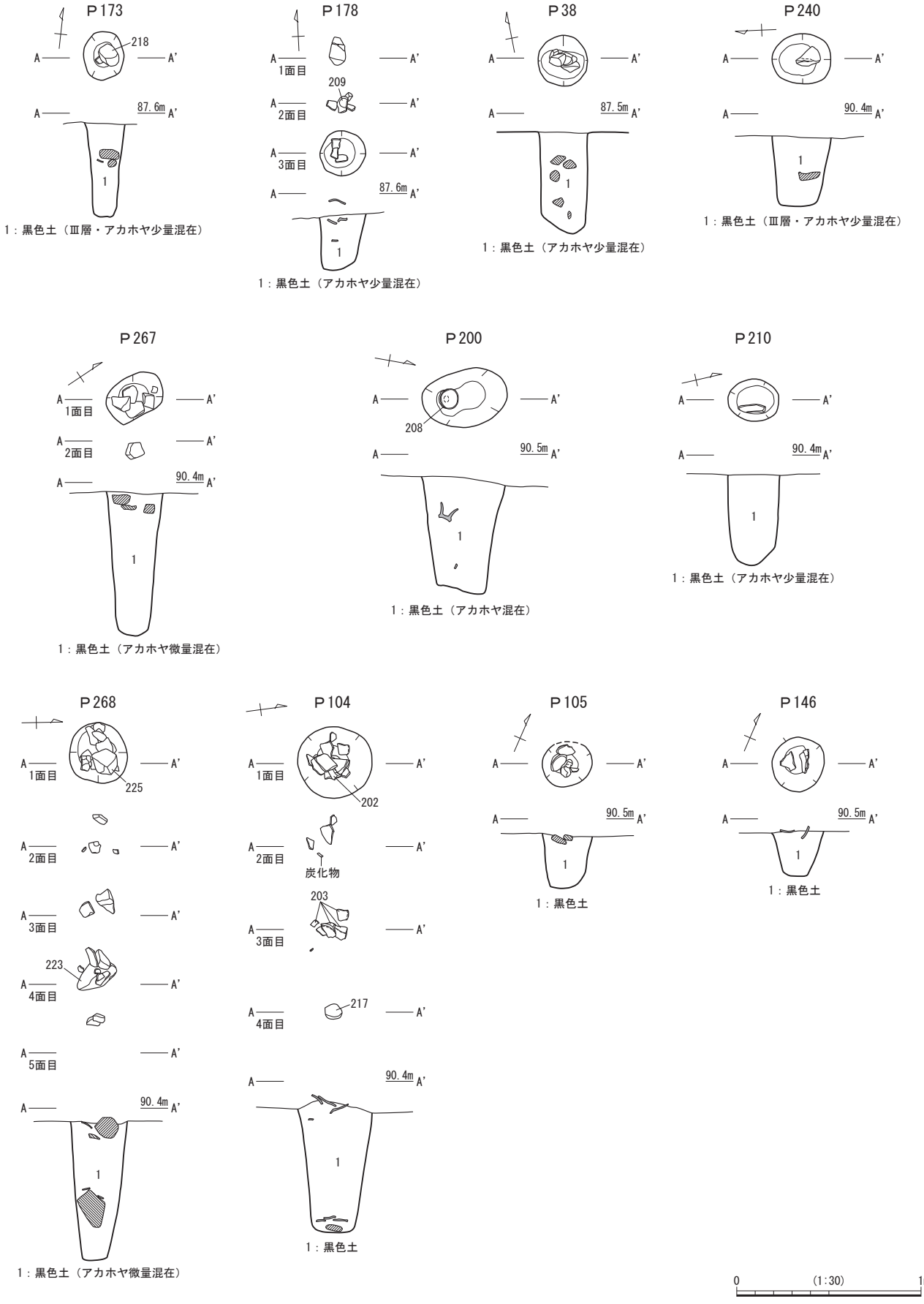
本遺跡において，ピットが複数検出された。配置に規則性はなく，建物を構成するようなピットや柱痕も認められなかった。埋土は全て単層で，Ⅱ層の黒色土を主体としている。

ここでは，複数検出されたピットの内，掘り方が明瞭で埋土中から比較的纏まって遺物が出土したものを図示した。また，計測値は第4表に示した。以下，ピット内から出土した遺物を個別に説明する。

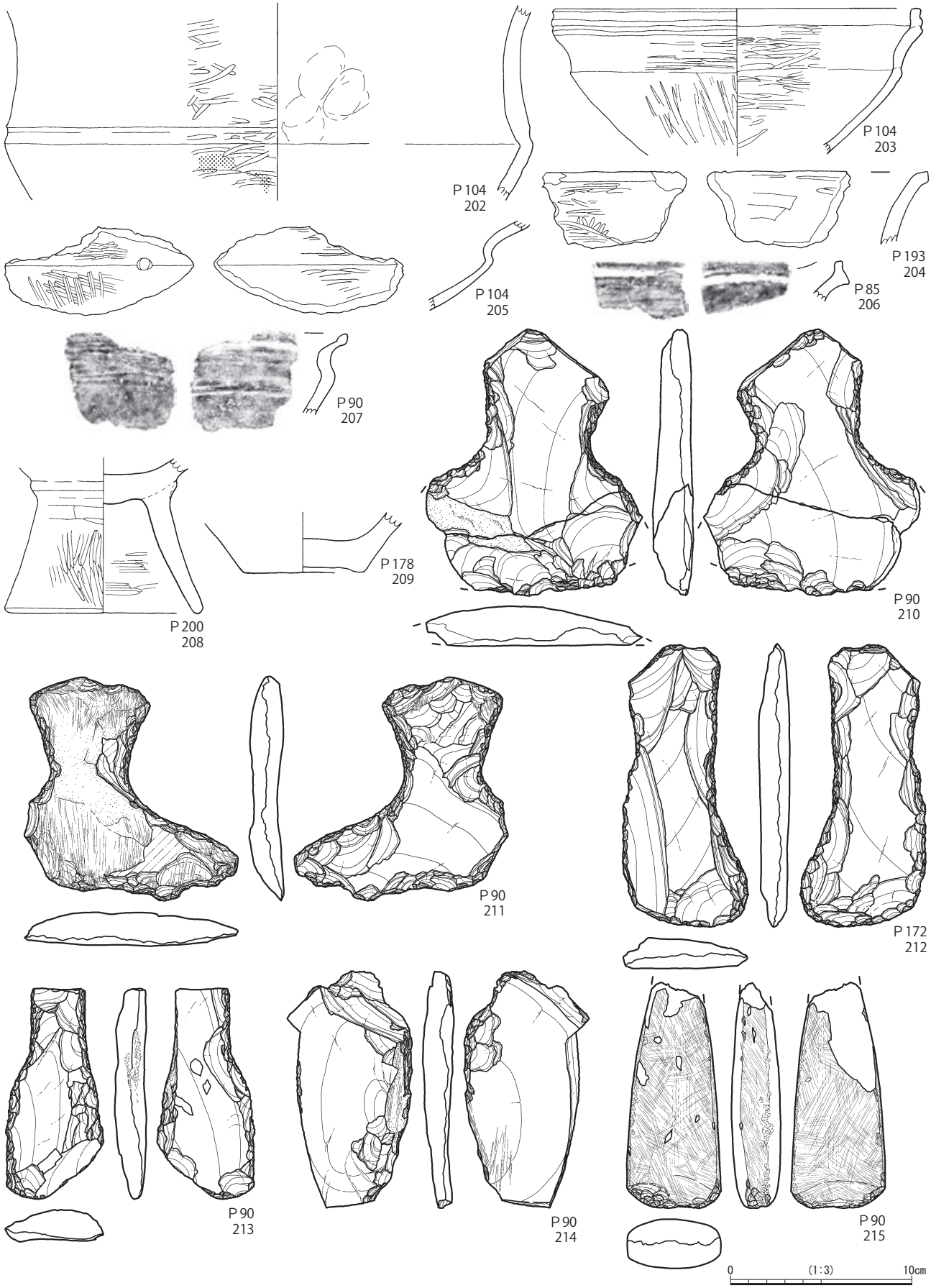
202・209は中岳Ⅱ式土器の深鉢形土器，203・204・206・207は中岳Ⅱ式土器の浅鉢形土器である。206がⅡＢ類，204がⅡＤ類，203がⅡＧ類，207がⅡⅠ類に分類される。205は黒川式土器の浅鉢形土器，208は縄文時代晩期末の高坏形土器である。202は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し，沈線を1条巡らせている。器面調整は外面が横方向のミガキを施し，内面は指ナデを施している。203は口径20.1㎝を測る。口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。器面調整は外面胴部が縦方向，頸部が横方向のミガキを施し，内面は胴部から口縁部まで横方向のミガキを施している。204は口縁部文様帯をもたないものである。器面調整は外面が横方向のミガキを主体的に施し，内面は横方向のナデを施している。205は胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反している。胴部最大径の所に円形の凹点が施されている。器面調整は内外面共に横方向のミガキを施している。206・207の器面調整は内外面共に横方向のミガキを主体的に施している。208は底径10.2㎝を測る。脚部のみ残存する。器面調整は外面が縦方向のミガキを施し，内面は横方向のミガキを施している。209は底径6.6㎝を測る，上げ底状の底部である。210 ～ 214は打製石斧である。210がⅢＤａ類，211がⅢＤｂ類，212・213がⅣａ類に分類される。214は大型の横長剥片を素材とした未製品である。215は磨製石斧である。刃部は使用により潰れている。基部の欠損は使用に伴い欠損したものと思われる。216 ～ 218は磨面と敲打痕が複合して認められる礫石器である。219 ～ 221は磨石で，222は敲石である。216・217・219 ～ 221は扁平な楕円形の礫，218は亜角礫，222は柱状の礫を利用している。223 ～ 225は石皿で全て欠損している。224は脚付きの成形石皿である。石材は，210 ～ 215がホルンフェルス，216・217・220・221・223が凝灰岩，218・219が安山岩，222・225が砂岩，224が花崗岩である。

第4表　ピット計測値一覧表

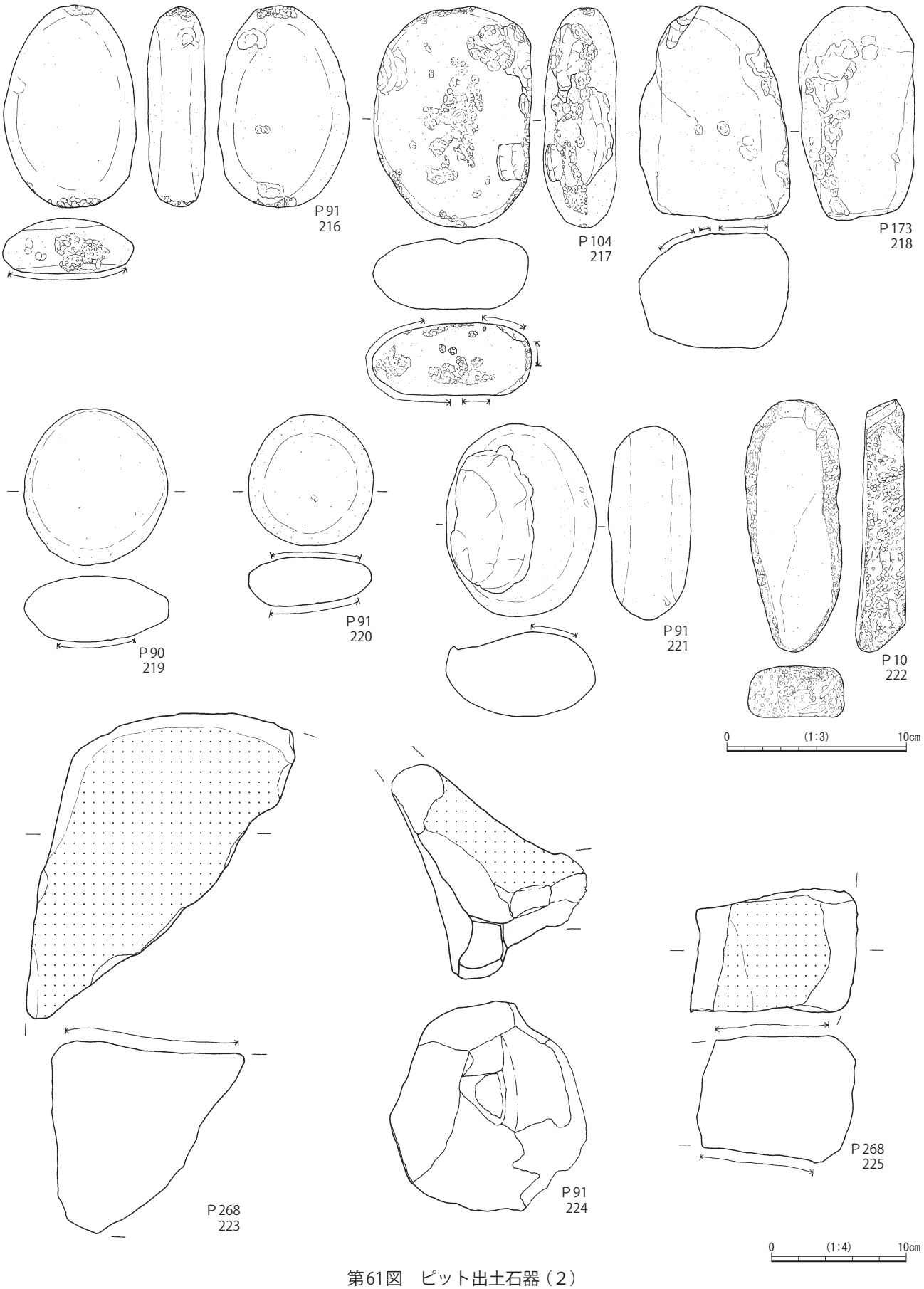
遺構番号	区	検出面	埋土	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	平面形	切り合い	遺物等
ピット173	F-15	Ⅲ	黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）	26	22	51	略円形	無し	土器・石器
ピット178	F-15	Ⅲ	黒色土（アカホヤ少量混在）	25	25	32	略円形	無し	土器・石器
ピット38	G-15	Ⅲ	黒色土（アカホヤ少量混在）	28	27	51	略円形	無し	石器
ピット240	F-19	Ⅲ	黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）	32	27	38	略円形	無し	土器
ピット267	F-19	Ⅴ	黒色土（アカホヤ微量混在）	31	29	77	楕円形	無し	礫・土器・石器
ピット200	G-19	Ⅱｃ	黒色土（アカホヤ混在）	46	33	63	楕円形	無し	土器
ピット210	G-19	Ⅱｃ	黒色土（アカホヤ少量混在）	27	23	49	略円形	無し	石器
ピット268	F・G-19	Ⅴ	黒色土（アカホヤ微量混在）	33	32	76	略円形	無し	礫・土器・石器
ピット104	H-20	Ⅲ	黒色土	40	39	68	略円形	無し	土器・石器
ピット105	I-22	Ⅲ	黒色土	27	24	32	略円形	無し	石器
ピット146	I-20	Ⅲ	黒色土	29	29	24	略円形	無し	土器


P173
218
A
A'
87.6m
1
1：黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）
P178
1面目
209
2面目
3面目
87.6m
1
1：黒色土（アカホヤ少量混在）
P38
87.5m
1
1：黒色土（アカホヤ少量混在）
P240
90.4m
1
1：黒色土（Ⅲ層・アカホヤ少量混在）
P267
1面目
2面目
90.4m
1
1：黒色土（アカホヤ微量混在）
P200
208
90.5m
1
1：黒色土（アカホヤ混在）
P210
90.4m
1
1：黒色土（アカホヤ少量混在）
P268
1面目
225
2面目
3面目
223
4面目
5面目
90.4m
1
1：黒色土（アカホヤ微量混在）
P104
1面目
202
2面目
炭化物
203
3面目
217
4面目
90.4m
1
1：黒色土
P105
90.5m
1
1：黒色土
P146
90.5m
1
1：黒色土
0
(1:30)
1m

第59図　ピット



第60図　ピット出土土器・石器（1）



第61図　ピット出土石器（2）

（3）縄文時代後期の遺物（第62図～第107図）

遺物は，Ⅱｂ層（黒色土）を中心に出土しており，その殆どが，後期後半の中岳Ⅱ式土器の時期に帰属するものと思われる。

本項では，遺構外から出土したものの内，西平式土器４点，中岳Ⅱ式土器311点，石鏃75点，ドリル１点，楔形石器１点，スクレイパー７点，異形石器３点，打製石斧117点，磨製石斧25点，礫器５点，磨石・敲石51点，石皿24点，砥石３点，用途不明石器２点，垂飾１点，丸玉２点，勾玉１点，管玉１点を図示した。

ア　土器（第62図～第80図）

西平式土器（第62図）

本遺跡出土遺物の中で最も古い後期中葉の土器で，少量出土している。226 ～ 229はＩ類の胴部である。器面調整は，外面がＲＬ縄文を施した後，平行沈線を施し，内面はナデを施している。

中岳Ⅱ式土器（第63図～第78図）

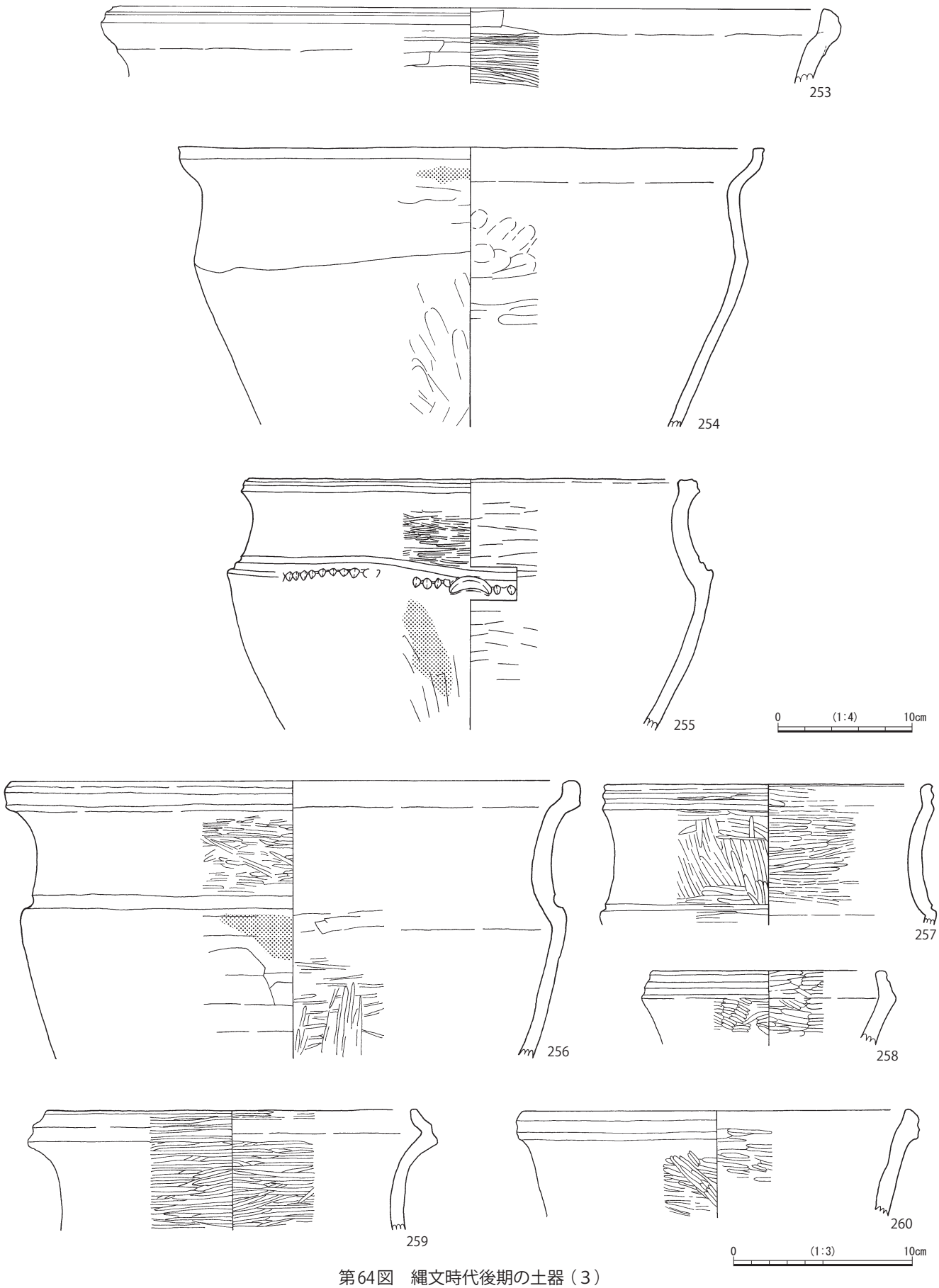
本遺跡出土遺物の中で最も多く見られる後期後半の土器である。口縁部の形態的特長から大別ⅡＡ～ⅡＩ類に分類し，胴部の形態的特長からａ・ｂ類に細分した。分類の基準については，小結に表で示しているので，そちらを参照されたい。

230 ～ 420は深鉢形土器，421 ～ 481は浅鉢形土器である。230 ～ 252はⅡＡ類に分類される。231は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を１条，230・232 ～ 241は２条巡らせている。240・241は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせた後，楕円形や円形の凹点を施している。242は口縁部文様帯に沈線を２条，頸部に沈線を１条巡らせている。245は肥厚した口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。246 ～ 248は口縁部文様帯に沈線が認められないものである。249は波状口縁で，口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。頂部下には山形の凹点を施している。250は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせた後，山形の凹点を連続的に施している。251は口縁部文様帯に楕円形の凹点のみが施されている。252は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせた後，斜立切形の刻目を施している。ⅡＡ類の器面調整の特徴としては，内外面共に横方向のミガキで仕上げる傾向がある。238・248のように内外面をナデのみで仕上げているものも認められるが稀である。

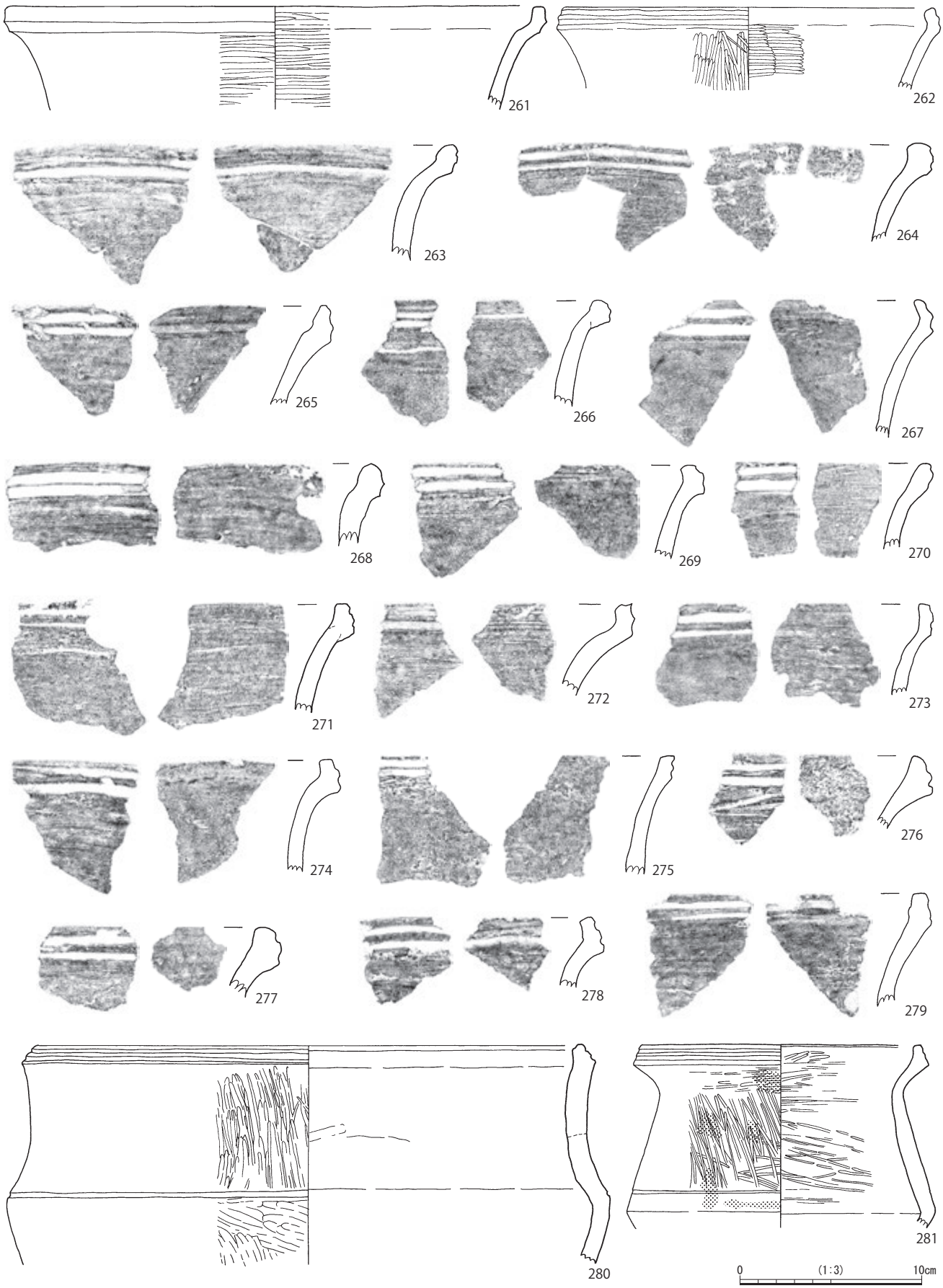
253 ～ 354はⅡＢ類に分類される。その内，254 ～ 257・280 ～ 282・303がａ類，317がｂ類に細分される。253・255 ～ 281は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を２条巡らせている。255は胴部に沈線を２条巡らせた後，添加文に三日月文，主文に円形の凹点を連続的に施している。282 ～ 301は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。279 ～ 281は胴部に沈線を１条巡らせている。302 ～ 314は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。303は胴部に沈線を１条巡らせている。315 ～ 326は口縁部文様帯に沈線が認められないものである。327 ～ 341は波状口縁をなすものである。327 ～ 337・340は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。328・329・340は頂部下に円形の凹点を，338は三日月文を１点施している。332は口縁部文様帯に連続的に円形の凹点を施している。332・336・338・340は頂部の口唇部に円形の凹点を施している。342・343は口縁部文様帯に沈線を３条巡らせている。344は口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を１条巡らせた後，楕円形の凹点を施している。345は肥厚した口縁部文様帯に沈線を２条巡らせ，頸部に楕円形の凹点を施している。347・348は肥厚した口縁部文様帯に沈線を２条巡らせ，頸部に円形の凹点を施している。346は口縁部文様帯に楕円形の凹点と三日月文を連続的に施している。349は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。350は小型鉢で，口縁部文様帯に楕円形の凹点を連続的に施している。351は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせた後，楕円形の凹点を連続的に施し，赤色顔料を帯状に塗布している。口唇部には刻目を施している。352は口縁部文様帯に沈線を１条，353・354は２条巡らせた後，凹点を連続的に施している。352・353は楕円形で，354は楕円形の凹点である。ⅡＢ類の器面調整の特徴としては，外面が胴部下位を縦や斜め方向のミガキで仕上げ，胴部中位から頸部にかけて主に横方向のミガキで仕上げる傾向がある。内面は胴部下位から頸部にかけては横方向のミガキか，ナデで仕上げる傾向がある。254 ～ 257・281・282・285・328は外面に煤が付着している。

第62図　縄文時代後期の土器（１）

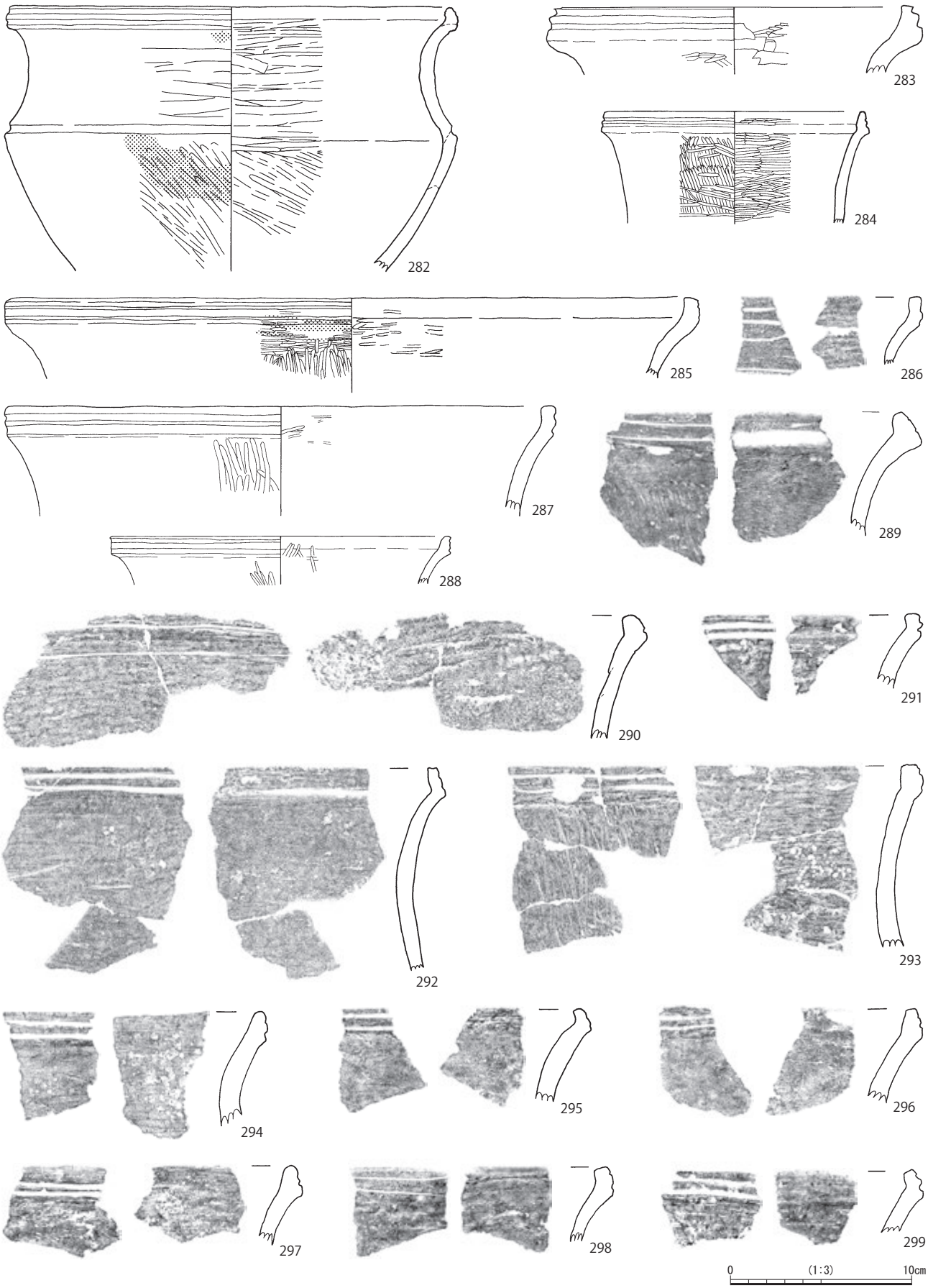
第63図　縄文時代後期の土器（２）



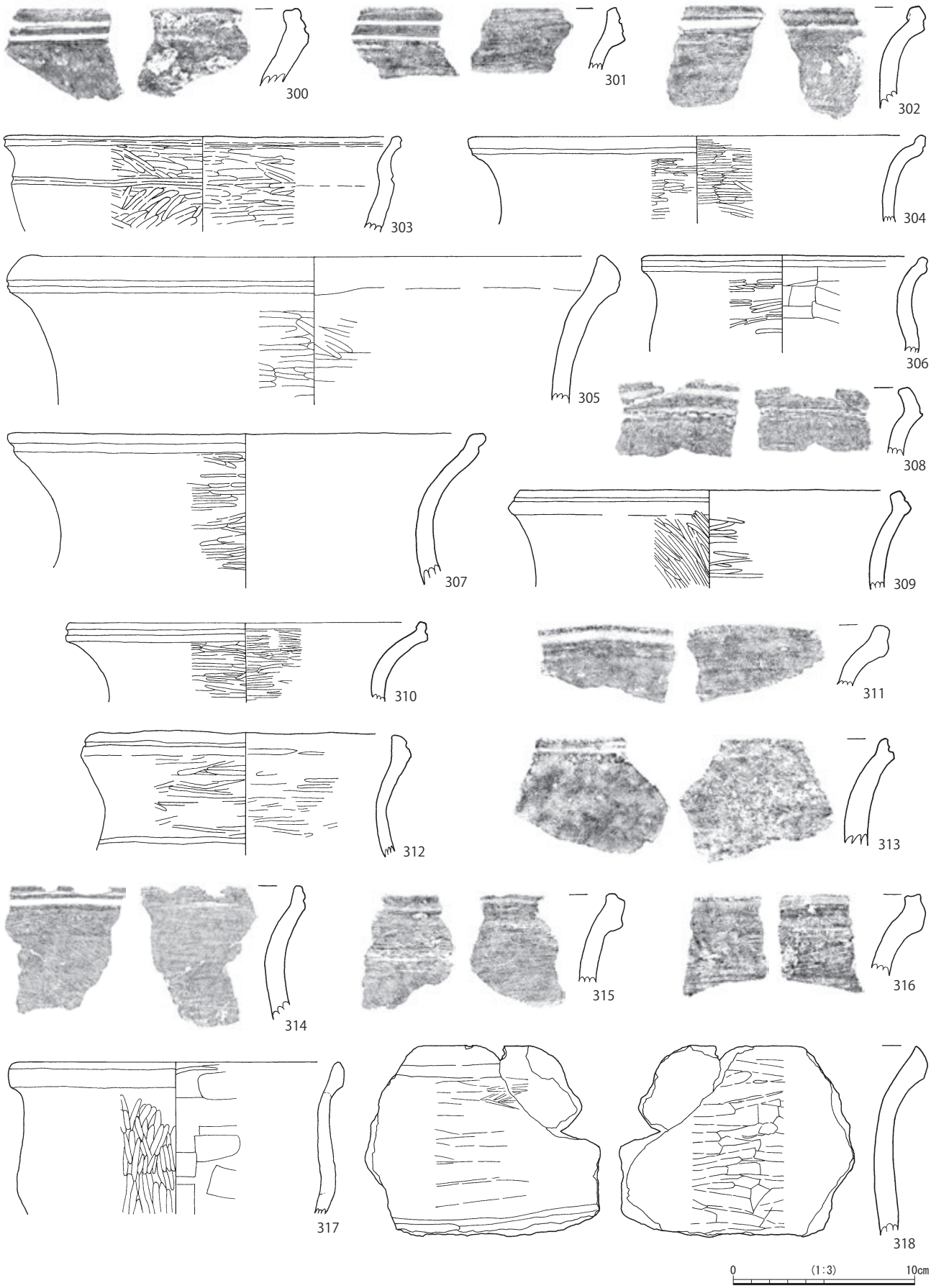
第64図　縄文時代後期の土器（３）



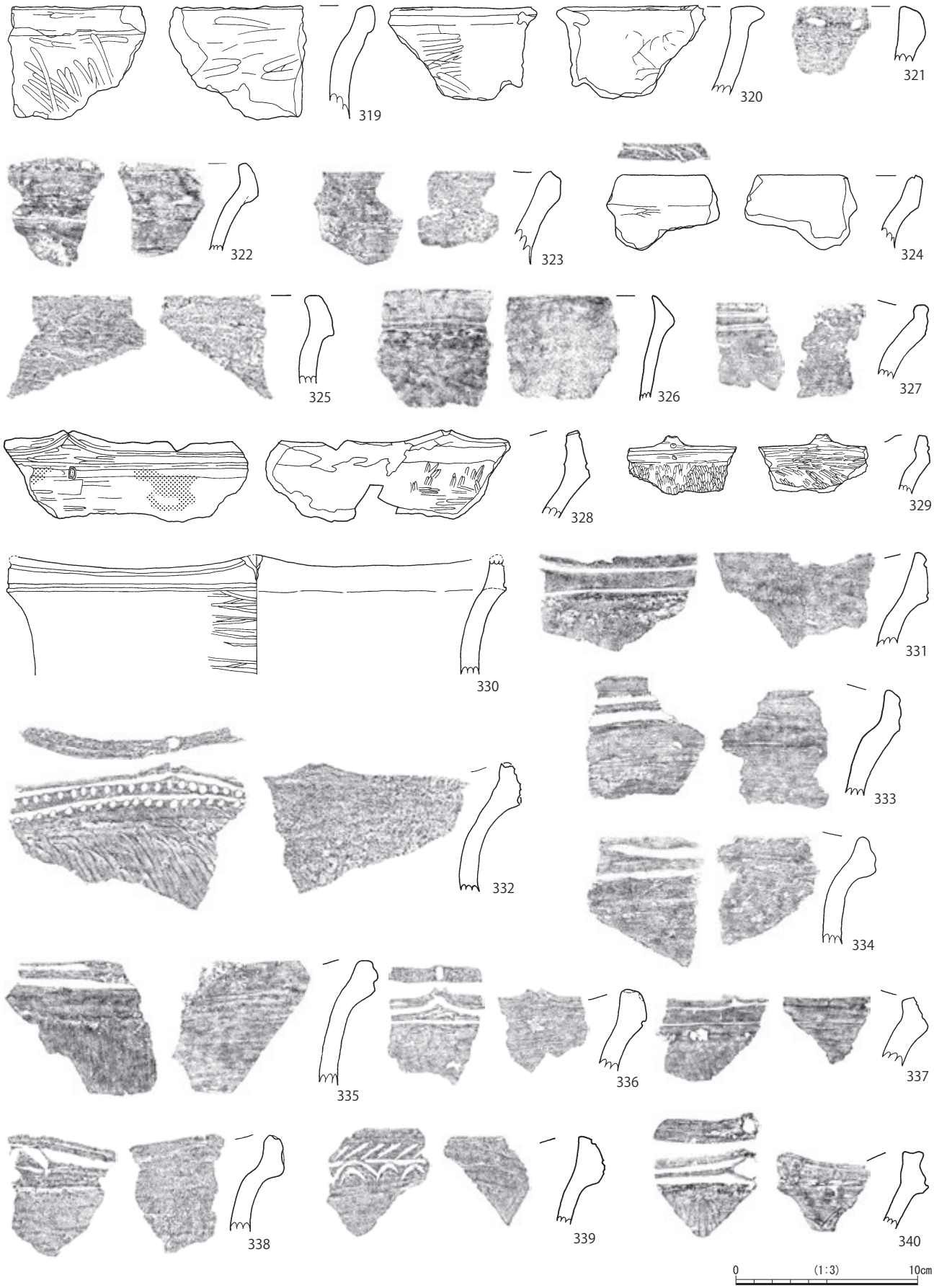
第65図　縄文時代後期の土器（4）



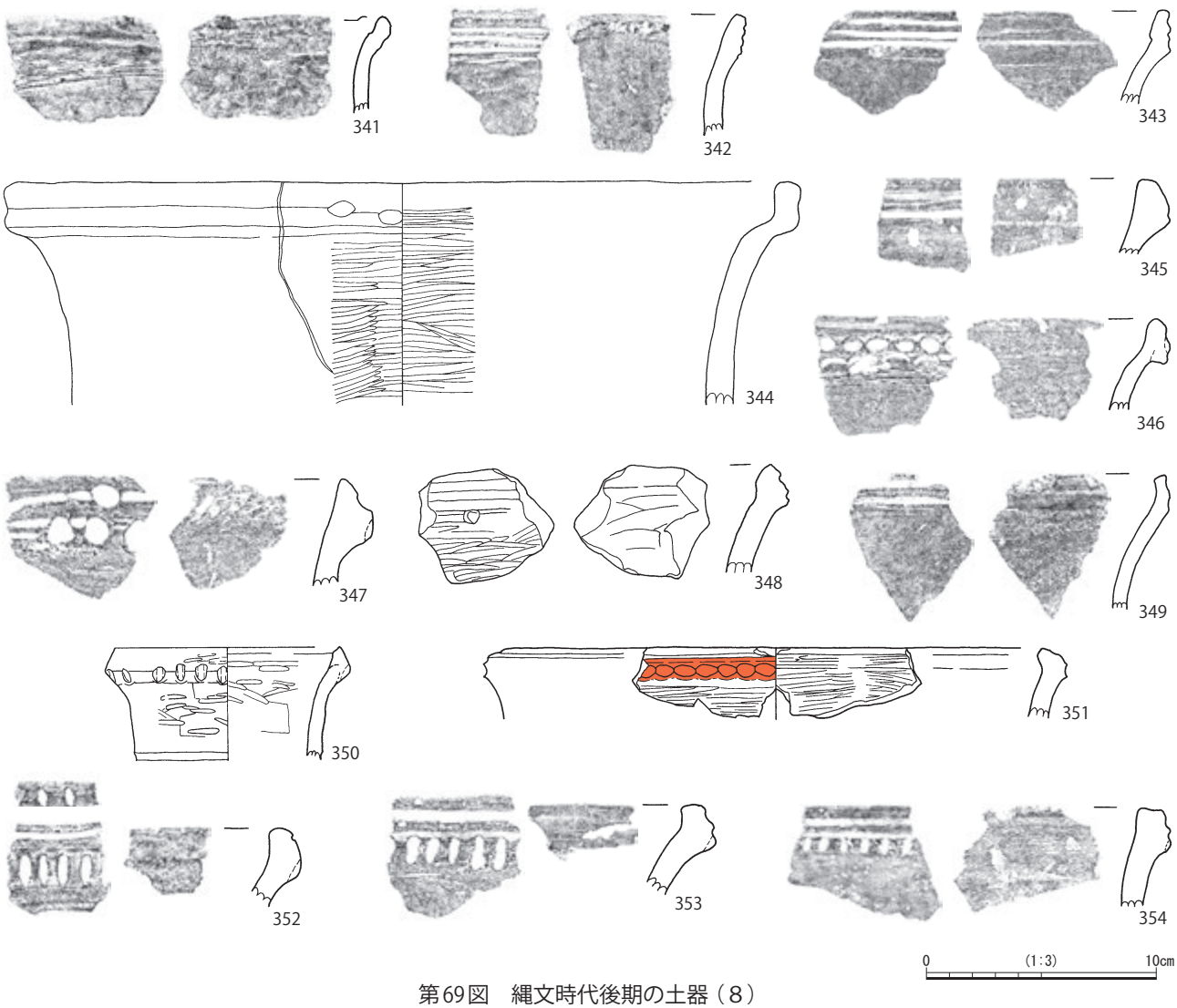
第66図　縄文時代後期の土器（5）



第67図　縄文時代後期の土器（6）



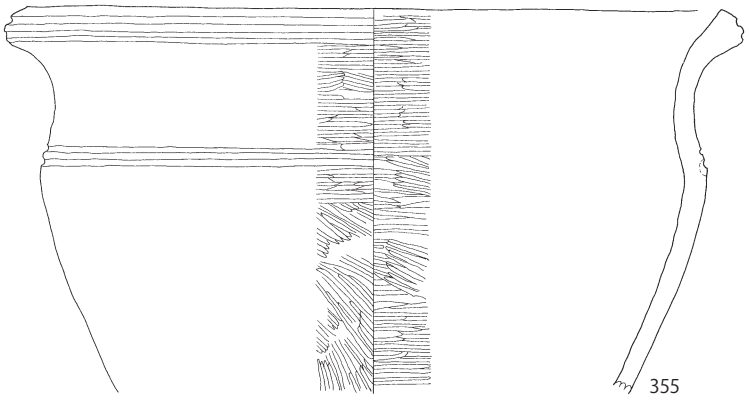
第68図　縄文時代後期の土器（7）

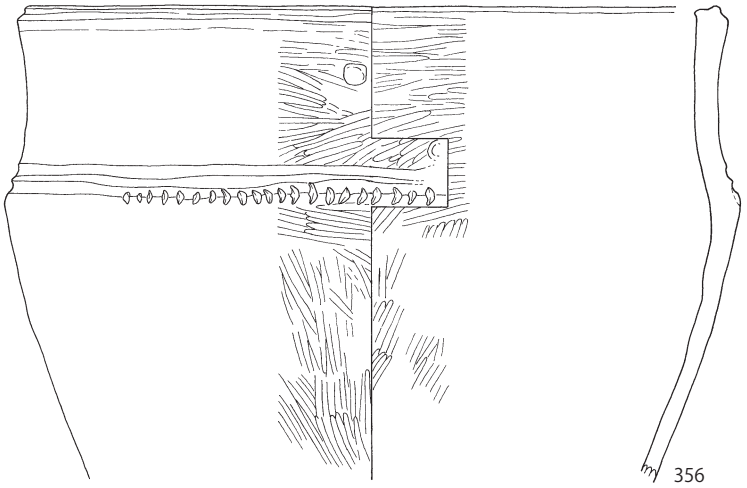


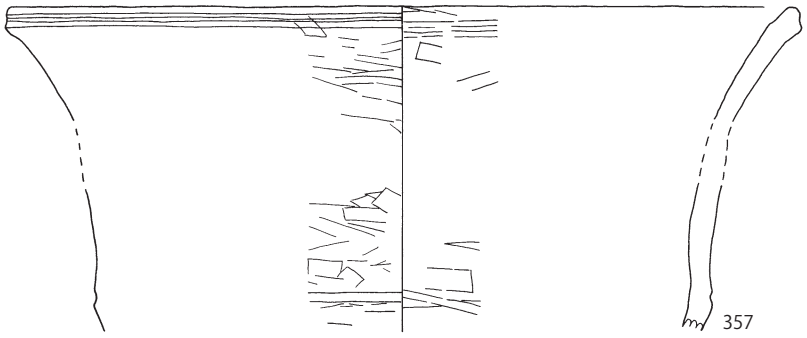
第69図　縄文時代後期の土器（８）

355 ～ 373はⅡＣ類に分類される。その内，356 ～ 358・370がａ類に，355がｂ類に細分される。355・358 ～ 366・368は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。358・359・365・368の沈線は浅く幅広である。355は胴部にも沈線を２条巡らせている。359・364は円形の凹点を連続的に施している。361は口縁部文様帯に山形の凹点を連続的に施している。362は口縁部文様帯と胴部最大径の所に刻目を連続的に施している。363は口縁部文様帯に三日月文を２点施している。356・357・367 ～ 370・372は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。367のみ沈線が細く，その他のものは浅く幅広である。367は波状口縁で，頂部上面に楕円形の凹点を施している。356は胴部に浅く幅広の沈線を２条巡らせた後，刻目を連続的に施し，頸部に円形の凹点を施している。370は胴部に沈線が１条巡らせている。371・373は口縁部文様帯に沈線が認められないものである。ⅡＣ類の器面調整の特徴としては，外面が胴部下位を縦や斜め方向のミガキ，胴部中位から頸部にかけて主に横方向のミガキで仕上げる傾向がある。内面は胴部下位が縦や斜め方向のミガキ，胴部中位から頸部にかけては横方向のミガキか，ナデで仕上げる傾向がある。357・371のように内外面を横方向のナデで仕上げるものある。

374 ～ 387はⅡＤ類に分類される。その内，375がａ類，374・382がｂ類に細分される。374・376 ～ 381は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。377 ～ 378の沈線は浅く幅広である。374は胴部にも沈線を１条巡らせている。376・378は波状口縁である。380・381は口縁部文様帯に円形の凹点を連続的に施している。375・382・383は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。375・383の沈線は浅く幅広である。382は胴部にも沈線を１条巡らせている。384 ～ 387は口縁部文様帯に沈線が認められないものである。ⅡＤ類の器面調整の特徴としては，外面に縦方向及び横方向のミガキを施し，内面に横方向のミガキやナデを施す傾向がある。374・382は外面に煤が付着している。

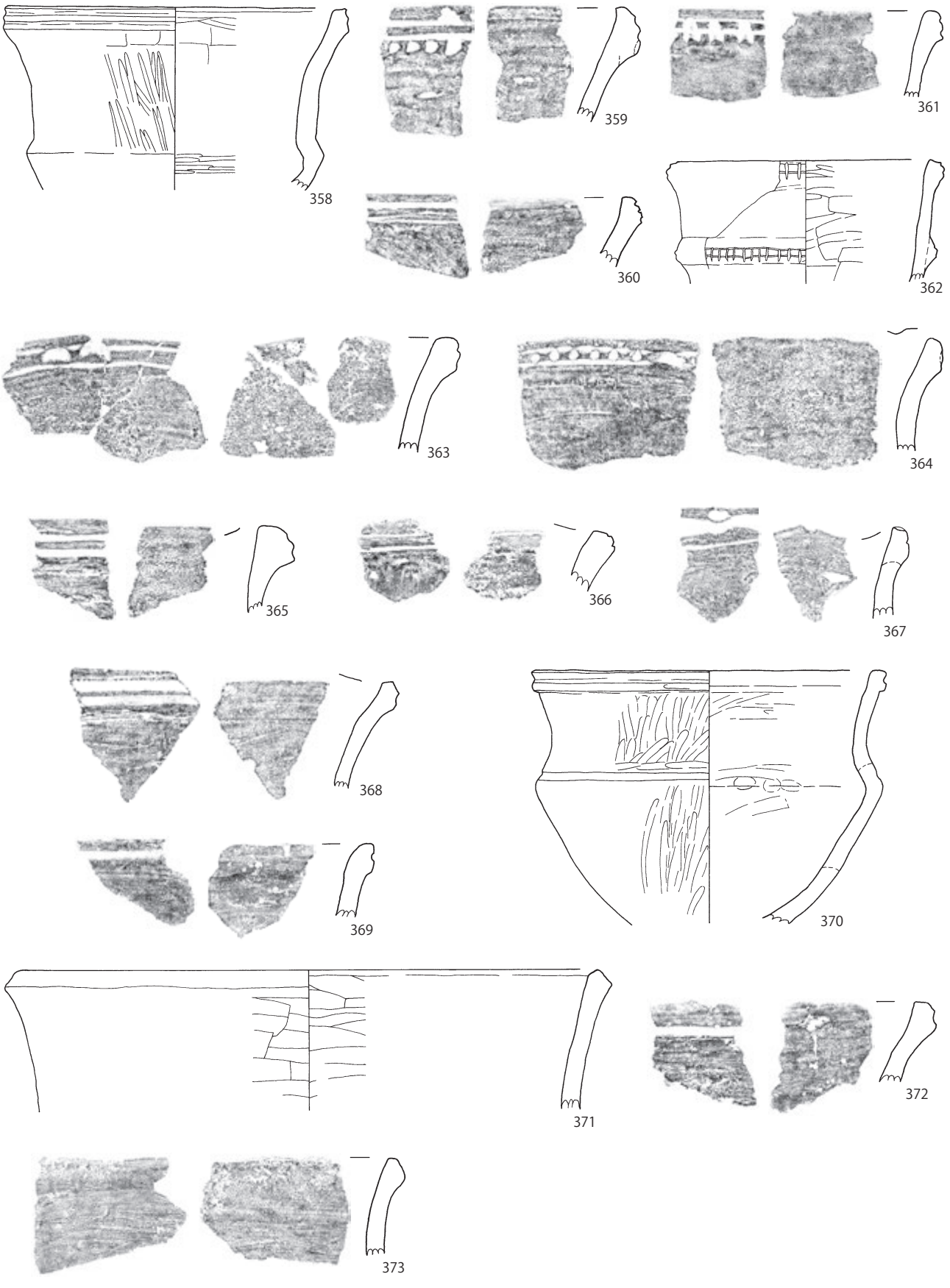




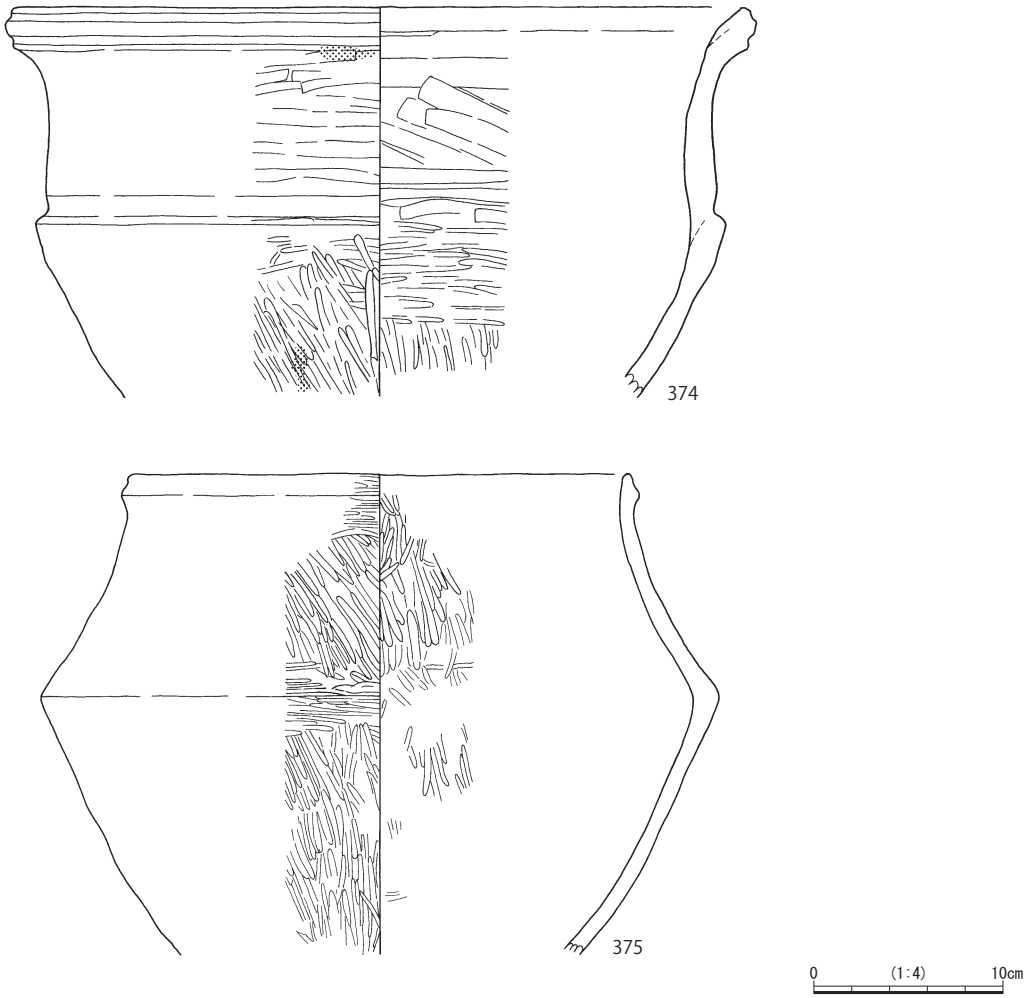


0 (1:4) 10cm

第70図　縄文時代後期の土器（9）



第71図　縄文時代後期の土器（10）



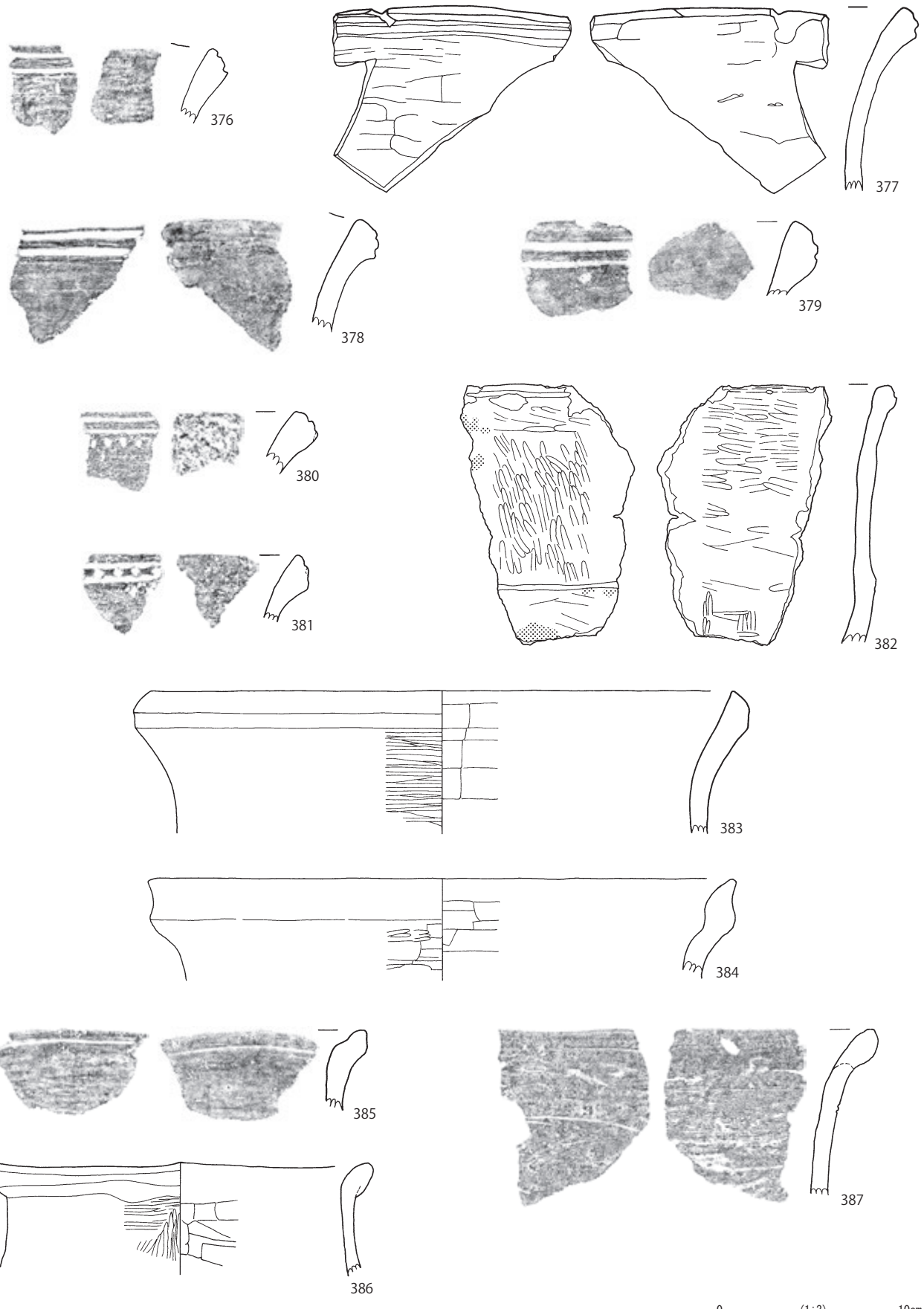
第72図　縄文時代後期の土器（11）

388 ～ 393はⅡE類に分類される。その内，388がｂ類に細分れる。388は口縁部文様帯に沈線を1条巡らせている。389 ～ 391は口縁部文様帯に沈線が認められないものである。392・393は口縁部文様帯に沈線を3条巡らせている。393は口縁部文様帯に円形の凹点を連続的に施している。ⅡE類の器面調整の特徴としては，外面に横方向のミガキを施し，内面に横方向のミガキやナデを施す傾向がある。391は外面に煤が付着している。

394 ～ 407はⅡF類に分類される。その内，404がａ類に細分される。394は口縁部に低い段を持っている。395は口唇部に2条の沈線を巡らせている。406は口縁部に沈線を1状巡らせた後，刻目を施している。ⅡF類の器面調整の特徴としては，内外面共に横方向のミガキやナデを施す傾向がある。398のように外面に縦方向のミガキを施すものや401のように内面に横方向のケズリを施すものもある。

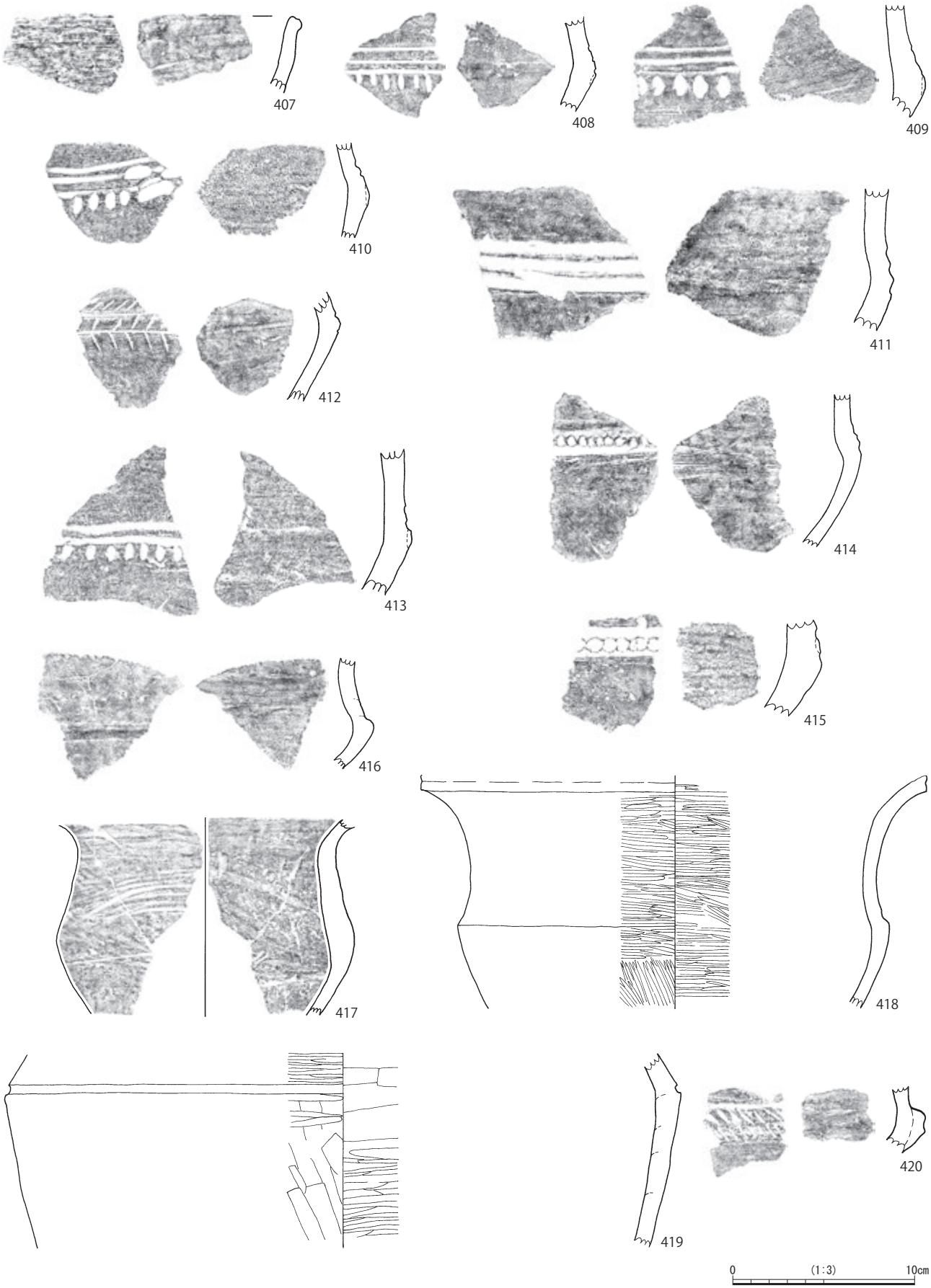
408 ～ 420は深鉢形土器の胴部である。408 ～ 416・418 ～ 420はⅡａ類，417がⅡｂ類に分類される。408 ～ 411は胴部最大径の所に沈線を3条巡らせている。409・410は楕円形の凹点を連続的に施している。410は半月形の凹点も施されている。412は胴部最大径の所に沈線を2条巡らせ，綾杉状に刻目を施している。413 ～ 415は胴部最大径の所に沈線を2条巡らせた後，楕円形や円形の凹点を連続的に施している。418は口縁部の一部を欠損している。口縁部文様帯に沈線を1条巡らせている。419は胴部最大径の所に沈線を1条巡らせている。420は胴部最大径の所に刻目突帯を巡らせている。Ⅱａ・Ⅱｂ類の器面調整は，内外面にミガキやナデを施す傾向がある。417は外面に貝殻条痕を施している。

421 ～ 470はⅡG類に分類される。その内，442・448・451・454・459・460・468はａ類に，421はｂ類に細分される。421 ～ 435は口縁部文様帯に浅く幅広沈線を2条巡らせている。424は沈線を巡らせた後，楕円形の凹点を施している。429は沈線を巡らせた後，刻目を連続的に施している。436は口縁部文様帯に浅く幅広沈線を1条巡らせた後，円形の凹点を連続的に施している。437 ～ 447は口縁部文様帯に沈線を2条巡らせている。437は沈縁を巡らせた後，円形の凹点を連続的に施している。448 ～ 462は口縁部文様帯に沈線を1条巡らせている。455・462は玉縁を呈している。463・465は

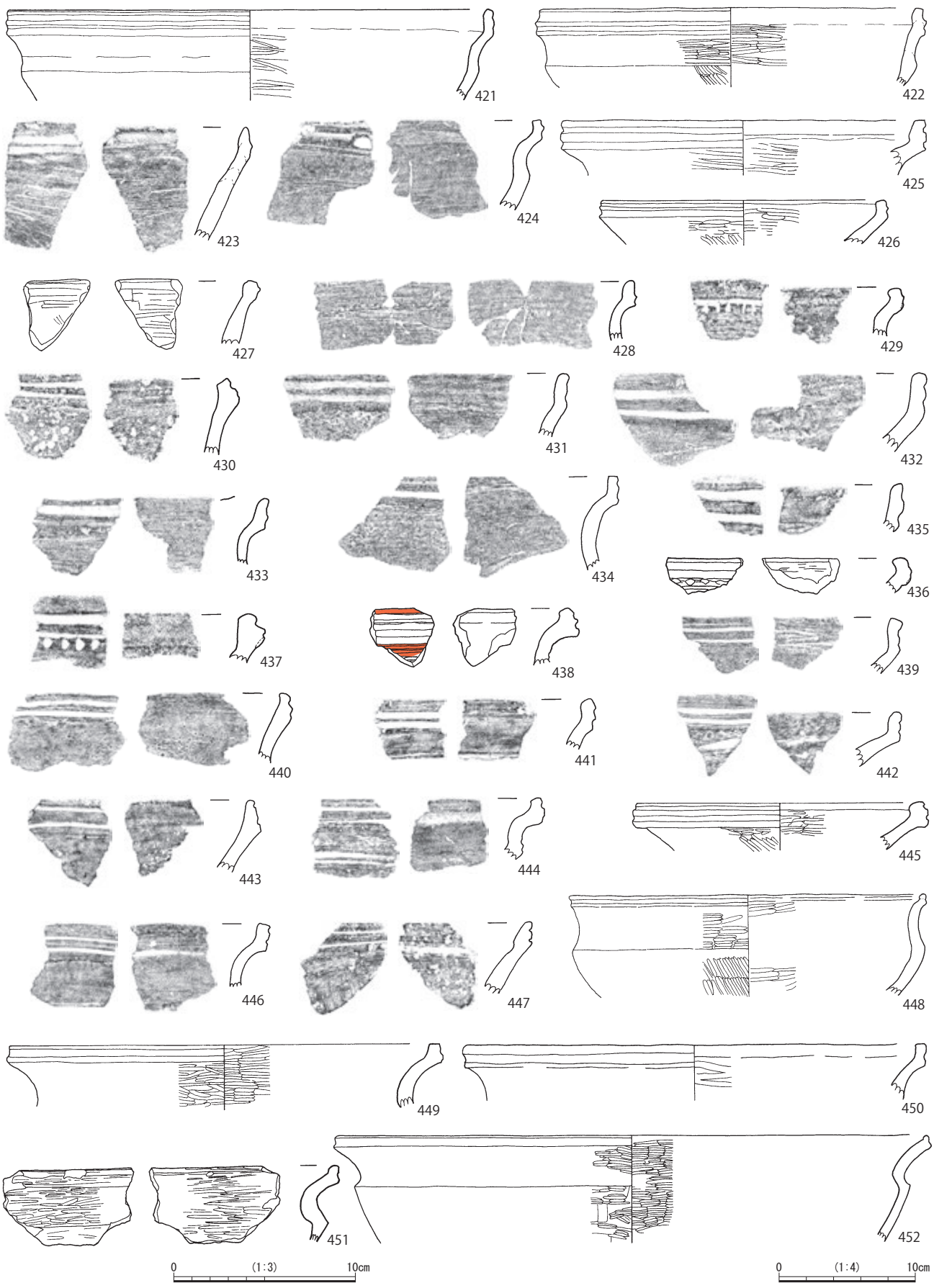


第73図　縄文時代後期の土器（12）

第74図　縄文時代後期の土器（13）

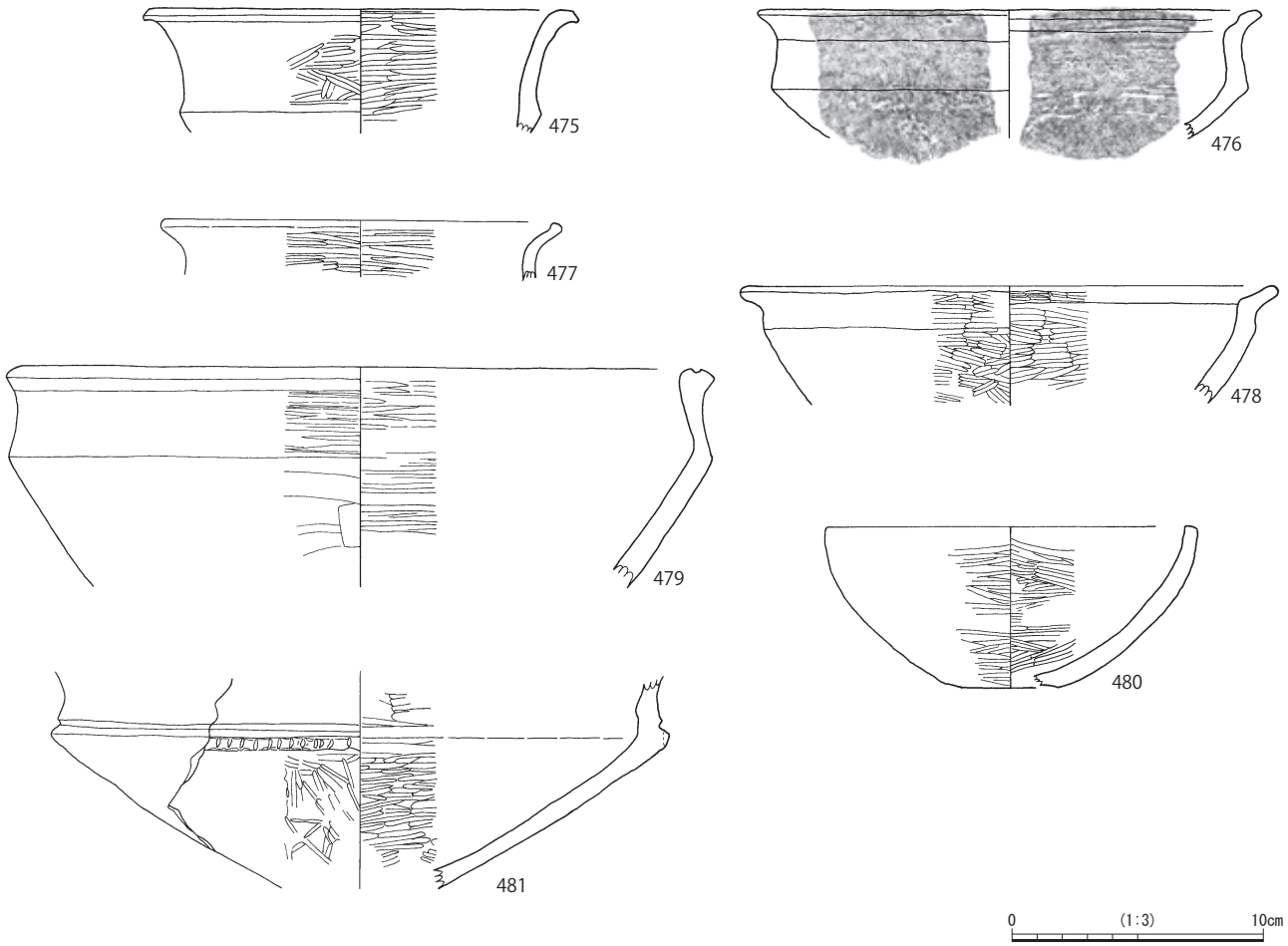


第75図　縄文時代後期の土器（14）



第76図　縄文時代後期の土器（15）

第77図　縄文時代後期の土器（16）



第78図　縄文時代後期の土器（17）

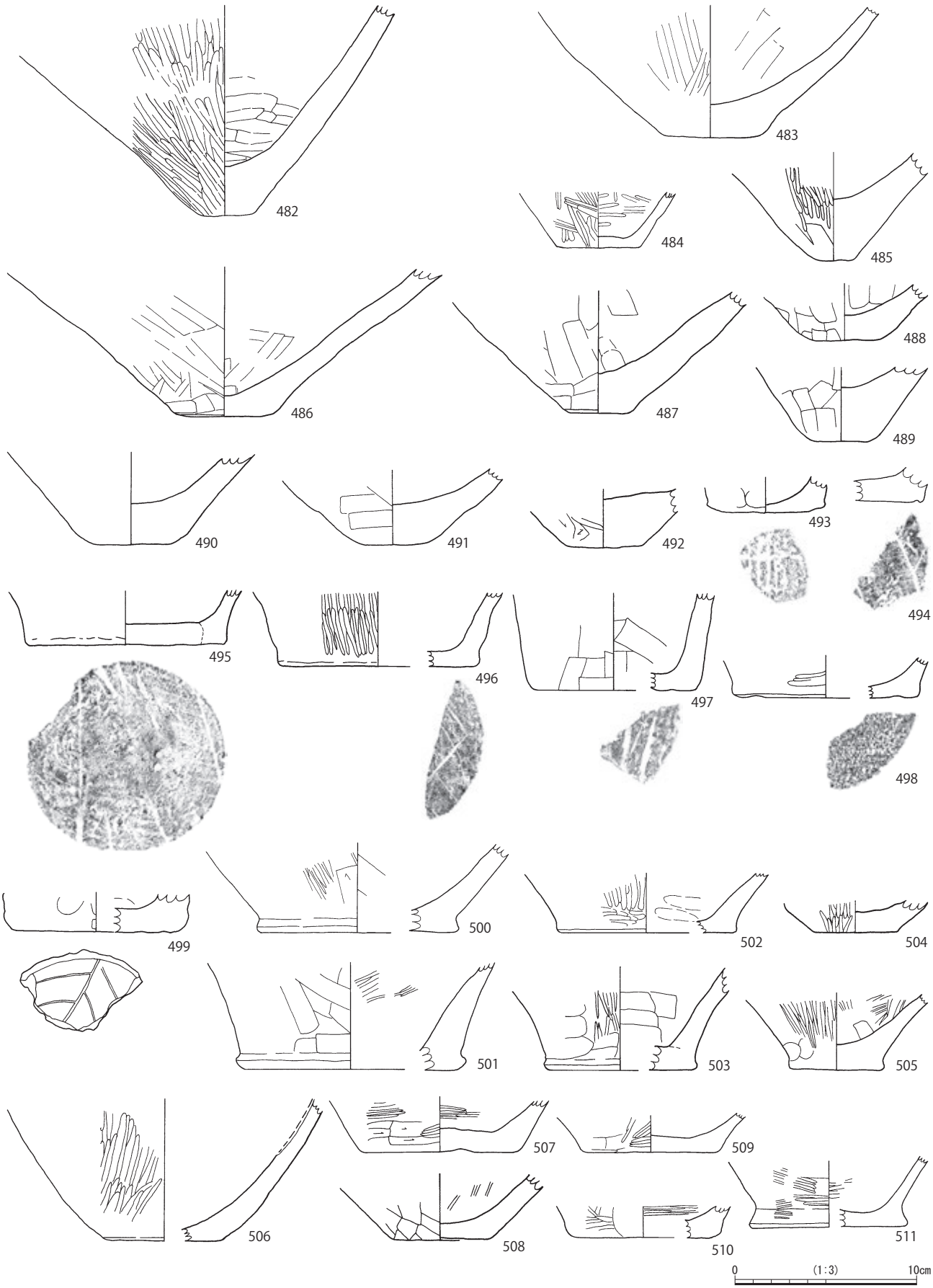
口縁部文様帯に沈線が認められないものである。464は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。波状口縁をなし，頂部下には円形の凹点を施している。463・464は口縁部文様帯に円形の凹点を施している。466 ～ 470は口縁部文様帯に沈線を３条巡らせている。468は胴部最大径の所で沈線を１条巡らせている。468・469は波状口縁である。468は４対の頂部をもつものである。ⅡＧ類の器面調整の特徴としては，外面が縦方向や横方向のミガキ，内面が横方向のミガキやナデを施す傾向がある。438は外面に赤色顔料を塗布している。468は外面に煤が付着している。

471 ～ 474はⅡＨ類に分類される。472は口縁部に沈線を１条巡らせている。474は口縁部に補修孔が認められる。ⅡＨ類の器面調整の特徴としては，外面が縦方向や横方向のミガキ，内面が横方向のミガキ及びナデを施す傾向がある。471は外面に煤が付着している。

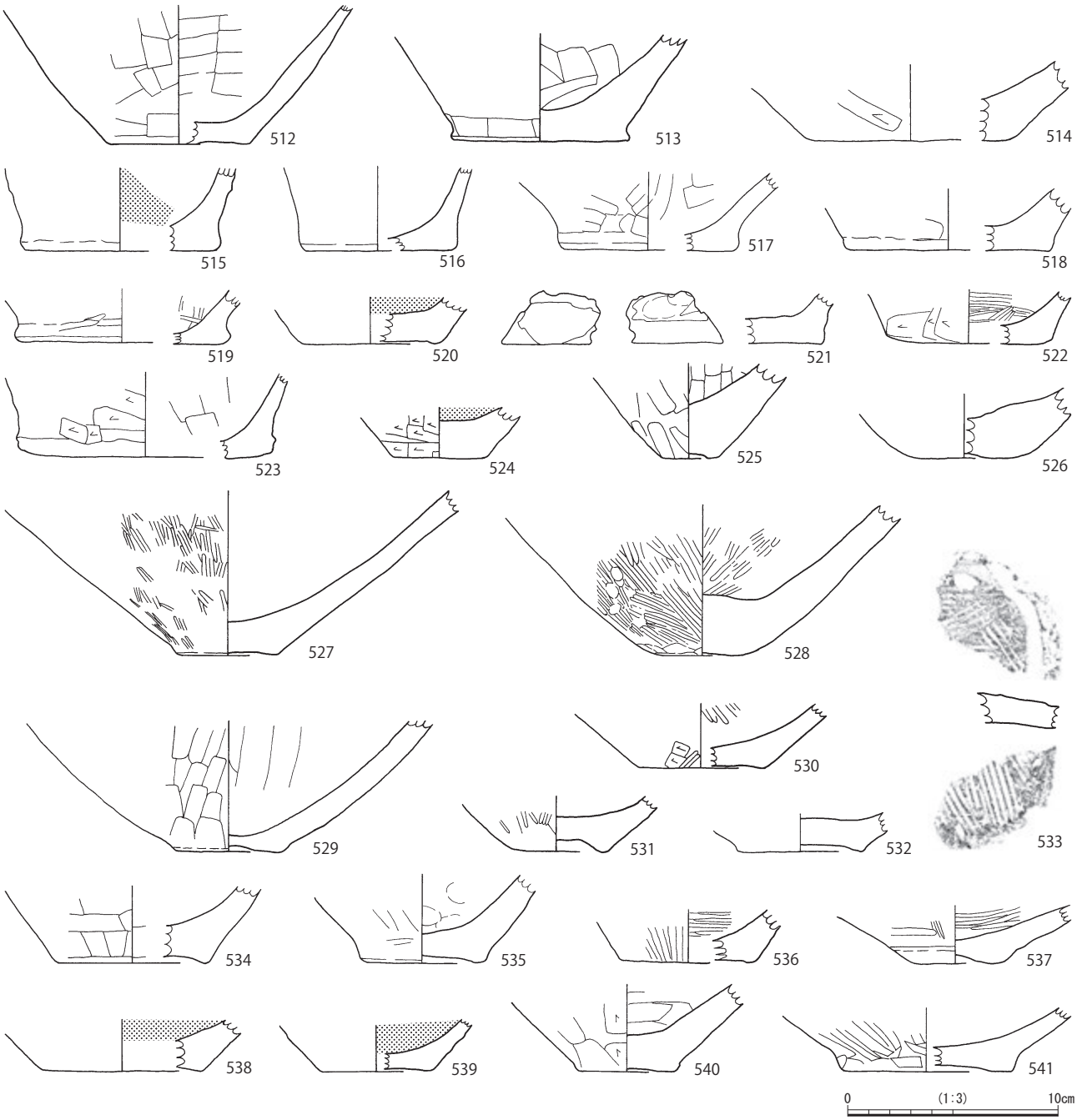
475 ～ 481はⅡＩ類に分類される。その内，475・476・479・481はａ類に細分される。475 ～ 479・481は外反する口縁部で，480は直立する口縁部である。479は口唇部に沈線を巡らせている。481は胴部最大径の所で沈線を１条巡らせる他，刻目を連続的に施している。ⅡＩ類の器面調整の特徴としては，外面が横方向や縦方向のミガキ，内面が横方向のミガキを施している。

縄文時代後期の土器底部（第79図・第80図）

482 ～ 492・524 ～ 529はⅡ類の底部である。493 ～ 523・530 ～ 541は未分類の底部である。482 ～ 492・524は底径1.6 ～ 5.1㎝の底部に厚みのある平底である。493 ～ 497・499は底部に木葉痕が認められる。498は鯨の脊椎と思われる文様が認められる。500 ～ 523は底径4.5 ～ 11.5㎝の比較的底部が薄い平底である。525 ～ 541は底径2.6 ～ 8.0㎝の上げ底状の底部である。器面調整は内外面共に縦方向や横方向のミガキ，ナデ，ヘラ削り等様々である。533は内外面に貝殻条痕文が認められる。515・520・524・538・539は内面に煤が付着している。



第79図　縄文時代後期の土器（18）



第80図　縄文時代後期の土器（19）

イ　土製品（第81図・第82図）

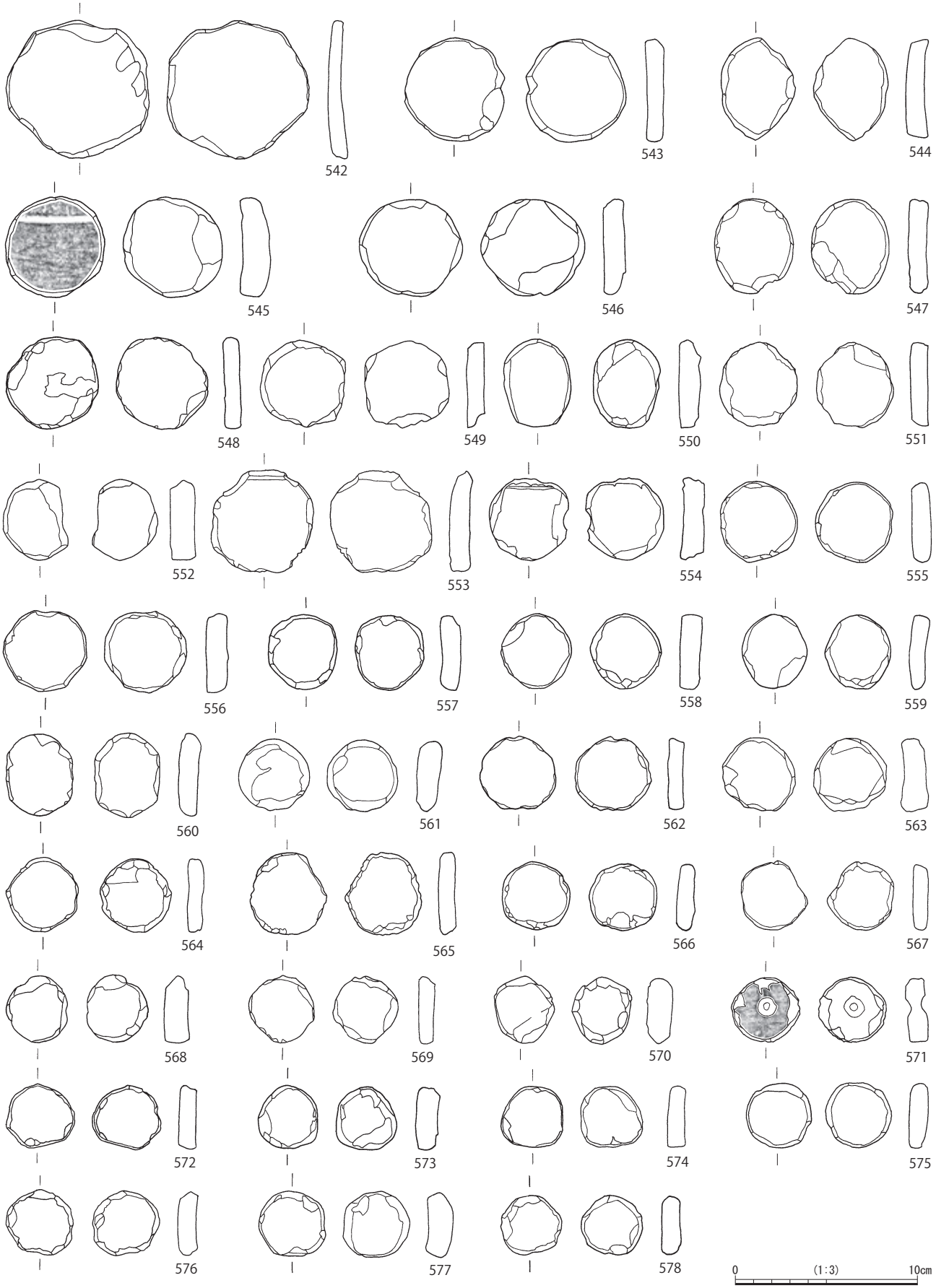
円盤形土製加工品（第81図・第82図）

542 ～ 591は円盤形土製加工品である。器面調整は内外面にミガキを施すものが殆どであり，中岳Ⅱ式土器を利用したものと考えられる。542 ～ 548は直径５㎝以上の大型で，549 ～ 580が３㎝以上５㎝未満の中型，581 ～ 591が３㎝未満の小型である。545は沈線が認められる。571は両面から穿孔を行っているが貫通はしていない。

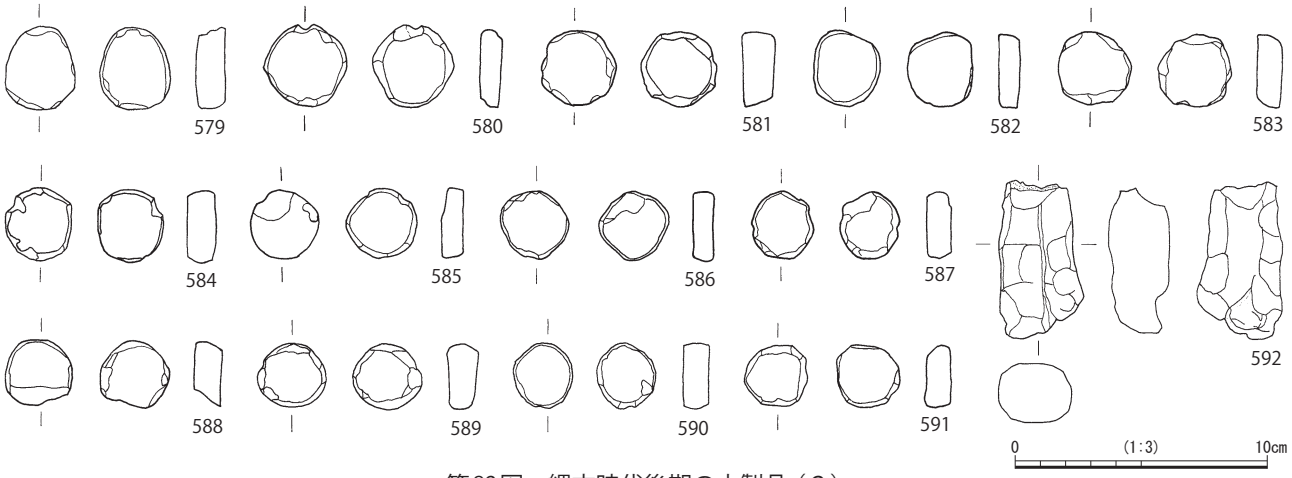
土製品（第82図）

592は土製品とするか焼成粘土塊とするのか迷うものであるが，２枚の粘土塊を重ねた後，全体に手で押さえた痕跡が認められるため，ここでは土製品として取り扱うこととする。現存部分で長さ6.2㎝，幅2.4 ～ 3.3㎝，厚さ2.9㎝である。上位は欠損しているが，つまんだ痕跡が認められ，0.7㎝と薄くなっている。また，下位は１㎝の切れ込みが認められる。表面とした面では重ねたときの名残りか中央に沈線が認められる。

この土製品を土偶と想定して，上位の欠損した部分が頭で，下位の切れ込みが足。また中央の沈線が妊娠線と考えられないだろうか。



第81図　縄文時代後期の土製品（1）



第82図　縄文時代後期の土製品（２）

ウ　石器（第83図～第107図）

石鏃（第83図・第84図）

平面形態からⅠ～Ⅳ類に分類し，Ⅰ・Ⅱ類は基部形態からａ～ｃ類に細分した。分類の基準については，小結に表で示しているので，そちらを参照されたい。

593～595はⅠａ類，596～614がⅠｂ類，615～637がⅠｃ類，638がⅡａ類，639～653がⅡｂ類，654・655がⅢ類，656がⅣ類に分類される。657・658は先端部のみで基部形状は不明である。659～667は石鏃未製品である。３㎝前後の小型剥片を素材としている。石材は，601・602・612・614・618・622・624～628・632～636・638～641・643・648・649・653～661・663・667が黒曜石，594・595・597・603・604・607・608・610・613・617・620・621・623・631・637・646・652が安山岩，615・619・629・644・650・651・662・664がチャート，598・599・606・616・647がホルンフェルス，596・609・630が頁岩，593・600・611が水晶，605・666が玉髄，645・665が珪質頁岩，642が流紋岩である。

ドリル（第85図）

668はドリルである。表裏両面に調整剥離を施し，先端部を作出している。石材は，安山岩である。

楔形石器（第85図）

669は楔形石器である。表裏両面に節理面を残している。上下両端部に対となる潰れ状の剥離が認められる。石材は，頁岩である。

スクレイパー（第85図）

670～676はスクレイパーである。670・671は刃幅5.2㎝～5.7㎝の中型で，672～676は刃幅9.1㎝～14.6㎝の大型である。670・671は比較的長い並列剥離で刃部を作出しているのに対し，672～676は簡易な剥離で刃部を作出している。674・676は刃部に使用に伴うものと思われる摩滅が認められる。石材は，672～676がホルンフェルス，670が安山岩，671が水晶である。

異形石器（第85図）

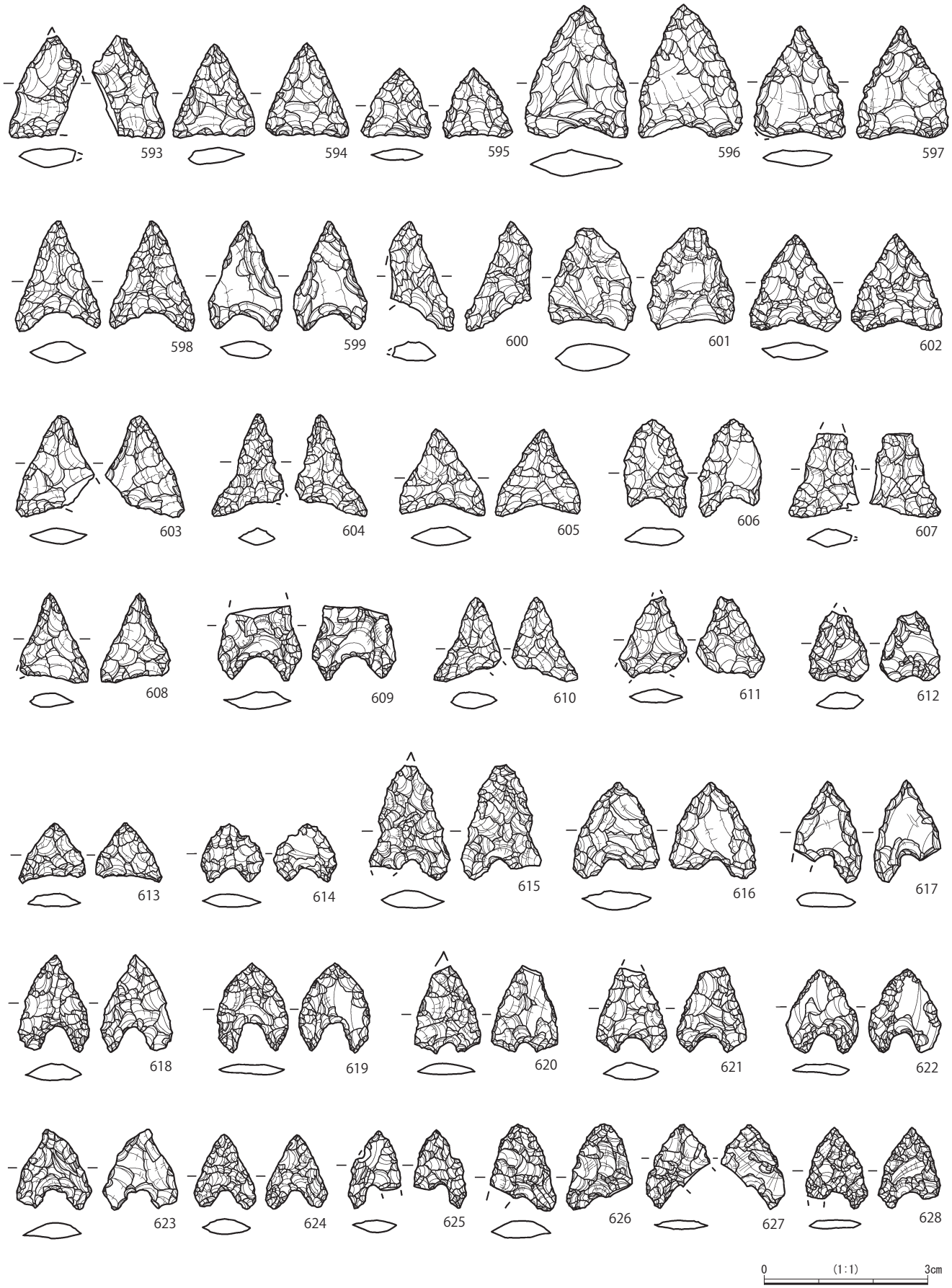
677～679は異形石器である。677・678は表裏両面に平坦剥離を施している。677はブーメラン形，678は靴形を呈する。679は縦長剥片を素材とし，上下両端部をつまみ形に仕上げている。石材は，全て黒曜石である。

打製石斧（第86図～第95図）

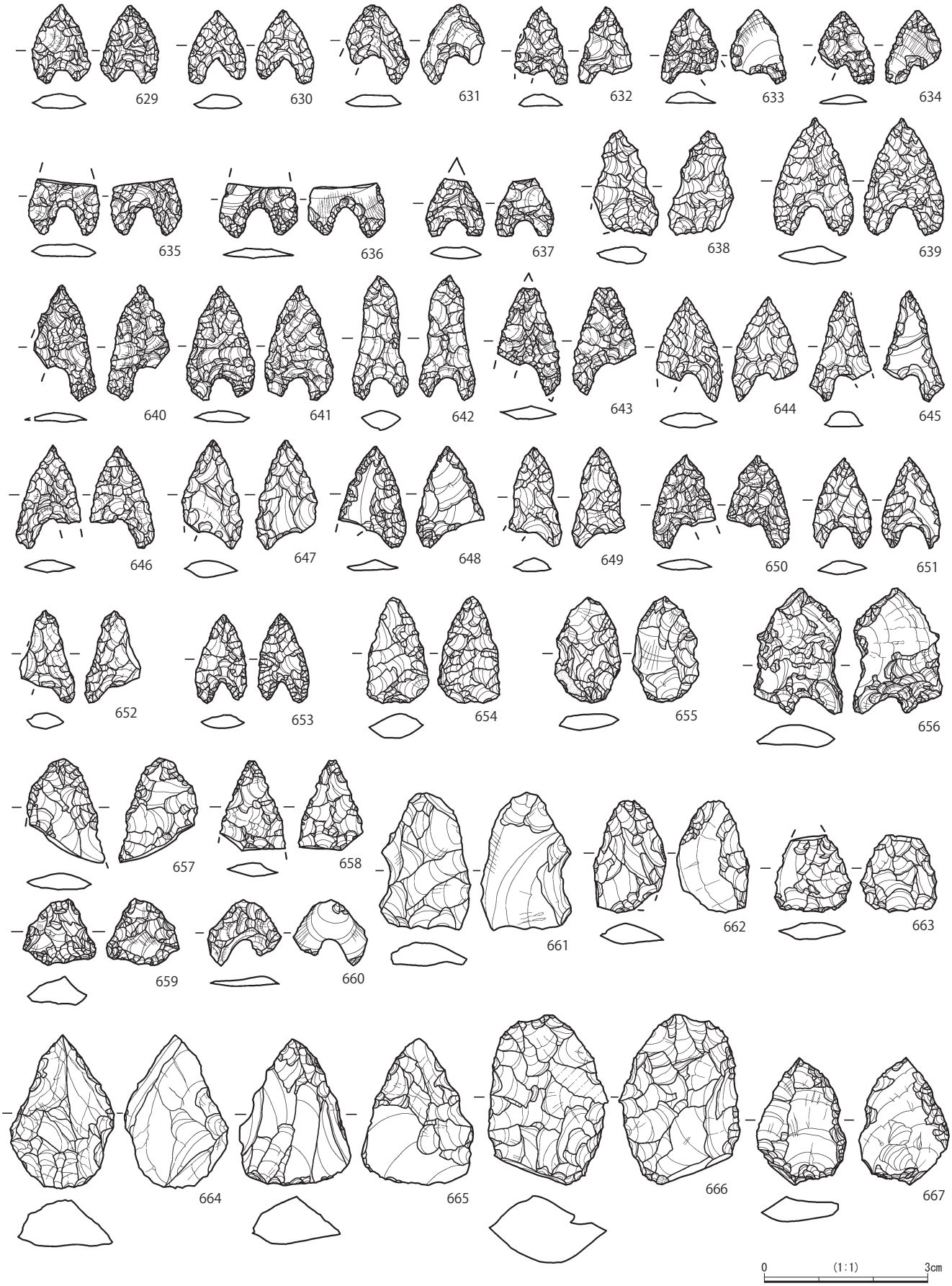
本遺跡出土石器の中で最も多く見られるもので，平面形態からⅠ～Ⅳ類に分類し，Ⅲについては刃部形態からＡ～Ｄ類に分類した。Ⅰ～Ⅳ類は打ち欠きのみで仕上げているものをａ類，打ち欠き後，部分的に簡易な研磨を施すものをｂ類に細分した。分類の基準については，小結に表で示しているので，そちらを参照されたい。

ｂ類は所謂「局部磨製石斧」や「部分磨製石斧」と呼ばれているものである。ａ・ｂ類の製作工程は，部分研磨を施すことを除き共通しており，大型の剥片ないし，礫片・扁平な礫を素材とし，縁辺から大まかな成形剥離後，細部を調整剥離している。したがって，ａ類としたものの中にｂ類の研磨前のものが含まれている可能性がある。本遺跡では，両者を明確に分けることができないため類型化した。

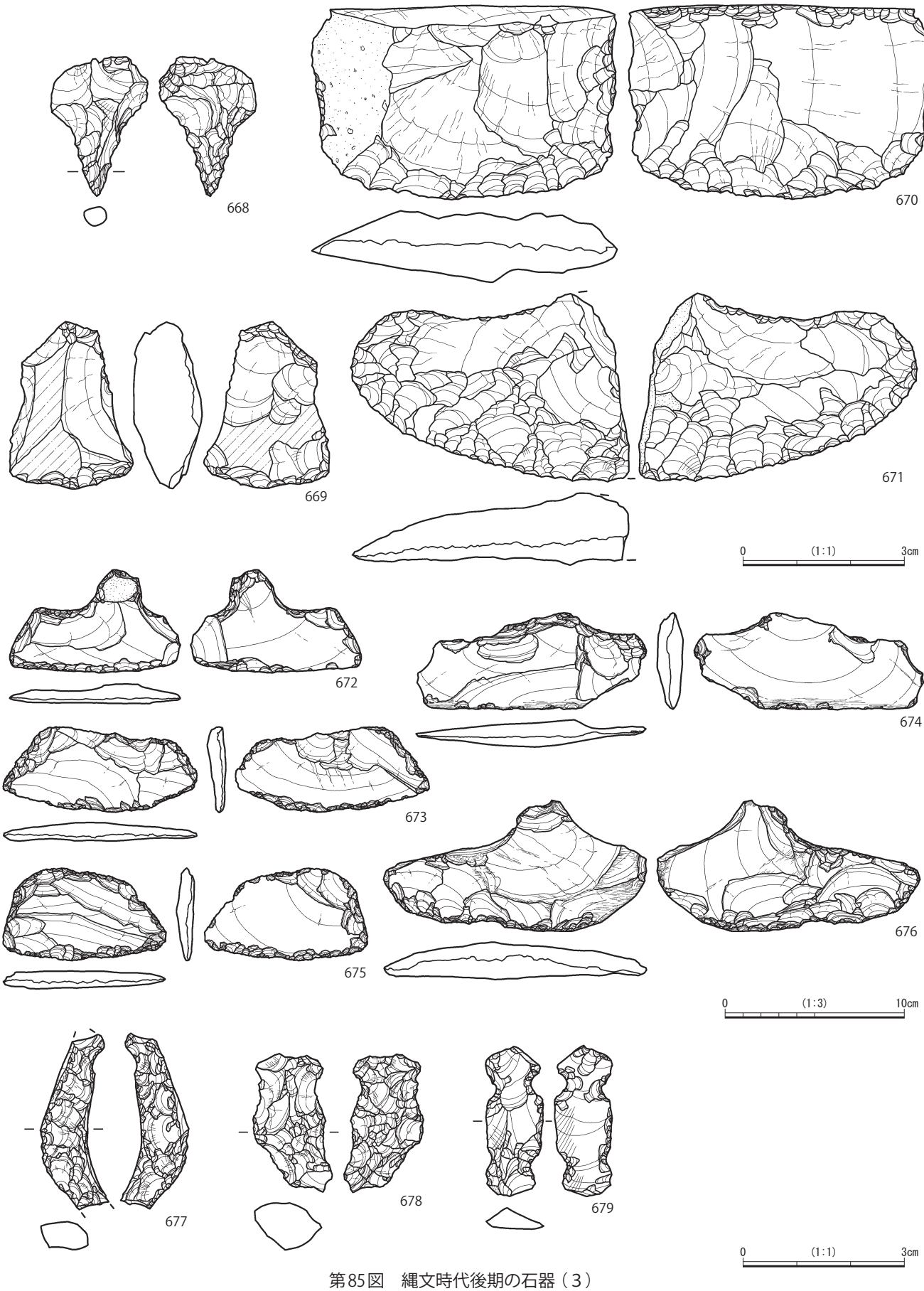
680～704はⅠａ類，705～731がⅠｂ類，732～738がⅡａ類，739～744がⅡｂ類，745～751がⅢＡａ類，752～756がⅢＡｂ類，757～761がⅢＢａ類，762がⅢＢｂ類，763～768がⅢＣａ類，769がⅢＣｂ類，784～788がⅣａ類，783・789がⅣｂ類に分類される。770～776は有肩で打製のものではあるが，刃部形態が不明であることからⅢａ類とした。777～782は有肩で部分研磨を施すものではあるが，刃部形態が不明であることからⅢｂ類とした。790は打製石斧が欠損し，基部のみが



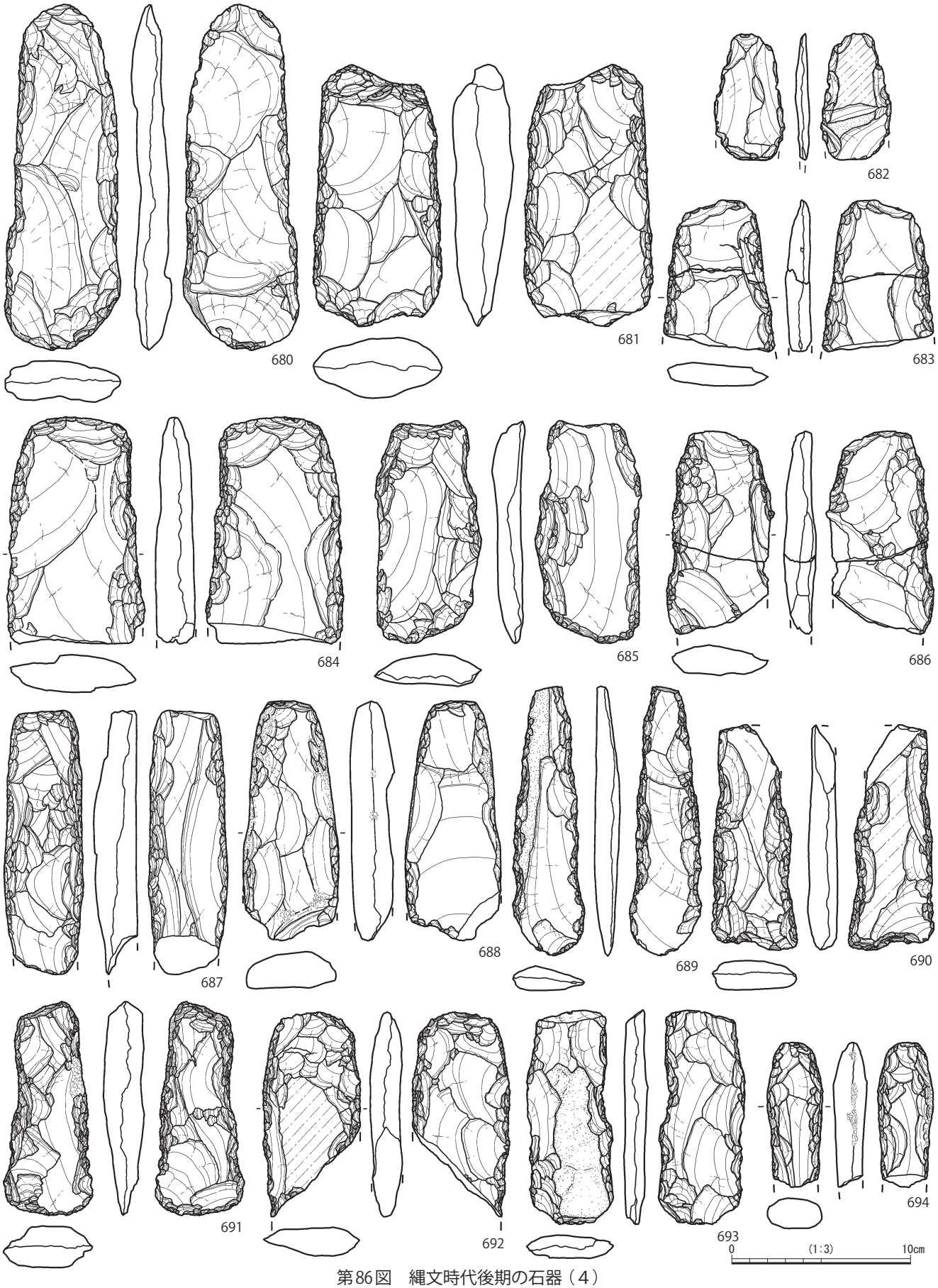
第83図　縄文時代後期の石器（1）



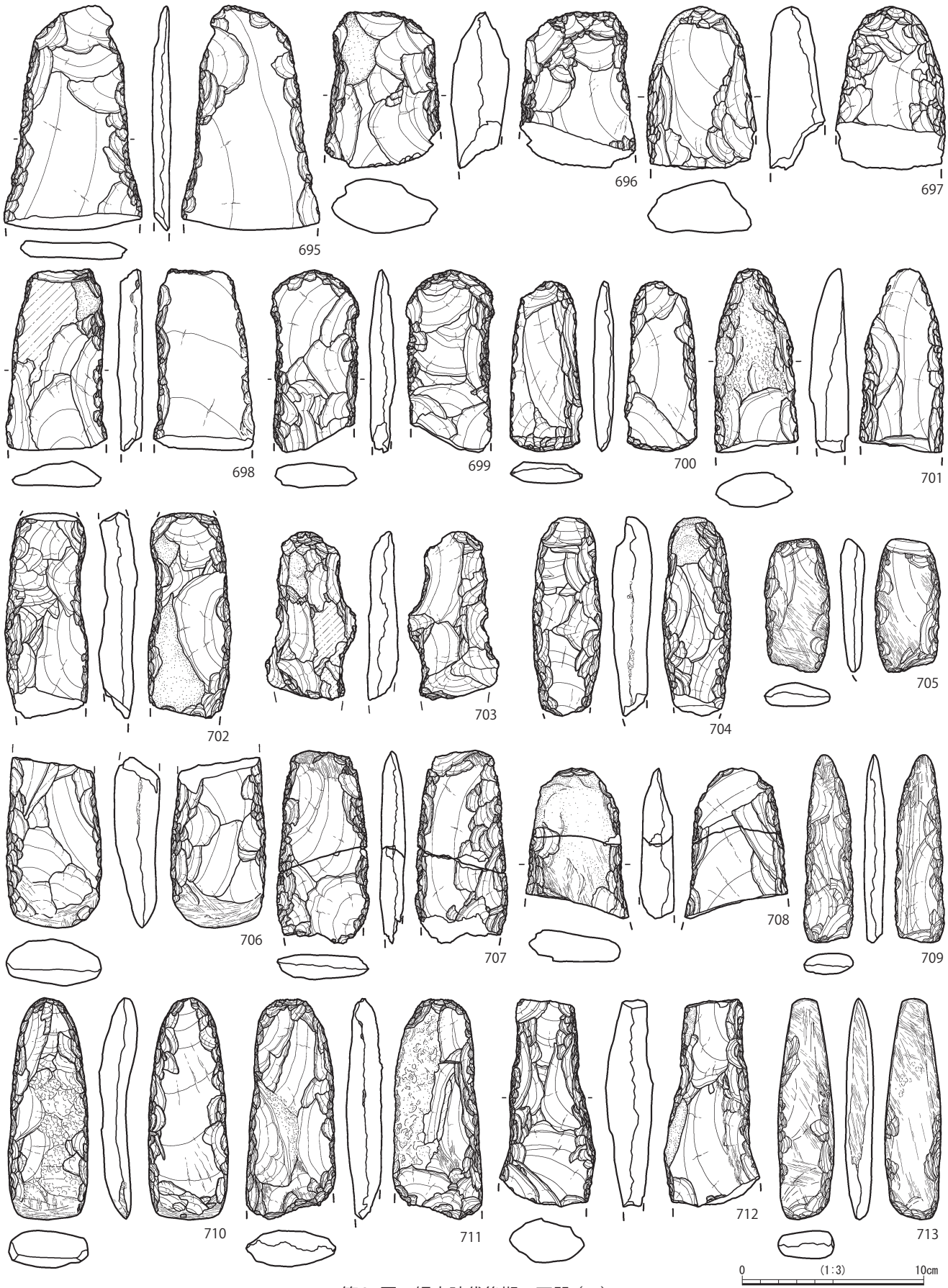
第84図　縄文時代後期の石器（２）



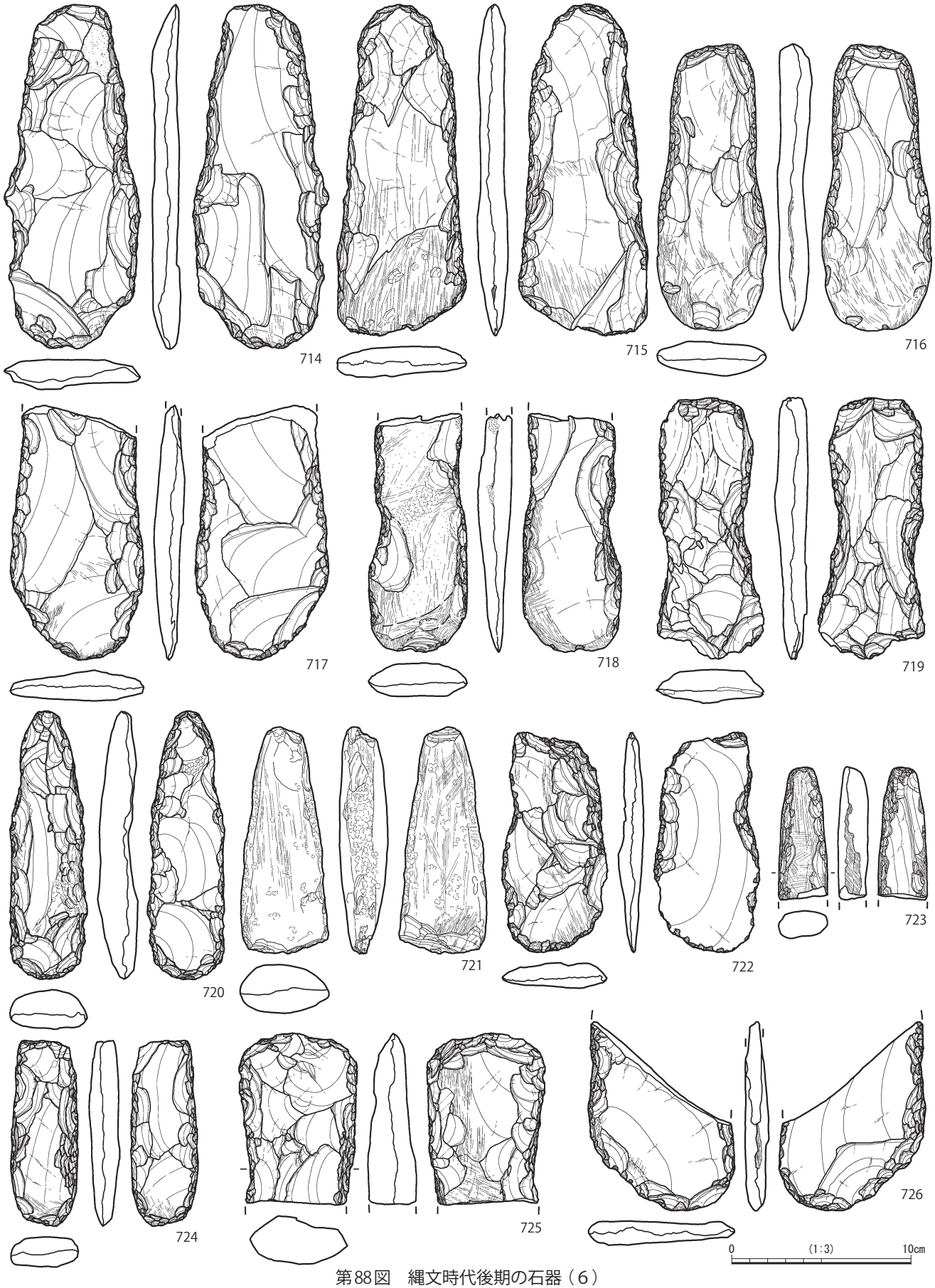
第85図　縄文時代後期の石器（3）



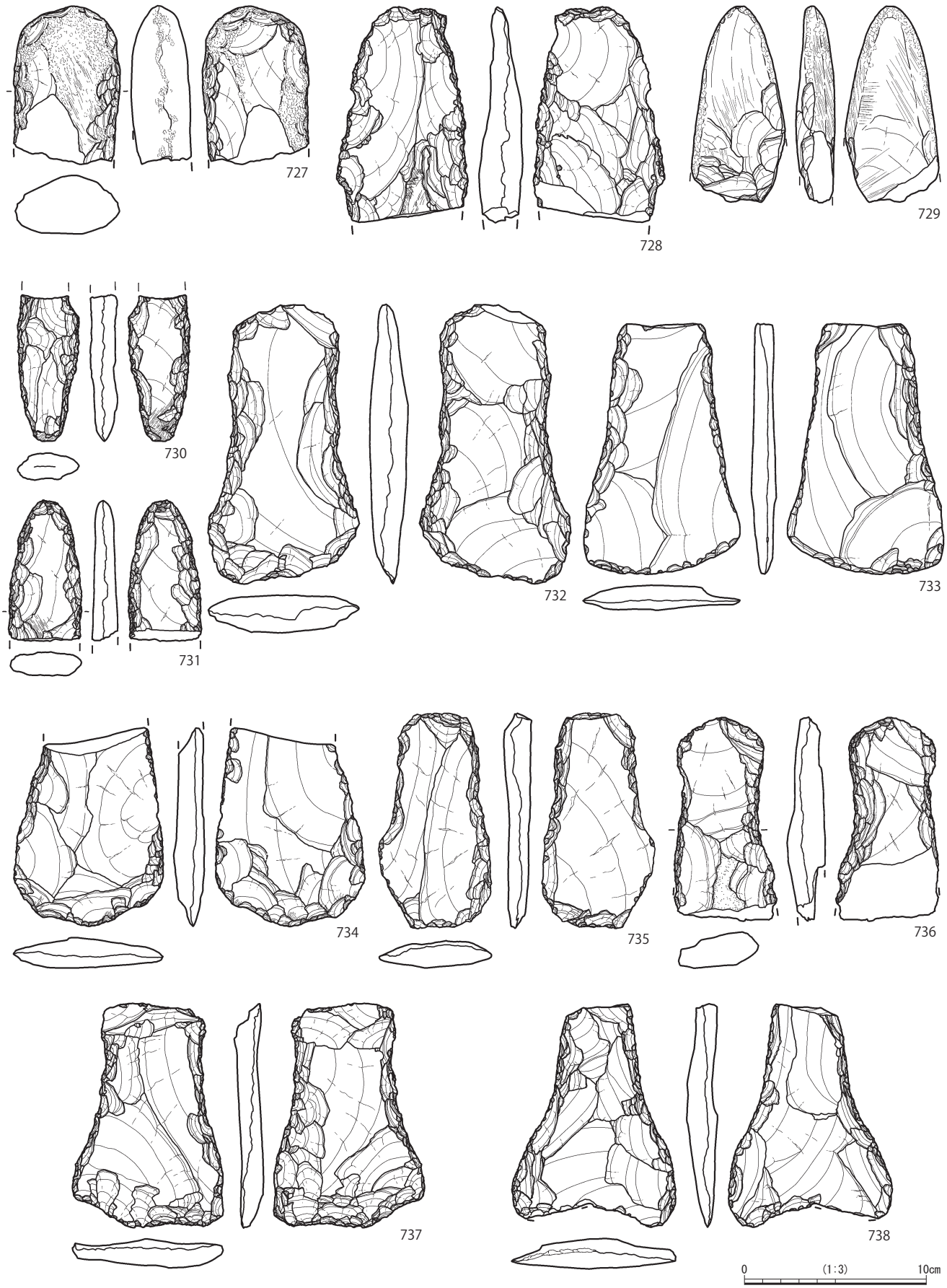
第86図　縄文時代後期の石器（4）



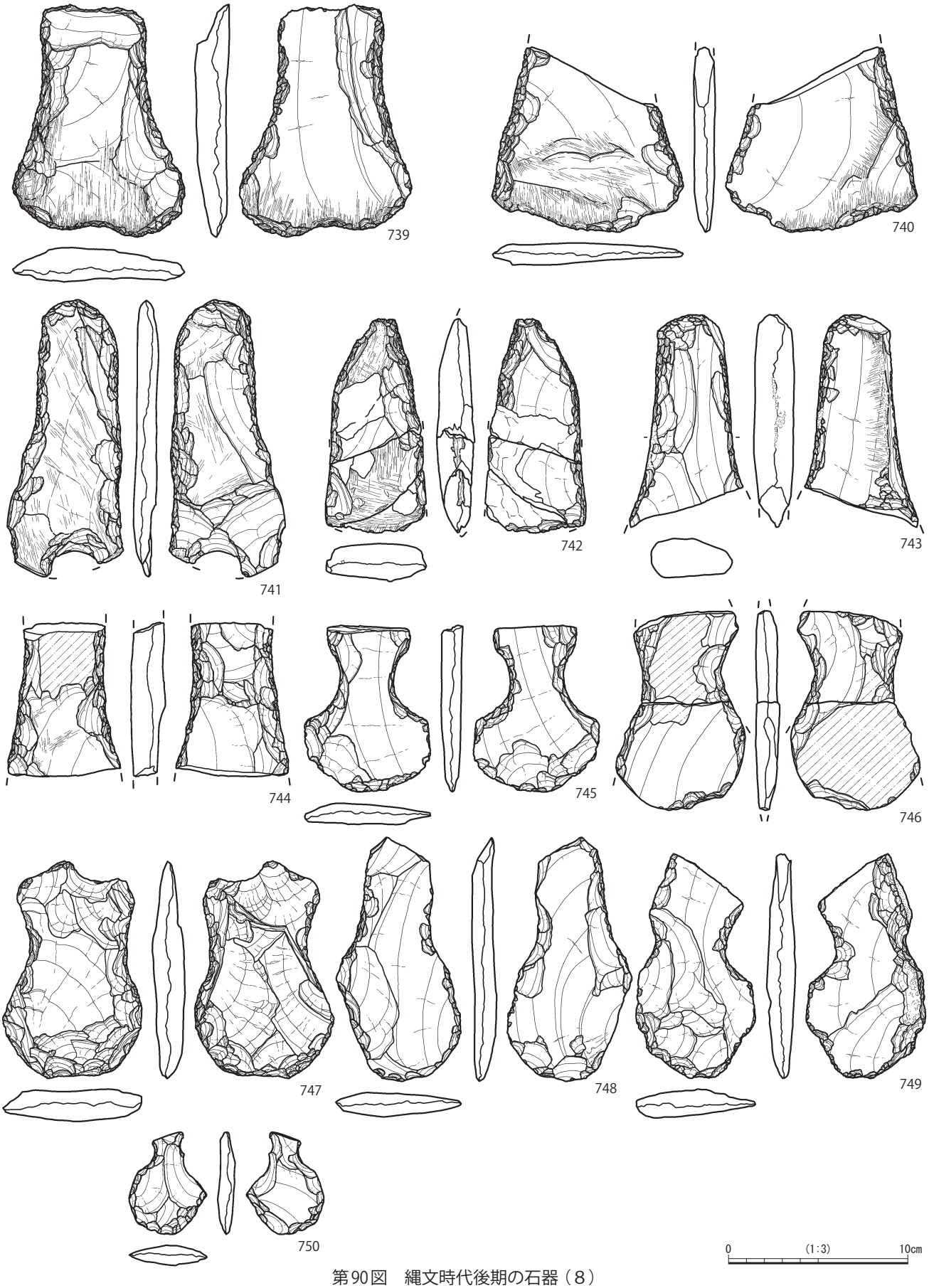
第87図　縄文時代後期の石器（5）



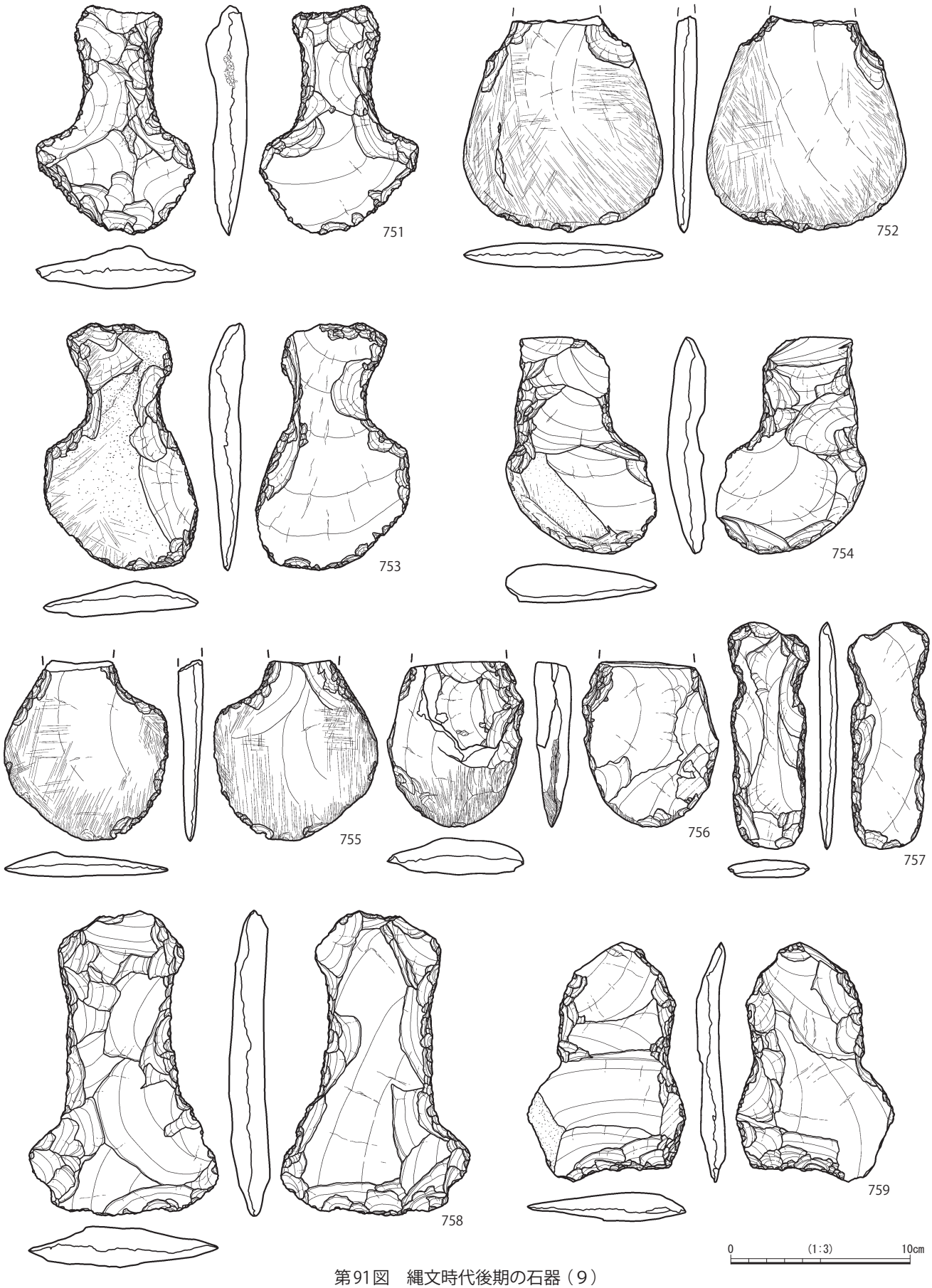
第88図　縄文時代後期の石器（6）



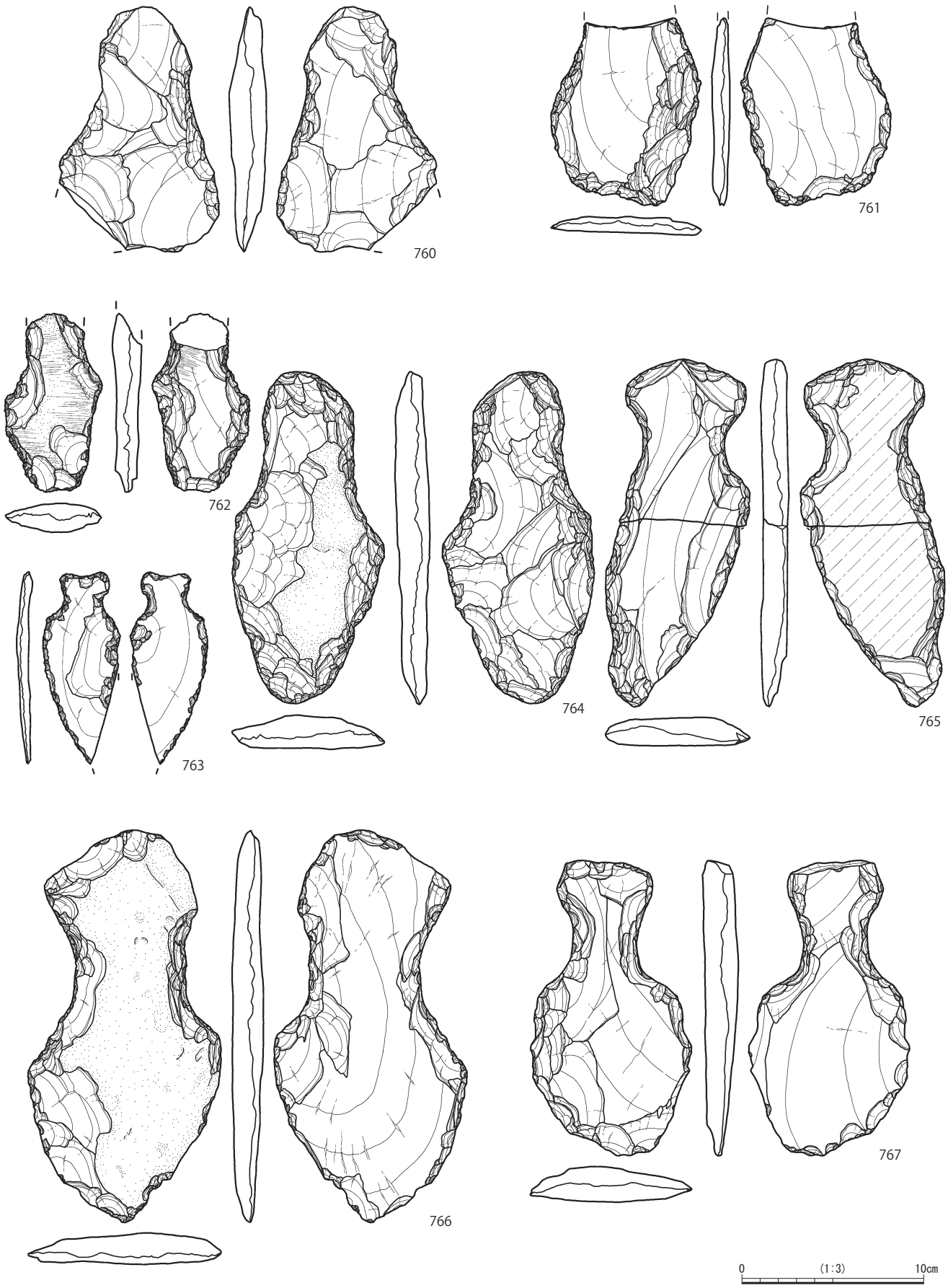
第89図　縄文時代後期の石器（7）



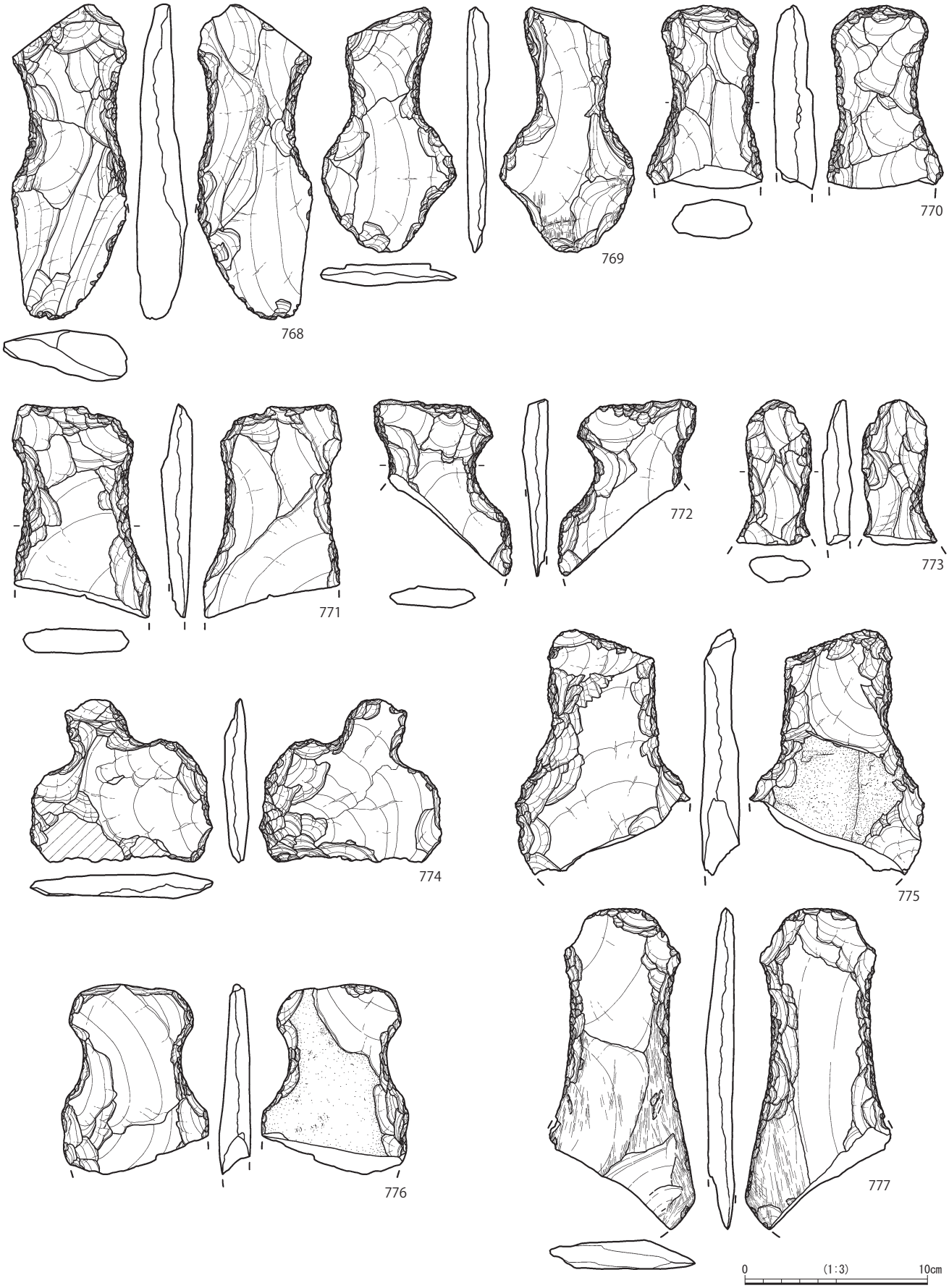
第90図　縄文時代後期の石器（８）



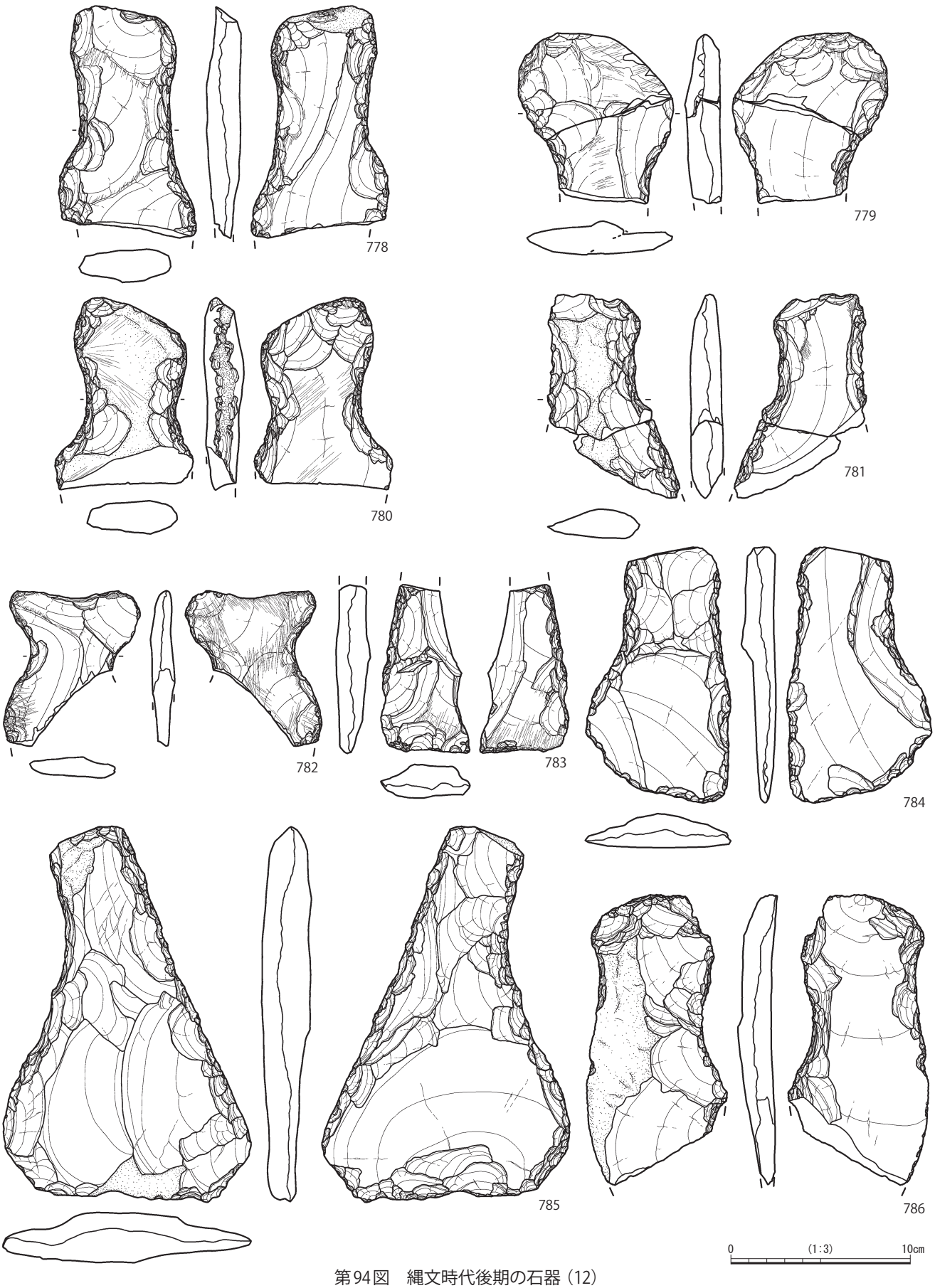
第91図　縄文時代後期の石器（9）



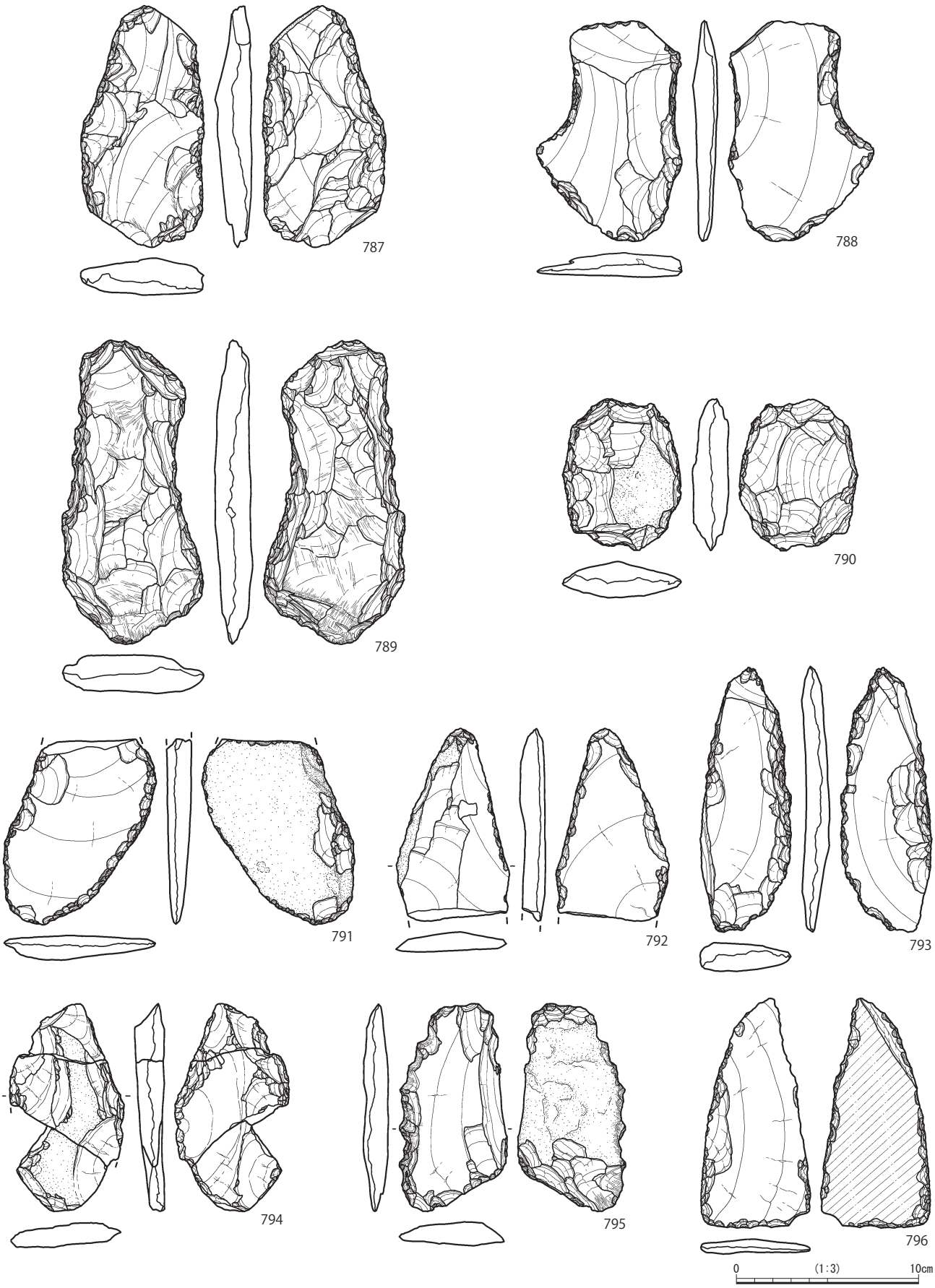
第92図　縄文時代後期の石器（10）



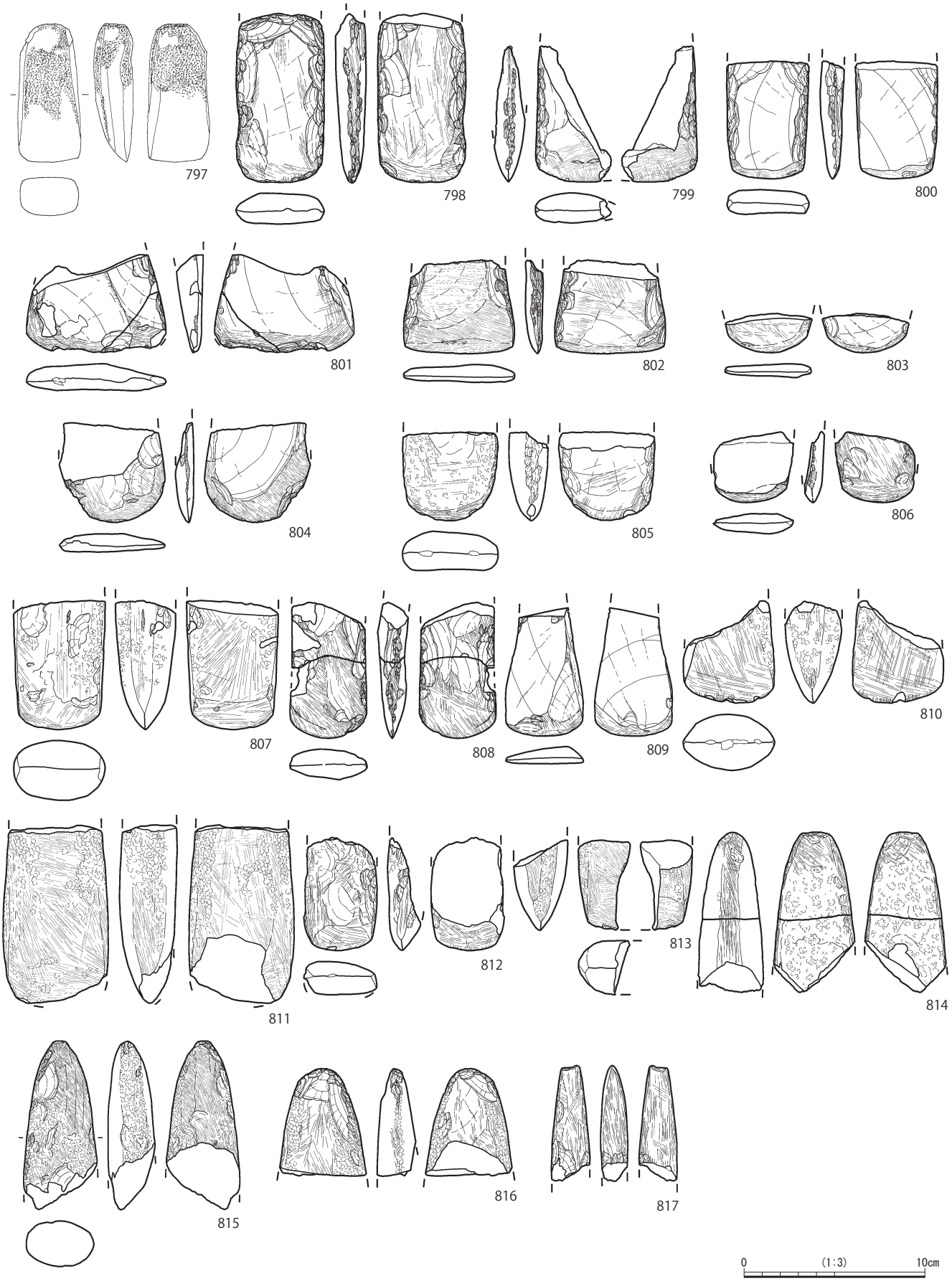
第93図　縄文時代後期の石器（11）



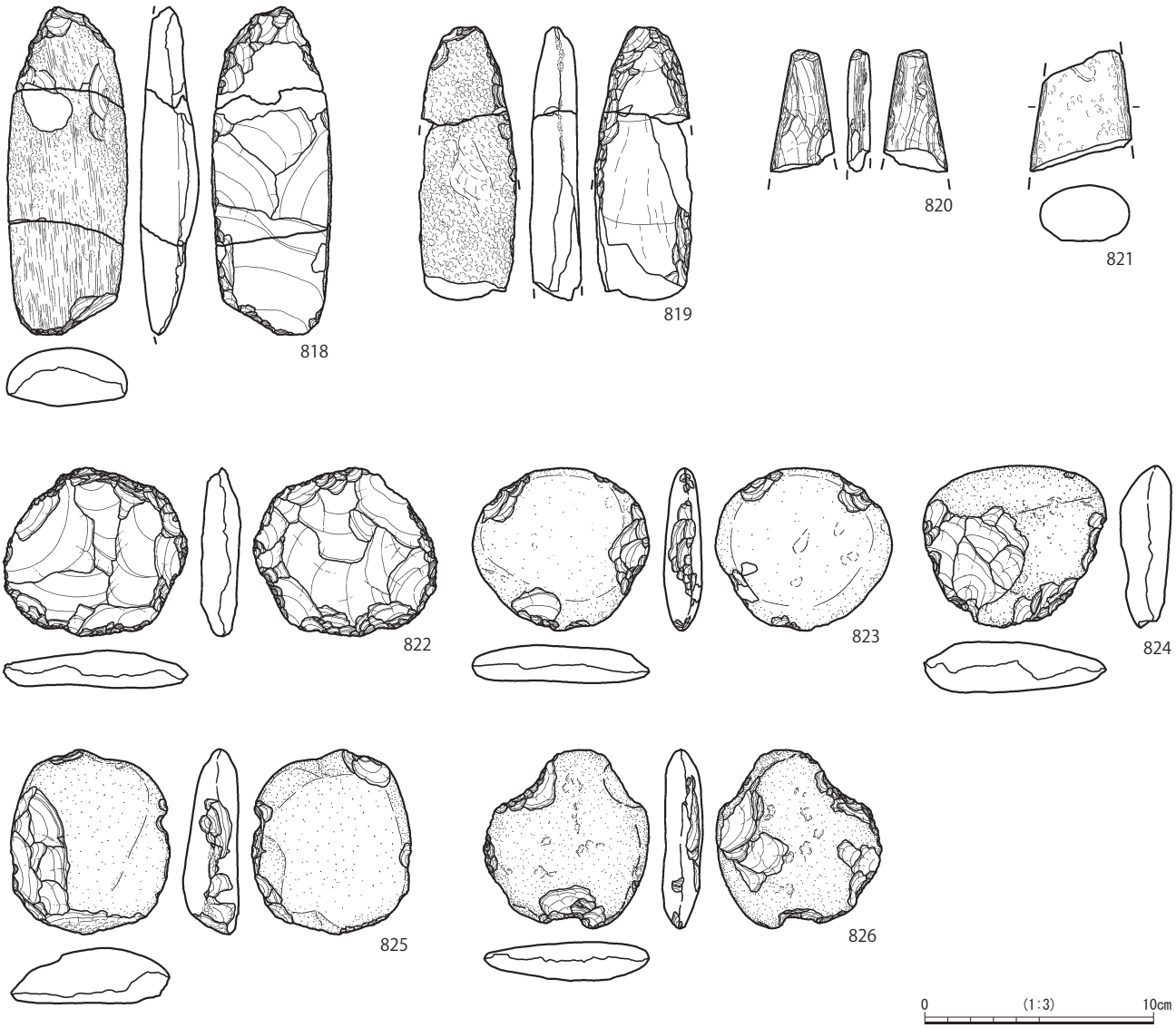
第94図　縄文時代後期の石器（12）



第95図　縄文時代後期の石器（13）



第96図　縄文時代後期の石器（14）



第97図　縄文時代後期の石器（15）

残存したもので，折れ面に再加工を施している。791 ～ 796は打製石斧未製品である。石材は，680・681・683 ～ 702・704 ～ 727・729 ～ 740・742 ～ 779・782 ～ 796がホルンフェルス，682・703・741が頁岩，728・780・781がハリ質安山岩である。

磨製石斧（第96図・第97図）

797 ～ 821は磨製石斧である。刃部形状は蛤刃を呈する。製作工程は敲打成形後，研磨整形を施す傾向がある。797を除く全てが欠損品である。798 ～ 804・805・808・810・811 ～ 813のように刃部に使用による刃こぼれが認められることから，欠損の原因の大半は使用によるものと推測される。797は完形品で，丁寧な研磨が施されている。基部に細かな敲打成形の痕が残されている。未使用品であり，石材が勾玉・管玉同様に結晶片岩様緑色岩製であることから玉斧と思われる。その他の石材は，798 ～ 809・811 ～ 821がホルンフェルス，810が砂岩である。

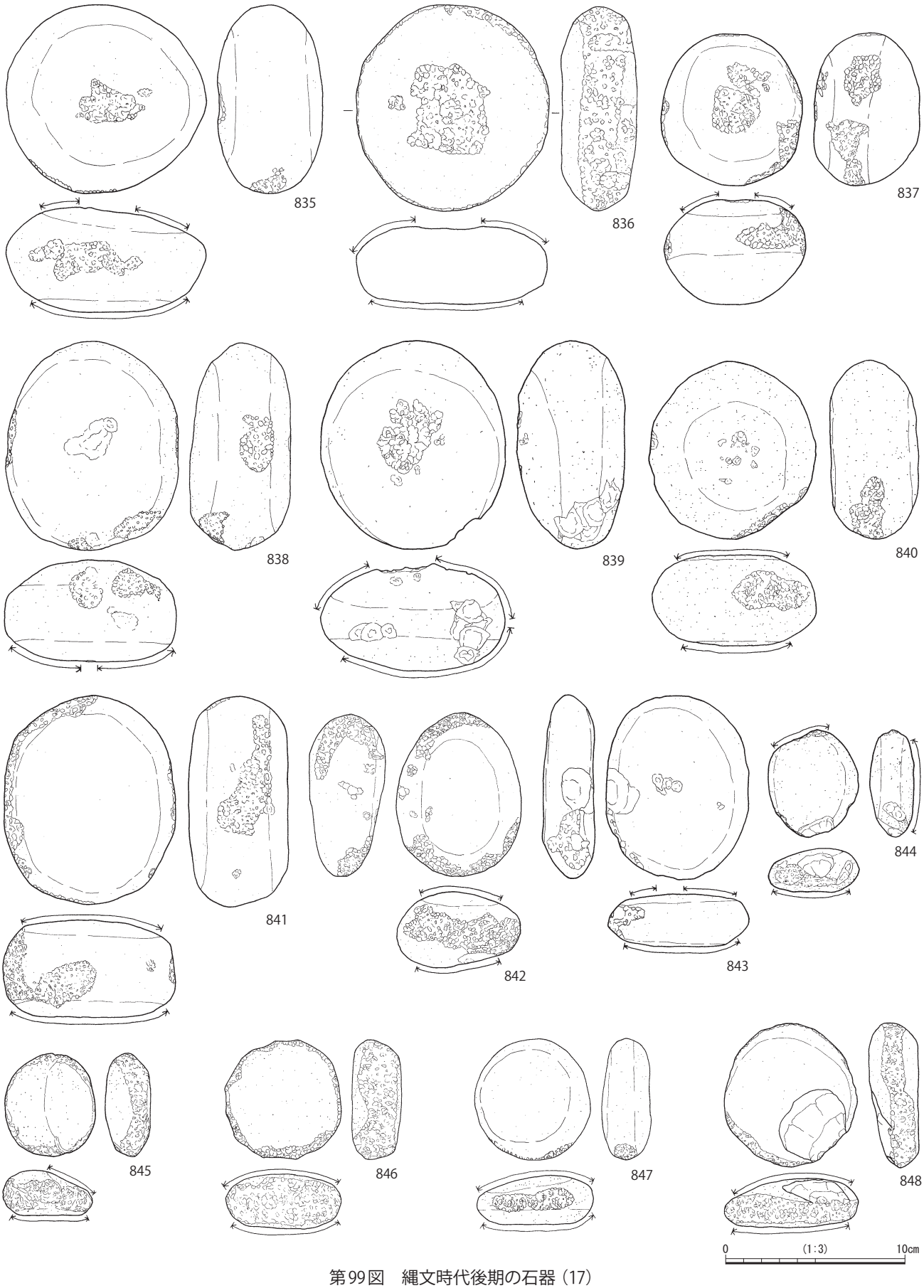
礫器（第97図）

822 ～ 826は両刃の礫器である。822は厚手の剥片ないし，分割礫を素材として，周縁からの剥離によって円形の刃部を形成している。823 ～ 826は扁平な円形の礫を素材とし，部分的に剥離を施して刃部を形成している。石材は，全てホルンフェルスである。

磨石・敲石類（第98図～第102図）

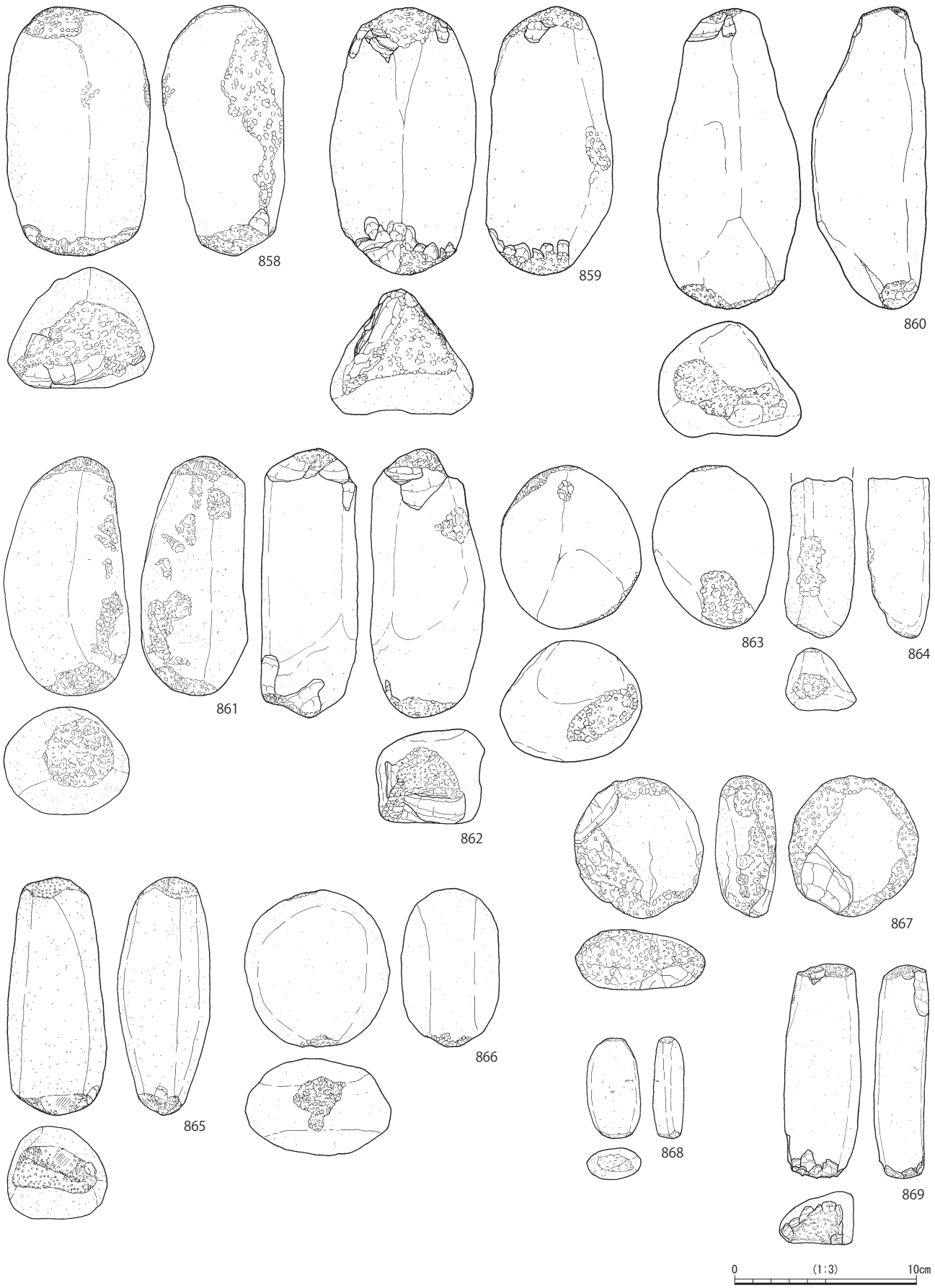
磨面のみ認められるもの，敲打痕のみ認められるもの，磨面と敲打痕が複合して認められるものとがある。磨面と敲打痕が複合して認められるものは，磨石として利用した後，敲石として利用したのか，その逆なのか，磨・敲を並行しながら作業を行ったのか判断でき

第98図　縄文時代後期の石器（16）

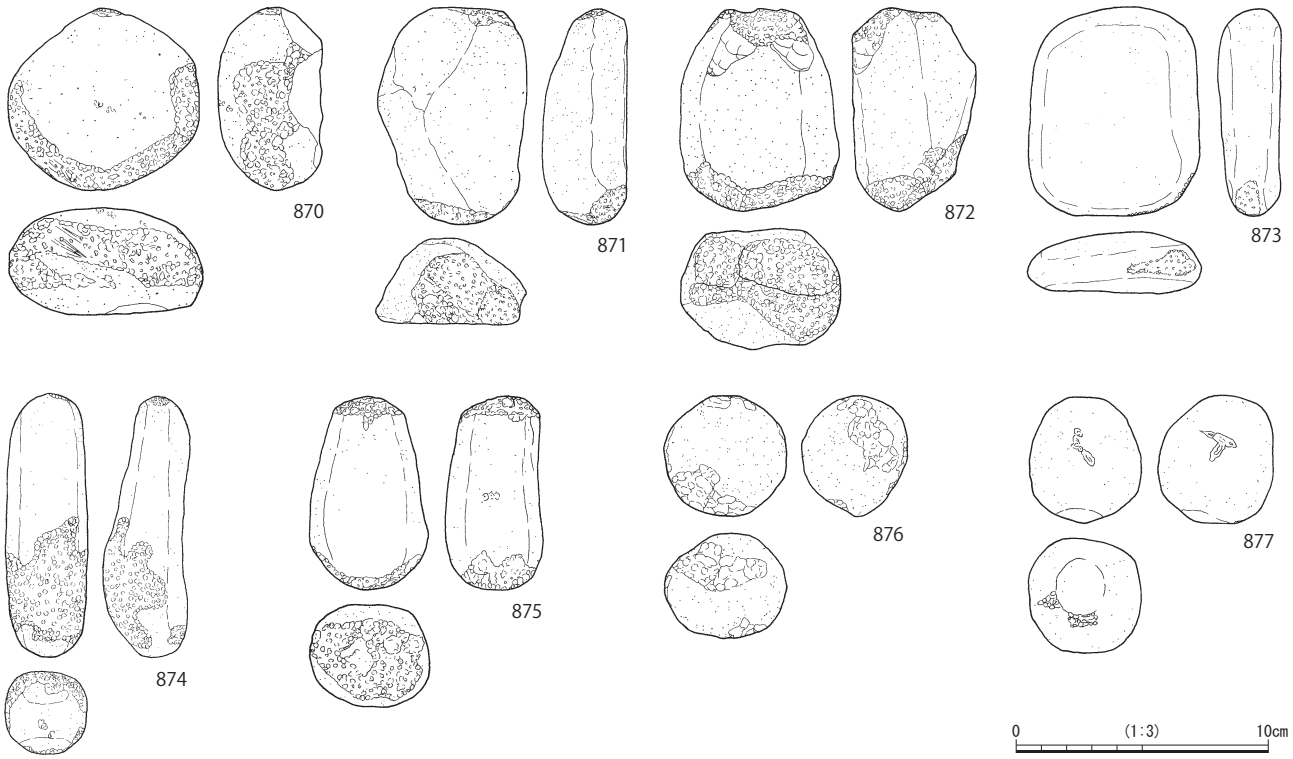


第99図　縄文時代後期の石器（17）

第100図　縄文時代後期の石器（18）



第101図　縄文時代後期の石器（19）



第102図　縄文時代後期の石器（20）

ないものが大半であることから，磨・敲石として取り扱った。

827～851は磨面と敲打痕が複合して認められるもの，852は磨面のみ認められるもの，853～877は敲打痕のみ認められるものである。827・829～854・866・867・870・873は扁平な円形ないし，楕円形の礫を利用し，828・855～857・863・876・877は球状の礫を利用し，858～862・864・865・868・869・874・875は棒状の礫を利用し，871・872は亜角礫を利用している。磨面と敲打痕が複合して認められるものは，扁平な円形ないし，楕円形の礫を利用する傾向があり，敲打痕のみのものは，棒状の礫を利用する傾向がある。磨面と敲打痕が複合して認められるものの内，828・830～832・834・836・846・848は継続して利用した結果，石鹸状になったものである。830・832・835・840・841・854は被熱しており，その内831は被熱によりはじけている。石材は，827～829・831・833～841・843・848・851・853・854・866・875・876・877が安山岩，830・832・842・844～847・850・861・865・867・868・871・873・874が砂岩，858～860・862・864・869・870・872がホルンフェルス，849・852・855～857・863が花崗岩である。

石皿（第103図～第107図）

878～901は石皿である。全て欠損品である。878・879・881・883・895は使用面が凹んでいる。880・882・884～894・896～901は使用面が平坦である。878～888・890～895は被熱している。石材は，878～880・883・884・886・887・889・891・892・894・895・897・898・900・901が安山岩，881・885・888が花崗岩，882・896・899が凝灰岩，890・893が砂岩である。

砥石（第107図）

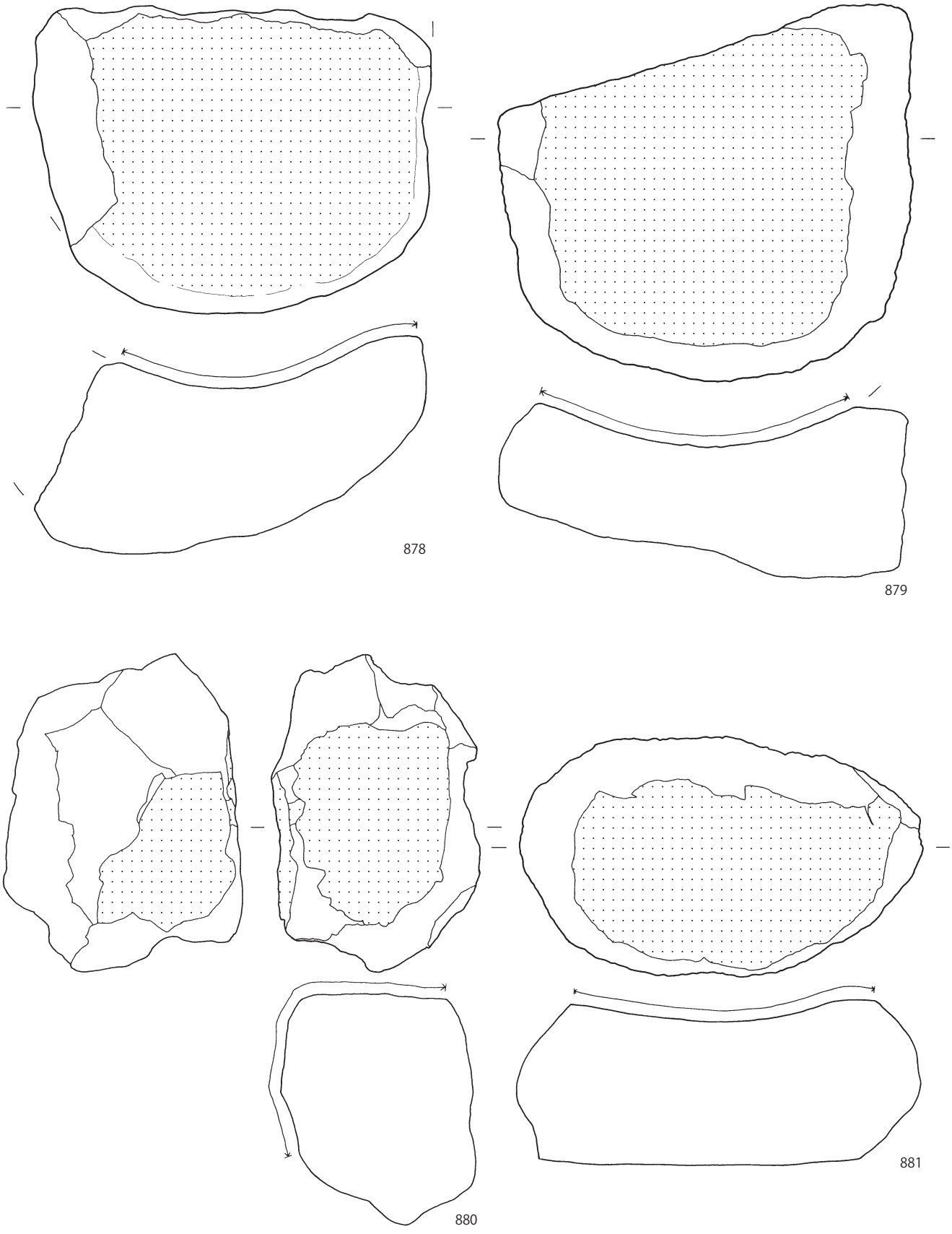
902 ～ 904は砥石である。903・904は溝状の痕跡が認められることから攻玉砥石と思われる。石材は，902が花崗岩，903・904が砂岩である。

用途不明石器（第107図）

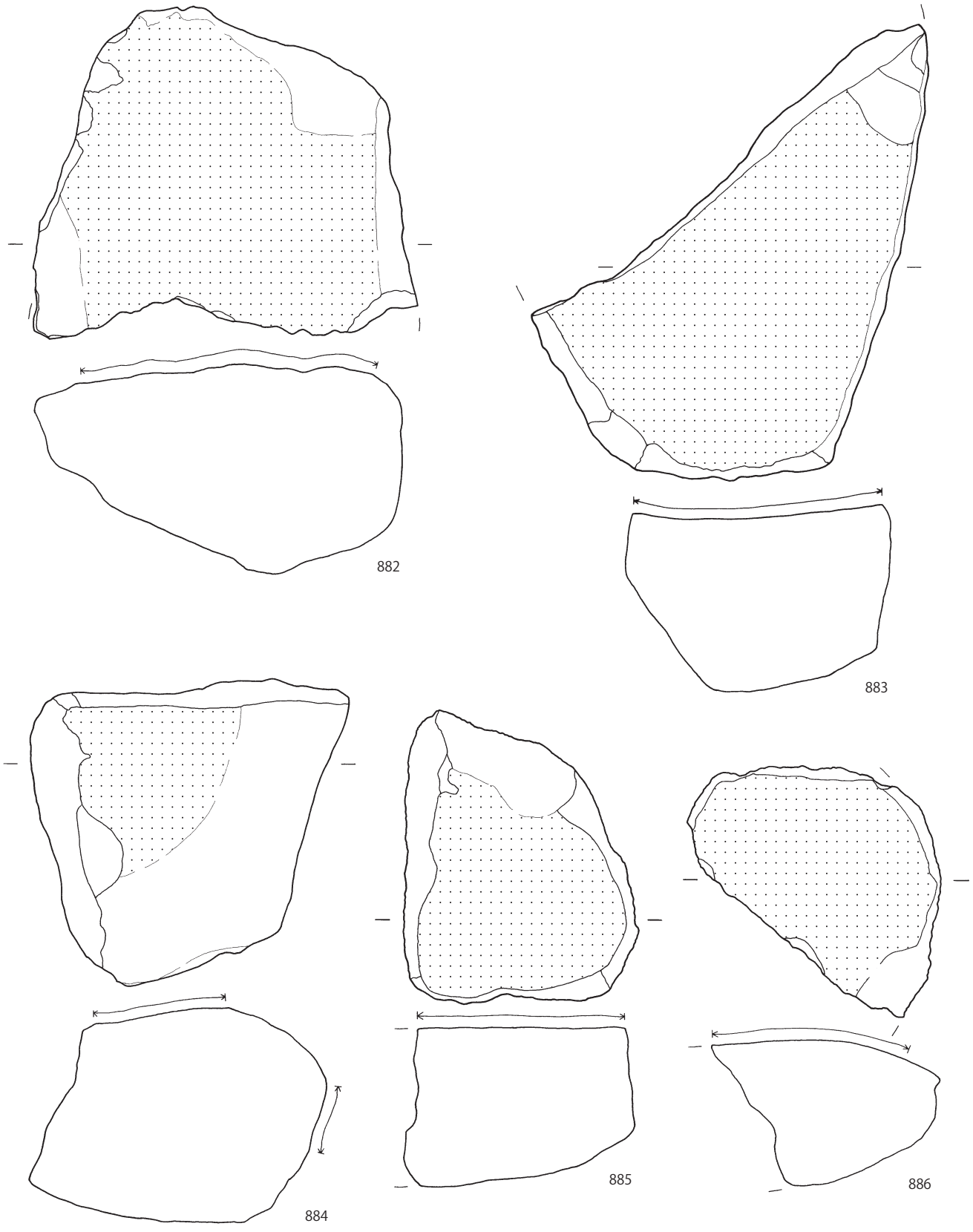
905・906は用途不明石器である。905は表面が面取りされている。906は表面が面取りされ，裏面は敲打により凹んでいる。905・906共に被熱により黒化している。石材は，905・906共に凝灰岩である。

エ　装飾品（第107図）

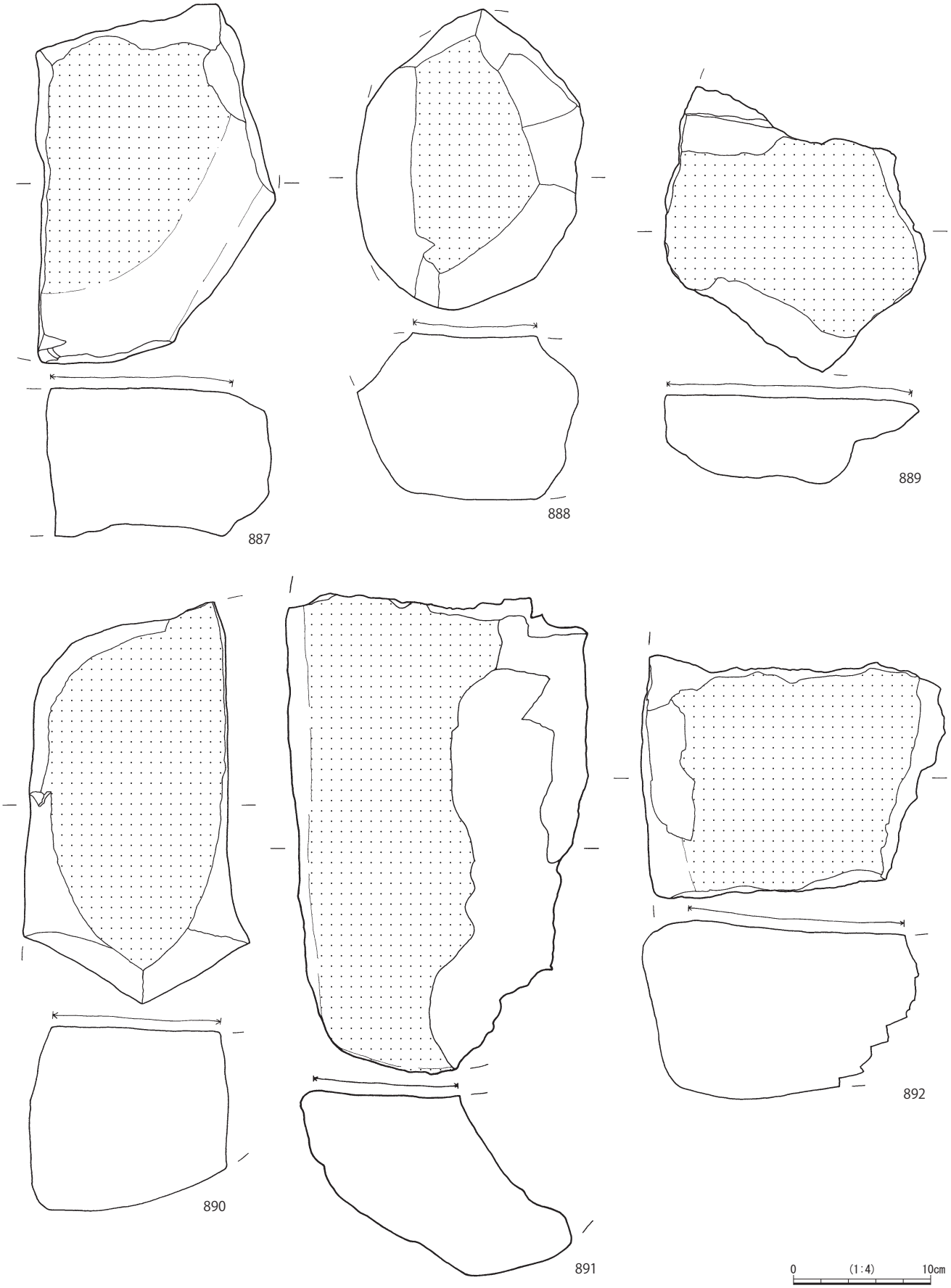
907は棒状の垂飾である。裏面上部に溝状の加工を施し，表面上部から穿孔を行っている。908・909は丸玉である。いずれも表面から穿孔を行っている。910は扁平な勾玉である。911は管玉である。わずかに丸みを帯びている。石材は，907 ～ 909がヒスイである。ヒスイは蛍光Ｘ線分析の結果，新潟県糸魚川産であることが同定されている。910・911は結晶片岩様緑色岩である。同石材を利用した玉造遺跡には，上加世田遺跡が挙げられ，本遺跡出土勾玉・管玉も関連性が窺える。



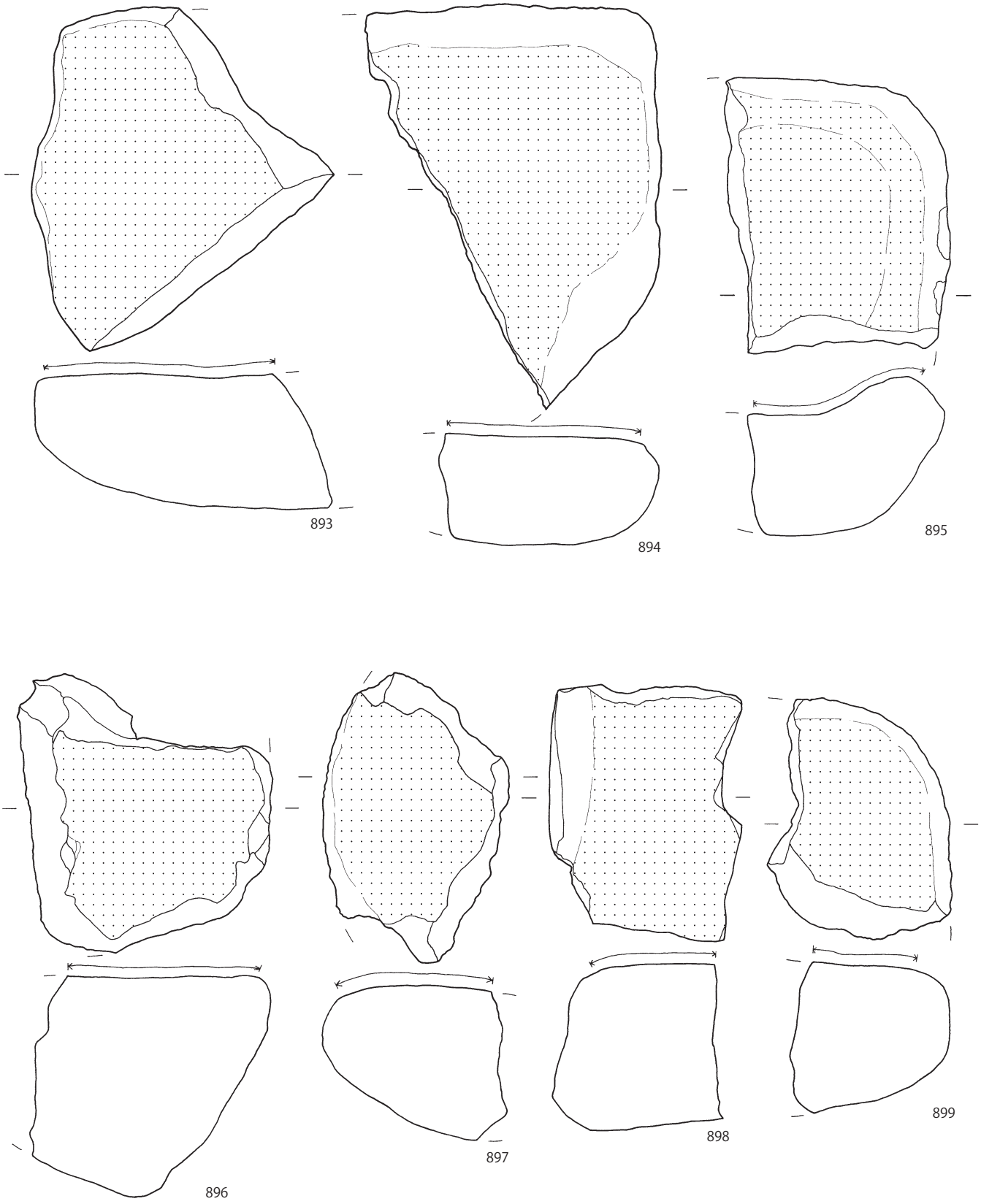
第103図　縄文時代後期の石器（21）



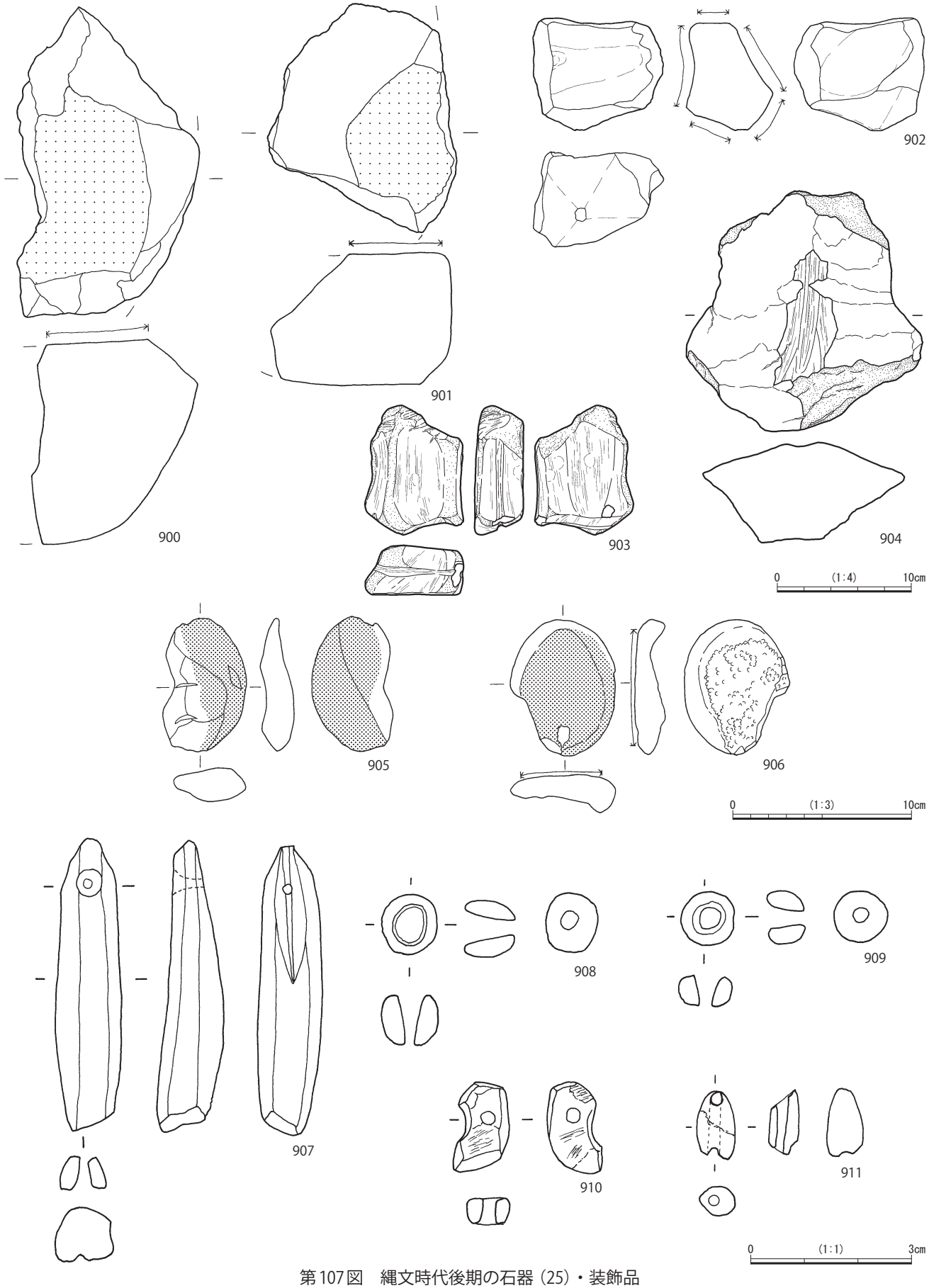
第104図　縄文時代後期の石器（22）



第105図　縄文時代後期の石器（23）



第106図　縄文時代後期の石器（24）



第107図　縄文時代後期の石器（25）・装飾品

（4）縄文時代晩期の土器（第108図～第116図）

晩期の遺物は，後期の遺物同様にⅡｂ層（黒色土）を中心に出土しており，両者のレベル差は認められなかった。本遺跡では，中岳Ⅱ式土器に続く，晩期初頭の上加世田式土器，晩期中葉の黒川式土器が少量出土している他，晩期末から弥生時代初頭の刻目突帯文土器，組織痕土器，未命名型式の土器，無刻目突帯文土器が相当数出土している。

本項では，遺構外から出土したものの内，上加世田式土器11点，黒川式土器２点，縄文時代晩期未分類の土器２点，縄文時代晩期末から弥生時代初頭の刻目突帯文土器89点，組織痕土器５点，未命名型式の土器29点，無刻目突帯文土器８点，縄文時代晩期末から弥生時代初頭の未分類の土器16点を図示した。

上加世田式土器（第108図）

912 ～ 921はⅢ類の深鉢形土器である。Ⅱ類土器に比べ器厚が薄い。912は口径28.6cmを測る口縁部である。口縁部文様帯に沈線を３条巡らせている。919・917・920も口縁部文様帯に沈線を３条巡らせている。913・914は口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。

915・916は口縁部文様帯に沈線を４条巡らせている。921は口縁部文様帯に沈線を１条巡らせている。器面調整は，内外面共に横方向のミガキやナデを施している。

922はⅢ類の浅鉢形土器である。頸部で屈曲し，外反する口縁部で，端部は外面に沈線を１条巡らせている。器面調整は，内外面共に横方向のミガキを施している。

黒川式土器（第108図）

923・924はⅣ類の浅鉢形土器である。923は胴部屈曲部が最上端にあり，ごく短い頸部から強く屈曲して外開きする口縁部へ至る。924は胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し，外反する口縁部に至る。器面調整は，内外面共に横方向の丁寧なミガキを施している。

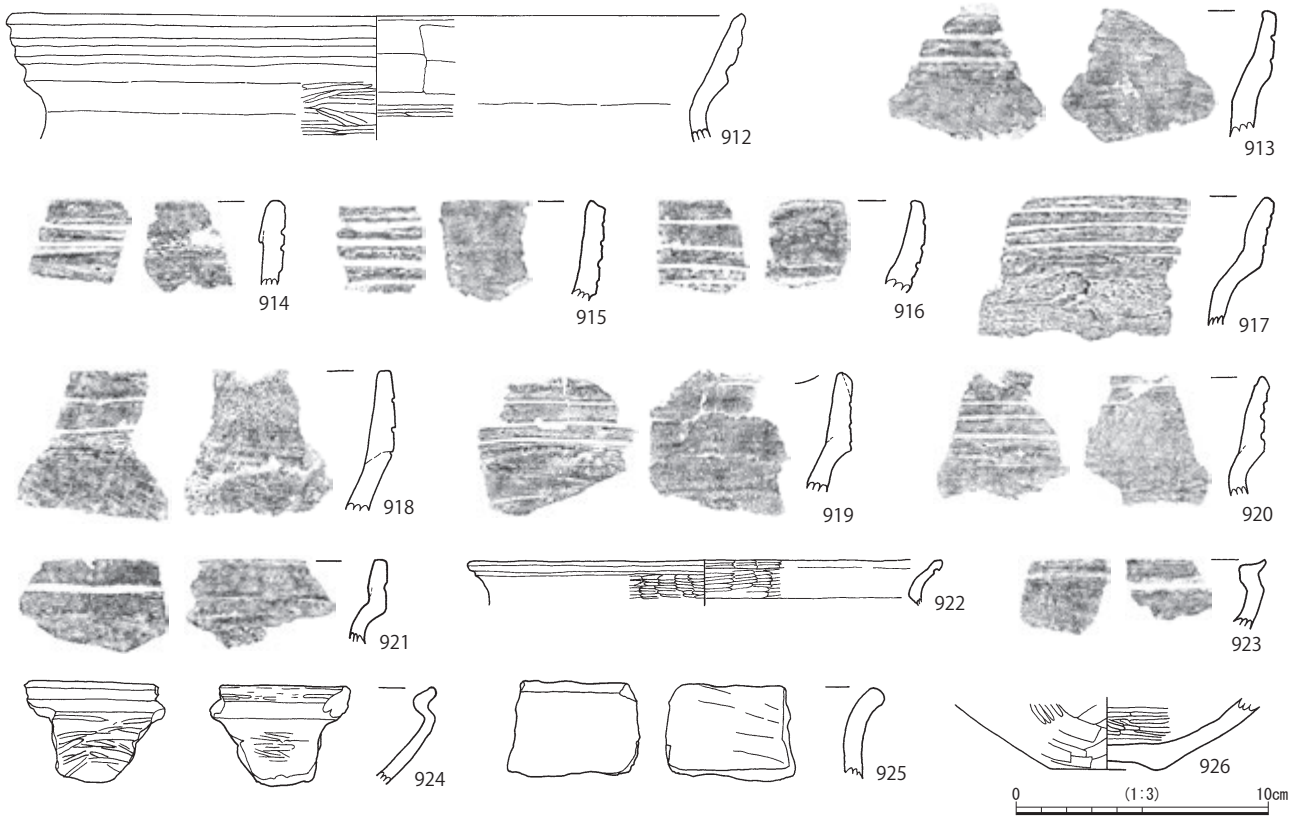
縄文時代晩期の土器（第108図）

925は粗製の深鉢である。外反する口縁部である。器面調整は，内外面共に横方向のナデを施している。926は底径4.2cmを測る，上げ底状の底部である。器面調整は，外面が横方向のナデ後，縦方向のミガキを施し，内面は横方向のミガキを施している。

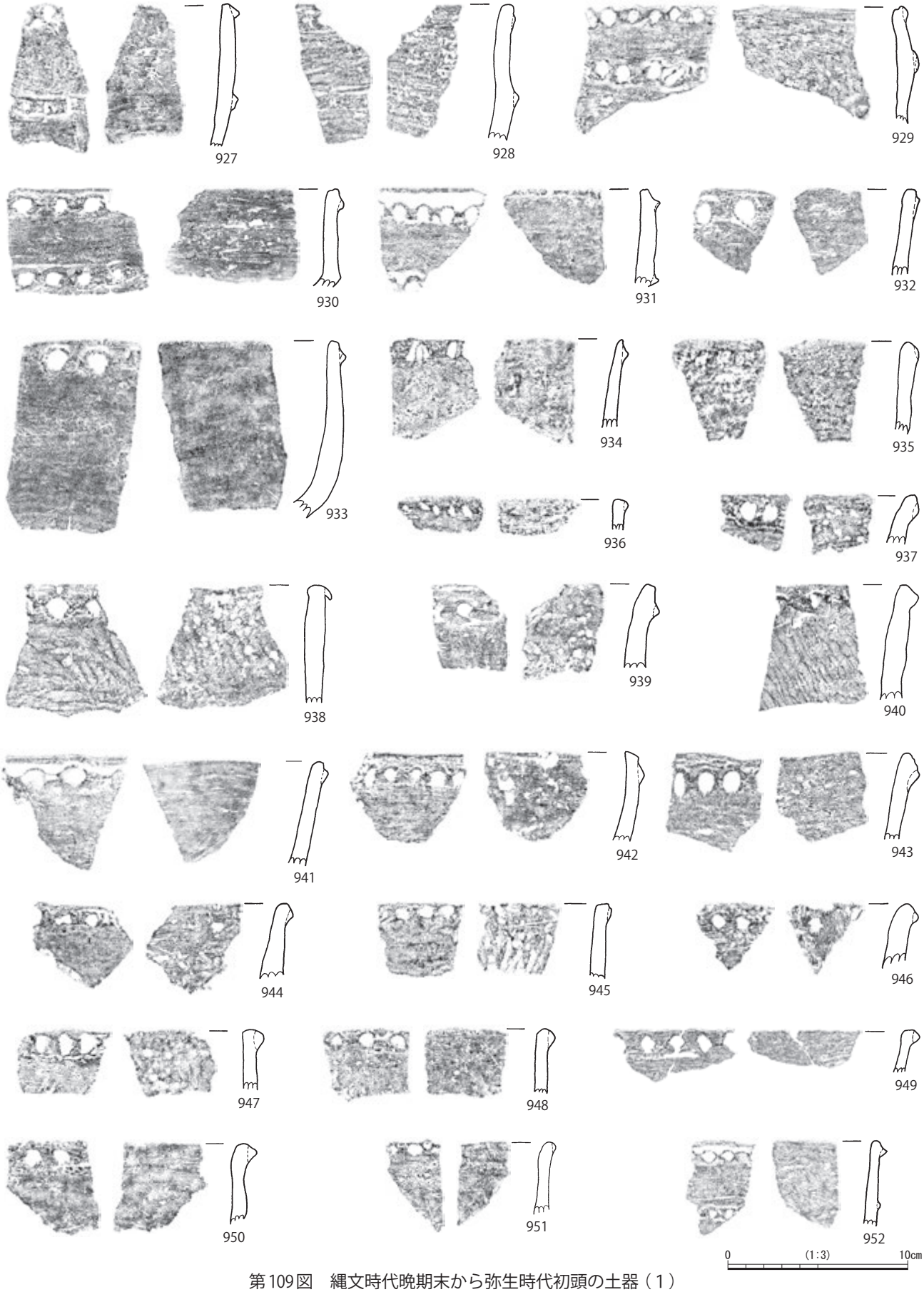
刻目突帯文土器（第108図～第112図）

927 ～ 1015はＶ類の深鉢形土器である。927 ～ 952は幅広の刻目が認められるものである。その内，932・933・937・938・941・943・948は突帯に指を押し当てて刻目にしている。927 ～ 931は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。

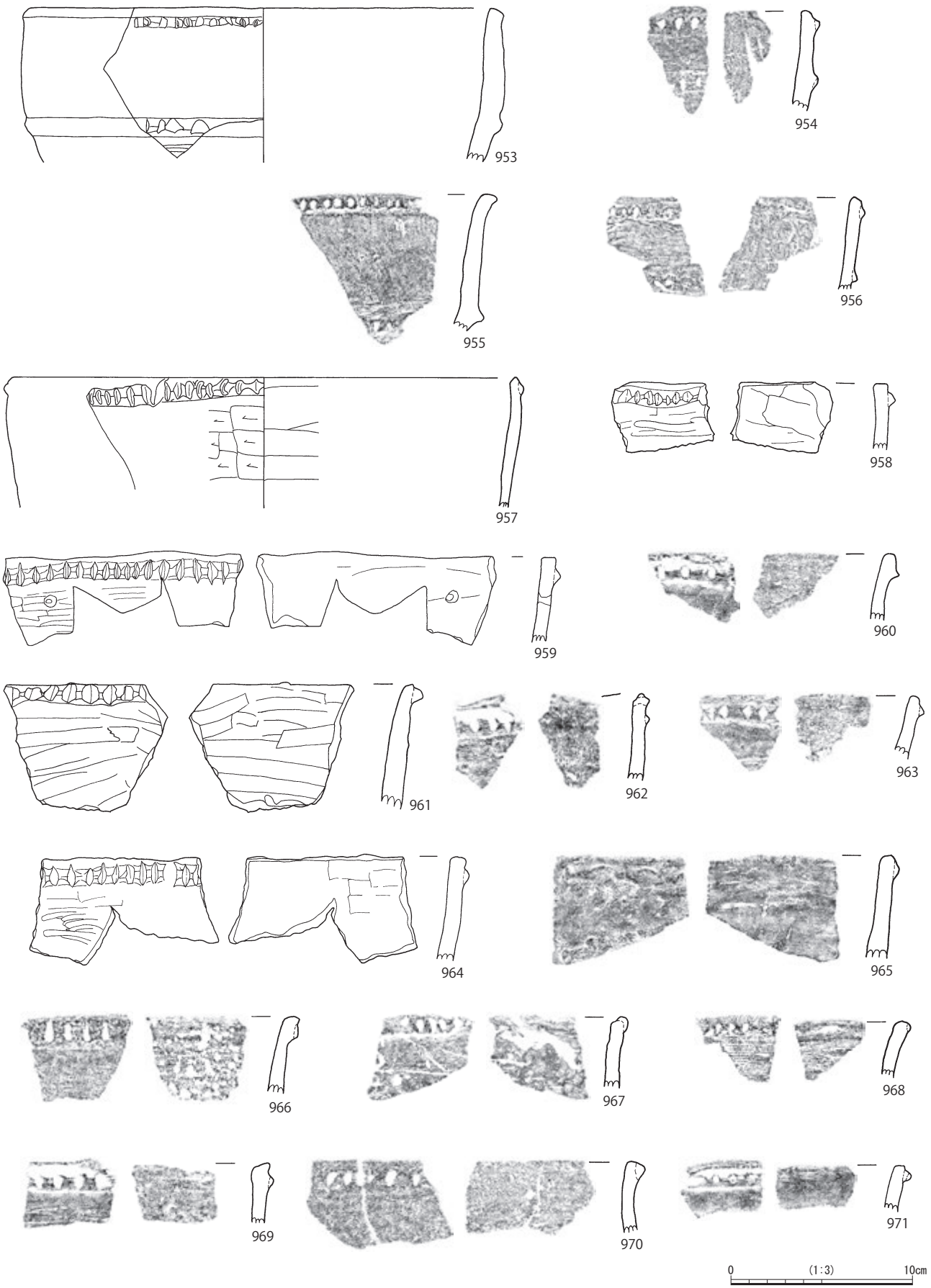
953 ～ 982は櫛状工具による細い刻目が認められるものである。953 ～ 956は口縁部と胴部に突帯を巡らせる



第108図　縄文時代晩期の土器

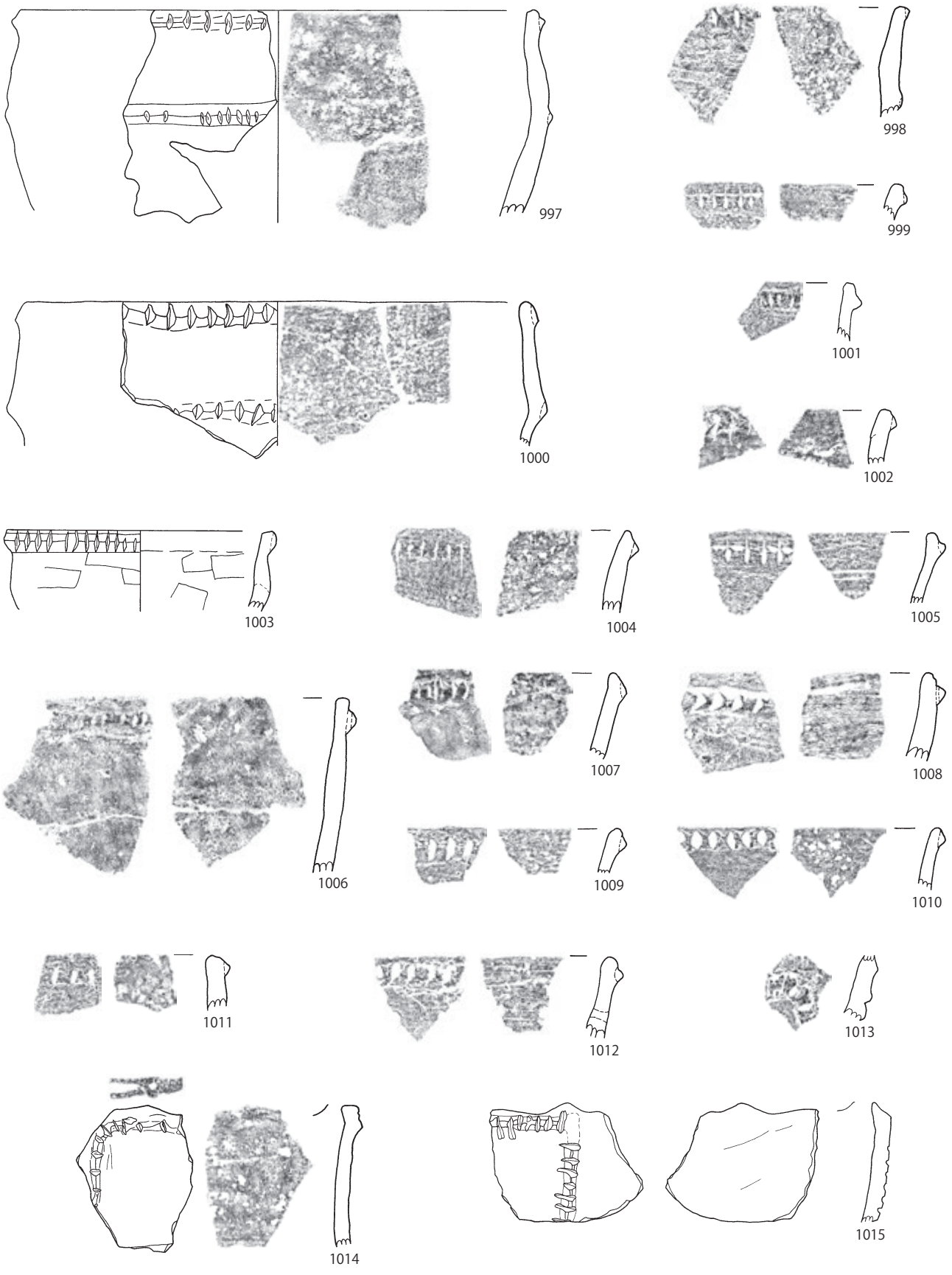


第109図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（1）



第110図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（２）

第111図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（３）



第112図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（4）

ものである。955は外面に煤が付着している。

983 ～ 996は爪形の刻目が認められるものである。983 ～ 986は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。その内，983は２条の突帯間に２条を単位とする沈線で鋸歯文を描いている。983・986・990は外面に煤が付着している。

997 ～ 1015はヘラ状工具による刻目が認められるものである。997・998・1000は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。1012は突帯下に円形刺突具により孔列を巡らせている。1013 ～ 1015は突帯を窓枠状に施している。1014・1015は波状口縁をなし，その内，1014は頂部上面に刺突を施し，口唇部の一部に沈線を１条巡らせている。

組織痕土器（第113図）

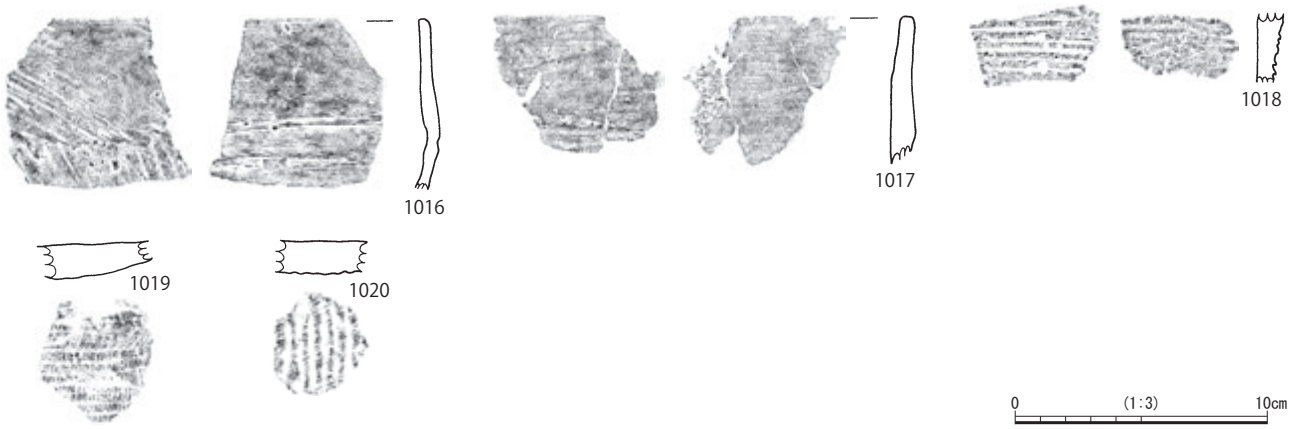
1016 ～ 1020はⅥ類の深鉢形土器である。1016は直行する口縁部である。器面調整は，外面が貝殻条痕文，内面は横方向のケズリ後ナデを施している。1017は直行する口縁部で，口唇部を面取りしている。器面調整は，内外面共に横方向の粗いミガキを施している。1018は胴部である。器面調整は，内外面共に貝殻条痕文を施している。1019・1020は組織痕が認められる底部である。

縄文時代晩期末の未命名型式の土器（第114図・第115図）

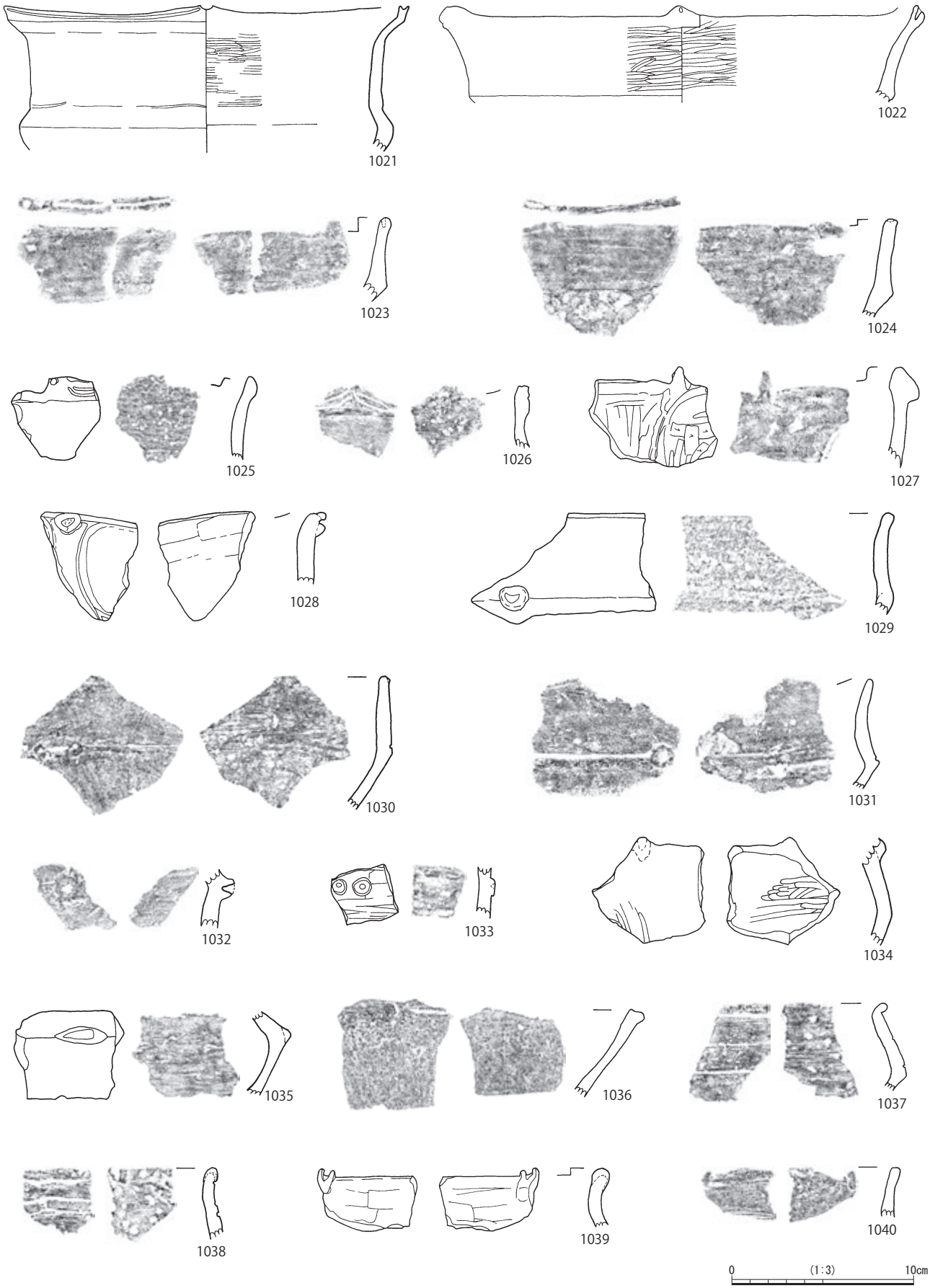
口唇部に突起や粘土紐貼り付け，胴部にドーナツ状の浮文等の特徴が認められる土器をⅦ類に分類した。1021 ～ 1049はⅦ類の深鉢形土器である。1021は４対の山形突起を持つもので，頂部上面に刺突を施している。胴部最大径の所で「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反し，直行する口縁部へ至る。口縁部文様帯には，口縁部の形に沿うように沈線を頂部下で途切れさせながら１条巡らせている。1022は４対の山形突起を持つもので，頂部上面に刺突を施している。屈曲した胴部から外反し，直立する口縁部へ至る。1023・1024は口縁部に山形突起を持つもので，頂部上面に刺突を施し，口唇部には沈線を１条巡らせている。1025は不定形な波状口縁をなすもので，頂部下に刺突を施している。口縁部文様帯には，沈線を２条巡らせている。1026は波状口縁をなすもので，口縁部文様帯に沈線を２条巡らせている。1027・1028は無刻目の突帯を弧状に巡らせている。1029は口唇部にドーナツ状の浮文が貼り付けられている。1029 ～ 1033は胴部最大径の所にドーナツ状の浮文が貼り付けられているものである。1030・1031は沈線を１条巡らせた後，ドーナツ状の浮文を貼り付けている。1034は胴部上位に突起が貼り付けられている。1035・1036は胴部最大径の所に突起が貼り付けられている。1037 ～ 1043は口唇部に粘土紐を貼り付けて装飾しているものである。1037・1038は胴部上位に沈線を３条巡らせている。1044は口唇部に鶏冠状の突起を持つもので，頂部上面に刻目を施している。口縁部より下がった部分には刻目突帯を１条巡らせている。1045は頸部の所で「く」の字状に屈曲し，短く延びる口縁部へ至る。1046は直行する口縁部で，頸部に沈線を１条巡らせている。1047は内傾する頸部から，直立する口縁部へ至る。口縁部より下がった部分に沈線を１条巡らせている。1048は直行する口縁部で，口縁部より下がった部分に沈線を１条巡らせている。1049は胴部最大径の所で屈曲し，直行する口縁部である。口唇部下に沈線を２条，胴部最大径の部分に沈線を２条巡らせている。

無刻目突帯文土器（第115図）

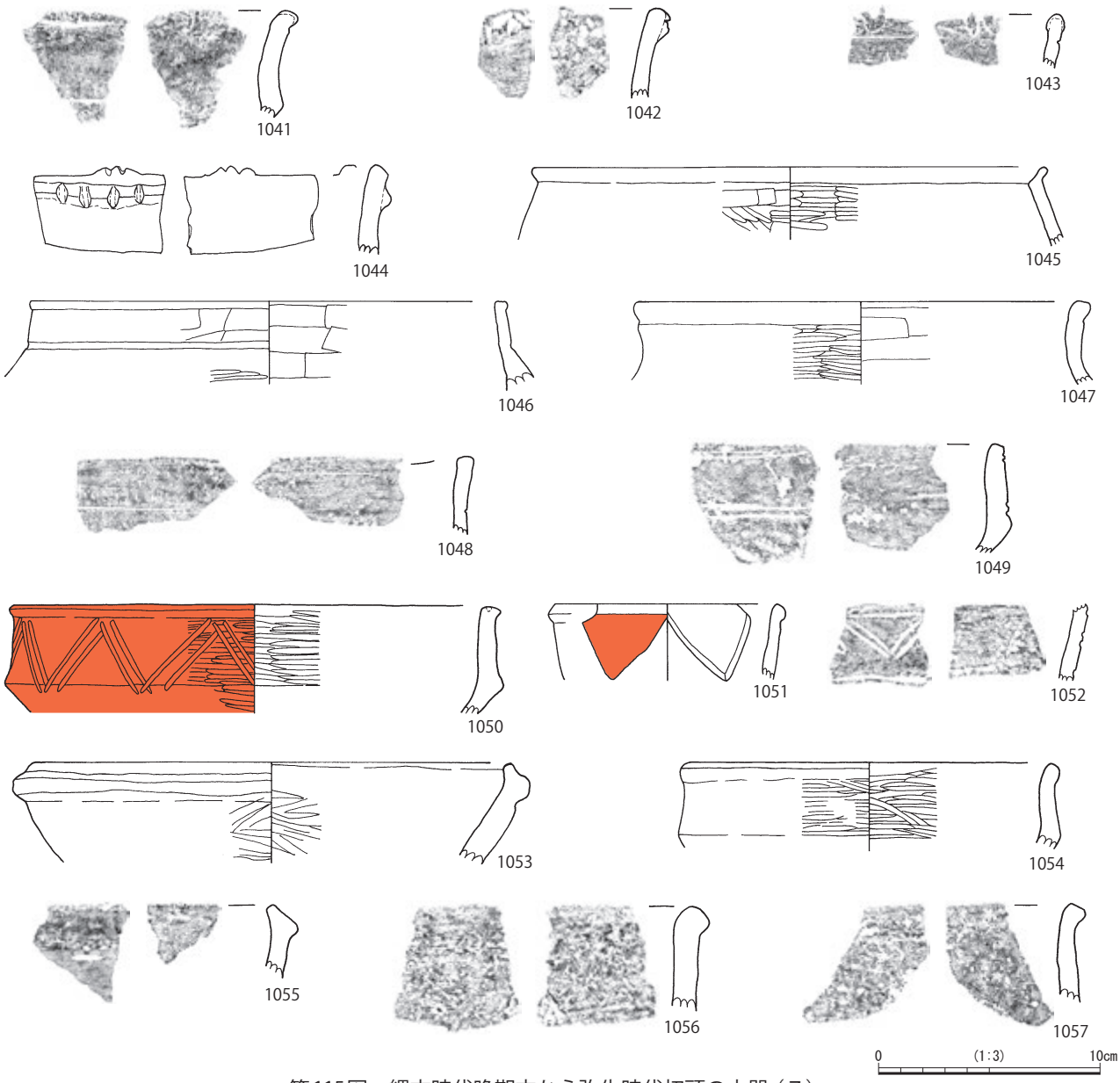
1050 ～ 1057はⅧ類の深鉢形土器である。1050は口縁部と胴部に突帯を巡らせるものである。突帯間に２条を単位とする鋸歯文を描いている。外面全体に赤色顔料を塗布している。1051は口縁部に突帯を巡らせるものである。外面突帯下に赤色顔料を塗布している。1052は胴部で，並行沈線で区画した間に２条を単位とする鋸歯文を描いている。刻目突帯文土器の可能性もある。1053 ～ 1057は口縁部に突帯を１条巡らせるものである。



第113図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（５）



第114図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（6）

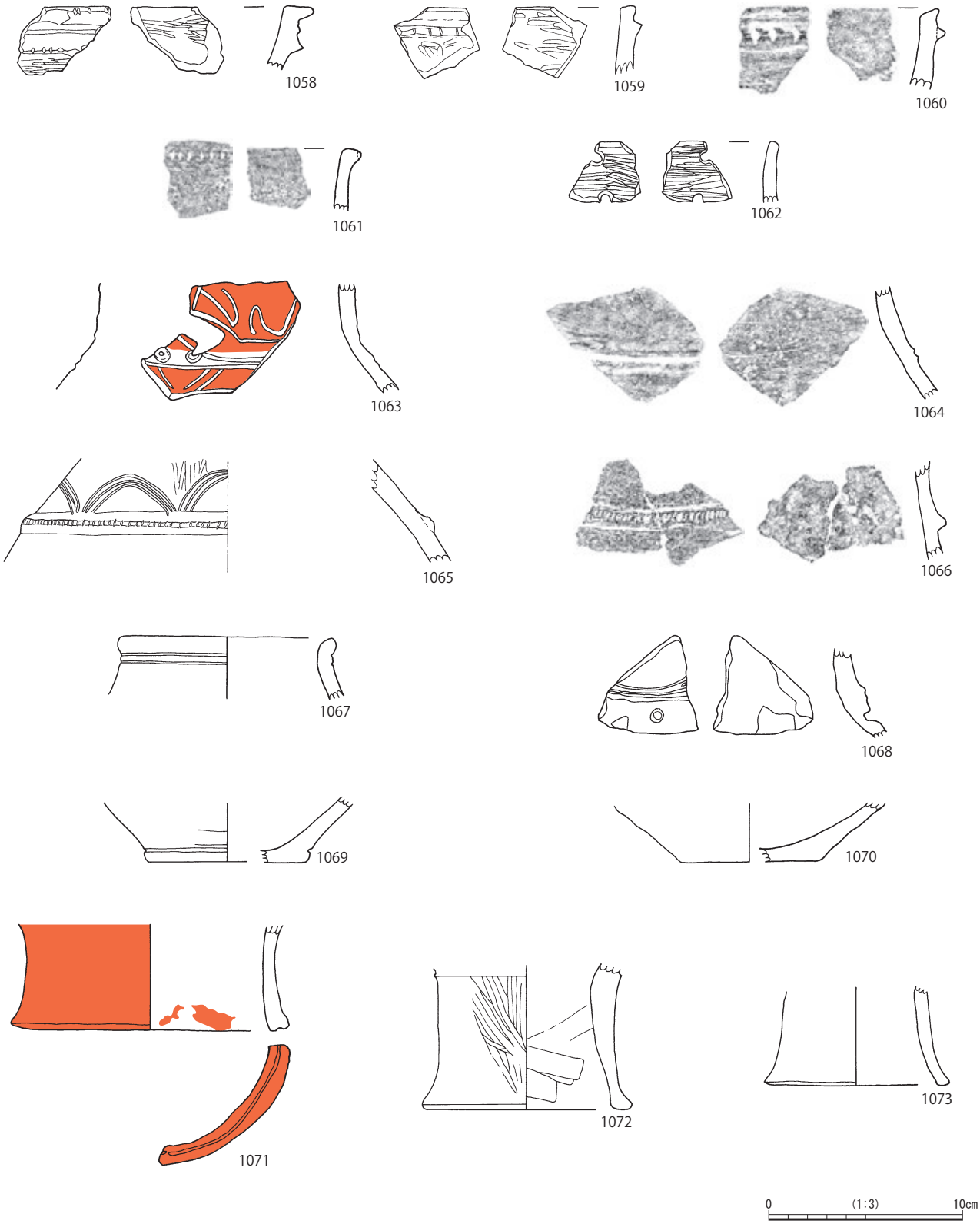


第115図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（7）

縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（第116図）

1058 ～ 1062は甕形土器である。1058は逆Ｌ字状の口縁部で，口縁部直下に突帯を巡らせている。口唇部及び突帯にヘラ状工具による刻目が施されている。1059・1060は未発達な逆Ｌ字状の口縁部で，口縁部直下に刻目突帯を巡らせている。刻目はヘラ状工具によるものと思われる。1061は短く外反する口縁部で，口唇部にヘラ状工具による刻目が施されている。1062は口縁部に穿孔が２孔認められる。残存部位が少ない為，孔列状になるかは不明である。

1063 ～ 1070は壺形土器である。1063は肩部と頸部の境が屈曲するものである。肩部と頸部の境にドーナツ状の浮文を貼り付けており，肩部と頸部でそれぞれ異なる沈線文を施している。また，外面は肩部と頸部の境を帯状に残し赤色顔料を塗布している。1064は頸部に沈線を２条巡らせるものである。1065は胴部上位に刻目突帯文を巡らせ，突帯上に３重の弧文を施している。1066は胴部に刻目突帯を１条巡らせている。1067は外反する口縁部で，口縁部と頸部の境に沈線を２条巡らせている。1068は肩部と頸部の境に突帯を２条巡らせている。突帯下に未貫通の穿孔が認められる。1069は底径8.0cmを測る平底の底部である。胴部下端に沈線を１条巡らせている。1070は底径7.0cmを測る平底の底部である。1071 ～ 1073は高坏形土器である。1071は脚部下面に沈線を１条巡らせている。外面全体と内面の一部に赤色顔料を塗布している。1072は坏部と脚部の境に沈線を１状巡らせている。1073は脚部である。器面調整は内外面共にナデを施している。



第116図　縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器（8）

（5）遺物観察表

第5表　縄文時代後期・晩期土器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
14	1	G-16	SI1	12503	II Ca	深鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ	暗褐色	黒褐色～灰褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	2	G-16	SI1	12550	II B	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ，指頭圧痕	茶褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	3	G-16	SI1	12814	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	褐色～黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文，外面煤付着
	4	G-16	SI1	12819	II Bb	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕後ナデ，ケズリ後ナデ	ナデ後ミガキ	暗褐色～黒褐色	暗褐色～黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文
15	5	G-16	SI1	12790	II Bb	深鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい橙色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文，外面煤付着
	6	G-16	SI1	11768・12489	II B	深鉢	口縁部～胴部	ヨコナデ，ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐色	黒褐色～黒色	○	○	○	○	－	沈線文，波状口縁
	7	G-16	SI1	12752	II a	深鉢	胴部	ミガキ，条痕	ミガキ，条痕	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	沈線文，三日月文，外面煤付着
	8	G-16	SI1	12084	II a	深鉢	胴部	条痕調整後ナデ	ナデ後ミガキ	黒褐色	褐灰色～淡褐色	○	○	○	－	－	
16	9	G-16	SI1	12085・12086・12087・12214	II Ba	深鉢	口縁部～胴部	ヨコナデ，ナデ	ナデ	暗褐色～橙褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文，刻目，波状口縁，外面煤付着
	10	G-16	SI1	12501	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ，ミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	－	○	輝石，沈線文
	11	G-16	SI1	－	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	楕円形凹点文
	12	G-16	SI1	12502	II D	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	－	○	－	沈線文，「は」の字状の凹点文
	13	G-16	SI1	10618	II a	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文，凹点文
	14	G-16	SI1	11554・12549	II B	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ，ナデ	明赤褐色～黒褐色	明赤褐色～黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文，刻目，波状口縁，外面煤付着
	15	G-16	SI1	12079	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	橙色	○	○	○	－	－	沈線文
	16	G-16	SI1	10967	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文，波状口縁
17	17	G-16	SI1	10966・10968・11093・11750・16366・10959	II a	深鉢	口縁部～胴部	ヨコナデ，ナデ	ナデ	褐色～黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文，連続山形文
	18	G-16	SI1	11758	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	19	G-16	SI1	5110	II B	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	20	G-16	SI1	10635	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色～褐灰色	褐灰色	○	○	－	－	－	外面煤付着
	21	G-16	SI1	11278・11373	II a	浅鉢（丹彩土器）	頸部～胴部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○	－	－	－	半月形凹点文，赤色顔料塗布
	22	G-16	SI1	12745	II a	深鉢	胴部	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	○	－	沈線文，楕円形凹点文
	23	G-16	SI1	12067	II a	浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	沈線文，刻目
	24	G-16	SI1	10593	II a	浅鉢（丹彩土器）	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文，楕円形凹点文，赤色顔料塗布，炭化物付着
	25	G-16	SI1	10602・10995・11096・11555・12244・12400	II	深鉢	胴部～底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色～黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	26	F-16	SI1	SI1-66	II	深鉢	底部	ミガキ，ナデ	ナデ	暗褐色～褐色	暗褐色	○	○	○	○	－	
21	60	G-22	SI2	SI2-129・131・132・133・135	II Eb	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	暗褐色～黒褐色	茶褐色～暗褐色	○	○	－	－	－	
	61	G-22	SI2	SI2-53	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	橙色	○	○	－	○	－	
	62	G-22	SI2	SI2-46	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい赤褐色	○	○	○	－	－	楕円形凹点文
	63	G-22	SI2	SI2-77・96	III	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	明黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	64	G-22	SI2	SI2-32	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	○	－	
	65	G-22	SI2	SI2-113	II	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○	－	－	－	
23	76	G-23	SI3	17497	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	○	－	－	沈線文，三日月文，楕円形凹点文
	77	G-23	SI3	17544・17924・17925・17926	II F	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	

第６表　縄文時代後期・晩期土器観察表（２）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色　調		胎　土					備　考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
23	78	G-23	SI3	17927	II Ia	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	
	79	G-23	SI3	17530・17542	II	深鉢	底部	ナデ後ミガキ	ナデ	橙色	浅黄橙色	○	○	－	－	－	
26	81	H-14	SJ1	－	II Ba	深鉢	口縁部～底部	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	明赤褐色	褐色	○	○	－	－	○	輝石
	83	G-14	SJ2	6900	II Cb	深鉢	口縁部～底部	ミガキ,ケズリ	ミガキ，ナデ	黒色	にぶい橙色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文，山形凹点文，楕円形凹点文
27	84	G-15	SJ3	－	II Aa	深鉢	口縁部～底部	ミガキ，ナデ	ミガキ	暗赤褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文，波状口縁，円形凹点文，内面煤付着
	85	G-15	SJ4	－	II Ba	深鉢	口縁部～底部	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	褐色	明褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	86	E-14	SJ5	－	II Ba	深鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文，波状口縁，凹点文
28	87	F-14	SJ6	－	II Fa	深鉢	口縁部～底部	ミガキ，ケズリ	ミガキ	褐色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石
	88	E･F-16	SJ7	－	II a	深鉢	胴部	ミガキ,ケズリ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗褐色～褐色	○	○	－	○	－	内面煤付着
	89	E-13	SJ8	－	II	深鉢	胴部～底部	ケズリ，ナデ	ミガキ	明赤褐色	褐色	○	○	－	－	－	内面煤付着
29	90	F-15	SJ9	－	II Ba	深鉢	口縁部～底部	ナデ後ミガキ	ミガキ，ナデ	にぶい赤褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文，波状口縁，楕円形凹点文，三日月文
	91	F-15	SJ10	－	II	深鉢	胴部～底部	ケズリ，ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐色	黒色	○	○	－	－	○	輝石
30	92	I-23	SJ11	－	II	深鉢	胴部	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石
	93	E･F-16	SJ12	－	II a	深鉢	胴部～底部	ミガキ，ケズリ	ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	○	○	－	－	○	輝石，内面煤付着
36	111	G-14	SQ1	28	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	沈線文
	112	G-14	SQ1	SQ1-110	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	113	G-14	SQ1	112	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	明赤褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	114	G-14	SQ1	98	II a	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文，楕円形凹点文
	115	G-14	SQ1	39	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	明褐色	○	○	－	○	－	沈線文，楕円形凹点文
	116	G-14	SQ1	108	II a	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	－	○	－	沈線文
	117	G-14	SQ1	103	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	118	G-14	SQ1	SQ1-97	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	○	－	－	沈線文
	119	G-14	SQ1	SQ1-100	II C	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ，ミガキ	褐色	黒色	○	○	－	○	－	沈線文，刻目
	120	G-14	SQ1	SQ1-29	II Ba	深鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ	淡褐色	暗灰色～暗褐色	○	○	－	○	－	沈線文，線刻文，外面煤付着
38	128	F-14・15	SQ3	SQ3-21	II Fb	深鉢	口縁部～胴部	ナデ，ケズリ	ナデ，指頭圧痕	橙色	橙色	○	○	－	○	－	
	129	F-14	SQ3	12	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文，波状口縁
49	149	F･G-19	SK6	SK6-51・84	III	浅鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	150	F･G-19	SK6	SK6-25	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	151	G-19	SK6	SK6-7	II Ia	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	152	F･G-19	SK6	SK6-19	II F	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	
	153	F･G-19	SK6	SK6-2	II	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	○	○	○	－	－	
	154	G-19	SK6	SK6-61	II	深鉢	底部	ナデ，ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	
52	166	F-14	SK21	－	II B	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ，ナデ後ミガキ	暗褐色	黒褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	167	F-16	SK22	－	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	茶褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	168	F-14	SK21	－	II Ba	深鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ	黄褐色～褐色	褐色～黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文，外面煤付着
53	173	F-14	SK24	－	II	深鉢	胴部	ナデ後ミガキ	ナデ	橙色～暗褐色	にぶい黄褐色	○	○	○	－	－	
	174	F-14	SK24	－	II Ba	深鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色～黒褐色	褐色～黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	175	F-14	SK24	－	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	
55	178	F-14	SK27	14337	II a	深鉢	頸部～胴部	ミガキ	ナデ	褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	179	F-14	SK27	13128・13458・14337	II Ba	深鉢	口縁部～底部	ミガキ，ナデ，ケズリ後ミガキ	ナデ，ケズリ後ミガキ	にぶい褐色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	沈線文，外面煤付着

第７表　縄文時代後期・晩期土器観察表（３）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色　調		胎　土					備　考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
56	180	F-15・16	SK28	SK28-71・84・100	II Aa	深鉢	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	黄橙色～橙色	黄橙色～橙色	○	○	－	○	－	沈線文, 刻目
	181	F-16	SK28	SK28-16	II Bb	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	182	F-16	SK28	SK28-130	II Bb	深鉢	口縁部～胴部	ナデ, ケズリ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黄褐色	黄褐色	○	○	○	－	－	沈線文, 外面煤付着
57	183	F-16	SK28	SK28-138	II B	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	○	○	－	沈線文
	184	F-16	SK28	－	II Ba	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	褐灰色～にぶい褐色	褐灰色～にぶい褐色	○	○	－	○	－	沈線文, 外面煤付着
	185	F-16	SK28	SK28-125・157・163・166	II B	深鉢	口縁部	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	沈線文, 綾杉文
	186	F-18	SK28	SK28-66	II G	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	明赤褐色	○	○	○	－	－	沈線文, 波状口縁, 円形凹点文
	187	F-16	SK28	－	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	188	F-16	SK28	SK28-142	II	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	赤褐色	明褐色	○	○	○	－	－	
	189	F-16	SK28	－	II	深鉢	底部	ミガキ	－	にぶい褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	内面煤付着
60	202	H-20	P104	P104-3	II a	深鉢	胴部	ミガキ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 外面炭付着
	203	H-20	P104	P104-10・11・13・14	II Ga	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	－	－	○	輝石
	204	G-19	P193	－	II D	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐色	褐色	○	○	－	－	－	
	205	H-20	P104	P104-10	IV	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	褐色	淡褐色	○	○	－	－	－	円形凹点文
	206	I-17	P85	－	II B	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	○	輝石, 波状口縁
	207	E･F-14	P90	－	II Ia	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	208	G-19	P200	－	晩期末	高坏	脚部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	
	209	F-15	P178	P178-2	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙色	灰褐色	○	○	－	－	○	輝石
62	226	H-15	II b	－	I	深鉢	胴部	LR縄文	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	227	H-21	II b	－	I	深鉢	胴部	LR縄文	ナデ	黒褐色	褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	228	F-20	II b	－	I	深鉢	胴部	LR縄文	ナデ	明赤褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	○	沈線文
	229	G-19	II c	－	I	深鉢	胴部	LR縄文	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	沈線文
63	230	F-15	II b	16817	II A	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	231	H-17	II b	7016	II A	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	232	H-26	II b	10952	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	233	G-15	II b	7255	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	234	H-15	II b	7640	II A	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	明褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	235	E-15	II b	16409	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒色	褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	236	I-17	II b	12031	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	237	F-14	II b	14236	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	238	H-17	II c	12672	II A	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	239	F-14	II b	14559	II A	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒色	明黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	240	H-16	II b	8724	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 円形凹点文
	241	F-14	II b	13965	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	赤褐色	褐色	○	○	－	－	○	輝石, 沈線文, 楕円形凹点文
	242	H-15	II c	10796	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	243	H-16	II b	11214	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	244	F-15	II b	15581	II A	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	○	輝石, 沈線文
	245	F-16	II b	15871	II B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	沈線文
	246	H-16	II b	10845	II A	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒色	にぶい黄褐色	○	○	－	○	－	
	247	G-24	II b	13850	II A	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ, ミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	－	－	－	

第８表　縄文時代後期・晩期土器観察表（４）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色　調		胎　土					備　考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
63	248	F-15	Ⅱb	15503	ⅡA	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	
	249	H-16	Ⅱb	7613	ⅡA	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	灰黄褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁, 山形凹点文
	250	F-13	Ⅱb	14249	ⅡA	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	橙色	○	○	－	－	○	輝石, 沈線文, 山形凹点文
	251	F-14	Ⅱb	14234	ⅡA	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	赤褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	楕円形凹点文
	252	H-17	Ⅱb	12521	ⅡA	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	○	輝石, 沈線文, 刻目
64	253	H-15	Ⅱc	7703・10801	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	暗褐色	褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	254	I-17	Ⅱb	12092・12094・12285	ⅡBa	深鉢	口縁部～胴部	ヨコナデ, ナデ	ナデ	明褐色	橙色～暗灰黄色	○	○	－	○	－	外面煤付着
	255	H-16	Ⅱb	1135	ⅡBa	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ, ナデ	ナデ	黒褐色～赤褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文, 三日月文, 円形凹点文, 外面煤付着
	256	G-15	Ⅱb	9175・11730	ⅡBa	深鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	赤褐色～黒褐色	赤褐色～黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文, 外面煤付着
	257	F-16	Ⅱc	17903	ⅡBa	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文, 外面煤付着
	258	F-15	Ⅱb	16593・16595・17646	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	褐灰色	○	○	－	－	－	沈線文
	259	F-20	Ⅱb	15017	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	260	H-16	Ⅱb	9965	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	○	黒雲母, 沈線文
65	261	F-15	Ⅱb	16097	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	262	G-15	Ⅱc	10451・10452・10772	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	263	G-15	Ⅱb	9170	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	264	G-15	Ⅱb	7815	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	265	H-16	Ⅱb	11317	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	266	H-17	Ⅱc	12832	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	267	I-17	Ⅱb	12368	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	268	H-15	Ⅱb	8377	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	269	H-16	Ⅱb	11041	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	270	H-16	Ⅱb	10008	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	－	－	○	輝石, 沈線文
	271	G-16	Ⅱc	4780	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	272	H-15	Ⅱb	11721	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	273	F-16	Ⅱb	17199	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	274	I-27	Ⅱb	10516	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	275	H-17	Ⅱc	8174	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	276	H-17	Ⅱb	12319	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	277	H-16	Ⅱb	6958	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	278	H-16	Ⅱb	11644	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	279	H-16	Ⅱb	10365	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	280	H-15	Ⅱb	6910	ⅡBa	深鉢	口縁部	ナデ, ミガキ	ナデ	にぶい褐色～黒褐色	にぶい褐色～黒褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	281	F-16	Ⅱb	16225・16885・17181・17182・17251	ⅡBa	深鉢	口縁部～胴部	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	暗褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 外面煤付着
66	282	H-17	Ⅱb	12848	ⅡBa	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐色～褐色	暗褐色	○	○	○	○	－	沈線文, 外面煤付着
	283	－	Ⅱb	11229・12160	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	284	H-16	Ⅱb	10644	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	285	G-16	Ⅱb	9293・9295	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 外面煤付着
	286	H-17	Ⅱb	12035・12037	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	明黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	287	F-16	Ⅱc	17769	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	摩耗一部ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	288	H-19	Ⅱb	11827	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	289	H-16	Ⅱb	9469	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文

第９表　縄文時代後期・晩期土器観察表（５）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色　調		胎　土					備　考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
66	290	F-16	Ⅱb	16807・17243	ⅡB	深鉢	口縁部～頸部	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	291	G-16	Ⅱb	10051	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	明褐色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	292	G-15	Ⅱb	7808・7813	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ,ケズリ後ミガキ	ナデ,ナデ後ミガキ	褐色	褐色～黒褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	293	H-17	Ⅱb	157・4813・8832	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	294	H-16	Ⅱb	11631	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	295	G-15	Ⅱb	7254	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	296	G-15	Ⅱb	7755	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	297	H-15	Ⅱb	8367	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	298	G-16	Ⅱc	10205	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	299	G-21	Ⅱb	14014	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
67	300	H-15	Ⅱb	9079	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	301	G-16	Ⅱb	8145	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	302	G-16	Ⅱb	9878	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	303	G-16	Ⅱb	8120・9237	ⅡBa	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ,ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	304	F-15	Ⅱb	15509	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	305	H-16	Ⅱb	9978	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	暗灰黄色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	306	I-22	Ⅱb	－	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	307	G-16	Ⅱb	10432	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	308	F-14	Ⅱb	14798	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	309	H-29	Ⅱb	18102・18108	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	310	H-16	Ⅱb	11048	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	311	5T	Ⅱb	49	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	312	H-15	Ⅱb	7719	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	313	H-16	Ⅱb	10685	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	黄色	黒色	○	○	－	－	○	輝石,沈線文
	314	G-15	Ⅱb	7759	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	315	F-16	Ⅱb	16820	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	－	－	－	
	316	H-16	Ⅱb	11175	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	317	G-21	Ⅱb	16797	ⅡBb	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	灰褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	
	318	G-16	Ⅱ	10410	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ,ミガキ?	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	
68	319	H-19	Ⅱb	11829	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	
	320	G-22	Ⅱb	14383	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	暗褐色	○	○	－	○	－	
	321	F-16	Ⅱb	15910	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	－	－	－	
	322	E-15	Ⅱb	16996	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒色	○	○	－	○	－	
	323	H-16	Ⅱb	11119	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	324	G-24	Ⅱb	－	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	
	325	H-16	Ⅱb	11295	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	326	G-23	Ⅱc	－	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	○	－	
	327	F-15	Ⅱb	16145	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁
	328	H-17	Ⅱb	12312・12394	ⅡB	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ,ナデ	ミガキ,ナデ	黒褐色～暗赤褐色	黒褐色～赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁,円形凹点文,外面煤付着
	329	H-15	Ⅱb	9053	ⅡB	深鉢	口縁部	ナデ,ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	○	－	－	沈線文,円形凹点文
	330	H-15	Ⅱc	9658・10797	ⅡB	深鉢	口縁部	ヘラミガキ	ケズリ	灰褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁
	331	H-16	Ⅱb	11682	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ケズリ後ミガキ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	○	輝石,沈線文,波状口縁
	332	G-16	Ⅱb	12039	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	摩耗の為不明	黒褐色～褐色	暗褐色	○	○	○	○	－	沈線文,波状口縁,円形凹点文
	333	G-16	Ⅱb	9303	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ,ナデ	ミガキ	褐色	黒色	○	○	－	○	－	沈線文,波状口縁
	334	H-16	Ⅱb	10672	ⅡB	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁

第10表　縄文時代後期・晩期土器観察表（6）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
68	335	H-16	Ⅱb	9699	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	黒色	○	○	－	○	－	沈線文, 波状口縁
	336	F-16	Ⅱb	17337	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁, 円形凹点文
	337	H-16	Ⅱb	12147	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁
	338	G-21	Ⅱb	16731	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁, 三日月文, 円形凹点文
	339	F-16	Ⅱb	16932	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁
	340	F-16	Ⅱc	17893	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	明褐色	○	○	－	－	○	黒雲母, 沈線文, 波状口縁, 円形凹点文
69	341	I-22	Ⅱb	2429	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	波状口縁
	342	F-16	Ⅱb	16248	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	343	H-16	Ⅱb	10302	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	－	－	－	沈線文
	344	G-15	Ⅱb	9541	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文, 楕円形凹点文
	345	H-16	Ⅱb	9104	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	346	G-14	Ⅱb	5809	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	楕円形凹点文, 三日月文
	347	G-21	Ⅱb	15177	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	○	○	○	－	－	沈線文, 円形凹点文
	348	G-22	Ⅱb	14661	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	暗茶褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	円形凹点文
	349	H-16	Ⅱb	9930	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	○	輝石, 沈線文
	350	G-15	Ⅱb	7210・7265	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 楕円形凹点文
	351	G-16	Ⅱb	10029	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 楕円形凹点文, 赤色顔料
	352	F-15	Ⅱc	17943	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい褐色	褐灰色	○	○	－	○	－	沈線文, 楕円形凹点文, 刻目
	353	F-16	Ⅱc	16302	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 楕円形凹点文
	354	H-16	Ⅱb	12188	Ⅱ B	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 楕円形凹点文
70	355	G-19	Ⅱb	15727	Ⅱ Cb	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	黒色	○	○	○	－	－	沈線文
	356	G・H-20	Ⅱb	1921・1924	Ⅱ Ca	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 円形凹点文, 刻目
	357	F-15	Ⅱb	16479・16491・17321	Ⅱ Ca	深鉢	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
71	358	H-17	Ⅱb	9675	Ⅱ Ca	深鉢	口縁部～胴部	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	黒色	黒褐色～にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	359	H-16	Ⅱb	11123	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	360	F-16	Ⅱb	17257	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	361	I-17	Ⅱb	7029	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	明褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 山形凹点文
	362	F-15	Ⅱb	17038	Ⅱ C	深鉢	口縁部～胴部	ケズリ後ミガキ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	○	○	○	○	－	沈線文, 刻目
	363	H-15	Ⅱb	7324・7733	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ナデ	黒褐色	赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 三日月形文
	364	H-19	Ⅱb	11813	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	明赤褐色	○	○	○	－	－	沈線文, 円形凹点文, 波状口縁
	365	E-15	Ⅱb	10258	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	明赤褐色	褐色	○	○	○	－	－	沈線文, 波状口縁
	366	G-14	Ⅱb	6490	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁
	367	G-21	Ⅱb	14397	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁, 楕円形凹点文
	368	F-16	Ⅱc	17367	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 波状口縁
	369	G-15	Ⅱb	6292	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	370	F-14	Ⅱb	14560	Ⅱ Ca	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	にぶい黄褐色	黒褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	371	G-16	Ⅱb	8553	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	
	372	H-16	Ⅱb	10703	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	373	F-16	Ⅱc	17702	Ⅱ C	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	明黄褐色	○	○	－	○	－	
72	374	F-16	Ⅱc	17727	Ⅱ Db	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	褐色～黒褐色	褐色～暗褐色	○	○	－	○	－	沈線文, 外面煤付着
	375	F-15	Ⅱb	16568・16668・16991・16993・16998・17033	Ⅱ Da	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色～褐色	○	○	○	○	－	沈線文

第11表　縄文時代後期・晩期土器観察表（7）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
73	376	H-15	Ⅱb	9021	ⅡD	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	赤褐色	○	○	○	－	－	沈線文,波状口縁
	377	F-15	Ⅱb	16591	ⅡD	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○	○	－	沈線文
	378	H-17	Ⅱb	11968	ⅡD	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石, 沈線文,波状口縁
	379	F-16	Ⅱb	16866	ⅡD	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	380	F-15	Ⅱb	15916	ⅡD	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	○	－	沈線文, 円形凹点文
	381	F-15	Ⅱb	16651	ⅡD	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文, 円形凹点文
	382	F-16	Ⅱb	17188	ⅡDb	深鉢	口縁部～胴部	ナデ,ミガキ	ミガキ,ナデ	暗褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文,外面煤付着
	383	H-16	Ⅱc	10208	ⅡD	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	384	F-19	Ⅱc	16779	ⅡD	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	
	385	G-15	Ⅱb	9829	ⅡD	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	○	輝石
	386	F-20	Ⅱb	15818	ⅡD	深鉢	口縁部～胴部	ナデ,ミガキ	ナデ	褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	
	387	F-20	Ⅱb	14900	ⅡD	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	○	○	－	○	－	
74	388	H-28	Ⅱb	18157・18332	ⅡEb	深鉢	口縁部～胴部	ナデ,ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	沈線文
	389	G-19	Ⅱb	12436	ⅡE	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	
	390	H-28	Ⅱb	18158	ⅡE	深鉢	口縁部	ナデ,ミガキ	ナデ後ミガキ	灰褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	○	－	
	391	F-16	Ⅱb	16202	ⅡE	深鉢	口縁部	ナデ,ミガキ	ナデ後ミガキ?	にぶい褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	外面煤付着
	392	G-19	Ⅱc	15683	ⅡE	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	393	G-16	Ⅱb	7957	ⅡE	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	沈線文, 円形凹点文
	394	F-20	Ⅱb	6775	ⅡF	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ,ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	
	395	E-13	Ⅱb	13559	ⅡF	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	暗褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	396	H-20	Ⅱc	17827	ⅡF	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	にぶい橙色	○	○	○	－	－	
	397	F-20	Ⅱb	14438	ⅡF	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ後ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	－	－	－	
	398	I-20	Ⅱb	－	ⅡF	深鉢	口縁部	ミガキ,ナデ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	－	－	
	399	H-16	Ⅱb	11712	ⅡF	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○	－	○	－	
	400	F-16	Ⅱc	17657	ⅡF	深鉢	口縁部	ヘラケズリ	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	
	401	G-23	Ⅱb	14619	ⅡF	浅鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ケズリ後ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	
	402	I-22	Ⅱb	14066	ⅡF	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	
	403	I-22	Ⅱb	2427	ⅡF	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石
	404	I-34	Ⅱb	4206	ⅡFa	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	
	405	F-20	Ⅱb	12696	ⅡF	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	灰褐色	橙色	○	○	－	－	○	輝石,波状口縁
	406	F-18	Ⅱb	－	ⅡF	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 刻目
75	407	F-19	Ⅱb	13427	ⅡF	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	
	408	G-16	Ⅱb	8500	Ⅱa	深鉢	胴部	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	409	H-19	Ⅱb	11815	Ⅱa	深鉢	胴部	ミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	○	輝石, 沈線文,楕円形凹点文
	410	H-19	Ⅱb	11817	Ⅱa	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい橙色	○	○	○	－	－	沈線文,楕円形凹点文,半月形凹点文
	411	G-15	Ⅱb	6262	Ⅱa	深鉢	胴部	ミガキ	ナデ,一部ミガキ	暗褐色	灰黄褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	412	F-15	Ⅱb	15483	Ⅱa	深鉢	胴部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	413	H-16	Ⅱb	11656	Ⅱa	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	灰黄褐色	褐灰色	○	○	－	○	－	沈線文
	414	H-16	Ⅱb	9945	Ⅱa	深鉢	胴部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	－	○	－	沈線文
	415	G-21	Ⅱb	15011	Ⅱa	深鉢	胴部	ミガキ	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	416	F-14	Ⅱb	14561	Ⅱa	深鉢	胴部	ナデ後ミガキ	ナデ,一部ミガキ	橙色	黒褐色	○	○	○	－	－	
	417	J-26	Ⅱb	10935	Ⅱb	深鉢	頸部～胴部	貝殻条痕	ケズリ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	
	418	E-19	Ⅱb	14590・15067・15087	Ⅱa	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	－	－	○	黒雲母,沈線文
	419	G-16	Ⅱb	9201・9871・9877	Ⅱa	深鉢	胴部	ナデ後ミガキ	ナデ,ミガキ	灰黄褐色	褐灰色	○	○	－	○	－	沈線文
	420	I-17	Ⅱb	12265	Ⅱa	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	貼付突帯, 刻目
76	421	G-15	Ⅱb	7792	ⅡGb	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	422	H-15	Ⅱb	8997	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文

第12表　縄文時代後期・晩期土器観察表（8）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
76	423	H-16	Ⅱb	12624	ⅡG	浅鉢	口縁部	ナデ，ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	424	I-27	Ⅱb	9752	ⅡGa	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐灰色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文，楕円形凹点文
	425	G-16	Ⅱc	10200	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	426	G-15	Ⅱb	6295	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	427	F-16	Ⅱb	16369	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗茶褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	428	G-15	Ⅱb	9557・9843	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	○	－	沈線文
	429	H-16	Ⅱb	10331	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	沈線文，刻目
	430	H-16	Ⅱb	7473	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	431	E-13	Ⅱb	14463	ⅡG	浅鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	432	G-15	Ⅱb	10455	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	433	G-15	Ⅱb	7267	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文，波状口縁
	434	F-21	Ⅱb	15130	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○	○	－	－	沈線文
	435	F-17	Ⅱb	7056	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	436	G-22	Ⅱb	14771	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	沈線文，円形凹点文
	437	I-17	Ⅱb	12375	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	○	－	－	沈線文，円形凹点文
	438	E-14	Ⅱb	14789	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	褐灰色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文（沈線間に丹の痕跡）
	439	H-16	Ⅱb	10378	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	440	G-16	Ⅱb	10168	ⅡG	浅鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	明赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	441	G-20	Ⅱb	15113	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	442	F-15	Ⅱb	16605	ⅡGa	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	443	H-17	Ⅱc	433	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	明褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	444	H-17	Ⅱc	8179	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	445	H-16	Ⅱb	10643	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	446	G-16	Ⅱc	10181	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	447	F-15	Ⅱb	16476	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	448	H-15	Ⅱb	6856	ⅡGa	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	449	H-17	Ⅱb	12306	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	450	I-17	Ⅱb	7405	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰白色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	451	F-16	Ⅱb	17558	ⅡGa	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	灰黄色	にぶい黄色	○	○	－	－	－	沈線文
	452	F-15	Ⅱb	16600	ⅡG	浅鉢	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒色	暗褐色	○	○	－	－	－	沈線文
77	453	G-15	Ⅱb	4637	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ後ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	454	G-21	Ⅱb	18261	ⅡGa	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	455	I-19	Ⅱb	1876	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	456	G-15	Ⅱb	6258	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	457	H-16	Ⅱb	10836	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	458	I-17	Ⅱb	12030	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	459	F-20	Ⅱb	14904	ⅡGa	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○	－	－	－	沈線文
	460	G-16	Ⅱc	10118	ⅡGa	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	461	I-17	Ⅱc	397	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	462	G-16	Ⅱb	9264	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	明褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	463	I-20	Ⅱb	11437	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ，ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	○	－	円形凹点文
	464	H-20	Ⅱb	2146	ⅡG	浅鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	茶褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文，円形凹点文
	465	F-15	Ⅱb	15509	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○	－	－	－	
	466	F-16	Ⅱc	17092	ⅡG	浅鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	467	H-17	Ⅱb	12117	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	468	H-17	Ⅱb	9165・9674	ⅡGa	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文，波状口縁，外面煤付着
	469	G-21	Ⅱb	14072	ⅡG	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文，波状口縁
	470	I-17	Ⅱb	11628	ⅡG	浅鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	褐色	褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	471	H-17	Ⅱb	12583	ⅡH	浅鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ，ミガキ	暗褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	外面煤付着
	472	F-14	Ⅱb	14205	ⅡH	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	473	F-18	Ⅱb	－	ⅡH	浅鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	淡褐色	淡褐色	○	○	○	－	－	
	474	F-20	Ⅱb	14447	ⅡH	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	茶褐色	○	○	○	－	－	

第13表　縄文時代後期・晩期土器観察表（9）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
78	475	J-35	Ⅱb	2694	Ⅱ Ia	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	
	476	G-23	Ⅱb	－	Ⅱ Ia	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐色	黒色	○	○	－	－	－	
	477	F-22	Ⅱc	－	Ⅱ I	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	褐色	○	○	－	－	－	
	478	J-24	Ⅱb	10918	Ⅱ I	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	橙色	○	○	－	－	－	
	479	I-33	Ⅱb	3843・3849	Ⅱ Ia	浅鉢	口縁部～胴部	ナデ,ミガキ	ナデ後ミガキ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	480	H-14	Ⅱb	8226・8227	Ⅱ I	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	
	481	G-15	Ⅱb	7230	Ⅱ Ia	浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	沈線文,刻目
79	482	F-16・18	Ⅱb	17465	Ⅱ	深鉢	胴部～底部	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色～黒褐色	にぶい赤褐色～黒褐色	○	○	○	－	○	
	483	F-21	－	11545	Ⅱ	深鉢	底部	ミガキ,ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○	○	○	－	
	484	I-35	Ⅱb	4430	Ⅱ	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	
	485	F-16	Ⅱb	17566	Ⅱ	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	
	486	G-15・16	Ⅱb	1006・1042・10425・10742	Ⅱ	深鉢	胴部～底部	ナデ	ナデ	褐色	黒色	○	○	○	－	－	
	487	H-15	Ⅱc	10807	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	488	G-17	Ⅱc	4761	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	黒色	○	○	－	－	－	
	489	I-17	Ⅱb	12032	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	490	F-15	Ⅱb	15057	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	
	491	L-36	Ⅱb	530	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	○	－	
	492	H-17	Ⅱc	12579	Ⅱ	深鉢	底部	ケズリ後ミガキ	ケズリ	にぶい黄橙色	黒色	○	○	－	－	－	
	493	F-15	Ⅱb	17014	縄文後期	深鉢	底部	指頭圧痕	ナデ	にぶい黄橙色	赤褐色	○	○	○	－	－	底部網代痕
	494	I-33	Ⅱb	3845	縄文後期	深鉢	底部	剥落	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	○	輝石,底部木葉痕
	495	G-21	Ⅱb	15448	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	底部木葉痕
	496	F-20	Ⅱb	15026	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	底部木葉痕
	497	G-20	Ⅱb	1837	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	底部木葉痕
	498	F-15	Ⅱb	－	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	底部組織痕（鯨の脊椎？）
	499	G-19	Ⅱb	15148	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ,指頭圧痕	茶褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	底部木葉痕
	500	L-36	Ⅱb	529	縄文後期	深鉢	底部	ナデ後ミガキ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	
	501	F-19	Ⅱb	144	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	橙色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	502	H-21	Ⅱb	4715	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ,ナデ	ナデ,指頭圧痕	淡褐色	淡褐色	○	○	－	－	○	輝石
	503	H-32	Ⅱb	4568	縄文後期	深鉢	底部	ナデ後ミガキ	ナデ	明黄褐色	暗褐色	○	○	○	－	－	
	504	H-16	Ⅱb	10324	縄文後期	浅鉢	底部	ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	
	505	H-21	Ⅱb	16787・16789	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	明赤褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	506	F-14	Ⅱb	13121	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	
	507	M-37	Ⅱb	997	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい橙色	○	○	○	－	－	
	508	H-16	Ⅱb	10009	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ミガキ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	
	509	J-34	Ⅱb	1436	縄文後期	深鉢	底部	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	
	510	I-37	Ⅱb	3486	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	○	輝石,指頭圧痕
	511	H-30	Ⅱb	18026	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	
80	512	F-14	Ⅱb	13182・13183	縄文後期	深鉢	胴部～底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○	－	－	
	513	F-15	Ⅱb	15052・15058	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐色	灰色	○	○	－	－	－	
	514	F-16	Ⅱb	15273	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	－	○	－	
	515	I-33	Ⅱb	4471	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	○	輝石,内面煤付着
	516	H-19	Ⅱb	11498	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	暗褐色	黄褐色	○	○	－	－	－	
	517	J-34	Ⅱb	1749	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	○	－	－	
	518	J-35	Ⅱb	1554	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○	－	－	

第14表　縄文時代後期・晩期土器観察表（10）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
80	519	F-21	IIb	15000	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	褐色	暗褐色	○	○	○	－	－	
	520	F-16	IIb	17137	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	黄褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	内面煤付着
	521	H-21	IIb	1968	縄文後期	深鉢	底部	ナデ，剥落	ナデ，指頭圧痕	淡褐色	褐色	○	○	○	－	－	
	522	I-35	IIb	4136	縄文後期	深鉢	底部	ケズリ	ミガキ	にぶい橙色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	523	I-33	IIb	3598	縄文後期	深鉢	底部	ケズリ	ナデ	明黄褐色	褐灰色	○	○	－	－	○	輝石
	524	M-33	IIc	1681	II	深鉢	底部	ケズリ	－	暗赤褐色	黒色	○	○	－	－	－	内面煤付着
	525	G-14	IIb	6696	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	526	I-23	IIb	2331	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	－	－	－	
	527	F-15	IIb	16669	II	深鉢	胴部～底部	ミガキ	ナデ	明褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	
	528	G-16	IIc	10203	II	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ，ケズリ，ケズリ後ミガキ	橙色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	
	529	F･G-20	IIb	1413	II	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙色	灰褐色	○	○	○	－	－	
	530	G-14	IIb	7866	縄文後期	深鉢	底部	ケズリ後ミガキ	ミガキ	橙色	黒色	○	○	－	－	－	
	531	H-16	IIb	10669	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	532	F-14	IIb	13968	縄文後期	深鉢	底部	剥落	ナデ	明褐灰色	黒色	○	○	－	－	－	
	533	F-14	IIb	13723	縄文後期	深鉢	底部	貝殻条痕	貝殻条痕	橙色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	
	534	F-15	IIb	17865	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙色	灰褐色	○	○	－	－	－	
	535	H-19	－	11831	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ，指頭圧痕	茶褐色	暗褐色	○	○	－	－	－	
	536	G-22	IIb	14373	縄文後期	深鉢	底部	ミガキ，ナデ	ミガキ	褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
	537	I-31	IIb	18315･18316	縄文後期	深鉢	底部	ナデ，ミガキ	ミガキ	明黄褐色	灰黄色	○	○	－	○	○	輝石
	538	F-15	IIb	15500	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	内面煤付着
	539	F-16	IIb	17224	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	灰褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	内面煤付着
	540	I-25	IIb	10530	縄文後期	深鉢	底部	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○	－	○	○	輝石
	541	G-25	IIb	14613	縄文後期	深鉢	底部	ナデ	ナデ	暗褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
108	912	H･I-17	IIb	12090	III	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	913	H-21	IIb	14048	III	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	914	H-26	IIb	9741	III	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ミガキ	橙色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	915	F-18	IIb	12943	III	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	にぶい橙色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	916	F-20	IIb	6771	III	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	917	I-20	IIb	2981	III	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	918	F-16	IIc	17806	III	深鉢	口縁部	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	919	3T	IIb	87	III	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	○	○	－	－	○	輝石，沈線文
	920	3T	IIb	82	III	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	921	I-17	IIb	11936	III	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	922	F-22	IIb	18064	III	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	923	F-20	IIc	15813	IV	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	明褐色	○	○	－	－	－	
	924	J-23	IIc	－	IV	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	－	－	○	輝石
	925	G-22	IIb	2869	縄文晩期	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	黄褐色	○	○	－	－	－	
	926	G-20	IIb	14411	縄文晩期	浅鉢	底部	ナデ後ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	
109	927	I-32	IIb	4552	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ナデ	明黄褐色	黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	928	I-33	IIb	4487	V	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ケズリ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	929	H-32	IIb	4567	V	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	赤褐色	黒色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	930	I-34	IIb	1237	V	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ケズリ後ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	931	H-31	IIb	18040	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	932	I-35	IIb	4082	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	933	I-32	IIb	3821	V	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	組織痕土器に類似，刻目突帯文
	934	K-35	IIb	913	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	935	J-34	IIb	1388	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	936	J-34	IIb	1430	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	明黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	937	J-35	IIb	1319	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	938	J-35	IIb	1644	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	明黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文

第15表　縄文時代後期・晩期土器観察表（11）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
109	939	I-28	IIb	18253	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	940	F-19	IIb	14429	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	灰褐色	褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	941	H-32	IIb	4575	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	942	H-31	IIb	18036	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	943	J-35	IIb	1530	V	深鉢	口縁部	ケズリ後ナデ	ケズリ	黒色	黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	944	K-35	IIb	827	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	945	H-28	IIb	17992	V	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	946	J-35	IIb	2705	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	明黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	947	H-24	IIb	9415	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄褐色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	948	H-31	IIb	18039	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	949	J-36	IIb	1498	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	950	I-33	IIb	3855	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	951	K-33	IIb	3028	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐色	黄橙色	○	○	－	－	○	輝石,刻目突帯文
	952	H-32	IIb	3786	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
110	953	K-34	IIb	806	V	深鉢	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	褐色	明褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	954	F-21	IIb	－	V	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	955	F-19	IIb	12416	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	茶褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文,外面煤付着
	956	G-19	IIb	15697・15698	V	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ナデ	暗褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	957	L-37	IIb	545	V	深鉢	口縁部～胴部	ケズリ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	○	－	刻目突帯文
	958	H-22	IIb	4723	V	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ケズリ,ナデ	灰茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	959	G-21	IIb	－	V	深鉢	口縁部	ナデ	ケズリ	茶褐色黒褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	960	I-33	IIb	4961	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	961	F-20	IIb	14451	V	深鉢	口縁部	ヘラナデ,ナデ	ヘラナデ,ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	962	G-16	IIb	7480	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文,波状口縁
	963	I-22	IIb	2391	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒色	褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	964	H-22	IIb	1949	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	965	H-32	IIb	3825	V	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	966	I-34	IIb	4951	V	深鉢	口縁部	ケズリ後ナデ	ナデ	黒色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	967	G-22	IIb	14381	V	深鉢	口縁部	ナデ後ケズリ	ナデ	褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	968	F-20	IIb	－	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ケズリ	黒褐色	黒褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	969	G-16	IIb	7505	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	明褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	970	I-33	IIb	4516・4517	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	浅黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	971	F-16	IIb	16216	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
111	972	J-34	IIb	2797	V	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	973	J-34	IIb	1042	V	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	974	G-15	IIb	4974	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	975	F-23	IIb	－	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	－	○	輝石,刻目突帯文
	976	F-20	IIb	1778	V	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	暗褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	977	G-19	IIb	－	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	淡褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	978	I-33	IIb	4475	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	979	I-33	IIb	4519	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	980	H-32	IIb	3808	V	深鉢	口縁部	ナデ後刻目	ケズリ後ミガキ	黒色	明黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	981	H-21	SI5	－	V	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	暗褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	982	F-19	IIb	15378	V	深鉢	口縁部	ケズリ	ナデ	橙色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	983	G-20	I	－	V	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ,指頭圧痕	黒褐色	黄褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文,外面煤付着

第16表　縄文時代後期・晩期土器観察表（12）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
111	984	J-34	Ⅱb	1607	Ⅴ	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	黒褐色	暗灰黄色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	985	H-32・I-33	Ⅱb	3793・4463・4542	Ⅴ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	明黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	986	G-21	SI6	17819	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	暗褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文,外面煤付着
	987	I-35	Ⅱb	1245	Ⅴ	深鉢	口縁部	ケズリ後ナデ	ケズリ	黒色	褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	988	F-21	Ⅱb	12963	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	989	F-20	Ⅱb	－	Ⅴ	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ナデ	褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	990	F-20	Ⅱb	15013	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒色	黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文,外面煤付着
	991	F-19	Ⅱb	－	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	992	F-23	Ⅱb	－	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	黄橙色	○	○	－	－	○	輝石,刻目突帯文
	993	H-23	Ⅱb	17546	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	灰褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	994	I-33	Ⅱb	3887	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ後ケズリ	ナデ	褐色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	995	G-19	Ⅱb	－	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	灰褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	996	I-35	Ⅱb	1276	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
112	997	I・J-33	Ⅱb	4597	Ⅴ	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	明褐色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	998	J-35	Ⅱb	1544	Ⅴ	深鉢	口縁部	ケズリ	ナデ	褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	999	I-35	Ⅱb	1559	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	1000	I-35	Ⅱb	1259	Ⅴ	深鉢	口縁部	ケズリ後ナデ	ケズリ	黒褐色	にぶい褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	1001	G-19	Ⅱb	－	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	淡褐色	淡褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1002	I-35	Ⅱb	4438	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1003	I-36	Ⅱb	4407	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	刻目突帯文
	1004	H-28	Ⅱb	17974	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1005	J-34	Ⅱb	1457	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	黒褐色	浅黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1006	F-19	Ⅱc	15671	Ⅴ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1007	G-21	Ⅱb	8258	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1008	H-28	Ⅱb	17972	Ⅴ	深鉢	口縁部	ミガキ,ナデ	ナデ	暗赤灰色	橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1009	I-35	Ⅱb	1256	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1010	H-19	Ⅱb	12442	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	淡い黄色	灰黄色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1011	I-34	Ⅱb	3577	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1012	I-36	Ⅱb	4147	Ⅴ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文,孔列文
	1013	H-23	Ⅱb	1955	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	淡褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1014	I-35	Ⅱb	4156	Ⅴ	深鉢	口縁部	ケズリ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文,波状口縁
	1015	H-22	SZa2	－	Ⅴ	深鉢	口縁部	ミガキ	ケズリ,ナデ	茶褐色	灰黄褐色	○	○	－	－	－	刻目突帯文,波状口縁
113	1016	J-38	Ⅱb	3613	Ⅵ	深鉢	口縁部	貝殻条痕	ケズリ後ナデ	黒色	黒色	○	○	○	－	－	
	1017	I-25	Ⅱb	9745	Ⅵ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	
	1018	H-30	Ⅱb	18091	Ⅵ	深鉢	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	明赤褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	
	1019	H-23	Ⅱb	14761	Ⅵ	深鉢	底部	剥落	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	底部組織痕
	1020	G-19	Ⅱb	－	Ⅵ	深鉢	底部	剥落	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	底部組織痕
114	1021	G-15	Ⅱb	11477	Ⅶ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁,口唇部刺突
	1022	J-34	Ⅱb	1396	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	波状口縁,口唇部刺突
	1023	J-34	Ⅱb	1433・1735	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	明黄褐色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁,口唇部刺突
	1024	G-23	Ⅱb	14361	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	浅黄橙色	灰白色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁,口唇部刺突
	1025	I-35	Ⅱb	4092	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐灰色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁,口唇部刺突
	1026	I-33	Ⅱb	3593	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○	○	－	－	－	沈線文,波状口縁
	1027	4T	Ⅱb	41	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	突帯文
	1028	F-35	Ⅱb	15182	Ⅶ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	突帯文

第17表　縄文時代後期・晩期土器観察表（13）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
114	1029	H-31	Ⅰ	－	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	橙色	○	○	－	－	－	ドーナツ状の浮文
	1030	J-35	Ⅱb	1756	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	○	○	輝石, 沈線文, ドーナツ状の浮文
	1031	J-34	Ⅱb	1738	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文, ドーナツ状の浮文
	1032	F-20	Ⅱb	15368	Ⅶ	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	ドーナツ状の浮文
	1033	J-34	Ⅱb	1610	Ⅶ	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	ドーナツ状の浮文
	1034	F-20	Ⅱb	14435	Ⅶ	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	－	－	－	
	1035	I-35	Ⅱb	4130	Ⅶ	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	
	1036	I-35	Ⅱb	4134	Ⅶ	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○	－	－	－	
	1037	J-34	Ⅱb	1446	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	黄灰色	○	○	－	－	－	沈線文
	1038	J-34	Ⅱb	2656	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	1039	G-20	Ⅱb	－	Ⅶ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	
	1040	J-34	Ⅱb	1460	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	
115	1041	J-34	Ⅱb	1622	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	1042	I-34	Ⅱb	4965	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	明褐色	○	○	－	－	－	
	1043	I-35	Ⅱb	2597	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	1044	I-33	Ⅱb	4477	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○	－	－	－	波状口縁, 刻目突帯文
	1045	F-18	Ⅱb	15329	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	
	1046	J-33	Ⅱb	3585	Ⅶ	深鉢	口縁部	ナデ, ミガキ	ナデ	黒褐色	灰褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	1047	J-35	Ⅱb	1763	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	1048	H-32	Ⅱb	3812	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	1049	I-35	Ⅱb	4086	Ⅶ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	にぶい橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	1050	G-23	Ⅱb	14355	Ⅷ	深鉢	口縁部	ミガキ後朱彩	ミガキ	赤色	浅黄橙色	○	○	－	－	－	突帯文, 沈線文, 赤色顔料
	1051	I-35	Ⅱb	4196	Ⅷ	深鉢	口縁部	ミガキ	剥落	にぶい赤褐色	浅黄橙色	○	○	－	－	－	突帯文, 赤色顔料
	1052	J-34	Ⅱb	1623	Ⅷ	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	赤褐色	明赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文
	1053	J-36	Ⅱb	521	Ⅷ	深鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	突帯文
	1054	L-35	Ⅱb	647	Ⅷ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐色	明褐色	○	○	－	－	－	突帯文
	1055	L-37	Ⅱb	790	Ⅷ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○	○	－	－	突帯文
	1056	L-37	Ⅱb	758	Ⅷ	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	突帯文
	1057	I-33	Ⅱb	3596	Ⅷ	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	橙色	○	○	－	－	－	突帯文
116	1058	G-20	Ⅱb	12952	弥生初頭	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	1059	G-22	SZa3	－	弥生初頭	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	1060	G-16	Ⅱb	5179	弥生初頭	甕	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい赤褐色	○	○	○	－	－	刻目突帯文
	1061	H-23	Ⅱb	9784	弥生初頭	甕	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	－	－	－	刻目
	1062	I-33	Ⅱb	3597	弥生初頭	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	褐色	○	○	－	－	－	穿孔あり
	1063	J-34	Ⅱb	1395・1399・1602	縄文晩期末～弥生初頭	壺	頸部～肩部	ミガキ	ミガキ	赤色	明赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文, ドーナツ状の浮文, 赤色顔料
	1064	M-37	Ⅱb	1001	縄文晩期末～弥生初頭	壺	頸部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	1065	L・M-37	Ⅱb	631・760	縄文晩期末～弥生初頭	壺	肩部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	橙色	○	○	－	－	－	沈線文, 刻目突帯文
	1066	H-23	Ⅱb	9406	縄文晩期末～弥生初頭	壺	肩部～胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目突帯文
	1067	I-33	Ⅱb	4498	縄文晩期末～弥生初頭	壺	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	沈線文
	1068	G-23	Ⅱb	14364	縄文晩期末～弥生初頭	壺	頸部～肩部	ミガキ	剥落	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	○	○	－	－	－	突帯文, 穿孔あり
	1069	G-23	Ⅱb	14357	縄文晩期末～弥生初頭	壺	底部	ナデ	ナデ	橙色	灰黄色	○	○	－	－	－	沈線文
	1070	F-16	Ⅱb	17226	縄文晩期末～弥生初頭	壺	底部	ミガキ剥落著しい	ミガキ剥落著しい	褐灰色	黒色	○	○	－	－	－	
	1071	I-32	Ⅱb	3801	縄文晩期末～弥生初頭	高坏	脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	－	－	－	沈線文, 赤色顔料
	1072	I-34・J-35	Ⅱb	1045・1651・1755・4238	縄文晩期末～弥生初頭	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	○	－	－	沈線文
	1073	K-34	Ⅱb	2717	縄文晩期末～弥生初頭	高坏	脚部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	－	－	

第18表　縄文時代後期土製品観察表（1）

実測番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	器種	器面調整		色　調		最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	胎　土					備考
						外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃	金雲母	他	
17	27	G-16	SI1	–	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	3.4	3.2	1.2	○	○	–	–	○	輝石
	28	G-16	SI1	–	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	黒色	3.4	3.3	0.9	○	○	–	–	–	
	29	G-16	SI1	10599	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	5.1	5.9	1.9	○	○	–	–	○	輝石
	30	G-16	SI1	11574	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	5.0	5.0	1.1	○	○	–	○	○	輝石
	31	G-16	SI1	12491	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	橙色	褐灰色	3.2	3.1	1.0	○	○	–	–	○	輝石
	32	G-16	SI1	11370	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐色	黒褐色	3.4	3.2	1.0	○	○	–	–	○	輝石
21	66	G-22	SI2	–	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	橙色	橙色	5.5	4.9	0.9	○	○	–	–	○	輝石
40	134	F-14	SQ9	SQ9-8	焼成粘土塊	指頭圧痕	–	浅黄橙色	–	9.5	9.0	5.6	○	○	–	–	–	
49	155	G-19	SK6	–	土玉	ナデ	–	橙色	にぶい橙色	1.8	2.1	1.9	○	○	–	–	○	輝石
81	542	G-14	IIc	–	円盤形土製加工品	ケズリ	ナデ	褐灰色	灰黄褐色	7.5	7.7	0.8	○	○	–	–	○	輝石
	543	G-15	IIb	9563	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄橙色	5.6	5.3	1.0	○	○	–	–	○	輝石
	544	E-15	IIb	16398	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐色	5.5	4.0	1.1	○	○	–	–	○	輝石
	545	H-16	IIb	11227	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	5.4	5.4	1.5	○	○	–	–	○	黒雲母，沈線文
	546	F-16	IIb	17598	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	褐灰色	5.2	5.5	1.2	○	○	–	○	–	
	547	I-23	IIb	15805	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	赤褐色	橙色	5.1	4.2	1.1	○	○	–	○	–	
	548	I-29	IIb	18248	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰褐色	にぶい黄褐色	5.0	4.9	0.9	○	○	–	○	○	輝石
	549	H-20	IIb	17746	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	4.7	4.5	1.0	○	○	–	–	○	輝石
	550	H-27	IIb	8866	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐色	4.7	3.6	1.1	○	○	–	–	○	輝石
	551	F-16	IIb	16836	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	4.6	4.2	1.0	○	○	–	–	○	輝石
	552	F-16	IIb	17602	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒色	黒褐色	4.4	3.2	1.3	○	○	–	–	○	輝石
	553	F-16	IIb	15964	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	暗褐色	4.4	5.4	1.1	○	○	–	–	○	輝石
	554	H-16	IIb	10693	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	灰褐色	4.4	4.2	1.2	○	○	–	–	–	
	555	H-15	IIb	10486	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	4.3	4.1	1.1	○	○	–	–	○	輝石
	556	23T	–	–	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	4.3	4.5	1.1	○	○	–	–	–	
	557	G-16	IIb	–	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	褐色	灰褐色	4.1	3.7	1.0	○	○	–	○	–	
	558	G-20	IIb	–	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	灰褐色	4.0	3.8	1.1	○	○	–	–	○	輝石
	559	I-23	IIb	15784	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰褐色	褐灰色	4.0	3.5	1.0	○	○	–	–	○	輝石
	560	F-22	IIb	14387	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	黒褐色	4.0	3.6	1.1	○	○	○	–	–	
	561	G-16	IIb	–	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	褐灰色	3.9	3.8	1.3	○	○	–	–	○	輝石
	562	F-19	IIc	17427	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	赤褐色	明褐色	3.9	4.1	0.8	○	○	–	–	○	輝石

第19表　縄文時代後期土製品観察表（2）

実測番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	器種	器面調整		色　調		最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	胎　土					備考
						外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃	金雲母	他	
81	563	G-21	Ⅱb	15445	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	明黄褐色	褐灰色	3.9	3.9	1.5	○	○	－	○	－	
	564	G-22	SZa3	－	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	3.9	3.9	0.8	○	○	－	－	－	
	565	G-21	Ⅱb	14073	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰黄褐色	黒褐色	3.9	4.2	0.9	○	○	－	－	－	
	566	F-16	Ⅱb	16259	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	黒褐色	3.7	3.6	1.0	○	○	－	－	○	輝石
	567	F-15	Ⅱb	15228	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	褐色	褐色	3.7	3.5	0.8	○	○	－	－	○	輝石
	568	H-17	Ⅱb	5538	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	3.6	3.2	1.3	○	○	－	－	○	輝石
	569	H-17	Ⅱb	11894	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰褐色	褐灰色	3.6	3.5	0.9	○	○	－	－	－	
	570	E-15	Ⅱb	16994	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい橙色	3.6	3.1	1.4	○	○	－	－	－	
	571	G-15	Ⅱb	7183	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	暗褐色	にぶい黄褐色	3.5	3.7	1.0	○	○	－	－	－	
	572	H-23	Ⅱb	14828	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	3.4	3.6	0.9	○	○	○	－	－	
	573	F-16	Ⅱb	17195	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	褐灰色	3.4	3.2	1.2	○	○	－	－	○	輝石
	574	G-16	Ⅱb	10637	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	灰黄褐色	褐灰色	3.3	3.3	1.0	○	○	－	○	－	
	575	H-17	Ⅱb	11607	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	黄灰色	3.5	3.5	1.0	○	○	－	－	○	輝石
	576	G-16	Ⅱb	6632	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	3.5	3.7	1.0	○	○	－	－	○	輝石
	577	H-21	Ⅱb	－	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	3,5	3,5	1.3	○	○	－	－	－	
	578	H-17	Ⅱb	11878	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	橙色	にぶい橙色	3.2	3.3	1.0	○	○	○	－	－	
82	579	H-28	Ⅱb	－	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	褐灰色	3.2	2.7	1.1	○	○	－	－	○	輝石
	580	G-21	Ⅱb	－	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐灰色	3.2	3.2	0.8	○	○	－	○	－	
	581	H-17	Ⅱb	12293	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	黒色	2.9	2.9	1.3	○	○	－	－	○	輝石
	582	G-15	Ⅱb	－	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	2.9	2.5	0.8	○	○	－	－	○	輝石
	583	F-20	Ⅱb	－	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	2.8	2.9	1.0	○	○	－	－	○	輝石
	584	F-20	Ⅱb	－	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	橙色	にぶい褐色	2.8	2.5	1.1	○	○	－	○	－	
	585	H-16	Ⅱb	12334	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	2.7	2.8	0.9	○	○	○	－	－	
	586	H-15	Ⅱb	5034	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	灰褐色	2.7	2.7	0.8	○	○	○	－	－	
	587	F-16	Ⅱb	1260	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	2.6	2.3	1.0	○	○	－	－	○	輝石
	588	G-15	Ⅱb	4024	円盤形土製加工品	ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	2.6	2.2	1.0	○	○	－	－	○	輝石
	589	F-16	Ⅱb	－	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	2.5	2.7	1.2	○	○	－	－	－	
	590	G-15	Ⅱb	4039	円盤形土製加工品	ナデ	ナデ	明赤褐色	橙色	2.5	2.3	1.0	○	○	○	－	－	
	591	G-14	Ⅱb	6128	円盤形土製加工品	ミガキ	ナデ	褐灰色	灰褐色	2.4	2.5	1.0	○	○	－	－	○	輝石
	592	F-15	Ⅱb	16184	土製品	ナデ，指頭圧痕	－	黒褐色	－	6.2	3.3	2.9	○	○	－	－	○	輝石

第20表　縄文時代後期石器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
18	33	G-16	SI1	10597	Ⅰc	石鏃	(2.0)	1.5	0.4	(1.0)	ホルンフェルス	先端部欠損
	34	G-16	SI1	10916	Ⅰc	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.4	黒曜石	
	35	G-16	SI1	11274-1	Ⅱb	石鏃	(1.9)	1.5	0.3	(0.8)	安山岩	先端部欠損
	36	G-16	SI1	11274-2	Ⅱb	石鏃	(1.3)	1.2	0.4	(0.4)	黒曜石	先端部欠損
	37	G-16	SI1	SI1-10下ズミ	Ⅱb	石鏃	1.7	1.0	0.2	0.3	安山岩	
	38	G-16	SI1	11539	Ⅱb	石鏃	(1.6)	(0.9)	0.2	(0.2)	安山岩	片脚欠損
	39	G-16	SI1	10640	-	石鏃	1.7	1.1	0.4	0.7	黒曜石	未製品
	40	G-16	SI1	12640	-	石鏃	1.7	1.2	0.4	0.8	黒曜石	未製品
	41	G-16	SI1	11732	-	石鏃	1.2	1.7	0.3	0.6	黒曜石	未製品
	42	G-16	SI1	10636	-	楔形石器	1.8	1.5	1.0	2.2	黒曜石	
	43	G-16	SI1	12782	-	石核	2.8	4.2	1.8	25.3	チャート	
	44	G-16	SI1	11756	Ⅳa	打製石斧	(10.9)	(6.0)	(1.9)	(140.9)	ホルンフェルス	刃部欠損
	45	G-16	SI1	12556	Ⅰa	打製石斧	(8.9)	(5.5)	2.0	(91.7)	ホルンフェルス	刃部欠損
	46	G-16	SI1	11001	Ⅳa	打製石斧	(8.4)	(4.2)	(1.6)	(64.2)	ホルンフェルス	刃部欠損
	47	G-16	SI1	10598	Ⅰa	打製石斧	(9.2)	(7.1)	(1.6)	(131.9)	ホルンフェルス	刃部欠損
	48	G-16	SI1	12652	-	打製石斧	(8.3)	(8.9)	1.5	(127.9)	ホルンフェルス	両端部欠損
	49	G-16	SI1	11284	Ⅲa	打製石斧	(8.0)	(6.2)	(1.4)	(77.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	50	G-16	SI1	12739	Ⅰa	打製石斧	(6.2)	5.5	1.5	(53.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	51	G-16	SI1	12762	-	磨製石斧	(12.1)	(5.8)	1.9	(196.3)	ホルンフェルス	刃部欠損，未製品
	52	G-16	SI1	10588	-	磨製石斧	(9.6)	5.4	1.9	(118.2)	ホルンフェルス	基部欠損
19	53	G-16	SI1	11282	-	磨・敲石	13.0	9.5	6.0	1174.0	安山岩	
	54	G-16	SI1	10905	-	磨・敲石	(4.9)	9.4	4.1	(258.7)	安山岩	上半欠損
	55	G-16	SI1	12497	-	磨・敲石	7.1	6.3	2.2	158.5	安山岩	
	56	G-16	SI1	10576	-	敲石	3.3	3.4	3.2	49.4	安山岩	
	57	G-16	SI1	11097	-	敲石	11.2	6.2	4.8	503.0	安山岩	
	58	G-16	SI1	11561	-	敲石	12.4	5.8	4.1	347.0	ホルンフェルス	
	59	G-16	SI1	10996	-	石皿	(10.2)	(18.0)	12.1	(2317.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
21	67	G-22	SI2	SI2-59	Ⅰa	打製石斧	(16.0)	(11.1)	1.6	(255.1)	ホルンフェルス	両端部欠損
	68	G-22	SI2	SI2-80	Ⅰb	打製石斧	14.6	5.9	2.5	241.6	ホルンフェルス	
	69	G-22	SI2	SI2-34	Ⅰa	打製石斧	(10.5)	(5.1)	1.9	(127.9)	ホルンフェルス	刃部欠損
	70	G-22	SI2	SI2-64	-	磨製石斧	(5.3)	3.6	1.3	(38.7)	ホルンフェルス	基部欠損
	71	G-22	SI2	SI2-54	-	磨・敲石	6.5	5.5	4.4	237.8	安山岩	
	72	G-22	SI2	SI2-104	-	石皿	(17.1)	(12.7)	(6.4)	(1070.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	73	G-22	SI2	SI2-117	-	石皿	(24.2)	(14.4)	(6.7)	(2000.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	74	G-22	SI2	SI2-83	-	石皿	(13.4)	(16.7)	(7.0)	(2410.0)	安山岩	ほぼ欠損
22	75	G-22	SI2	-	-	石刀	28.6	4.3	1.7	300.0	ホルンフェルス	朱・漆付着
23	80	G-23	SI3	17475	-	敲石	(10.4)	8.3	4.0	(472.0)	砂岩	上端欠損
26	82	H-14	SJ1	-	b	打製石斧	(5.3)	(6.4)	1.9	(46.6)	ホルンフェルス	基部欠損
31	94	H-14	SU1	7610	Ⅰa	打製石斧	27.7	12.0	2.7	868.7	頁岩	
	95	H-14	SU1	7523	Ⅰa	打製石斧	22.4	7.5	2.3	403.0	ホルンフェルス	
32	96	H-14	SU1	7521	Ⅰa	打製石斧	18.9	7.4	1.7	325.5	頁岩	
	97	H-14	SU1	7605	Ⅲa	打製石斧	24.6	9.6	2.4	608.4	ホルンフェルス	
	98	H-14	SU1	7609	Ⅳa	打製石斧	26.1	11.0	2.5	697.8	頁岩	
	99	H-14	SU1	6568	Ⅰa	打製石斧	(9.7)	(4.7)	0.8	(45.7)	粘板岩	刃部欠損
	100	H-14	SU1	7603	ⅢBa	打製石斧	(19.8)	11.6	2.4	(442.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
33	101	H-14	SU1	7522	Ⅲa	打製石斧	(16.9)	(8.1)	2.3	(259.3)	頁岩	刃部欠損
	102	H-14	SU1	7520	-	打製石斧	21.7	8.8	2.2	419.3	頁岩	未製品
	103	H-14	SU1	7608	ⅢCa	打製石斧	22.4	10.6	2.1	399.5	ホルンフェルス	
	104	H-14	SU1	7524	Ⅳa	打製石斧	21.4	9.5	1.7	321.4	ホルンフェルス	
	105	H-14	SU1	7604	ⅢCa	打製石斧	17.8	6.8	2.0	223.7	ホルンフェルス	
	106	H-14	SU1	7519	-	打製石斧	7.1	16.2	1.6	179.3	ホルンフェルス	未製品
	107	H-14	SU1	7611	-	打製石斧	(4.1)	(6.2)	(0.8)	(22.7)	粘板岩	刃部のみ
34	108	H-16	SU2	10963	Ⅰa	打製石斧	13.9	8.4	3.0	445.2	ホルンフェルス	
	109	H-16	SU2	10965	-	打製石斧	16.6	6.0	0.8	101.4	頁岩	未製品
	110	H-16	SU2	10964	-	打製石斧	5.5	12.9	1.4	151.6	ホルンフェルス	未製品
37	121	G-14	SQ1	SQ1-1	ⅢDb	打製石斧	6.0	9.3	1.4	96.5	ホルンフェルス	
	122	G-14	SQ1	SQ1-93	-	敲石	7.7	7.2	1.9	124.2	ホルンフェルス	
	123	G-14	SQ1	SQ1-20	-	磨・敲石	(4.8)	(11.4)	5.6	(323.0)	安山岩	上半欠損
	124	G-14	SQ1	SQ1-84	-	磨・敲石	(8.3)	(9.6)	5.0	(564.0)	花崗岩	上半欠損
	125	G-14	SQ1	SQ1-86	-	磨石	13.0	12.6	4.7	1153.5	安山岩	
	126	G-14	SQ1	SQ1-80	-	敲石	11.1	5.1	3.5	287.3	花崗岩	
	127	G-14	SQ1	SQ1-121	-	石皿	(36.7)	(31.3)	(16.2)	(14700.0)	安山岩	
38	130	F-16	SQ10	SQ10-7	ⅢAa	打製石斧	13.6	9.5	2.2	238.7	ハリ質安山岩	
	131	F-16	SQ10	SQ10-4	ⅢAa	打製石斧	11.0	6	1.6	137.4	ハリ質安山岩	
	132	I-27	SQ2	SQ2-4	-	敲石	6.0	5.3	4.1	188.7	安山岩	
	133	F-14	SQ3	SQ3-6	-	軽石製品	(4.6)	6.9	2.6	(30.7)	軽石	
40	135	F-19	SQ8	SQ8-19	Ⅳa	打製石斧	(12.9)	(7.0)	(1.9)	(212.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	136	F-19	SQ8	SQ8-8,14850	-	石皿	(21.8)	(20.1)	(12.5)	(6320.0)	安山岩	ほぼ欠損
	137	F-19	SQ8	SQ8-34	-	石皿	(12.0)	(17.4)	(7.6)	(2370.0)	花崗岩	ほぼ欠損
43	138	E-13・14	SQ4	SQ4-2	-	磨製石斧	(10.5)	4.8	3.2	(225.3)	ハリ質安山岩	未製品，被熱あり
	139	F-14	SQ5	SQ5-8	-	敲石	11.6	6.3	5.4	529.0	頁岩	
	140	F-20	SQ6	SQ6-13	-	砥石	(14.6)	(9.6)	(2.0)	(392.0)	砂岩	ほぼ欠損
	141	F-20	SQ6	SQ6-7	-	磨製石斧	(10.3)	(7.3)	1.1	(94.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
44	142	F-19	SQ7B	SQ7-8	Ⅲa	打製石斧	(16.0)	(7.3)	(2.2)	(309.0)	ホルンフェルス	刃部欠損
	143	F-19	SQ7A	SQ7-17	ⅢAb	打製石斧	13.6	5.7	1.3	103.1	頁岩	

第21表　縄文時代後期石器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
44	144	F-19	SQ7B	SQ7-4	ⅢAb	打製石斧	10.9	9.9	2.3	(271.8)	ホルンフェルス	基部欠損
	145	F-19	SQ7B	SQ7-10	-	石皿	28.9	24.5	12.5	6790.0	凝灰岩	
	146	F-19	SQ7A	SQ7-11	-	石皿	24.1	24.6	12.6	7450.0	花崗岩	
47	147	G-19	SK1	-	-	敲石	5.4	5.2	3.7	140.5	砂岩	
	148	E・F-14	SK2	SK2-3	-	石皿	(29.0)	(23.6)	(10.7)	(7030.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
49	156	F・G-19	SK6	SK6-38	-	打製石斧	(9.2)	(5.6)	0.8	(56.4)	ホルンフェルス	刃部欠損，未製品
	157	F・G-19	SK6	SK6-10	Ⅰb	打製石斧	17.1	5.7	1.5	165.2	頁岩	
	158	H-17	SK9	13454	Ⅳb	打製石斧	15.8	7.6	1.7	215.6	ホルンフェルス	
	159	F・G-19	SK6	SK6-11	-	打製石斧	13.8	5.2	1.5	77.1	ホルンフェルス	未製品
	160	H-17	SK9	13455	-	礫器	12.2	9.8	2.3	307.2	ホルンフェルス	
	161	F・G-19	SK6	SK6-21	-	磨・敲石	13.6	10.3	7.2	1437.5	凝灰岩	
	162	F・G-19	SK6	SK6-13	-	磨石	(11.8)	(6.5)	6.2	(695.0)	花崗岩	右側縁欠損
	163	H-17	SK9	13453	-	敲石	11.7	5.9	4.4	406.5	砂岩	
	164	F・G-19	SK6	SK6-62	-	磨・敲石	7.9	7.1	3.5	300.0	安山岩	
	165	F・G-19	SK6	SK6-12	-	敲石	4.6	3.9	3.4	89.0	砂岩	
52	169	F-13・14	SK23	SK23-8	Ⅳa	打製石斧	(11.9)	(8.6)	2.2	(167.0)	ホルンフェルス	刃部欠損
	170	F-13・14	SK23	SK23-3	Ⅳb	打製石斧	14.8	10.3	2.4	285.8	ホルンフェルス	
	171	F-13・14	SK23	SK23-6	-	石皿	(11.1)	(11.7)	(8.4)	(996.0)	花崗岩	ほぼ欠損
	172	H-17	SK19	13414	-	石皿	17.9	21.5	16.8	6440.0	凝灰岩	
53	176	F-14	SK24	-	-	磨・敲石	11.6	8.8	4.9	799.5	安山岩	
54	177	H-17	SK26	12849	-	軽石製品	(42.8)	37.2	18.9	8400.0	軽石	
58	190	F-16	SK28	SK28-209下ズミ	Ⅰc	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.6	安山岩	片脚欠損
	191	F-16	SK28	SK28-1下ズミ	Ⅰc	石鏃	1.6	1.1	0.3	0.4	安山岩	先端部欠損
	192	F-16	SK28	SK28-205下ズミ	Ⅰc	石鏃	1.6	1.1	0.3	0.5	安山岩	片脚欠損
	193	F-16	SK28	SK28-43	Ⅰc	石鏃	1.5	1.0	0.3	0.3	黒曜石	
	194	F-16	SK28	SK28-201下ズミ	Ⅱb	石鏃	1.7	1.1	0.3	0.5	安山岩	片脚欠損
	195	F-16	SK28	SK28-4下ズミ	-	石鏃	2.2	1.3	0.4	0.8	安山岩	未製品
	196	F-16	SK28	SK28-4	ⅢAa	打製石斧	14.2	8.2	1.8	168.6	ホルンフェルス	
	197	F-16	SK28	SK28-1	Ⅳa	打製石斧	18.5	10.1	0.3	430.6	ホルンフェルス	
	198	F-16	SK28	-	-	磨・敲石	11.5	9.7	4.2	534.0	安山岩	
	199	F-16	SK28	SK28-108	-	磨・敲石	12.3	6.6	4.0	401.0	安山岩	
	200	F-16	SK28	SK28-33	-	石皿	(18.0)	(13.1)	(10.9)	(2010.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	201	F-16	SK28	SK28-35	-	石皿	(24.3)	(28.0)	(12.1)	(7060.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
60	210	E・F-14	P90	-	ⅢDa	打製石斧	14.6	(11.9)	2.2	(363.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	211	E・F-14	P90	P90-2	ⅢDb	打製石斧	12.4	11.8	1.9	219.5	ホルンフェルス	
	212	F-15	P172	-	Ⅳa	打製石斧	15.6	6.9	1.7	198.3	ホルンフェルス	
	213	E・F-14	P90	P90-4	Ⅳa	打製石斧	11.6	5.4	1.8	115.8	ホルンフェルス	
	214	E・F-14	P90	P90-5	-	打製石斧	13.0	6.9	1.7	169.1	ホルンフェルス	未製品
	215	E・F-14	P90	P90-3	-	磨製石斧	(12.4)	5.2	2.7	(276.6)	ホルンフェルス	基部欠損，敲石に転用
61	216	F-14	P91	P91-2	-	磨・敲石	11.1	7.3	3.1	435.5	凝灰岩	
	217	H-20	P104	P104-16	-	磨・敲石	12.1	8.8	4.0	588.0	凝灰岩	
	218	F-15	P173	P173-1	-	磨・敲石	11.6	8.0	6.4	831.5	安山岩	
	219	E・F-14	P90	-	-	磨石	8.6	8.0	3.7	347.5	安山岩	
	220	F-14	P91	P91-11	-	磨石	7.2	6.9	2.7	175.1	凝灰岩	
	221	F-14	P91	P91-7	-	磨石	10.6	8.2	4.7	633.0	凝灰岩	
	222	G-20	P210	-	-	敲石	13.9	5.3	2.8	331.0	砂岩	
	223	G-19	P268	P268-15	-	石皿	22.6	19.7	14.4	3600.0	凝灰岩	
	224	F-14	P91	P91-9	-	石皿	16.0	13.9	14.7	2090.0	花崗岩	ほぼ欠損，脚付
	225	F-14	P268	P268－1	-	石皿	(9.2)	(12.4)	(9.4)	(1890.0)	砂岩	ほぼ欠損
83	593	I-35	Ⅱb	4177	Ⅰa	石鏃	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.8)	水晶	片脚欠損
	594	H-23	Ⅱb	1960	Ⅰa	石鏃	1.7	1.5	0.3	0.6	安山岩	
	595	I-33	Ⅱb	4491	Ⅰa	石鏃	1.3	1.3	0.2	0.2	安山岩	
	596	G-13	Ⅱb	5279	Ⅰb	石鏃	2.4	1.9	0.5	1.8	頁岩	
	597	F-14	Ⅱb	14214	Ⅰb	石鏃	2.1	1.7	0.3	0.8	安山岩	
	598	H-23	Ⅱb	9387	Ⅰb	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.8	ホルンフェルス	
	599	F-15	Ⅱb	16463	Ⅰb	石鏃	2.0	1.4	0.3	0.7	ホルンフェルス	
	600	I-33	Ⅱb	4466	Ⅰb	石鏃	2.0	(1.2)	0.4	(0.5)	水晶	片脚欠損
	601	I-37	Ⅱb	3481	Ⅰb	石鏃	1.9	1.6	0.5	1.3	黒曜石	
	602	K-34	Ⅱb	967	Ⅰb	石鏃	1.8	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
	603	J-35	Ⅱb	1115	Ⅰb	石鏃	1.9	(1.4)	0.3	(0.6)	安山岩	片脚欠損
	604	F-20	Ⅱb	15372	Ⅰb	石鏃	1.9	(1.3)	0.3	(0.4)	安山岩	片脚欠損
	605	I-33	Ⅱb	4681	Ⅰb	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.5	玉髄	
	606	H-16	Ⅱb	11040	Ⅰb	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.6	ホルンフェルス	
	607	I-33	Ⅱb	4679	Ⅰb	石鏃	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.5)	安山岩	先端部及び片脚欠損
	608	I-35	Ⅱb	4588	Ⅰb	石鏃	1.6	(1.3)	0.3	(0.4)	安山岩	片脚欠損
	609	H-16	Ⅱb	3763	Ⅰb	石鏃	(1.4)	1.5	0.3	(0.6)	頁岩	先端部欠損
	610	J-34	Ⅱb	1039	Ⅰb	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.3	安山岩	片脚欠損
	611	G-19	Ⅱb	14870	Ⅰb	石鏃	(1.5)	(1.2)	0.2	(0.4)	水晶	先端部欠損及び片脚欠損
	612	H-21	Ⅱb	12707	Ⅰb	石鏃	(1.3)	1.1	0.3	(0.4)	黒曜石	先端部欠損
	613	I-23	Ⅱb	11533	Ⅰb	石鏃	1.1	1.2	0.2	0.2	安山岩	
	614	F-16	Ⅱb	16941	Ⅰb	石鏃	1.0	1.1	0.2	0.2	黒曜石	
	615	H-14	Ⅱb	8229	Ⅰc	石鏃	(2.1)	1.5	0.3	(0.8)	チャート	先端部及び片脚欠損
	616	G-14	Ⅱb	5408	Ⅰc	石鏃	1.8	1.6	0.4	0.8	ホルンフェルス	
	617	E-16	Ⅱb	-	Ⅰc	石鏃	1.8	1.2	0.3	(0.6)	安山岩	片脚欠損
	618	G-20	Ⅱb	14412	Ⅰc	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.4	黒曜石	

第22表　縄文時代後期石器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
83	619	G-16	Ⅱc	11780	Ⅰc	石鏃	1.7	1.3	0.2	0.4	チャート	
	620	G-19	Ⅱb	5685	Ⅰc	石鏃	(1.6)	1.2	0.2	(0.4)	安山岩	先端部欠損
	621	G-22	Ⅱb	11871	Ⅰc	石鏃	(1.5)	1.3	0.3	(0.5)	安山岩	先端部欠損
	622	H-15	Ⅱb	10498	Ⅰc	石鏃	1.5	1.3	0.2	0.4	黒曜石	
	623	F-15	Ⅱb	16458	Ⅰc	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	安山岩	
	624	H-17	Ⅱb	12587	Ⅰc	石鏃	1.4	1.1	0.3	0.2	黒曜石	
	625	G-16	Ⅱb	8560	Ⅰc	石鏃	1.4	1.0	0.2	(0.2)	黒曜石（姫島）	片脚欠損
	626	H-15	Ⅱb	9708	Ⅰc	石鏃	1.6	(1.2)	0.3	(0.5)	黒曜石	片脚欠損
	627	G-13	Ⅱb	3366	Ⅰc	石鏃	(1.5)	(1.2)	0.2	(0.2)	黒曜石	片脚欠損
	628	H-15	Ⅱb	5904	Ⅰc	石鏃	1.5	1.1	0.2	0.3	黒曜石	
84	629	H-17	Ⅱb	9164	Ⅰc	石鏃	1.4	1.0	0.3	0.4	チャート	
	630	H-16	Ⅱb	11030	Ⅰc	石鏃	1.3	1.0	0.3	0.2	頁岩	
	631	H-16	Ⅱb	8811	Ⅰc	石鏃	1.4	(1.2)	0.2	(0.3)	安山岩	片脚欠損
	632	G-16	Ⅱb	7949	Ⅰc	石鏃	1.4	1.0	0.2	(0.2)	黒曜石	片脚欠損
	633	H-15	Ⅱb	5493	Ⅰc	石鏃	1.3	(1.0)	0.2	(0.3)	黒曜石	片脚欠損
	634	H-16	Ⅱb	7530	Ⅰc	石鏃	1.3	(1.0)	0.2	(0.2)	黒曜石	片脚欠損
	635	G-16	Ⅱb	7954	Ⅰc	石鏃	(1.0)	1.3	0.2	(0.3)	黒曜石	先端部欠損
	636	H-15	Ⅱb	5060	Ⅰc	石鏃	1.0	(1.4)	0.2	(0.2)	黒曜石	先端部欠損
	637	G-16	Ⅱb	8062	Ⅰc	石鏃	(1.1)	1.1	0.2	(0.2)	安山岩	先端部欠損
	638	H-16	Ⅱb	8818	Ⅱa	石鏃	1.9	(1.2)	0.3	(0.5)	黒曜石	片脚欠損
	639	E-14	Ⅱb	13529	Ⅱb	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.7	黒曜石	
	640	H-16	Ⅱb	4397	Ⅱb	石鏃	(2.1)	(1.1)	0.2	(0.3)	黒曜石	片脚欠損
	641	H-16	Ⅱb	6948	Ⅱb	石鏃	2.1	1.2	0.2	0.5	黒曜石	
	642	H-16	Ⅱb	3648	Ⅱb	石鏃	2.3	1.0	0.4	0.6	流紋岩	
	643	G-13	Ⅱb	4263	Ⅱb	石鏃	(2.0)	(1.1)	0.2	(0.4)	黒曜石	先端部及び片脚欠損
	644	F-19	Ⅱc	16778	Ⅱb	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.5	チャート	片脚欠損
	645	F-16	Ⅱc	17792	Ⅱb	石鏃	2.0	1.1	0.3	0.4	珪質頁岩	片脚欠損
	646	G-13	Ⅱb	3399	Ⅱb	石鏃	(1.9)	(1.2)	0.2	(0.3)	安山岩	片脚欠損
	647	F-16	Ⅱc	17922	Ⅱb	石鏃	2.0	(1.1)	0.3	(0.6)	ホルンフェルス	片脚欠損
	648	E-14	Ⅱb	13545	Ⅱb	石鏃	1.9	(1.2)	0.2	(0.3)	黒曜石	片脚欠損
	649	I-17	Ⅱb	12606	Ⅱb	石鏃	1.8	(1.0)	0.3	(0.3)	黒曜石（姫島）	片脚欠損
	650	G-15	Ⅱb	5011	Ⅱb	石鏃	(1.7)	(1.1)	0.2	(0.3)	チャート	片脚欠損
	651	F-15	Ⅱb	15305	Ⅱb	石鏃	1.7	1.1	0.3	0.3	チャート	
	652	H-19	Ⅱb	12440	Ⅱb	石鏃	1.7	(1.0)	0.3	(0.4)	安山岩	片脚欠損
	653	F-22	Ⅱb	14769	Ⅱb	石鏃	1.6	0.9	0.3	0.3	黒曜石	
	654	G-16	Ⅱb	10054	Ⅲ	石鏃	1.9	1.1	0.5	0.8	黒曜石	
	655	H-16	Ⅱb	8782	Ⅲ	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.9	黒曜石	
	656	G-16	Ⅱb	7948	Ⅳ	石鏃	2.3	1.6	0.4	1.5	黒曜石	未製品
	657	H-29	Ⅱb	18019	－	石鏃	(1.9)	(1.4)	0.3	(0.6)	黒曜石	両脚欠損
	658	F-22	Ⅱb	16750	－	石鏃	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.3)	黒曜石	両脚欠損
	659	H-16	Ⅱb	11664	－	石鏃	1.2	1.3	0.5	0.6	黒曜石	未製品
	660	G-16	Ⅱb	8420	－	石鏃	1.2	1.3	0.2	0.2	黒曜石（姫島）	未製品
	661	F-15	Ⅱb	16062	－	石鏃	2.5	1.7	0.4	1.8	黒曜石	未製品
	662	G-16	Ⅱb	7085	－	石鏃	2.1	1.3	0.4	1.0	チャート	未製品
	663	H-32	Ⅱb	4725	－	石鏃	(1.4)	1.4	0.3	(0.5)	黒曜石	先端部欠損，未製品
	664	H-16	Ⅱb	5139	－	石鏃	2.8	1.9	0.8	3.9	チャート	未製品
	665	H-16	Ⅱb	8591	－	石鏃	2.7	2.0	0.9	3.5	珪質頁岩	未製品
	666	F-16	Ⅱc	17901	－	石鏃	3.1	2.2	1.2	8.0	玉髄	未製品
	667	F-13	Ⅱb	14498	－	石鏃	2.3	1.7	0.5	1.7	黒曜石	未製品
85	668	F-20	Ⅱb	11418	－	ドリル	2.6	1.8	0.3	3.0	安山岩	
	669	H-16	Ⅱb	－	－	楔形石器	3.1	2.3	1.3	7.7	頁岩	
	670	H-16	Ⅱb	－	－	スクレイパー	3.6	5.7	1.3	30.8	安山岩	
	671	H-32	Ⅱb	3819	－	スクレイパー	3.5	5.2	1.3	18.1	水晶	
	672	G-22	Ⅱc	18325	－	スクレイパー	5.7	9.5	1.3	49.8	ホルンフェルス	
	673	I-26	Ⅱb	10521	－	スクレイパー	4.7	10.8	1.0	46.7	ホルンフェルス	
	674	F-15	Ⅱc	17864	－	スクレイパー	5.3	12.8	1.5	88.0	ホルンフェルス	
	675	G-15	Ⅱc	10753	－	スクレイパー	5.1	9.1	1.0	50.2	ホルンフェルス	
	676	F-16	Ⅱb	16328	－	スクレイパー	7.3	14.6	2.1	171.9	ホルンフェルス	
	677	F-20	Ⅱb	6776	－	異形石器	(3.3)	1.3	0.5	(2.1)	黒曜石	両端部欠損
	678	I-17	Ⅱb	7454	－	異形石器	2.6	1.5	0.9	2.7	黒曜石	
	679	H-15	Ⅱb	8368	－	異形石器	2.8	1.1	0.4	0.9	黒曜石	
86	680	H-20	Ⅱb	1871	Ⅰa	打製石斧	19.3	6.5	2.2	266.1	ホルンフェルス	
	681	F-14	Ⅱb	13717	Ⅰa	打製石斧	14.6	7.1	3.3	424.1	ホルンフェルス	
	682	F-16	Ⅱb	17148	Ⅰa	打製石斧	7.1	3.9	0.8	22.0	頁岩	
	683	H-27	Ⅱb	8912	Ⅰa	打製石斧	(8.5)	(6.2)	1.5	(88.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	684	H-22	Ⅱb	14058	Ⅰa	打製石斧	(12.6)	(7.7)	2.2	(296.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	685	H-16	Ⅱb	11290	Ⅰa	打製石斧	12.4	5.9	1.8	141.1	ホルンフェルス	
	686	H-14	Ⅱb	8213	Ⅰa	打製石斧	(11.3)	6.0	1.8	(126.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	687	H-16	Ⅱb	10718	Ⅰa	打製石斧	14.8	4.4	2.4	200.5	ホルンフェルス	
	688	E-19	Ⅱb	14433	Ⅰa	打製石斧	13.4	(5.4)	2.5	(245.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	689	H-15	Ⅱb	7652	Ⅰa	打製石斧	15.0	4.0	1.4	80.4	ホルンフェルス	
	690	G-21	Ⅱb	2478	Ⅰa	打製石斧	(12.6)	4.7	1.7	(121.7)	ホルンフェルス	基部欠損
	691	F-22	Ⅱc	17938	Ⅰa	打製石斧	11.9	4.9	2.3	146.3	ホルンフェルス	
	692	F-18	Ⅱc	15661	Ⅰa	打製石斧	(11.4)	5.4	1.8	(115.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	693	I-17	Ⅱb	12370	Ⅰa	打製石斧	12.0	4.7	1.3	96.0	ホルンフェルス	

第23表　縄文時代後期石器観察表（4）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
86	694	F-15	Ⅱb	16512	Ⅰa	打製石斧	(8.1)	3.1	1.9	(65.2)	ホルンフェルス	刃部欠損
87	695	H-20	Ⅱb	12457	Ⅰa	打製石斧	(12.3)	(7.6)	1.0	(110.0)	ホルンフェルス	刃部欠損
	696	I-27	Ⅱb	10526	Ⅰa	打製石斧	(8.6)	(6.3)	3.2	(184.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	697	H-21	Ⅱb	14599	Ⅰa	打製石斧	(9.0)	(6.0)	(3.2)	(196.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	698	H-17	Ⅱc	12532	Ⅰa	打製石斧	(9.8)	(5.5)	1.4	(98.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	699	G-16	Ⅱc	10170	Ⅰa	打製石斧	(10.0)	4.8	1.4	(80.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	700	G-23	Ⅱb	14082	Ⅰa	打製石斧	9.3	3.9	1.2	54.3	ホルンフェルス	
	701	F-16	Ⅱb	16203	Ⅰa	打製石斧	(10.1)	4.6	2.2	(124.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	702	I-22	Ⅱb	2419	Ⅰa	打製石斧	(11.3)	4.6	2.1	(127.3)	ホルンフェルス	両端部欠損
	703	H-21	Ⅱb	16894	Ⅰa	打製石斧	9.3	5.0	1.7	75.7	頁岩	
	704	I-34	Ⅱb	4207	Ⅰa	打製石斧	(10.9)	3.8	2.7	(121.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	705	G-24	Ⅱb	13847	Ⅰb	打製石斧	7.3	3.6	1.3	45.9	ホルンフェルス	
	706	H-21	Ⅱb	17463	Ⅰb	打製石斧	(9.4)	5.3	2.6	(165.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	707	H-28	Ⅱb	18330	Ⅰb	打製石斧	(10.6)	5.1	1.4	(88.0)	ホルンフェルス	基部欠損
	708	H-15	Ⅱb	6908	Ⅰb	打製石斧	(8.3)	(5.6)	1.9	(99.4)	ホルンフェルス	刃部欠損
	709	F-15	Ⅱc	17874	Ⅰb	打製石斧	10.3	2.7	10.1	43.1	ホルンフェルス	
	710	H-16	Ⅱb	9113	Ⅰb	打製石斧	12.2	4.4	2.2	122.4	ホルンフェルス	
	711	F-19	Ⅱc	15728	Ⅰb	打製石斧	12.1	4.9	2.0	143.0	ホルンフェルス	
	712	H-17	Ⅱc	12578	Ⅰb	打製石斧	(11.4)	(5.2)	2.6	(167.9)	ホルンフェルス	刃部欠損
	713	F-15	Ⅱb	17016	Ⅰb	打製石斧	12.2	3.1	1.6	84.3	ホルンフェルス	
88	714	H-16	Ⅱb	11938	Ⅰb	打製石斧	19.2	7.6	1.7	270.0	ホルンフェルス	
	715	H-17	Ⅱb	12313	Ⅰb	打製石斧	18.4	7.2	1.7	238.1	ホルンフェルス	
	716	G-15	Ⅱb	10446	Ⅰb	打製石斧	15.9	6.1	2.0	230.6	ホルンフェルス	
	717	F-20	Ⅱb	14438	Ⅰb	打製石斧	(14.1)	7.4	1.7	(181.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	718	I-22	Ⅱb	11071	Ⅰb	打製石斧	(13.2)	5.5	1.9	(156.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	719	J-25	Ⅱb	11180	Ⅰb	打製石斧	14.5	5.9	1.9	172.3	ホルンフェルス	
	720	H-16	Ⅱb	11937	Ⅰb	打製石斧	14.9	4.2	2.2	162.0	ホルンフェルス	
	721	H-14	Ⅱb	8944	Ⅰb	打製石斧	12.6	4.9	2.7	222.9	ホルンフェルス	
	722	G-21	SI5	17820	Ⅰb	打製石斧	12.2	5.8	1.4	97.8	ホルンフェルス	
	723	E-14	Ⅱb	14169	Ⅰb	打製石斧	(7.4)	2.7	1.7	(50.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	724	J-23	Ⅱb	15397	Ⅰb	打製石斧	10.3	3.8	1.7	93.5	ホルンフェルス	
	725	H-16	Ⅱb	10013	Ⅰb	打製石斧	(9.6)	6.6	2.7	(198.2)	ホルンフェルス	刃部欠損
	726	I-17	Ⅱb	11930	Ⅰb	打製石斧	(10.6)	(8.2)	1.3	(108.3)	ホルンフェルス	基部欠損
89	727	I-17	Ⅱb	12288	Ⅰb	打製石斧	(8.7)	5.9	3.3	(252.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	728	G-21	Ⅱb	16905	Ⅰb	打製石斧	(11.8)	7.2	2.4	(188.4)	ハリ質安山岩	刃部欠損
	729	G-21	Ⅱb	17516	Ⅰb	打製石斧	(10.8)	5.1	2.1	(162.4)	ホルンフェルス	刃部欠損
	730	H-17	Ⅱb	11899	Ⅰb	打製石斧	(8.1)	3.4	1.5	(49.5)	ホルンフェルス	基部欠損
	731	H-28	Ⅱb	18237	Ⅰb	打製石斧	(7.7)	(4.0)	1.4	(56.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	732	G-15	Ⅱc	10779	Ⅱa	打製石斧	15.2	8.3	2.1	304.6	ホルンフェルス	
	733	F-20	Ⅱb	15370	Ⅱa	打製石斧	13.8	8.6	1.4	149.2	ホルンフェルス	
	734	H-24	Ⅱb	13381	Ⅱa	打製石斧	(10.9)	8.2	1.7	(162.7)	ホルンフェルス	基部欠損
	735	H-19	Ⅱb	11868	Ⅱa	打製石斧	11.8	6.2	1.5	126.8	ホルンフェルス	
	736	F-18	Ⅱc	18056	Ⅱa	打製石斧	(11.2)	(5.6)	2.1	(136.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	737	F-15	Ⅱc	17647	Ⅱa	打製石斧	12.3	8.3	1.6	148.0	ホルンフェルス	
	738	I-17	Ⅱc	396	Ⅱa	打製石斧	(12.3)	9.0	1.7	(153.3)	ホルンフェルス	基部欠損
90	739	E-14	Ⅱb	14183	Ⅱb	打製石斧	12.9	9.6	1.9	234.2	ホルンフェルス	
	740	H-23	Ⅱb	14762	Ⅱb	打製石斧	(10.3)	10.6	1.2	(138.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	741	F-15	Ⅱb	17062	Ⅱb	打製石斧	15.4	6.4	1.4	150.6	頁岩	
	742	F-15	Ⅱb	16493	Ⅱb	打製石斧	11.9	5.6	2.1	163.4	ホルンフェルス	
	743	G-15	Ⅱb	10435	Ⅱb	打製石斧	(11.8)	(6.3)	2.2	(180.6)	ホルンフェルス	刃部欠損
	744	H-15	Ⅱb	7627	Ⅱb	打製石斧	(8.6)	(6.3)	1.9	(127.3)	ホルンフェルス	両端部欠損
	745	G-21	Ⅱb	17963	ⅢAa	打製石斧	9.3	7.0	1.2	81.8	ホルンフェルス	
	746	H-15	Ⅱb	7716	ⅢAa	打製石斧	(11.1)	(5.2)	1.3	(111.6)	ホルンフェルス	両端部欠損
	747	G-16	Ⅱb	9880	ⅢAa	打製石斧	12.1	7.7	1.8	174.0	ホルンフェルス	
	748	G-15	Ⅱb	16804	ⅢAa	打製石斧	13.6	6.9	1.4	110.5	ホルンフェルス	
	749	F-15	Ⅱb	16105	ⅢAa	打製石斧	12.5	6.7	1.6	123.2	ホルンフェルス	
	750	F-20	Ⅱb	12691	ⅢAa	打製石斧	5.6	4.2	1.0	21.1	ホルンフェルス	
91	751	H-21	Ⅱb	17462	ⅢAa	打製石斧	12.7	8.9	2.4	189.9	ホルンフェルス	
	752	E-14	Ⅱb	14143	ⅢAb	打製石斧	(12.0)	11.1	1.3	(213.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	753	G-19	Ⅱb	14603	ⅢAb	打製石斧	13.8	8.6	2.0	189.6	ホルンフェルス	
	754	H-15	Ⅱb	7700	ⅢAb	打製石斧	12.1	8.4	2.2	190.1	ホルンフェルス	
	755	G-21	Ⅱb	14401	ⅢAb	打製石斧	(10.1)	9.1	1.4	(113.6)	ホルンフェルス	基部欠損
	756	H-19	Ⅱb	11867	ⅢAb	打製石斧	(9.2)	7.6	2.1	(167.2)	ホルンフェルス	基部欠損
	757	H-15	Ⅱb	9006	ⅢBa	打製石斧	12.6	4.5	1.0	65.7	ホルンフェルス	
	758	G-22	Ⅱb	11444	ⅢBa	打製石斧	17.0	10.5	2.3	352.3	ホルンフェルス	
	759	F-15	Ⅱb	16805	ⅢBa	打製石斧	13.3	8.8	1.6	152.2	ホルンフェルス	
92	760	G-15	Ⅱb	9531	ⅢBa	打製石斧	13.4	(8.8)	2.1	(219.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	761	I-22	Ⅱb	11072	ⅢBa	打製石斧	(10.3)	8.2	0.9	(90.0)	ホルンフェルス	基部欠損
	762	H-16	Ⅱb	10696	ⅢBb	打製石斧	(9.8)	5.3	1.6	(80.8)	ホルンフェルス	基部欠損
	763	G-15	Ⅱc	11063	ⅢCa	打製石斧	10.5	4.2	0.9	29.5	ホルンフェルス	
	764	F-19	Ⅱb	15362	ⅢCa	打製石斧	18.7	8.4	1.9	285.5	ホルンフェルス	
	765	J-35	Ⅱb	1528	ⅢCa	打製石斧	19.1	7.9	1.6	251.4	ホルンフェルス	
	766	H-14	Ⅱb	8225	ⅢCa	打製石斧	21.5	10.6	1.7	420.2	ホルンフェルス	
	767	H-14	Ⅱb	8235	ⅢCa	打製石斧	16.2	8.8	2.0	280.0	ホルンフェルス	
93	768	H-14	Ⅱb	8224	ⅢCa	打製石斧	17.2	6.2	2.8	273.4	ホルンフェルス	

第24表　縄文時代後期石器観察表（5）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
93	769	G-16	Ⅱb	9633	ⅢCb	打製石斧	13.4	7.3	1.2	111.4	ホルンフェルス	
	770	I-22	Ⅱb	2398	Ⅲa	打製石斧	(10.0)	(6.3)	2.4	(156.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	771	I-27	Ⅱb	10518	Ⅲa	打製石斧	(11.6)	7.5	1.7	(163.7)	ホルンフェルス	刃部欠損
	772	I-33	Ⅱb	4497	Ⅲa	打製石斧	(9.6)	(7.6)	1.4	(78.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	773	H-16	Ⅱb	8614	Ⅲa	打製石斧	(7.9)	4.1	1.7	(57.8)	ホルンフェルス	刃部欠損
	774	H-16	Ⅱb	9910	Ⅲa	打製石斧	8.9	10.0	1.4	116.3	ホルンフェルス	
	775	G-14	Ⅱb	8951	Ⅲa	打製石斧	(13.4)	(9.5)	2.1	(251.0)	ホルンフェルス	刃部欠損
	776	I-35	Ⅱb	1085	Ⅲa	打製石斧	(10.4)	(8.0)	1.9	(157.1)	ホルンフェルス	刃部欠損
	777	I-24	Ⅱb	14594	Ⅲb	打製石斧	(17.5)	(7.9)	1.6	(223.7)	ホルンフェルス	刃部欠損
94	778	H-16	Ⅱb	10016	Ⅲb	打製石斧	(12.9)	7.6	1.9	(201.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	779	H-14	Ⅱb	8945	Ⅲb	打製石斧	(9.5)	(6.6)	2.1	(153.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	780	F-16	Ⅱb	16264	Ⅲb	打製石斧	(10.7)	(7.7)	2.2	(189.8)	ハリ質安山岩	刃部欠損
	781	E-15	Ⅱb	16401	Ⅲb	打製石斧	(11.4)	(7.4)	1.8	(141.3)	ハリ質安山岩	刃部欠損
	782	I-37	Ⅱb	3478	Ⅲb	打製石斧	(8.6)	(7.6)	1.3	(62.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
	783	F-16	Ⅱc	17652	Ⅳb	打製石斧	(9.4)	4.9	1.9	(82.8)	ホルンフェルス	基部欠損，再加工
	784	F-15	Ⅱb	16576	Ⅳa	打製石斧	14.2	8.1	1.9	213.9	ホルンフェルス	
	785	G-16	Ⅱb	9634	Ⅳa	打製石斧	20.9	13.8	2.8	608.8	ホルンフェルス	
	786	F-15	Ⅱb	16577	Ⅳa	打製石斧	(16.1)	(7.8)	2.2	(245.5)	ホルンフェルス	刃部欠損
95	787	G-14	Ⅱc	9506	Ⅳa	打製石斧	13.2	6.8	2.0	169.0	ホルンフェルス	
	788	G-16	Ⅱb	8068	Ⅳa	打製石斧	12.1	7.9	1.3	117.2	ホルンフェルス	
	789	H-17	Ⅱb	12122	Ⅳb	打製石斧	16.7	7.7	2.1	311.5	ホルンフェルス	
	790	I-17	Ⅱb	11929	a	打製石斧	8.3	6.5	2.0	120.8	ホルンフェルス	再加工
	791	G-19	Ⅱb	12434	－	打製石斧	(10.1)	8.4	1.4	(114.0)	ホルンフェルス	基部欠損，未製品
	792	H-29	Ⅱb	18013	－	打製石斧	(10.5)	6.2	1.4	(91.0)	ホルンフェルス	刃部欠損，未製品
	793	F-19	Ⅱb	15364	－	打製石斧	14.4	4.9	1.6	119.3	ホルンフェルス	未製品
	794	G-16	Ⅱb	8414	－	打製石斧	11.4	(6.2)	1.4	(105.8)	ホルンフェルス	左側縁欠損，未製品
	795	H-15	Ⅱb	9942	－	打製石斧	11.3	5.9	1.4	106.0	ホルンフェルス	未製品
	796	H-15	Ⅱb	9800	－	打製石斧	12.6	6.0	0.8	58.5	ホルンフェルス	未製品
96	797	F-20	Ⅱc	15755	－	磨製石斧	7.8	3.3	2.2	112.4	結晶片岩様緑色岩	
	798	I-17	Ⅱb	12254	－	磨製石斧	(9.3)	4.9	1.7	(123.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	799	H-21	Ⅱb	14043	－	磨製石斧	(7.5)	(4.2)	1.7	(42.5)	ホルンフェルス	2/3欠損
	800	H-15	Ⅱb	9042	－	磨製石斧	(6.5)	4.6	1.4	(57.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	801	G-15	Ⅱb	5471	－	磨製石斧	(5.4)	7.7	1.5	(70.1)	ホルンフェルス	基部欠損
	802	5T	－	48	－	磨製石斧	(5.1)	6.1	1.0	(44.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	803	H-16	Ⅱb	7476	－	磨製石斧	(2.2)	(4.8)	(0.8)	(9.0)	ホルンフェルス	刃部のみ
	804	G-23	Ⅱb	14094	－	磨製石斧	(5.5)	5.8	1.0	(32.6)	ホルンフェルス	基部欠損
	805	I-34	Ⅱb	1586	－	磨製石斧	(4.9)	5.3	2.2	(78.4)	ホルンフェルス	基部欠損
	806	F-15	Ⅱb	15473	－	磨製石斧	(3.9)	4.4	1.1	(20.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	807	G-20	Ⅱb	1922	－	磨製石斧	(7.1)	5.1	3.3	(172.1)	ホルンフェルス	基部欠損
	808	F-19	Ⅱb	12414	－	磨製石斧	(7.5)	4.2	1.7	(68.3)	ホルンフェルス	基部欠損
	809	G-15	Ⅱb	7797	－	磨製石斧	(7.1)	4.3	1.0	(33.9)	ホルンフェルス	基部欠損
	810	H-27	Ⅱb	9734	－	磨製石斧	(5.6)	5.0	3.1	(78.4)	砂岩	基部欠損
	811	G-13	Ⅱc	5686	－	磨製石斧	(9.8)	5.8	3.2	(313.9)	ホルンフェルス	両端部欠損
	812	G-16	Ⅱb	7500	－	磨製石斧	(6.3)	4.0	1.8	(44.5)	ホルンフェルス	基部欠損
	813	G-14	Ⅱb	6457	－	磨製石斧	(4.9)	(2.9)	(3.0)	(37.4)	ホルンフェルス	刃部のみ
	814	I-32	Ⅱb	1709	－	磨製石斧	(8.9)	(4.5)	(3.6)	(169.3)	ホルンフェルス	刃部欠損
	815	G-23	Ⅱb	13866	－	磨製石斧	(9.4)	(4.1)	2.6	(117.2)	ホルンフェルス	刃部欠損
	816	G-13	Ⅱb	3348	－	磨製石斧	(5.9)	(4.8)	(2.1)	(77.4)	ホルンフェルス	刃部欠損
	817	G-15	Ⅱb	5983	－	磨製石斧	(6.4)	(2.1)	1.5	(27.9)	ホルンフェルス	両端部欠損，擦切技法
97	818	F-15	Ⅱb	16568	－	磨製石斧	14.3	5.2	2.6	235.8	ホルンフェルス	未製品
	819	G-14	Ⅱb	8320	－	磨製石斧	(11.9)	4.2	2.2	(157.6)	ホルンフェルス	基部欠損
	820	H-14	Ⅱb	5461	－	磨製石斧	(5.3)	(2.7)	1.6	(17.3)	ホルンフェルス	両端部欠損，擦切技法
	821	G-15	Ⅱb	4914	－	磨製石斧	(5.3)	(4.4)	(2.4)	(75.3)	ホルンフェルス	両端部欠損
	822	F-21	Ⅱb	17930	－	礫器	7.3	8.0	1.7	113.2	ホルンフェルス	
	823	H-15	Ⅱc	10830	－	礫器	7.1	7.7	1.7	99.9	ホルンフェルス	
	824	H-17	Ⅱb	12329	－	礫器	7.1	8.0	2.2	127.9	ホルンフェルス	
	825	H-16	Ⅱb	10018	－	礫器	8.1	7.0	2.4	174.6	ホルンフェルス	
	826	H-15	Ⅱb	5896	－	礫器	7.8	7.2	1.7	94.9	ホルンフェルス	
98	827	H-16	Ⅱb	9946	－	磨・敲石	16.3	10.8	5.7	1245.5	安山岩	
	828	H-15	Ⅱb	7658	－	磨・敲石	13.8	11.6	8.8	2222.0	安山岩	
	829	G-19	Ⅱb	15705	－	磨・敲石	10.2	6.6	3.6	332.5	安山岩	
	830	H-16	Ⅱb	11037	－	磨・敲石	5.9	5.4	1.9	97.0	砂岩	被熱あり
	831	F-13	Ⅱb	14303	－	磨・敲石	11.6	8.9	4.4	784.5	安山岩	
	832	G-21	Ⅱb	15008	－	磨・敲石	10.6	9.4	4.5	723.0	砂岩	被熱あり
	833	H-15	Ⅱc	8964	－	磨・敲石	15.3	14.5	7.9	2442.0	安山岩	
	834	G-16	Ⅱb	9632	－	磨・敲石	13.1	(10.5)	5.0	(1120.5)	安山岩	左側縁欠損
99	835	G-14	Ⅱb	6721	－	磨・敲石	10.4	11.0	6.0	904.5	安山岩	被熱あり
	836	G-21	Ⅱb	14074	－	磨・敲石	11.3	10.7	4.1	763.0	安山岩	
	837	G-15	Ⅱb	3981	－	磨・敲石	8.4	7.8	5.8	582.0	安山岩	
	838	H-19	Ⅱb	12438	－	磨・敲石	11.5	9.5	5.6	861.0	安山岩	
	839	H-16	Ⅱb	12338	－	磨・敲石	11.5	10.2	6.0	882.0	安山岩	
	840	G-15	Ⅱb	7250	－	磨・敲石	9.8	9.2	4.9	714.0	安山岩	被熱あり
	841	G-14	Ⅱb	6491	－	磨・敲石	11.6	9.4	5.5	1026.5	安山岩	被熱あり
	842	I-22	Ⅱb	14592	－	磨・敲石	9.0	6.8	4.2	346.0	砂岩	

第25表　縄文時代後期石器観察表（6）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
99	843	F-20	Ⅱb	16897	－	磨・敲石	10.1	7.8	2.9	346.5	安山岩	
	844	F-15	Ⅱb	16656	－	磨・敲石	5.9	5.0	2.3	99.5	砂岩	
	845	F-15	Ⅱb	16182	－	磨・敲石	5.7	5.0	2.5	98.4	砂岩	
	846	H-15	Ⅱb	7701	－	磨・敲石	6.1	6.4	3.0	198.0	砂岩	
	847	H-19	Ⅱb	11836	－	磨・敲石	6.7	6.4	2.7	175.0	砂岩	
	848	H-16	Ⅱb	9944	－	磨・敲石	7.9	7.4	2.7	225.0	安山岩	
100	849	G-15	Ⅱb	9640	－	磨・敲石	10.9	7.7	4.4	505.0	花崗岩	
	850	F-15	Ⅱb	16571	－	磨・敲石	8.1	7.7	5.0	401.0	砂岩	
	851	F-16	Ⅱb	16840	－	磨・敲石	7.4	7.0	4.1	305.0	安山岩	
	852	E-13	Ⅱb	14527	－	磨石	5.7	5.8	3.2	149.5	花崗岩	
	853	G-20	Ⅱc	15719	－	敲石	9.7	8.5	4.0	434.0	安山岩	
	854	F-14	Ⅱb	17306	－	敲石	12.3	9.5	5.6	1021.0	安山岩	被熱あり
	855	G-15	Ⅱb	11592	－	敲石	11.9	8.3	7.2	1000.0	花崗岩	
	856	G-16	Ⅱb	11013	－	敲石	12.6	12.0	10.8	2089.0	花崗岩	
	857	G-16	Ⅱb	10415	－	敲石	15.4	11.3	9.0	2184.0	花崗岩	
101	858	H-17	Ⅱb	12614	－	敲石	13.6	7.8	6.6	1030.5	ホルンフェルス	
	859	G-15	Ⅱb	10259	－	敲石	14.6	8.0	6.8	973.5	ホルンフェルス	
	860	H-16	Ⅱb	12335	－	敲石	16.3	7.8	6.3	1026.0	ホルンフェルス	
	861	G-15	Ⅱb	7297	－	敲石	12.9	6.6	5.8	713.5	砂岩	
	862	G-15	Ⅱb	6569	－	敲石	14.7	6.3	5.1	763.0	ホルンフェルス	
	863	H-14	Ⅱb	8300	－	敲石	8.8	7.7	7.2	346.5	花崗岩	
	864	G-21	Ⅱb	16903	－	敲石	(8.8)	3.8	3.4	(175.0)	ホルンフェルス	上端欠損
	865	G-14	Ⅱb	6492	－	敲石	12.9	5.4	5.0	533.5	砂岩	
	866	G-15	Ⅱb	16034	－	敲石	8.6	7.9	5.3	424.0	安山岩	
	867	H-16	Ⅱb	9119	－	敲石	7.7	7.1	3.3	244.5	砂岩	
	868	E-15	Ⅱb	17316	－	敲石	5.5	3.0	1.7	44.0	砂岩	
	869	H-16	Ⅱb	12621	－	敲石	11.7	4.2	2.8	244.6	ホルンフェルス	
102	870	H-16	Ⅱb	11939	－	敲石	7.1	7.6	(4.2)	(293.5)	ホルンフェルス	裏面欠損
	871	H-16	Ⅱb	11120	－	敲石	8.5	5.9	3.4	218.9	砂岩	
	872	H-16	Ⅱb	8746	－	敲石	7.9	6.2	4.8	348.5	ホルンフェルス	
	873	H-17	Ⅱc	11603	－	敲石	8.2	6.7	2.4	230.6	砂岩	
	874	F-20	Ⅱb	1776	－	敲石	10.3	3.2	3.3	163.0	砂岩	
	875	G-15	Ⅱb	7244	－	敲石	7.6	4.7	4.0	206.5	安山岩	
	876	G-15	Ⅱb	7235	－	敲石	4.8	4.8	4.1	98.6	安山岩	
	877	E-14	Ⅱb	13805	－	敲石	4.9	4.5	4.5	135.0	安山岩	
103	878	G-20	Ⅱb	1919	－	石皿	(22.3)	(29.0)	15.7	(13300.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	879	G-16	Ⅱb	9212	－	石皿	(27.2)	(30.2)	12.6	(13900.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	880	F-19	Ⅱb	11070	－	石皿	(23.2)	(15.3)	(17.4)	(6550.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	881	G-15	Ⅱb	9526	－	石皿	(17.6)	(29.3)	12.0	(7920.0)	花崗岩	ほぼ欠損，被熱あり
104	882	F-15	Ⅱc	17611	－	石皿	(23.5)	(27.4)	14.8	(8900.0)	凝灰岩	ほぼ欠損，被熱あり
	883	H-17	Ⅱb	8861	－	石皿	(32.5)	(28.2)	13.3	(9230.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	884	G-23	Ⅱb	14571	－	石皿	(21.8)	(22.6)	15.2	(7780.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	885	F-20	Ⅱb	14436	－	石皿	(20.9)	(16.6)	(11.3)	(5760.0)	花崗岩	ほぼ欠損，被熱あり
	886	G-23	Ⅱb	14573	－	石皿	(17.9)	(18.0)	(10.3)	(2810.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
105	887	J-26	Ⅱb	11188	－	石皿	(26.2)	(17.3)	10.7	(6740.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	888	H-15	Ⅱc	10803	－	石皿	(21.9)	(16.5)	12.2	(6430.0)	花崗岩	ほぼ欠損，被熱あり
	889	G-16	Ⅱb	10729	－	石皿	(20.7)	(18.9)	6.5	(2870.0)	安山岩	ほぼ欠損
	890	H-16	Ⅱc	12862	－	石皿	(29.1)	(16.2)	13.2	(8650.0)	砂岩	ほぼ欠損，被熱あり
	891	G-23	Ⅱb	14572	－	石皿	(35.0)	(21.6)	13.4	(10400.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	892	F-20	Ⅱb	14927	－	石皿	(17.8)	(21.9)	(13.0)	(6400.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
106	893	H-15	Ⅱc	8983	－	石皿	(24.8)	(21.7)	9.8	(5950.0)	砂岩	ほぼ欠損，被熱あり
	894	G-15	Ⅱc	11729	－	石皿	(29.3)	(21.3)	8.1	(5240.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	895	F-19	Ⅱb	14844	－	石皿	(20.0)	(16.2)	11.4	(4210.0)	安山岩	ほぼ欠損，被熱あり
	896	G-20	Ⅱb	15161	－	石皿	(20.1)	(18.2)	15.9	(5960.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
	897	G-16	Ⅱb	9286	－	石皿	(21.0)	(13.3)	11.1	(2790.0)	安山岩	ほぼ欠損
	898	H-17	－	11111	－	石皿	(18.5)	(13.8)	11.9	(4890.0)	安山岩	ほぼ欠損
	899	F-19	Ⅱb	14425	－	石皿	(17.5)	(13.2)	(10.9)	(2630.0)	凝灰岩	ほぼ欠損
107	900	F-15	Ⅱb	12413	－	石皿	(22.8)	(13.5)	15.2	(4800.0)	安山岩	ほぼ欠損
	901	F-20	Ⅱb	1780	－	石皿	(17.1)	(13.9)	9.7	(2750.0)	安山岩	ほぼ欠損
	902	H-15	Ⅱc	10831	－	砥石	8.2	9.7	7.0	595.0	花崗岩	
	903	H-17	Ⅱc	9687	－	砥石	7.2	5.5	2.8	146.8	砂岩	
	904	H-15	Ⅱb	9711	－	砥石	13.4	13.2	5.6	215.6	砂岩	
	905	F-15	Ⅱc	17622	－	用途不明石器	7.5	(6.8)	2.0	(53.0)	凝灰岩	わずかに欠損，被熱あり
	906	G-14	Ⅱb	6201	－	用途不明石器	7.2	(4.2)	1.7	(38.5)	凝灰岩	ほぼ欠損，被熱あり

第26表　縄文時代後期装飾品観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
107	907	G-13	Ⅱb	5000	－	垂飾	5.5	1.2	1.3	12.1	ヒスイ	
	908	G-16	Ⅱb	8538	－	丸玉	1.1	1.1	1.0	2.0	ヒスイ	
	909	G-20	Ⅰ	17302	－	丸玉	1.0	1.0	0.7	1.3	ヒスイ	
	910	F-15	Ⅱb	16315	－	勾玉	1.7	1.1	0.9	1.4	結晶片岩様緑色岩	
	911	－	－	8150	－	管玉	1.3	0.7	5.1	0.8	結晶片岩様緑色岩	

（6）小結

縄文時代の調査では，縄文時代後期中葉から縄文時代晩期末（一部弥生初頭を含む）の遺構と遺物が検出された。遺構と遺物（土器・石器）の検討を行い，場の機能を復元することで小結としたい。

遺構

縄文時代後期では，竪穴住居跡３軒，埋設土器12基，石斧集積遺構２基，集石遺構11基，落とし穴２基，土坑26基，ピットが複数検出されており，多様な機能をもった集落であったことが窺われる。それらの遺構の大半は，東南部九州の縄文時代後期後半に特徴的に見られる中岳Ⅱ式土器の時期に帰属するものと思われる。

当該期の竪穴住居跡の検出例としては，鹿児島県曽於市西原遺跡の竪穴住居跡１軒，肝属郡東田遺跡の竪穴住居跡１軒，宮崎県都城市野添遺跡の竪穴住居跡７軒，同市中村遺跡の竪穴住居跡２軒，宮崎市平畑遺跡の55軒があり，鹿児島県内での検出例は少ない。竪穴住居跡の規模は，西原遺跡で一辺2.65ｍ，東田遺跡で3.2 ～ 3.5ｍ，中村遺跡で1.9 ～ 2.2ｍ，野添遺跡で2.2 ～ 4.7ｍ，平畑遺跡で1.5 ～ 7.5ｍであり，本遺跡のものが一辺3.6 ～ 4.2ｍであることから中規模と言える。平面形は１・２号竪穴住居跡が円形で，他遺跡でも円形が主体的である。３号竪穴住居跡のみ方形である。類例としては西原の隅丸方形が最も類似しているが，併せても２例と少ない。建物内の施設としては，２・３号竪穴住居跡が炉を備えているが，１号竪穴住居跡では炉を備えていない。本遺跡同様，他遺跡も明確な炉を備えているものと備えていないものが見えられる。また，１～３号住居跡は主柱穴を持たないことから，主柱で上屋を支えるような構造ではなかったものと推測される。柱構造については，平畑遺跡で主柱穴を持つものがいくつか見られるが，他遺跡と本遺跡の竪穴住居跡の柱構造は共通している。

埋設土器は中岳Ⅱ式土器のものが12基検出された。当該期の検出例としては，志布志市稲荷迫遺跡の１基のみである。本遺跡の埋設土器12基及び稲荷迫遺跡の埋設土器１基は，共に正位置で埋設されている。土器の遺存状態は様々で，１～６・９号埋設土器が完形，７・11号埋設土器が胴部のみ，８・10・12号埋設土器が胴部から底部，稲荷迫遺跡は胴部から底部のものである。埋設場所は，11号埋設土器が調査区２の２・３号竪穴住居跡から約20ｍ離れて位置し，１～10・12号埋設土器は調査区１の１号竪穴住居跡から10 ～ 35ｍ離れて位置している。子供の埋葬か，或いは埋葬された後，骨になった人の骨だけを入れた再葬墓の可能性が考えられ，居住域から少し離れて墓域を形成していたものと推測される。

石斧集積遺構は２基検出（１号13点，２号３点）された。中岳Ⅱ式土器の時期の検出例としては県内初例である。時期が下り縄文時代晩期では，曽於市鳴神遺跡（22点），柿木段遺跡（４点），日置市市ノ原遺跡（４点）で検出されている。２基の石斧集積遺構は，調査区１にある１号竪穴住居跡から１号石斧集積遺構で約19ｍ，２号石斧集積遺構が約10ｍ離れて位置している。１号石斧集積遺構は13点が器軸を東西に揃えて埋納されている。それらの石斧は大型の製品や未製品，欠損品等様々である。２号石斧集積遺構は若干の乱れが認められるものの，概ね器軸を東西に向けていることから，埋納当初は揃えていたものと推測される。石斧は３点と少なく，未使用の製品や未製品等一様ではない。なんらかの理由で隠したものか，或いは祭祀を行ったものと推測される。

集石遺構は11基検出された。１号竪穴住居跡の東側に位置する一群（１・３～５・10号）と，１号竪穴住居跡と２・３号竪穴住居跡の間に位置する一群（２・６～９号）に分けられる。いずれも居住域から13ｍ以上離れて位置している。11基の集石遺構の内，掘り込みを持つものが10基で，掘り込みを持たないものが１基である。掘り込みの形状は皿状のもの（１・10号），たらい状のもの（３号）が共に少なく，ピット状のもの（４～９号）が多かった。集石遺構を構成する礫は，欠損した石器の割合が高く被熱の痕跡があまり認められない。これらの礫や石器は出土位置の検討から，土砂と共に掘り込みに落とし込んでいるか，掘り込みが埋没する過程で落とし込んでいるように見受けられる。また，埋土中からは，焼土や炭化物も殆ど検出されていないことから，縄文時代早期に普遍的に見られる調理施設のようなものではなく，廃棄的な利用がなされていたと思われる。

落とし穴は調査区２の西側の台地端部で２基検出された。１・２号竪穴住居跡からは20ｍ以上離れている一方で，集石遺構・土坑・ピットとは近接している。関連性は不明である。本遺跡の落とし穴の深さは１号落とし穴で137cm，２号落とし穴で116cmであった。いずれも底面に小ピットの痕跡は認められない。

土坑は26基検出された。１号竪穴住居跡から10 ～ 20ｍの距離を保って環状に位置するもの（４・９・10・12・13・15・17 ～ 19・22・26・28号），１号竪穴住居跡と２・３号竪穴住居跡の間で集石遺構やピットと近接して位置するもの（１・５～７・25号），２・３号竪穴住居跡から10 ～ 20ｍ離れて単独で位置するもの（３・８・20号），調査区１西側で集石遺構や埋設土器と近接して位置するもの（２・23・24・27号）に分けられる。６・20 ～ 22・24・28号土坑は集石遺構の特徴と同様に，土砂と共に掘り込みに遺物を落とし込んでいるか，掘り込みが埋没する過程で遺物を落とし込んでいるように見

受けられる。本来は貯蔵として利用されたのかもしれないが，最終的には廃棄的な利用がなされたと考えられる。27号土坑は，纏まって土器が出土し，その後の接合作業により底部から口縁部まで復元できたことから，埋設土器の可能性がある。28号土坑からは非日用的な大型の軽石製品が出土しており，祭祀との関連性を窺わせる。このように，土坑の機能は多様であるが，本遺跡においては廃棄的な利用を示すものが多く認められる。このような傾向はピットにおいても認められる。

土器

土器は口縁部の形態的特長や文様からⅠ～Ⅷ類に分類される。土器の分類基準については第27表に示した。

縄文時代後期の土器

本遺跡においては，土器Ⅰ類が最も古く，縄文時代後期中葉の西平式土器に相当する。土器Ⅱ類は縄文時代後期後半の中岳Ⅱ式土器に相当する。本遺跡の中で最も多く見られる土器である。中岳Ⅱ式土器は全ての調査区において出土しているが，特に調査区1の西向き緩傾斜下のG・H－14～16にかけて集中する傾向が見られた。これまで，周辺の遺跡において中岳Ⅱ式土器の底部から口縁部まで復元できる例は少なかったが，今回の調査において8点もの資料が復元できた。

中岳Ⅱ式土器は，これまで先学者から時間的な細分が可能であることが指摘されてきたものである。中岳洞穴を標識遺跡とし，河口貞徳氏によって型式設定さ

第27表　縄文時代土器分類表

型式	分類	概　　要
西平式	Ⅰ類	磨消縄文で，沈線文を施すもの。
中岳Ⅱ式	ⅡA類	深鉢形土器。外反し直行する口縁部で，口唇部が平らに面取りされ，口縁部内面に明瞭な段を持つもの。
中岳Ⅱ式	ⅡB類	深鉢形土器。外反し直行する口縁部で，口唇部が平らに面取りされ，口縁部内面の段が滑らかになるもの。
中岳Ⅱ式	ⅡC類	深鉢形土器。外反する口縁部で，口唇部が平らに面取りされ，口縁部内面の段がないもの。口縁部が肥厚するもの。
中岳Ⅱ式	ⅡD類	深鉢形土器。外反する口縁部で，口唇部と口縁部文様帯との境が不明瞭で，口縁部内面の段がないもの。口縁部が肥厚するもの。
中岳Ⅱ式	ⅡE類	深鉢形土器。外反する口縁部で，口縁部外面の文様帯の段は明瞭であるが，文様帯の幅が間延びし，口唇部は平らなもの。
中岳Ⅱ式	ⅡF類	深鉢形土器。口唇部がやや丸みをおび，口縁部文様帯を持たないもの。
中岳Ⅱ式	ⅡG類	浅鉢形土器。外反し直行する口縁部をものつもの。
中岳Ⅱ式	ⅡH類	浅鉢形土器。直行する口縁部をもつもの。
中岳Ⅱ式	ⅡⅠ類	浅鉢形土器。口縁部が口辺から外反するもの。
中岳Ⅱ式	a	胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲するもの。
中岳Ⅱ式	b	胴部最大径の所で「S」字状に屈曲するもの。
上加世田式	Ⅲ類	外反し直行する口縁部をもつもので，中岳Ⅱ式土器よりも器厚が薄い。口縁部文様帯に複数の沈線を施すもの。
黒川式	Ⅳ類	浅鉢形土器。胴部最大径の所で「く」の字状に屈曲し，頸部は内傾しながら外する口縁部に至るもの。黒色磨研土器。
刻目突帯文	Ⅴ類	直行する口縁部で,口縁部や胴部に刻目突帯を巡らせているもの。
組織痕土器	Ⅵ類	直行する口縁部で,底部に組織痕が認められる。器面調整には貝殻条痕が施されている。
未命名型式	Ⅶ類	口縁部や胴部にドーナツ状の浮文を貼り付けているもので,口縁部に突起を貼り付けた後,頂部上面に刺突を施すものもある。
無刻目突帯文	Ⅷ類	直行する口縁部で,口縁部や胴部に無刻目の突帯を巡らせているもの。

れ，三万田式土器と御領式土器の間に位置付けられた（河口1980）。その後，桒畑光博氏によって再検討が行われ，３型式に分類した上で編年的位置付けを行い，三万田式土器と御領式土器に並行するものとしている（桒畑1989）。本遺跡出土の中岳Ⅱ式土器を桒畑氏の型式に当てはめると，中岳Ⅱ－１型式（土器ⅡＡ類）→中岳Ⅱ－２型式（土器ⅡＢ・Ｃ・Ｄ類）→中岳Ⅱ－３型式（土器ⅡＥ類）の時間的変遷が考えられる。土器Ｆ類の口縁部文様帯を持たない粗製の深鉢形土器や，土器Ｇ～Ｉ類の浅鉢形土器については層位的出土状況から時期差を見出すことはできなかった。今後，他遺跡の良好な資料の増加により時期差が解明されることが望まれる。

次に，土器の血液型とも言うべき胎土について言及したい。本遺跡出土の中岳Ⅱ式土器の胎土については，基本的に石英・長石を含んでいる。それ以外の特徴的な鉱物を集計し第28表に示した。鉱物の産地を推定するにあたっては，鹿児島県立埋蔵文化財センターの踏査成果を参照した（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005）。本遺跡出土中岳Ⅱ式土器は，金雲母・輝石がそれぞれ２割強，角閃石が２割弱，黒雲母が１割弱含まれている。４つの鉱物全て含まれるものはなかったが，金雲母と角閃石の組み合わせが１割弱，金雲母と輝石で２割強，輝石と角閃石で２割強確認できた。金雲母と角閃石は肝属山地や高隈山系の花崗岩類に由来し，輝石や角閃石は鹿屋市輝北町等に分布する，先加久藤火砕流（東・羽嶋・辻2012）に由来する。これらのことから，本遺跡から約30km圏の交易ないし行動領域が存在していたものと思われる。

縄文時代晩期の土器

土器Ⅲ類は縄文時代晩期初頭の上加世田式土器，土器Ⅳ類は縄文時代晩期中葉の黒川式土器，土器Ⅴ類は縄文時代晩期末から弥生時代初頭の刻目突帯文土器，土器Ⅵ類は組織痕土器，土器Ⅶ類は未命名型式の土器，土器Ⅷ類は無刻目突帯文土器に相当する。土器の分布傾向としては，土器Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ～Ⅷ類が散発的に出土しており，土器Ⅴ類は全調査区から出土しているが，調査区４北西側で比較的纏まって出土している。土器Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ～Ⅷ類は散発的な出土であるため，特徴を捉えることができなかったが，土器Ⅴ類は比較的纏まって出土したことから特徴を見出すことができた。土器Ⅴ類は２条から１条の刻目突帯を持つが，その刻目の方法に５つのパターンが認められた。

① 幅広の刻目のもので，幅広の棒を押し当てたものか櫛状工具を転がしたように見えるもの。
② 指を押し当てて刻目にしているもの。
③ 櫛状工具により細い刻目を施したもの。
④ 爪形の刻目が見られるもの。爪を押し当てたものと工具によって爪形施文したものとがある。
⑤ ヘラ状工具で刻目を施したもの。ヘラ状工具で突帯を切るようにして刻目を施すものとヘラ状工具を突帯に押し当てた後，工具を寝かせて刻目をＶ字状に広げるものとがある。

これらの刻目の方法の違いが時期差なのか，それとも系統差なのか，或いは個人差なのかが今後の課題として残った。

次に，本遺跡出土の刻目突帯文土器の胎土の特徴だが，基本的に石英・長石を含んでいる。それ以外の特徴的な鉱物を集計し第29表に示した。石英・長石が全ての個体で観察できるのに対し，角閃石が１割，金雲母・輝石が１割に満たなかった。いずれも肝属山地や高隈山系，鹿屋市輝北町等，大隅半島で産出する鉱物で，遺跡から約30km圏の交易ないし行動領域が窺える。

第28表　中岳Ⅱ式土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）

金雲母		輝石		角閃石		黒雲母		金雲母・角閃石		金雲母・輝石		輝石・角閃石	
有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し
86	271	83	274	65	292	3	354	18	339	1	356	2	355
24.1%	75.9%	23.2%	76.8%	18.2%	81.8%	0.8%	99.2%	5.0%	95.0%	23.2%	76.8%	23.2%	76.8%

※n=357点
※鉱物の分類は肉眼鑑定による

第29表　刻目突帯文土器の胎土（金雲母・輝石・角閃石）

金雲母		輝石		角閃石	
有り	無し	有り	無し	有り	無し
2	86	3	85	9	79
2.3%	97.7%	3.4%	96.6%	10.2%	89.8%

※n=88点
※鉱物の分類は肉眼鑑定による

石器

石器の分類基準については第30表に示した。石器はⅡ層及び遺構内から出土した。Ⅱ層からは縄文時代後期から縄文時代晩期の土器が出土しており，石器についても両時代のものが混在している可能性があるが，遺構や土器の出土状況から，殆どが中岳Ⅱ式土器の時期に帰属するものと思われる。

本遺跡出土石器は3712点を数える。石器組成は第31表に示した。剥片・砕片・石核等の石器製作に係わるものが４割強を占める。それに続いて，磨・敲石類・石皿等の調理具が３割強を占める。製品では土掘り具としての打製石斧が２割弱，狩猟具の石鏃が１割弱占める。石材は，大隅半島で採取可能なホルンフェルスが５割弱と最も多く，続いて安山岩が２割弱を占める。両石材製の石器に残された自然面から，河原で採取した原石を使用ないし加工したものと思われる。続いて黒曜石が１割強を占める。不純物を含み，光を通す特徴を持つことから，三船産か日東産と思われる。原産地は本遺跡から約36 ～ 84km離れているが，石鏃や楔形石器，異形石器等の小型剥片石器の製作を目的として供給している。

石鏃

113点の内，形態分類できたものは72点である。内訳については第32表に示した。Ⅰｃ類が４割，Ⅰｂ類が３割弱，Ⅱｂ類が２割強を占める。その他は１割に満たない。石材には，多様なものが用いられているが，黒曜石と安山岩が３割以上で，他の石材に比べ偏る傾向が認められる。黒曜石（三船産か日東産），黒曜石（姫島産），頁岩，チャート，玉髄のものについては，剥片，砕片，石核が出土していることから，石核で遺跡内に搬入され，剥片剥離から製品製作まで行われていた可能性が考えられる。それ以外の石材については，完形品で遺跡内に搬入されたか，剥片ないし未製品で搬入された後に仕上げられたと考えられる。

打製石斧

724点の内，形態分類できたものは195点である。内訳については第33表に示した。Ⅰａ類が２割弱，Ⅰｂ類が１割半ば，Ⅲ類が１割強，その他は，１割に満たない。石材は，大隅半島で採取可能なホルンフェルスが９割弱と圧倒的に多く，その他は，１割に満たない。器体に残される自然面がローリングしていることから，河原で採取した原石を使用したものと思われる。未分類としたものの中には欠損品，未製品等が529点，打製石斧製作に係わる調整剥片が897点出土していることから，遺跡内において打製石斧製作が行われていたと考えられる。

石刀

２号竪穴住居跡の床面から天附型の石刀が１点出土した。鹿児島県内の石刀・石棒を第117図・第118図に，天附型石刀の出土例は第34表に示した。天附型の石刀は九州各地で出土しており，特に中九州と南九州に集中している。本遺跡出土のものは，橿原文様と呼ばれるものであるが，木の葉文を基調とした文様とはやや異なり弧状である。両端に漆が塗られ，一部赤色顔料も観察される[※1]。中央部には塗られている痕跡がないので，何か巻かれていた可能性もある。ほぼ全面に製作時に付いたと思われる擦痕が認められるが，使用による痕跡は認められない。また，刃部は形成されていない。天附型で，橿原文様の付けられている石刀で完形のものはほとんど無く，西日本では初めての例である。また，中岳Ⅱ式の時期（縄文時代後期後半）の住居から出土しており，時期が確定できる数少ない資料で貴重なものである[※2]。

装飾品

丸玉２点，垂飾１点，管玉１点，勾玉１点が出土している。全て完形品で，遺構外からの出土である。特筆すべきは使用された石材で，丸玉２点と垂飾１点には新潟県糸魚川産のヒスイが使用されていた。本遺跡内で製作された痕跡が認められなかったことから，製品そのものが搬入されたと考えられる。管玉と勾玉は結晶片岩様緑色岩（クロム白雲母）製である。大坪志子氏の研究によると，原産地は九州中部の変成岩帯と推測しており，クロム白雲母製品は九州中にほぼ満遍なく分布する中で，玉生産は各地の中核遺跡で行われたとしている（大坪2007）。鹿児島県内では上加世田遺跡が多量の玉類を出土する遺跡として知られている。本遺跡で玉類が製作された痕跡がないことを考慮すると，上加世田遺跡のような中核遺跡を中継して搬入されたものと考えられる。

場の機能について

既述した遺構と遺物の成果から，本遺跡の場の機能の検討を行いたい。

縄文時代後期中葉は遺物・遺構共に希薄で主たる活動域は調査区外にあったものと推測される。縄文時代後期後半になると中岳Ⅱ式土器の文化を持った人々が集落を形成する。生業は，大隅半島で産出する胎土を使用し土器製作を行っていた他，石鏃や打製石斧を製作し，狩猟や植物質食料の採取を行っていたものと考えられる。採取で得た植物質食料は，付近の河原で採取した礫を素材とした磨石や石皿を使って製粉加工し消費していたものと考えられる。他地域との交流も行われており，実用的な道具を作るための原料である黒曜石や装飾品（玉類）も交易を通じて獲得したものと考

第30表　縄文時代石器分類表

器種分類		概　　要
剥片石器	石鏃	両側縁からの押圧剥離により，先端部を作出し，器体を薄く仕上げたもの。
	Ⅰ類	ほぼ正三角形状を呈するもの（長幅比1.50以下）。
	a	基部に抉りのないもの。
	b	基部に浅い抉りがあるもの。
	c	基部に深い抉りがるもの。
	Ⅱ類	二等辺三角形状を呈するもの（長幅比1.51以上）。
	a	基部に浅い抉りがあるもの。
	b	基部に深い抉りがるもの。
	Ⅲ類	基部が丸みをおびるもの。
	Ⅳ類	五角形状を呈するもの。
	ドリル	先端部を錐状に加工したもの。
	楔形石器	縁辺にそれぞれ対となる潰れ状の剥離が認められるもの。
	スクレイパー	連続的な二次加工により刃部を作出したもの。
	異形石器	連続的な二次加工により整形しているが，用途不明の石器。
	二次加工剥片	二次加工を施すもので，刃部が認められないもの。
剥片		石核から剥離されたもの。
砕片		剥片剥離及び二次加工，欠損で生じたもの。
石核		剥片剥離が行われたもの。
礫石器	打製石斧	大型の剥片ないし，礫片・扁平な礫を素材とし，縁辺からの剥離調整により刃部を作出したもの。
	Ⅰ類	短冊形のもの。
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し，部分的に簡易な研磨を施すもの。
	Ⅱ類	撥形のもの。
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し，部分的に簡易な研磨を施すもの。
	Ⅲ類	有肩のもの。
	A	刃部が丸みを帯びるもの。
	B	刃部が平らになるもの。
	C	刃部が尖るもの。
	D	刃部が平らで，器体の長さよりも幅が広いもの（長幅比1.00以下）。
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し，部分的に簡易な研磨を施すもの。
	Ⅳ類	側縁の抉りが片側に偏るもの。
	a	打ち欠いて仕上げているもの。
	b	打ち欠き加工で成形し，部分的に簡易な研磨を施すもの。
	磨製石斧	面的に研磨が行われているもので，概ね厚みがあり，刃部は蛤の形を呈する。
	礫器	礫片ないし礫の縁辺に刃部を作出したもの。
	磨石・敲石	磨面のみ認められるもの，敲打痕のみ認められるもの，磨面と敲打痕が複合して認められるものとがある。
	石皿	磨面・凹面が認められるもの。脚付きのものもある。
	砥石	擦痕及び筋状の凹が認められるもの。
石製品		上記の石器に該当せず，利器としての用途が不明なもの。

第31表　石器組成

器種 / 石材	石鏃	ドリル	楔形石器	スクレイパー	異形石器	剥片	砕片	石核	打製石斧	磨製石斧	礫器	磨・敲石	石皿	砥石	軽石製品	用途不明石器	石刀	管玉	勾玉	丸玉	垂飾	総計
ホルンフェルス	6	0	0	5	0	842	9	0	656	35	7	217	3	7	0	0	1	0	0	0	0	1788
安山岩	26	1	0	1	0	19	7	0	8	1	0	414	135	5	0	0	0	0	0	0	0	617
黒曜石	50	0	1	0	3	164	209	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	445
砂岩	0	0	0	0	0	19	0	0	7	3	1	212	15	14	0	0	0	0	0	0	0	271
頁岩	6	0	1	0	0	85	8	1	35	3	0	13	0	4	0	0	0	0	0	0	0	156
花崗岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67	44	7	0	0	0	0	0	0	0	118
凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	17	38	0	0	1	0	0	0	0	0	57
チャート	9	0	0	0	0	32	11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53
粘板岩	0	0	0	0	0	25	0	0	9	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	37
石英	0	0	0	0	0	22	6	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
黒曜石（姫島）	4	0	0	0	0	8	14	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27
玉髄	3	0	0	0	0	8	2	7	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
シルト質頁岩	1	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
水晶	3	0	0	1	0	8	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
ハリ質安山岩	0	0	0	0	0	2	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
流紋岩	1	0	0	0	0	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
軽石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	9
珪質頁岩	2	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
黒色安山岩	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
ヒスイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3
不明	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
輝石安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
結晶片岩様緑色岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	3
玄武岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
黒曜石（腰岳）	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
総計	113	1	2	7	3	1262	278	32	724	45	8	946	237	37	9	2	1	1	1	2	1	3712

第32表　石鏃分類集計一覧表

分類 / 石材	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲ	Ⅳ	小計	未分類	総計
黒曜石	0	4	13	1	6	2	1	27	23	50
安山岩	2	9	9	0	3	0	0	23	3	26
チャート	0	0	3	0	3	0	0	6	3	9
ホルンフェルス	0	3	1	0	1	0	0	5	1	6
頁岩	0	2	2	0	0	0	0	4	2	6
黒曜石（姫島）	0	0	1	0	1	0	0	2	2	4
玉髄	0	1	0	0	0	0	0	1	2	3
水晶	1	1	0	0	0	0	0	2	1	3
珪質頁岩	0	0	0	0	1	0	0	1	1	2
シルト質頁岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
黒色安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
黒曜石（腰岳）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
流紋岩	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
総計	3	20	29	1	16	2	1	72	41	113

※欠損品のものでも分類に耐えうるものは分類し，集計を行った
※未製品及び分類に耐えれない程に欠損したものを未分類とした

第33表　打製石斧分類集計一覧表

分類／石材	Ⅰ	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲ	Ⅲa	Ⅲb	ⅢAa	ⅢAb	ⅢBa	ⅢBb	ⅢCa	ⅢCb	ⅢDa	ⅢDb	Ⅳ	Ⅳa	Ⅳb	a	b	小計	未分類	総計	調整剥片
ホルンフェルス	3	31	28	6	8	14	21	9	4	7	6	6	1	8	1	1	2	2	11	4	1	1	175	481	656	787
頁岩	0	5	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	12	23	35	65
粘板岩	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	9	22
ハリ質安山岩	0	0	1	0	0	0	1	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	8	2
安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	3
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	17
凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
玄武岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
総計	3	37	30	6	8	15	24	10	6	9	7	6	1	8	1	1	2	2	13	4	1	1	195	529	724	897

※欠損品のものでも分類に耐えうるものは分類し，集計を行った
※未製品及び分類に耐えれない程に欠損したものを未分類とした

えられる。居住域内外においては，石斧の埋納や土製品・軽石製品・石刀が出土しており，作物の豊穣や子孫繁栄を願った祭祀も行われていたと推測される。また，居住域から10～35ｍ離れた所には土器を埋設している。付近には，廃棄や貯蔵を目的とした集石遺構や土坑・ピットを配置していることから，日々の生活の中で行き来するような所に墓域を形成していたものと推測される。

中岳Ⅱ式土器の文化が終焉すると，縄文時代晩期からは再び遺物・遺構が希薄になり，主たる活動域は調査区外へと移る。縄文時代晩期末から弥生時代初頭の刻目突帯文土器の時代になると調査区４において人間活動の痕跡が認められるが，集落の形成には至っていない。

※１　蛍光Ｘ線分析により赤色顔料は朱であることが，ＡＴＲ－ＦＴＩＲ分析により黒色塗膜は漆であることが判明している。顕微鏡と肉眼観察により，石刀に朱を塗布した後に黒色漆を塗布していることが認められている。

※２　國學院大學名誉教授小林達雄氏，國學院大學栃木短期大学教授小林青樹氏ご教授による。

参考文献

大坪志子2007「九州地方の石製装身具－後晩期の玉類を中心とした石材同定－」『石川県埋蔵文化財情報』第17号　財団法人石川県埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター第三調査係2005「土器胎土の鉱物を求めて―土器製作推定地のための基礎研究―」『縄文の森から』第３号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

遠部慎2001「九州地域（長崎県・佐賀県）の概要と集成」『考古学資料集』17　小林青樹　平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究Ａ（２）

河口貞徳1980『中岳洞穴』末吉町教育委員会

桒畑光博1989「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列－中岳Ⅱ式土器の再検討－」『鹿児島考古』第23号　鹿児島県考古学会

菅波正人2001「九州地域（福岡県）の概要と集成」『考古学資料集』17　小林青樹　平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究Ａ（２）

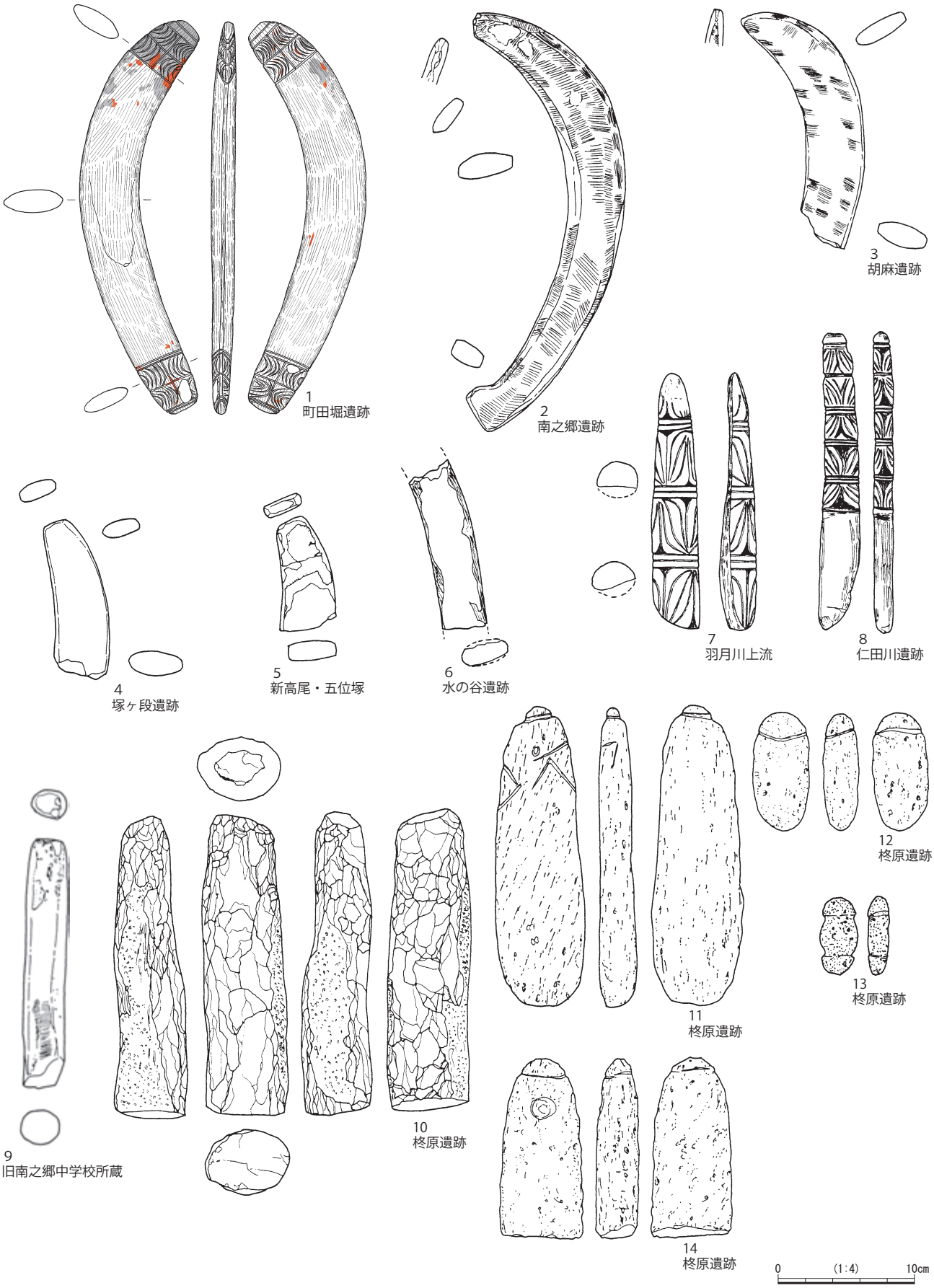
坪根伸也・遠部慎2001「九州地域（大分県）の概要と集成」『考古学資料集』17　小林青樹　平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究Ａ（２）

繁昌正幸・三垣恵一・寺原徹・森田郁朗2006『市ノ原遺跡第５地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（105）鹿児島県立埋蔵文化財センター

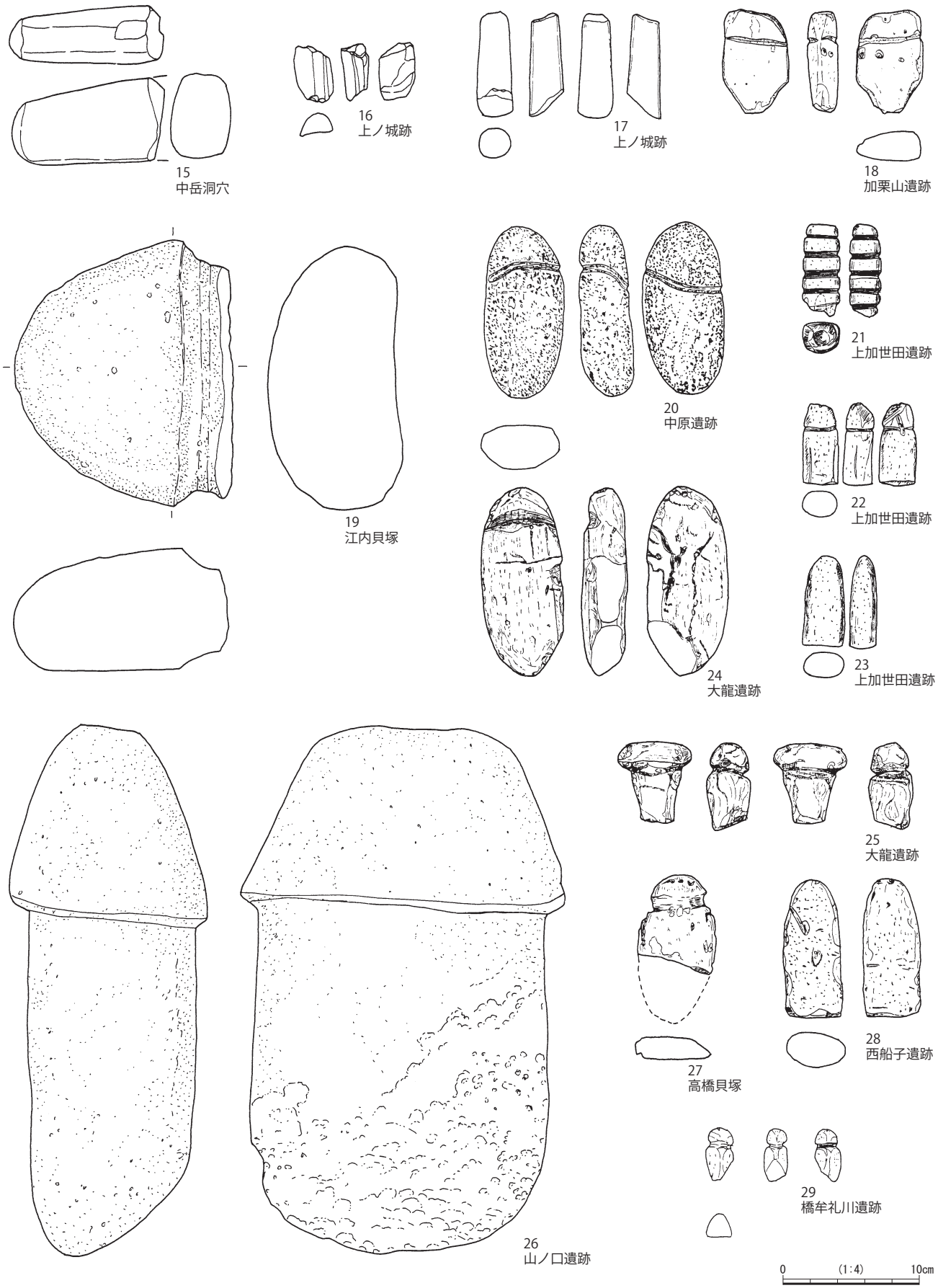
東和幸2001「九州地域（熊本県・宮崎県・鹿児島県）の概要と集成」『考古学資料集』17　小林青樹　平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究Ａ（２）

東和幸・羽嶋敦洋・辻明啓2012『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）鹿児島県立埋蔵文化財センター

前迫亮一・横手浩二郎2008『西原遺跡，牧ノ原Ｂ遺跡，原村Ⅰ遺跡，原村Ⅱ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（124）鹿児島県立埋蔵文化財センター



第117図　鹿児島県内出土石刀・石棒（1）（東2001改変）



第118図　鹿児島県内出土石刀・石棒（２）（東2001改変）

第34表　天附型石刀出土地一覧表（菅波，坪根・遠部，東2001改変）

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	出土状況	石材	サイズ（cm） 重量（g）	特徴
1	広田遺跡	福岡県糸島郡 二丈町大字広田	丘陵裾部	晩期前半	溝	砂岩	長さ（8.2） 幅5.1 厚さ2.3 重さ86.2	両端欠損。
2	権現塚北遺跡	福岡県山門郡瀬高町大字坂田	沖積低台地	晩期前半～後半	包含層	頁岩質	長さ（13.2） 幅3.6 厚さ1.9 重さ120.0	両端欠損。断面砲弾形の平坦面側を背にして，内湾する。
3	礫石原遺跡	長崎県島原市 三会礫石原	丘陵	晩期初頭（？）～ 刻目突帯文	埋葬地付近 （出土状況不明）			一端欠損。断面形は楕円形。
4	天附遺跡	熊本県牛深市 天附元下須	下須島北端	後期後半 （御領式）	宅地造成中 出土		長さ25.6 幅4.1	
5	大明神遺跡	熊本県下益城郡 城南町鰐瀬宮ノ前		後期（御領式）	採集	軟質粘板岩	長さ27.0 重さ400.0	
6	出土地不明	熊本県河内中学校 所蔵				蛇紋岩		
7	太郎迫遺跡	熊本県熊本市 太郎迫町大原	緩傾斜地	後期中半（辛川式）～晩期前半		安山岩	長さ27.5 幅6.5 厚さ3.0	剥離面残す。
8	沖松遺跡	熊本県球磨郡 須恵村字沖松	丘陵地	後期（鳥井原式）～ 晩期（古閑式）				中心部のみ存在。
9	上南部遺跡	熊本県熊本市 上南部町村下	河岸段丘上					
10	神園田淵屋敷遺跡2次	熊本県熊本市 長嶺町		後期後半 （御領式・天城式）				中心部のみ存在。
11	平畑遺跡	宮崎県宮崎市大字 熊野字平畑	緩傾斜地	後期後半～ 晩期前半	包含層		長さ29.4 幅4.2 厚さ1.7	
12	西都原付近	宮崎県西都市			採集	玄武岩質		
13	西都原付近	宮崎県西都市			採集	玄武岩質		
14	陣内遺跡	宮崎県西臼杵郡 高千穂町大字 三田井字車迫	小台地上	後期中半～ 晩期中半	採集	頁岩質	長さ（16.0） 厚さ0.9	
15	南之郷遺跡	鹿児島県曽於市 末吉町原北別府	台地上		採集	粘板岩様	長さ30.7 幅4.21 厚さ1.75	グリップエンド状の作り出し。
16	胡麻遺跡	鹿児島県曽於市末 吉町五位塚中屋敷					長さ（18.6） 幅4.16 厚さ1.7	一端欠損。
17	塚ヶ段遺跡	鹿児島県曽於市 末吉町					長さ（12.1） 幅3.89 厚さ1.9	先端部のみ。
18	新高尾・五位塚	鹿児島県曽於市 末吉町					長さ（8.3） 幅3.9 厚さ1.46	先端部のみ。
19	水の谷遺跡	鹿児島県鹿屋市 上祓川町	舌状台地	後期終末～ 晩期前半	包含層	千枚岩	長さ（12.8） 幅3.5 厚さ1.5	両端欠損。
20	町田掘遺跡	鹿児島県鹿屋市 串良町細山田	台地	後期後半 （中岳Ⅱ式）	竪穴住居内床面	ホルンフェルス	長さ28.6 幅4.3 厚さ1.7 重さ300.0	両端部朱塗り後，黒色漆仕上げ。
21	上加世田遺跡	鹿児島県加世田 市川畑	河岸段丘上	後期後半（上加世田式・入佐式）	採集			
22	諏訪前遺跡	鹿児島県日置市 金峰町大野	台地上	後期終末（上加世田式・入佐式）～ 晩期前半（黒川式）	包含層			一端欠損。
23	大坪遺跡	鹿児島県出水市 美原町	沖積平野	後期終末（上加世田式・入佐式）～ 晩期前半（黒川式）	包含層			一端欠損。敲打整形のみ。

2　弥生時代の調査

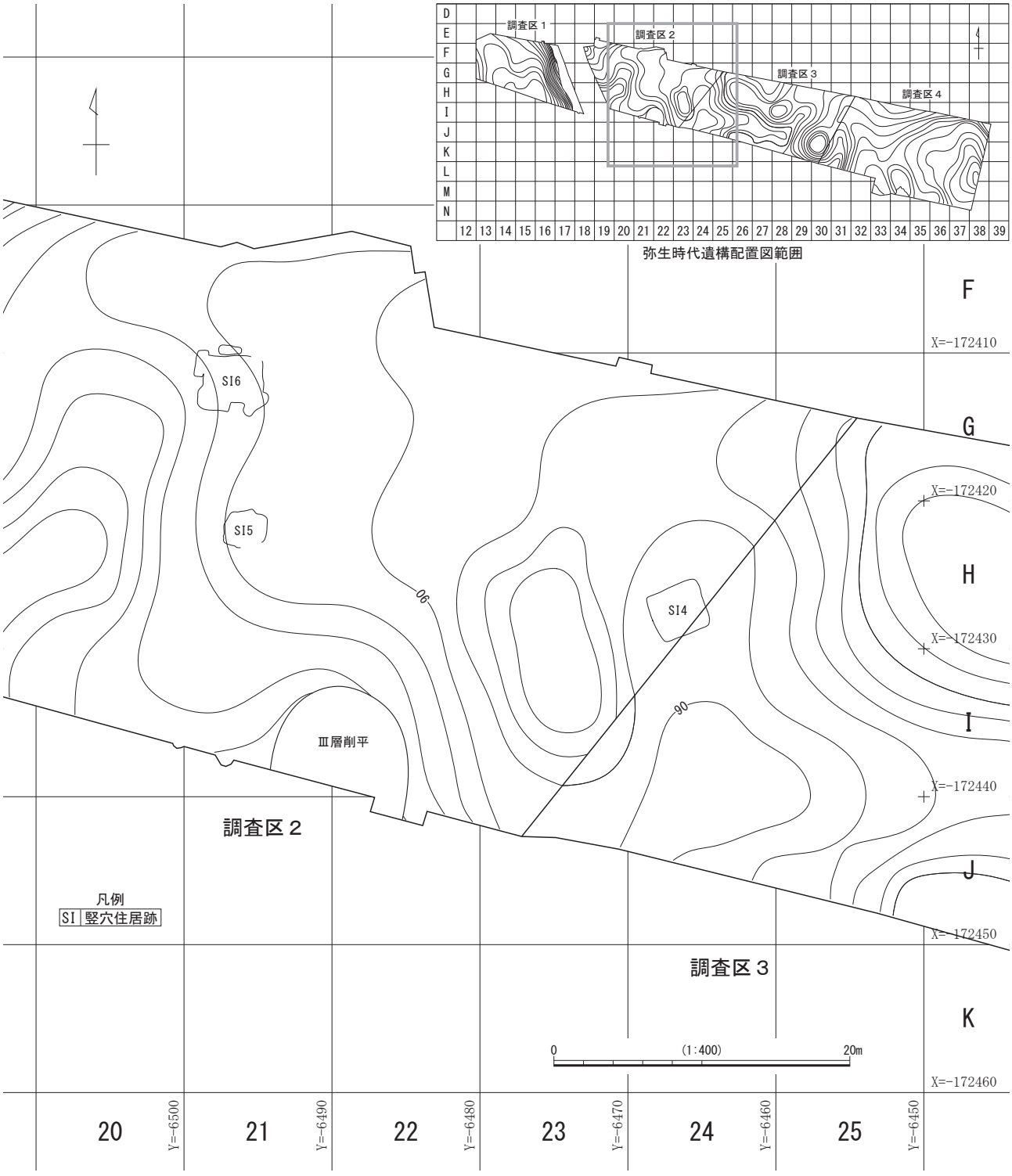
（1）調査の概要

弥生時代の遺物はⅡ層（黒色土）から出土し，前期の高橋式土器，中期中葉の吉ヶ崎式土器，中期後葉の山ノ口式土器等が出土している。前期の遺物は主に調査区４において出土しているが全体的に遺物量は少ない。

遺構は，調査区２において，山ノ口式土器の時期の竪穴住居跡が３軒検出された。いずれも，埋土の上位に開聞岳起源の暗紫コラの堆積が認められる。

（2）遺構（第120図～第122図）

遺構は竪穴住居跡が３軒検出された。



第119図　弥生時代遺構配置図

ア　竪穴住居跡

４号竪穴住居跡（第120図）

Ｈ－24区において検出された住居跡で，東西方向3.7ｍ，南北方向3.4ｍの略方形を呈している。検出面はⅡ層中で，検出面からの深さは0.48ｍである。南壁側の中央部に底辺0.7ｍ，高さ0.58m，深さ0.2ｍの略三角形の掘り込みがある。柱穴と思われる痕跡は検出されなかった。遺物は埋土中及び床面直上において数点しか出土していない。埋土のⅡ層目には灰褐色の硬くしまった火山灰が堆積しているが，分析の結果，開聞岳起源の暗紫コラ（約2000年前）と判明した。

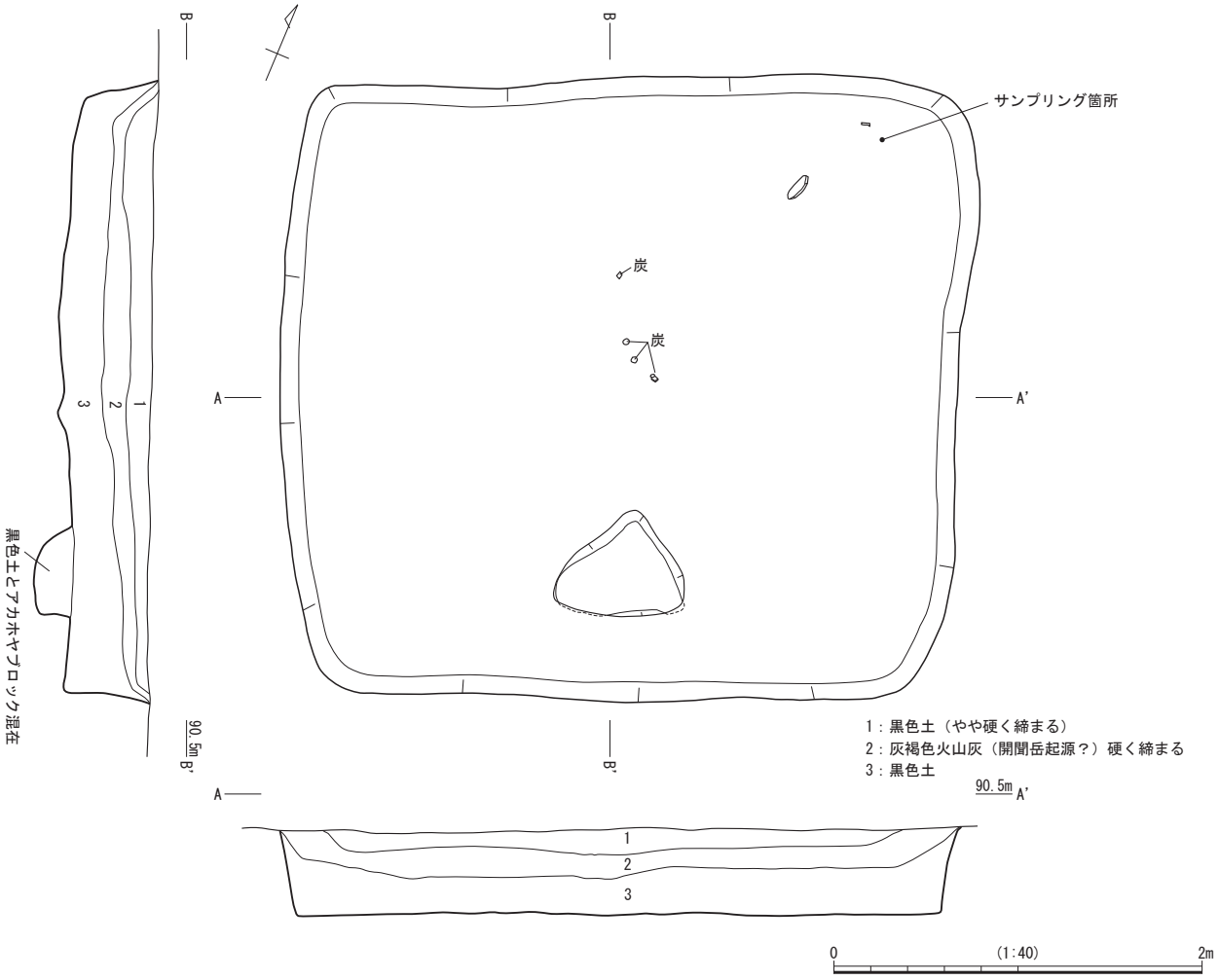
４号住居内で採取された炭化物の^{14}C年代測定値は2135±20年BPの年代値が得られている。

５号竪穴住居跡（第121図）

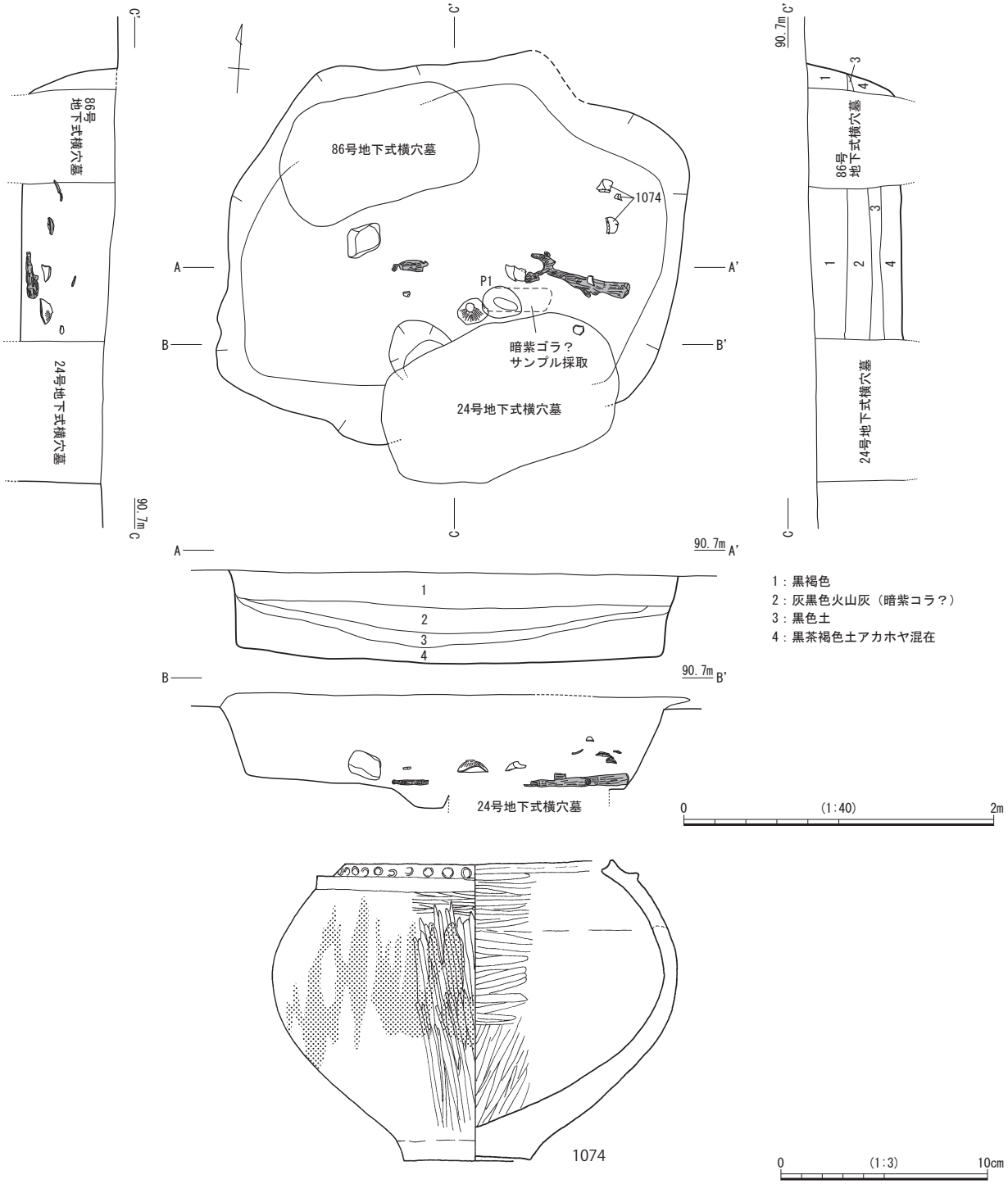
Ｈ－21区において検出された住居跡で，東西方向2.9ｍ，南北方向2.4ｍの楕円形に近い形状を呈している。検出面はⅡ層中で，検出面からの深さは0.6ｍである。住居の北西隅及び南東隅に24号・86号地下式横穴墓の竪坑が掘られ現状を保っていない。柱穴と確定できるピットは認められないが，ほぼ中央に0.27ｍ×0.2ｍの楕円形で深さ0.6ｍのピット１基が検出されている。埋土中には炭化物が認められ，床面直上において長さ0.65ｍ，幅0.1ｍ・長さ0.25ｍ，幅0.07ｍの炭化材が検出される。また，復元で完形になる土器片も床面直上から出土している。1074は無頸壺である。底部径６㎝，口縁部径13㎝，器高14.3㎝を測る。底部はわずかに上底である。球形状に大きく膨らんだ胴部からややしまりながら口縁部へと至る。口唇部はやや凹み，口縁下位に突帯を巡らす。口縁端部と突帯の間に文様帯を設け，径0.5㎝の竹管文を施すものである。器面調整は外面の突帯下位は横方向，胴部は縦方向の丁寧なヘラミガキである。内面は上位は横方向，下位は斜め方向のヘラミガキである。また，外面には吹きこぼれと思われる煤の付着が認められる。

この住居跡も埋土中に開聞岳起源の暗紫コラが堆積している。

５号住居から採取された炭化材の分析の結果。炭化材はサクラ属で，^{14}C年代測定では2115±20年BPの年代値が得られている（第４章６参照）。



第120図　４号竪穴住居跡



第121図　5号竪穴住居跡・出土土器

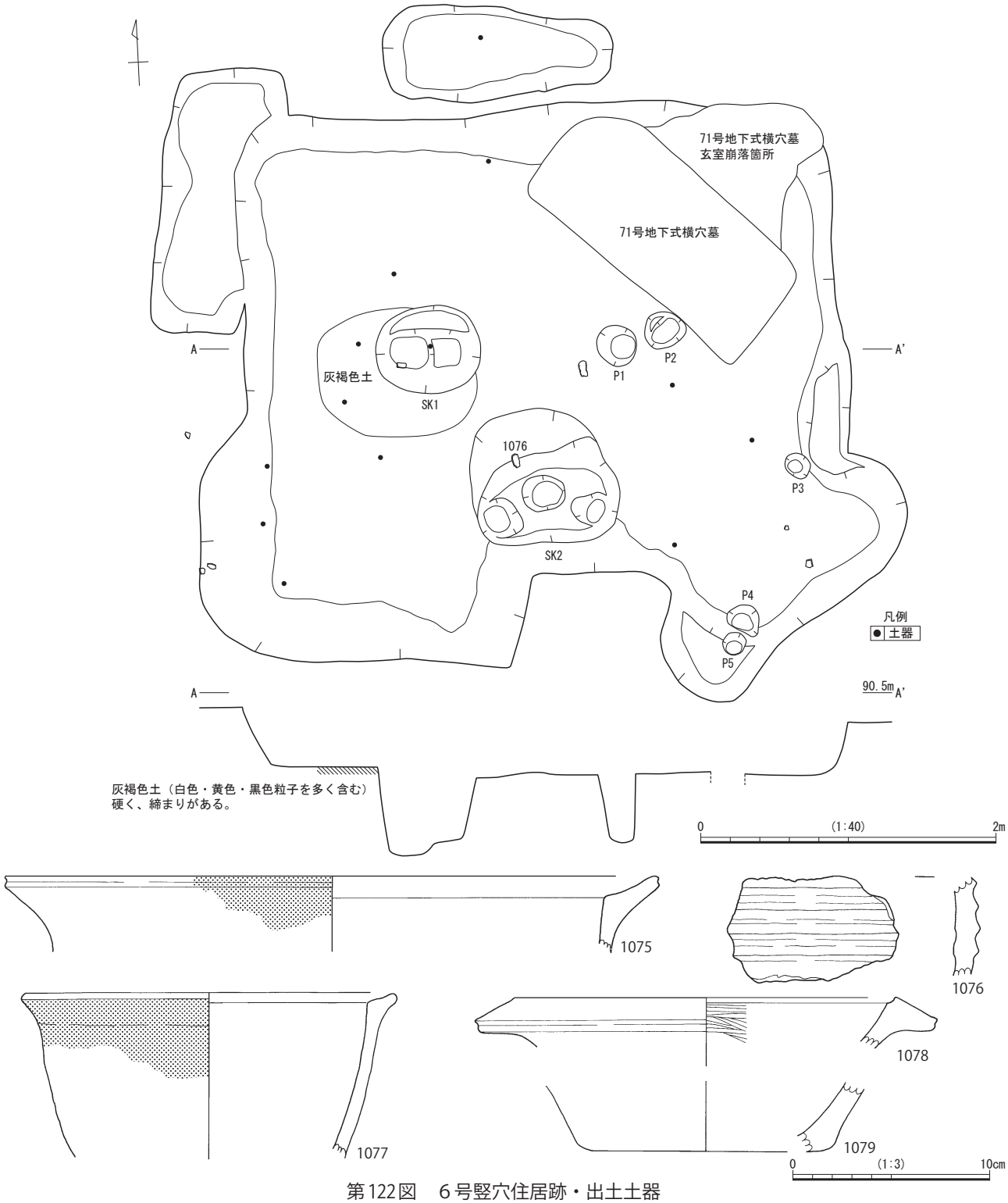
6号住居跡（第122図）

G－21区において検出されたもので，東西方向5ｍ，南北方向4.5ｍの張り出しを有する略方形を呈する。検出面はⅡ層中で，検出面からの深さは0.4ｍである。住居の北西隅には幅0.8ｍ，長さ1.8ｍの張り出しを有し，南東隅には幅0.8ｍ，長さ２ｍの張り出しを斜め方向に配する。また，南西隅では西へ0.3ｍ，南へ0.5ｍ張り出している。北壁中央の外側には幅0.7ｍ，長さ1.6ｍの土坑が検出される。住居の北東側には71号地下式横穴墓の竪坑が掘られている。住居の床面では幅0.6ｍ，長さ0.7ｍの楕円形と幅0.9ｍ，長さ１ｍの不定形の土坑が検出される。

また小ピットも検出されるが，柱穴と認定できるものはない。ただ中央のピット１と土坑１が深さ0.5ｍを超すもので，２本の柱穴と考えてもよいかもしれない。２本の柱穴を持ち，南壁沿いに土坑を有する点や張り出し

を有することから６号住居跡は，当地方の弥生時代中期の典型的な住居跡と思われる。

住居内の遺物は少なく，図化できたのは５点である。1075は復元口縁径33㎝を測る甕形土器。口縁部が「く」の字状に外反し，端部はわずかに凹む。外面には煤の付着が認められる。1076は甕形土器の胴部で，４条の三角形貼り付け突帯を巡らす。1077は口縁部径18.4㎝を測る甕形土器。口縁部はやや短く「く」字状に外反する。胴部は直線的で，底部へ至るものと思われる。胴部上位から口縁部へかけて煤の付着が認められる。1078は壺型土器の口縁部で復元口縁径18.2㎝を測る。大きく外反した頸部から口縁部は垂れ下がり気味である。端部はやや凹み，内面上端も凹みが認められる。1079は壺形土器の底部で復元底部径11.6㎝を測る。

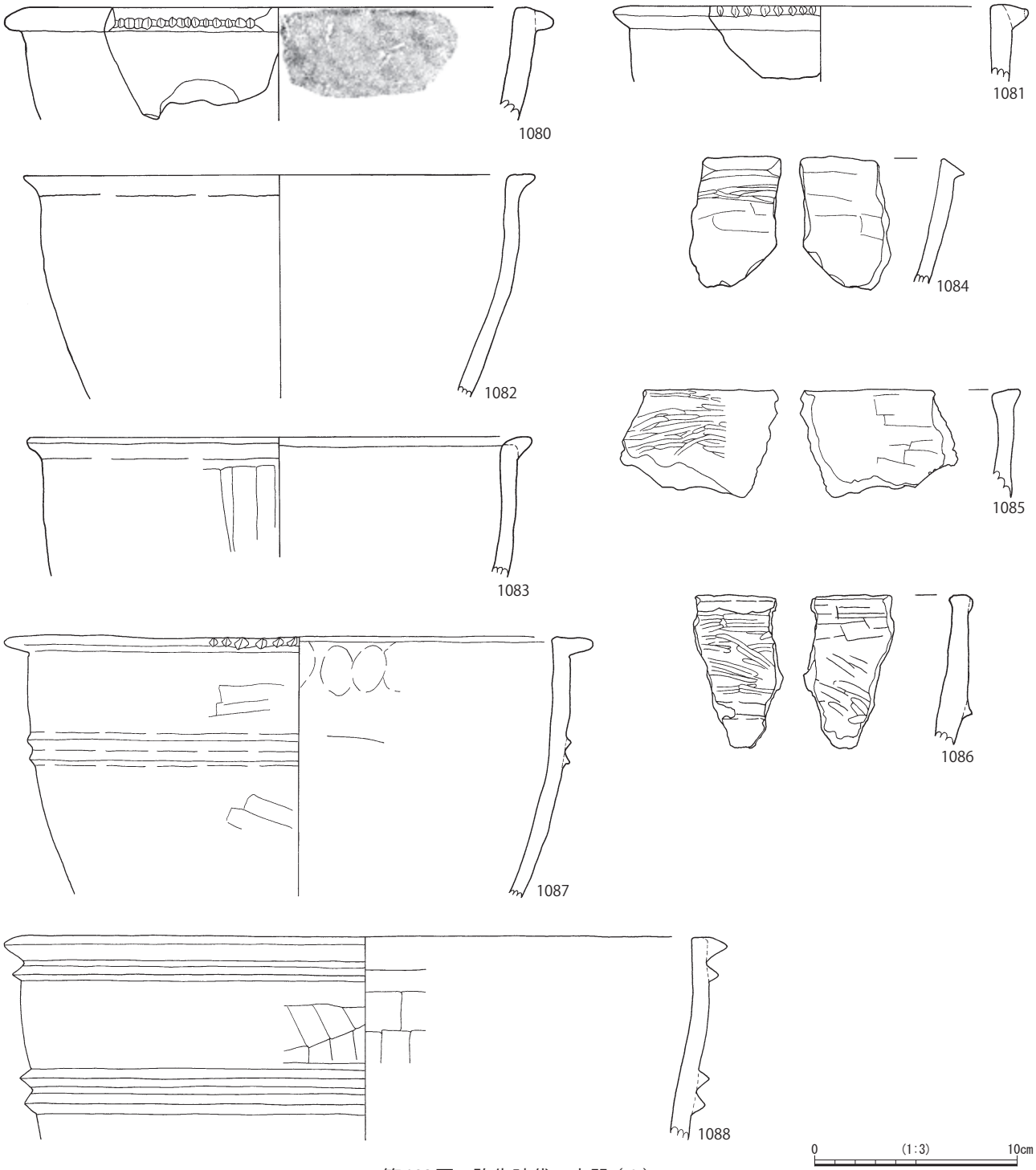


第122図　６号竪穴住居跡・出土土器

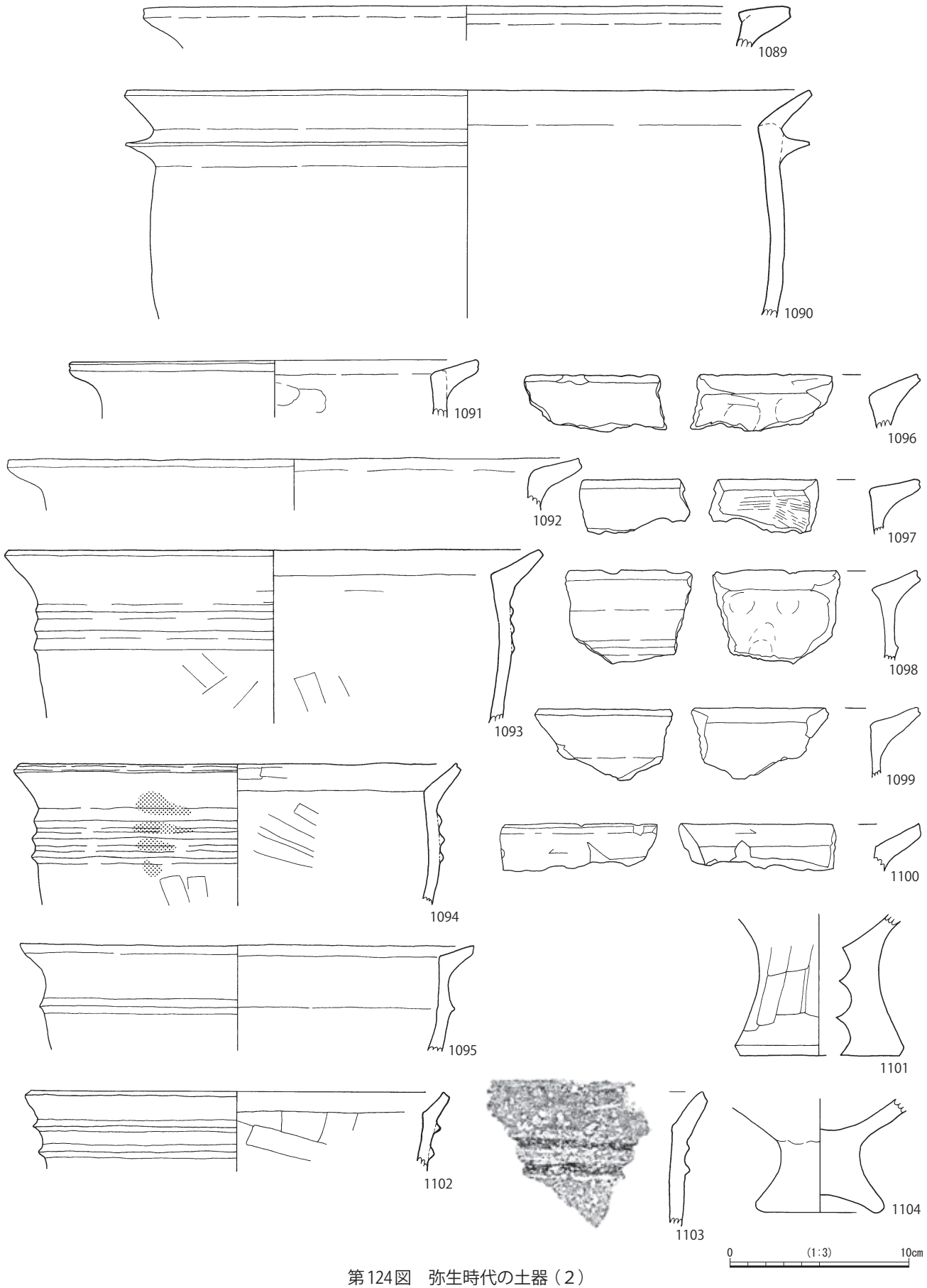
（3）遺物（第123図～第125図）

ア　土器

弥生時代の遺物はⅡ層中で出土しており，中期の土器が主である。前期の土器で図化できたのは1080から1086までの７点である。1080は口縁径27㎝で，口縁は「逆L」字状に外反し端部は丸く収め，刻み目を有する。1081は口縁径20.2㎝で口縁は「逆L」字状に外反し端部には刻み目を有する。1082は口縁径25㎝で，口縁は「逆L」字状に外反する。1083は口径24.6cmで，口縁はやや上方に向けて外反する。1084 ～ 1086は口縁部でいずれも口縁が短く外反するものである。1087・1088は中期中葉と思われる。1087は口縁径28.8㎝で，口縁は「逆L」字状に外反し端部には刻み目を有する。胴部上位には２条の三角突帯を巡らす。1088は口縁径35.6㎝で，口縁は「逆L」字状に外反する。口縁下位に１条，胴部上位に２条の三角突帯を巡らす。



第123図　弥生時代の土器（１）



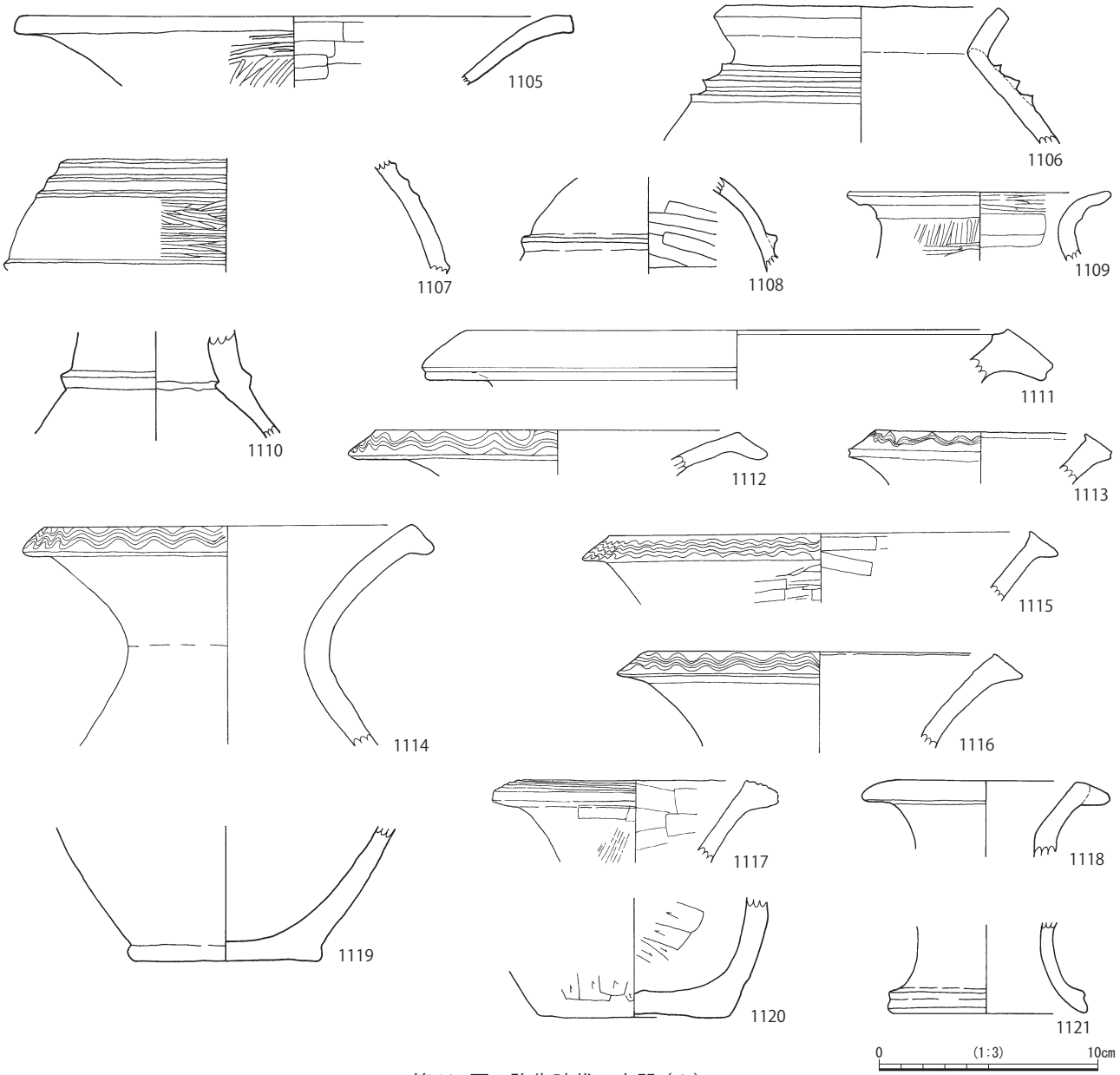
第124図　弥生時代の土器（2）

1089・1090は口縁径48㎝と51.2㎝の大型甕である。1089は口縁が「逆L」字状に外反する。1090は口縁が「く」の字状に外反し，直下に短い突帯を巡らす。1091 ～ 1101は中期後葉の甕形土器。1091 ～ 1100はいずれも口縁部が「く」の字状に外反するものである。1093・1094は口縁下位に３条の三角突帯を巡らす。1095は胴部上位に１条の三角突帯を巡らす。1101は底部で充実脚台である。1102 ～ 1103は後期の甕形土器。

1102・1103は，口縁部が直行気味に外反し，口縁下位に２条の三角突帯を巡らす。1104は充実脚台に近いものであるがわずかに上底を呈する。

1105 ～ 1120は壺形土器。1105は口縁径25㎝で，口縁が大きく外反するもので，広口壺の形態を呈する。

1106は無頸壺である。口縁は短く外反し，肩部に３条の三角突帯を巡らす。1107は口縁部を欠損するもので，肩部に３条の三角突帯を巡らす。1108は胴部が球形状に膨らみ，胴部に１条の突帯を巡らす。1109は頸部が直行し，口縁は緩やかに外反する。1110は頸部で，１条の三角突帯を巡らす。1111は口縁部径27.8cmを測る。口縁部はやや厚く「へ」の字状に外反する。口縁内面には小突起を巡らすものである。1112 ～ 1116は口縁部に櫛描波状文を施すものである。1114は頸部がしまるものである。1117は凹線文土器である。1118は器形は凹線文土器と同様であるが，口縁部に文様が施されないものである。1119・1120は壺形土器の底部である。いずれも平底である。1121は高坏の脚部である。底部径９㎝で裾部は，わずかに外開きとなる。底部の上位に三角突帯を巡らす。



第125図　弥生時代の土器（３）

（4）遺物観察表

第35表　弥生時代土器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色調		胎土					備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
121	1074	H-21	SI5	SI5-8	弥生中期	無頸壺	完形	ミガキ，ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	竹管文，外面煤付着
122	1075	F-21	SI6	18070	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	茶褐色	○	○	○	○	－	外面煤付着
	1076	G-21	SI6	17818	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	
	1077	G-21	SI6	17383	弥生後期	甕	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	－	○	－	外面煤付着
	1078	G-21	SI6	17390	山ノ口	壺	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	暗褐色	○	○	－	○	－	
	1079	G-21	SI6	17384	山ノ口	壺	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	－	○	－	
123	1080	L-36	IIb	588	高橋	甕	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	刻目
	1081	L-36	IIb	1・513	高橋	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	○	－	刻目
	1082	L-37	IIb	607・608・611・752・753・843・844・848	高橋	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	
	1083	L-37	IIb	605・750・1020	高橋	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	○	－	
	1084	F-22	IIb	－	高橋	甕	口縁部	ヘラナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	○	－	－	
	1085	I-23	IIb	12901	高橋	甕	口縁部	ミガキ	ナデ	灰褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	
	1086	H-24	IIb	11453	高橋	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	
	1087	H-23	IIb	9389・9782・9783	吉ヶ崎	甕	口縁部	ナデ	ナデ，指頭圧痕	茶褐色	にぶい褐色	○	○	－	○	○	輝石，刻目，三角突帯
	1088	G-22・H-21	IIb	1973・14384	吉ヶ崎	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	○	輝石，口縁部直下に三角突帯，胴部に二条三角突帯
124	1089	G-22	IIb	2440	山ノ口	甕（大型）	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	
	1090	G-22	IIb	11068	山ノ口	甕（大型）	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	口縁部直下に三角突帯
	1091	F-22	IIb	17830	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	
	1092	H-23	IIb	9396	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	○	－	
	1093	F-13	IIb	13038	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	－	三角突帯
	1094	F-13	IIb	13594	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	○	○	－	三角突帯，外面煤付着
	1095	F-22	IIb	12975	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	にぶい橙色	○	○	－	○	－	三角突帯
	1096	G-21	IIb	2459	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ，指頭圧痕	茶褐色	茶褐色	○	○	－	○	－	
	1097	F-20	IIb	12704	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	淡褐色	淡褐色	○	○	－	○	－	
	1098	F-20	IIb	14731	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ，指頭圧痕	黒褐色	茶褐色	○	○	○	○	－	三角突帯
	1099	F-21	IIb	－	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	褐色	○	○	－	○	－	
	1100	F-13	IIb	13065	山ノ口	甕	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	○	○	－	
	1101	G-21	IIb	2461	山ノ口	甕	底部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	赤褐色	○	○	－	○	－	
	1102	F-13	IIb	13294・13922	高付	甕	口縁部	ナデ	ナデ	褐灰色	にぶい褐色	○	○	－	○	－	三角突帯
	1103	F-21	IIb	11517	高付	甕	口縁部	ナデ	ケズリ，ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	－	－	－	三角突帯
	1104	F-13	IIb	13010	山ノ口	甕	胴部～底部	ナデ	ナデ	赤褐色	褐灰色	○	○	－	○	－	
125	1105	H-26	IIb	8920	山ノ口	広口壺	口縁部	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	－	
	1106	F-22	IIb	12711	山ノ口	壺	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	○	○	－	－	－	三角突帯
	1107	F-15	IIb	15235	山ノ口	壺	胴部	ミガキ	剥落	明赤褐色	明黄褐色	○	○	－	○	○	輝石，三角突帯
	1108	E-13	IIb	13206	山ノ口	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	黒褐色	○	○	－	○	－	突帯
	1109	H-17	P78	－	山ノ口	壺	口縁部	ナデ，ミガキ	ナデ後ミガキ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	－	－	○	輝石
	1110	F-14	IIb	13153	山ノ口	壺	頸部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	○	○	－	○	－	三角突帯
	1111	G-21	IIb	14467	山ノ口	壺	口縁部	ミガキ	ナデ	茶褐色	黒褐色	○	○	－	○	－	
	1112	F-13	IIb	13066・13770	弥生中期	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	○	－	波状文
	1113	E-13	IIb	13220	弥生中期	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	○	－	波状文
	1114	F-13・14	IIb	13109・13110・13471・13622	弥生中期	壺	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	○	－	波状文
	1115	E-14	IIb	13247	弥生中期	壺	口縁部	ナデ後ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	－	○	－	波状文

第36表　弥生時代土器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構層位	取上番号	分類	器種	部位	器面調整		色　調		胎　土					備　考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
125	1116	F-14	Ⅱb	13667	弥生中期	壺	口縁部	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	○	○	－	○	－	波状文
	1117	G-13	Ⅱb	3364・4329	弥生中期	壺	口縁部	ナデ，ミガキ	ナデ	橙色	明黄褐色	○	○	－	○	－	凹線文
	1118	F-15	Ⅱb	15042	弥生中期	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	－	○	－	
	1119	G-22	Ⅱb	2185	弥生中期	壺	胴部～底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	－	－	－	
	1120	F-14	Ⅱb	13115	弥生中期	壺	底部	ナデ，ケズリ	ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	－	－	－	
	1121	F-19	Ⅱb	11485	弥生中期	高坏	底部	ナデ，しぼり	ナデ	明褐色	橙色	○	○	－	－	－	矢羽透，三角突帯

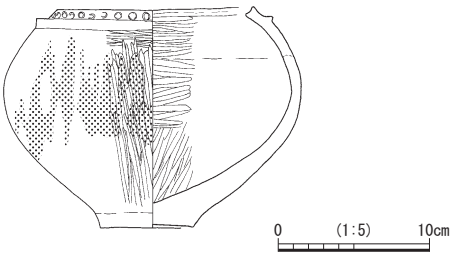
（5）小結

弥生時代では，竪穴住居跡3軒が検出されている。しかしながら，住居内からは遺物が少ない。3軒共に住居内埋土の上位に約2000年前の開聞岳起源の暗紫コラが堆積しており，それ以前の住居跡であることは確実である。また，5号住居内の炭化木による放射性炭素年代測定では2115±20年ＢＰの年代値がでており，弥生時代中期の範疇に入るものと思われる。5号住居から出土した無頸壺は竹管文が施されるものであるが，その出自は不明であるが，須久式土器の広口壺の底部から胴部までの部分と類似しており鹿児島県内での山ノ口式の時期と考えられよう。大隅地方で弥生中期の集落遺跡を見てみると，鹿屋バイパス関係では，王子遺跡（鹿屋市王子町）で，竪穴住居跡27軒，掘立柱建物跡14棟，土坑4基等があり，遺物も矢羽根透かしを有する高坏や凹線文土器等瀬戸内との関連のあるものや鉄製品等が出土している。中ノ丸遺跡（鹿屋市大浦町）では竪穴住居跡3軒，円形周溝2基。中ノ原遺跡（鹿屋市大浦町）では竪穴住居跡3軒。前畑遺跡（鹿屋市郷之原町）では竪穴住居跡3軒，掘立柱建物跡8棟，円形周溝1基。また，東九州自動車道関係では十三塚遺跡（鹿屋市串良町）で竪穴住居跡8軒，円形周溝1基。田原迫ノ上遺跡（鹿屋市串良町）で竪穴住居跡31軒，掘立柱建物跡40棟，円形周溝11基，方形周溝墓1基。牧山遺跡（鹿屋市串良町）で竪穴住居跡2軒。永吉天神段遺跡（曽於郡大崎町）で竪穴住居跡46軒，掘立柱建物跡20棟，円形周溝3基，円形周溝墓1基，土坑墓24基。荒園遺跡（曽於郡大崎町）で竪穴住居跡5軒等が調査されている。大崎町下堀遺跡でも竪穴住居跡5軒が調査されている。

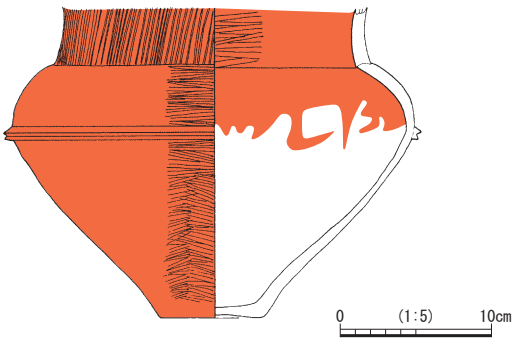
町田堀遺跡での土器については，前期・中期・後期の土器が出土している。

前期の遺物は主に調査区4からの出土で，出土量も7点と少ない。口縁部が短く「逆Ｌ字」状に外反し刻み目を有するものと刻み目のないものとがある。高橋式に比定できよう。

中期では，1087と1088は口縁部が「逆Ｌ字」状に外反し口縁部直下及び胴部に三角突帯を巡らすもので，中期中葉の吉ヶ崎式に比定できよう。1089～1100の甕形土器は口縁部が「く」字状に外反するもので山ノ口式土器で中期後葉と考えられる。1102と1103は口縁部の外反が弱くなるもので後期の高付式と思われる。1105～1121の壺形土器及び高坏は中期後葉の山ノ口式土器と思われるが，櫛描波状文を施すものは後期に入る可能性がある。1117の凹線文土器は瀬戸内との関係を窺わせるものである。



町田堀遺跡　5号竪穴住居跡出土土器



尾ヶ原遺跡（金峰町）　須久式土器

第126図　5号竪穴住居跡出土土器・須久式土器比較

参考文献

鹿児島県教育委員会1985「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）

鹿児島県教育委員会1989「概要編・榎木田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査調査報告書（48）

鹿児島県教育委員会1990「前畑遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（52）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2011「石縊遺跡・十三塚遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財調査報告書（164）

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（７）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

町田堀遺跡

第１分冊

発 行 年 月　　2016年３月

編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ　0995-70-0574　　ＦＡＸ　0995-70-0576

印　　刷　　株式会社　松井ピ・テ・オ・印刷
〒321-0904　栃木県宇都宮市陽東５－９-21
ＴＥＬ　028-662-2511　　ＦＡＸ　028-662-4278